魔法少女リリカルなのは　～転生者共を捕まえろ～

藤之宮　アレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～転生者共を捕まえろ～

【Ｎコード】
Ｎ９１７２Ｓ

【作者名】
藤之宮　アレス

【あらすじ】
人間界を守護する神界の守護神の一柱、『闇の軍神アレス』。
違う世界の神界からの依頼で人間に転生して旅立つのは…『魔法少女リリカルなのは』の世界！
フツーならテキトーな人を転生させて旅立たせる所を人間に転生した事のあるアレスに白羽の矢が立った！

そんな巫山戯た設定で良いのか！

神が人に転生する変な物語…始まります。

※１利用規約改定に伴い導入「技名、魔法名、人物名などに原作となる小説、漫画、ゲームなどから一部お借りしている（転載）部分があります。」

※２結構ご都合主義的な展開が見受けられます。苦手な方はバックをお願いします。

※３一部キャラショタコン属性付与、ハーレム、準チートです。苦手な方はバックをお願いします。

※４自己満足満載な小説です。お気に召さない場合はブラウザバック！

第0話　プロローグ（前書き）

とりあえず、アレス君が旅立つ理由。

まあ、アレな理由ですがねｗ

第0話　プロローグ

長い時を生きた。１０００年の時は長かった。

俺の名は『藤之宮アレス』。これは人に転生した時の名で神界に戻った時は「闇の軍神アレス」と言う二つ名を持つ。

先ほどまでは「魔法先生ネギま！」の世界で吸血鬼の真祖「エヴァンジェリン」の双子の姉として生きていたのだ。

何を悲しくて女の子に転生されなきゃならないのか。

ちなみに、エヴァの姉として生きていたときの名は「アリス」だった。

妹のエヴァは俺の配下の天使として神界で生きる事となった。

さて、これで暫くは神界でのんびりと過ごす事としよう。

「は？」

開口一番に出たのは気の抜けた返事だった。

「誠に申し訳ないが、急遽依頼が来てしまってな」

「ったく。で？どの様な依頼ですか？」

目の前にいるのは俺の上司に当たるゼルディア様。

まあ、簡単に説明すると女性の姿をした美神だ。後は想像に任せる。

「うむ、これまた他の世界なんだがな。見習いの神が転生者達をとある世界に送り込んでしまったらしい」

「…」

ツッコミ所が満載だ。

同じ神としてちょいと教育してやりたい。

「…で、まさかとは思いますが。転生するときに色々と能力を付けたとか言うんじゃないでしょうね？」

「よく分かったな。いわゆるチート能力をたっぷりと付けた奴らがだな…」

「お待ちください。確かに俺は相当の力を持ってますから大抵の奴らには負けませんが、能力次第では相性が悪くて勝てないのもいますよ？」

思い浮かべるのは全ての漫画の能力とか、全ての漫画の魔力、気とか身体能力が無限とか。

時を止める能力とかはっきり言って勝てる自信は無い。

「大丈夫だ。私が作ったこれなら勝てる」

そう言って渡して来たのは銀色で何の装飾も無い指輪だった。

「…何ですか？この指輪は？」

「理＜ことわり＞の指輪だ。どんな能力であろうと破る事は不可能の理を封じてある」

「ちなみに？」

「『前世に戻る』だ。結界を張ってこの指輪を使えばその内部に居る人物は強制的に前世の姿に戻される」

「ほぅ…」

思わず口が笑ってしまう。

確かにこれなら転生前の能力に戻される。

もし、前世が普通の人であるなら問題は無い。

俺なら…多分、アリスの姿になるのだろうが。

「で、全員の前世は？」

「貰ったリストでは全員ただの人だった。前世が我らの様に神だったとか英雄だったとか…みたいなヤツはいない」

「なるほど？」

俺はリストを受け取り、パラパラとめくる。

「…ゼルディア様？」

「どうした？」

「…この人物達を転生させた見習い神は何を考えてたのですか？」

「…それは私も気にはなっていた。何故そんな人物ばかりチョイスしたのかは聞いていないが…」

リストを見ると全員の備考欄には『ロリコン』もしくは『ペドフィリア』とどちらかが書かれていたからだ。

挙げ句の果てには『アニメヲタク』『女の子大好き』『シスコン』等々とも書かれている。

「ゼルディア様」

そう言って現れたのは金髪の美神。

俺の姉のアテナだった。

「あら、お帰りなさい、アレス」

「ただいま、姉さん。どうしたんだ？」

「ああ、先ほど手紙が届きました」

アテナはそう言って手紙をゼルディア様に渡す。
ゼルディア様は手紙を開けてマジマジと読み始めた。
「なるほどな。何故こんなちょいと危なそうな奴らばかりと思ったら…」
「思ったら？」
「その見習い神がその手の奴らの名を綴った名簿にうっかりネクタルをこぼしてな」
何となくだが、イヤな予感を感じる。
「そしたらそいつらが全員事故で亡くなった。その事がばれて叱られると思った見習神は黙らせるのを条件に全員に希望する能力を付けて転生させたそうだ」
俺は目の前が真っ暗になった。
何というテンプレ的展開。
ってか、酒飲みながら仕事してんじゃねぇ。
「何と言いましょうか…」
苦笑してるアテナ姉さん。
「で、転生した世界と言うのは？」
「全員、同じ世界だ。『魔法少女リリカルなのは』の世界らしい」

某吉本劇場よろしくこけたくなった。

はっきり言って全員ろくでもない奴らと言うのは分かった。

確かにあの世界の女の子達は全員可愛いし、綺麗なのが揃っている。

無印世界とA's世界なんかはヒロイン達は皆9歳と言うまさにロリコン共にとって天国としか言えないだろう。

「で?今度の立場は?また女の子とか言いませんよね?」

「その点は安心しろ。今回は久しぶりに『藤之宮アレス』として転生して貰う」

「ん、分かりました」

「ごめんね、アレス。私も一緒に行きたいけど、追加依頼でね。その見習神が更に名簿を隠し持っていたからそっちの世話にも行かなきゃならないの」

「ああ、分かったよ…姉さん。また暫く会えないけど…」

「分かってるわよ。私達は不死の存在。また会えるんだから」

姉さんは俺の頬を撫でてから出ていった。

ちなみに、俺の身長は１９５?、姉さんの身長は１７５?だ。

旅立とうとしたらゼルディア様とエヴァがやって来る。

「どうかされましたか？」

「うむ、今回はエヴァを連れて行くがよい」

「は？はあ、分かりました…って、今回の立場は？」

いきなり初任務が俺とか。

まあ、前世からずっと一緒だったから構わないか。

だが、今回は俺は男として転生だからなぁ。

「お楽しみだ。転生してからの…な」

ちょっと待て。その妙な微笑みはイヤな予感しか感じないんですがね！

「…もの凄くイヤな予感を感じるのですがね？」

「大丈夫だ。許嫁とかそう言うのじゃなくて、相棒だよ、『相棒』」

「…相棒…ですか」

と言うことは…デバイス…ユニゾンデバイス辺りかもしれないな。

「よろしくお願いします、おね…じゃなくてお兄様」

「了解。こちらこそお願いする」

俺はそう言ってエヴァの頭を撫でた。

顔を赤くして微笑むエヴァ。

「それでは、行ってまいります」

俺とエヴァは扉をくぐって旅立った。

第0話　プロローグ（後書き）

見習神ろくでもねぇなw

最近、二次小説を読んでると結構こんな神がいるので。

だから、こうやって神が転生して捕まえるのも良いのでは？と思ったり。

ちなみに、エヴァは無論、『魔法先生ネギま！』に出てきた吸血鬼の真祖、「エヴァンジェリン＝Ａ．Ｋ＝マクダウェル」嬢の事です。

双子の姉が居たため、性格が１８０度違います。

従順です。え？何この可愛い生き物状態ですw

それでは、次回は主人公設定です。

主人公設定（前書き）

今回はアレス君のプロフィールを。

ちなみに人間に転生した時の状態です。

主人公設定

名前　藤之宮アレス（ＣＶ．朴　？美）

９歳時の時
身長１３０？
体重４４？
←
１９歳時（やるか分からないＳｔＳ時）
身長１３５？
体重４６？

外観

ややつり目でやんちゃな少年といった感じの顔…だが、化粧をさせるときちんと女の子の顔に見える。

１９歳時点では、どうやって見ても１０～１２歳くらいにしか見えない。
ちなみにその事をからかうとキレる。

真っ黒な髪で前髪の一部が金髪が混じってる。
右目が蒼い瞳で左目が漆黒の瞳

能力
？闇の力を具現、収束出来る
力の分類は気に近い。
玉を作って発射したり、剣を作ったり、盾を作ったり、鎧化して身

体に覆う事も出来る。

?身体に存在する7つのチャクラを回して戦闘力を上げる『念法』を使用する。

第一チャクラを回せば無限に近い体力を発揮。最高記録は1週間不眠不休で戦った事もある。
が、後が凄く大変（三日三晩寝てしまう）だからあまりやりたくない。

?浄化の蒼水晶＜スター・サファイア＞
右目専用で幽霊・精霊等の存在を一発で見破る。
どんなに隠密性が高い幽霊であろうと見ることが出来る。ＯＮ・ＯＦＦ切り替え可能。

?前世のおかげで『魔法先生ネギま!』世界の魔法を使用可能。
得意属性は闇と炎。感卦法も使用可能。

始動キーはエヴァと同じで『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』

前世は吸血鬼の真祖だったが今回は人間の身体だから少々身体能力は落ちている
…が、チートはチート。

使用武器は大剣、双剣、槍、刀。一番得意なのは双剣。ちなみに無手も双剣と同じ位得意。

一応弓矢等の遠距離武器も使える。が、某赤い弓兵よりは速射性能は落ちる。
ちなみに命中率は赤い弓兵と同等。

視認距離は2？。某赤い弓兵よりは短い。動体視力はライフルの弾が止まって見える位。

空気の流れで動きを読める。
背後からの奇襲攻撃成功確率はほとんどゼロに近い。どんな達人だ。

？奥義・二重身（ドッペルゲンガー）

魂を最大12個に分割して別れるいわゆる分身の術。
制限時間は三日。三日経つか一定のダメージが分身体に蓄積されると強制的に本体に戻る。

？封印奥義・魔皇気

闇の力を圧縮して出来る特殊な気。全ての力を吸収してしまうチート能力。
反発する光の力すら吸収してしまう。対抗するには光の力を圧縮して出来る『聖光気』しかない。

１５分しか使えない上に使用した後は吸収した力を解放する必要がある。
一番効率が良いのが『夜の情事』
最低でも三日三晩の時間が必要の為、色々と面倒。つーか、三日三晩だと相手が大変だ（笑）。
故に姉のアテナに封印して貰っていて普段は使用出来ない。

?特殊能力・ショタコンキラー

１９歳になっても半ズボン・ランドセルが似合う外観（身長１３５?きっかりで止まる）の為、合法ショタである。
困った事に、なのは・フェイト・アリサ・すずか・はやての５人はショタコン属性が付与されてる。あとは…分かるな?
ついでに桃子・プレシア・リンディにも付与されてる。
更にシグナム・シャマルにも付与されてる。
ヴィータにもちょっぴり付与はされてるが暴走するほどではない。
ちなみにユーノ、クロノ、ザフィーラの３人には全く付与されていない。
付与されてたらアレスが色々と困るし作者も困る。

出すか分からないＳｔＳではティアナ、スバルにも付与。

数の娘達はわかんねｗ

そこまでは考えて無いし。でも、書いた方が良い…か？

ヴィヴィオとかキャロはかっこいいお兄ちゃん扱い。

追加事項が現れたら更新します。

主人公設定（後書き）

とりあえずこんなもんかな。

大体、二次小説の主人公って長身のイケメンじゃん？

ニコポじゃん？

ってな事で、ショタコンちっくな少年にしてみましたｗ

ちなみに、シリアス１割、コミカルギャグ７割、暴走２割で進めて行く予定ですｗ

第1話　早速接触！（前書き）

ついに始まってしまった暴走小説

かぁ～！こんな駄文見たことないわぁ！

と言わないでくださいｗ

ちょっと凹みますから

とりあえず、５歳の頃のお話。

もちろん、知り合いますよ。

未来の『魔王』様と…ｗ

第1話　早速接触！

「うん…」

眩しい光が目に入る。
と同時に揺さぶられる身体。

どうやら車に乗っているみたいだ。

「お目覚めですか？アレス様」

目を開けて見ると助手席から覗き込む黒髪の女の人。

記憶を辿るとどうやらこの世界での母親の様だ。

「ああ…って。アレス様？」

「はい。本来ですとアテナ様の部下であるトオルとナミが夫婦役だったのですが…」

「ですが？」

「急遽用事が出来てしまい、私達が代わりにアレス様の両親役を務めさせて頂きます」

そう言う事か。折角久しぶりの親子生活だったのにな。

トオルと言ったのは前世の前世で俺の父親だった『藤之宮徹』。

ナミと言ったのは同じく前世の前世で母親だった『藤之宮奈美』。
二人は死後、アテナ姉さんの部下として天使に転生したのだ。
「そうか…。ってちょい待ち」
「ハイ？」
「…俺の記憶が間違って無ければ…ナオミとジン…じゃないのか？」
俺は父親の横顔と母親の顔をジッと眺める。
黒い髪で前髪に一部、銀髪が混じっている。
「その通りでございますわよ？アレスちゃん？」
口元がにやけてるぞ。
「全く…誰かと思ったら。陣伯父さんと直美伯母さんか…」
「コラ。それは前世の前世でのお話でしょ。今回は念願の母親なんだからね」
頬を膨らませてる直美伯母さん。いや、母さんだったな。
「はは、分かったよ、母さん」
その言葉を聞いて感動したのか、フルフルと震えていた。
「やっぱりアレスちゃんは可愛い…。今夜も添い寝ね」

相も変わらずのショタコンぶりだった…。

今回の父親役を務めるのは『藤之宮陣』。前世の前世においては俺の伯父にあたり、その時の名字は若本だった。

そして、今回の母親役を務めるのは『藤之宮直美』。同じく前世の前世においては伯母にあたり、奈美の双子の姉だったのだ。

まあ、見ての通り前世からずっとショタコンなのだが。しかも俺限定の。

「ほらほら、もうすぐ着くぞ」

道の先に見えるのはごく普通の家。何の変哲も無い、一戸建て住宅。

「そうそう、お隣さんは『高町』さんと言うそうだ」

そうか、高町家の隣に引っ越すのか。

「ん～着いた～」

俺はワゴン車から降りて背伸びをする。背骨がポキポキと心地良い音が聞こえる。

「ん～」

同じ様に母さんも降りて背伸びをしていた。

ってちょっと待て。エラい若く見えるんだが？

「母さん？」

「何かしら？」

「無粋な事を聞くけど…今何歳だ？」

「あらあら、女の人に年齢を聞くなんて…」

ハンカチを取り出して目に当ててる。明らかに嘘泣きとわかるのだが。

「し、仕方ないだろ…エラい若く見えるんだから…」

「そうね。はっきり言うと２１歳」

「ぶふぅ！」

激しく吹き出す俺。

待てよ？俺は今何歳だ？

身体をぺたぺた触って確認する。

「…うむ、５歳位か？」

「ご名答。俺は２３歳で直美は２１歳でアレスは５歳だ」

…１８歳と１６歳で結婚して産んでる計算なんだが。

「だって、アレスちゃんと歳が近い方が良いし…」

駄々をこねたと思われる今回の母親、直美であった。

お隣さんは近所で喫茶店、『翠屋』と言う店をやっているのでそこに向かう。

到着して、３人で翠屋に入る。

時計を見ると丁度午後2時頃を指していた。

つまりは客がほとんど…いや、全くいなかった。

「いらっしゃいませー」

現れたのは栗色髪の若い女の人。

「すみません。今度、隣に引っ越してきた藤之宮陣と申します。で、こちらが家内の直美で…」

「よろしくお願いします」

「息子のアレスです」

「はじめまして～」

俺と母さんは深々とお辞儀する。

「まあまあ…私は高町桃子と申します」

同じ様に深々とお辞儀する桃子さん。

記憶を辿ると…なるほど、確か…なのはのお母さんだったはず。

「たっだいま～」

「ただいま」

店のドアが開いて二人の男女が買い物袋を持って入ってくる。

ダークブラウン系の髪をした二人だ。

男はやや切れ長の目でいわゆるイケメン系の顔。

女は眼鏡をかけていて三つ編みの髪。

「あれ、お客さん？」

「ええ、自宅の隣に引っ越してきた藤之宮さんよ」

「「「よろしく」」」

俺達は挨拶する。

「俺は高町恭也です」

「私は高町美由希です」

「ほほぉ、なかなか良いお子さんで…」

「ええ。後二人いるのですけど…」

…二人…？

妙に引っかかる。確か…妹のなのはだけだったと思うのだが。

「『なゆた』と『なのは』は何処に？」

「ん～…多分、公園じゃないかしら？」

「多分。あの二人、凄く仲が良いし」

桃子達3人は口々にそう言ってる。

「それじゃあ、あたし達が散歩がてら探して来ましょうか？陣は家の片づけね」

と口を開くのは母さん。

「はあ、分かったよ。あまり遅くならないでくれよ」

「良いんですか？」

「ええ。車の旅でしたからちょっと気分転換に。それで、二人のお子さんの特徴は？」

「はい、なゆたは恭也と同じ髪の色で、なのはは私と同じ栗色の髪です」

「分かりました。綺麗な栗色ですからすぐに分かると思いますよ」

「ありがとうございます」

丁度、近所の奥様達みたいな団体さんが入ってくる。

「それでは、行って来ます」

俺と母さんは翠屋を後にした。

「さて、迷子の子猫ちゃんを探しましょうか」

「別に迷子になってる訳じゃ…」

そう言って母さんは俺の手を繋いで歩き始める。

…そう言えば、母さんの前世の時は身長が１６０？位はあったよな。

今の俺の身長は…多分、１１０？位のハズ。

俺は母さんの顔を見る。

「どうしたの？」

「…母さん、身長何？？」

「どうしたの？突然」

「いや、確か前世の前世の時は１６０？はあったと思ったから…」

「うふふ。よく覚えてるわね。そうよ、今は身長１４７？だったかな？」

「え？何でまた…」

「だって、アレスちゃんの身長は…１３５？で止まるんでしょ？」

「うぐ…」

痛い所を突く。

そうなのだ。俺の前世の前世は小学校４年生辺りで身長が止まって１３５？ピッタリだったのだ。

おかげで中学と高校の時の制服は特注品で、背広も特注品だったのだ。

何せ一般のＳサイズでもブカブカだったのだからおして知るべし。

「と言う訳で、今回は奈美と同じ位にしたのです」

胸を張ってる母さん。ちなみに胸はかなり大きい。

そして顔は前世はそれなりに大人びた顔だったのに今回は童顔。マニアックなロリ巨乳と言うやつである。

「はあ…たまには身長１８０？とか味わってみたいよ…」

「駄目よ！そんなのアレスちゃんじゃなくなるわ！」

何ソレ。俺＝低身長と言う方程式でも出来とるんかいな。

しばし散策すると小さな公園が見えてきた。

中を見ると丁度二人の子供が砂遊びしていた。

男の子がダークブラウン系の髪で女の子が栗色の髪。

多分、高町なゆたと高町なのはであろう。

「あ、いたいた」

そう言って俺と母さんは二人に近づく。

「ふぇ？」

「…誰だ？」

訝しげな表情で俺達を見るなゆたとなのはの二人。

「ごめんなさいね。私は藤之宮直美。高町なゆた君となのはちゃんね？」

「「はい…」」

「今日、貴方達のお家の隣に引っ越して来たのよ」

「え？」

なゆたの顔が一瞬驚愕に染まる。

無論、俺はその顔を見逃す訳が無い。

「で、こちらが息子のアレス」

「初めまして。アレスだよ」

「うん、アレス君。よろしくね」

「よ…よろしく…」

満面の笑みのなのはと妙によそよそしいなゆた。

なのはは魔力がボチボチ流れ出ている。

制御の仕方を知ってるハズ無いから当たり前だ。

だが、なゆたの方は…まるで知っているかのように。きちんと制御してほとんどゼロに押さえている。

普通のヤツなら気付かないだろうが、俺の目を誤魔化すにはまだまだ鍛錬が足りない様だ。

「それじゃ、二人を見つけた事だし。アレスちゃん、帰りましょうか？」

「うん」

「二人ともどうする？一緒に帰る？」

「う～ん…」

「なのは、帰ろうか」

悩むなのはをなゆたが促す。

「それじゃあ、帰りましょう」

こうして俺達は翠屋に向けて帰還する。

「それじゃあ、今晩は引っ越しソバを持って行くからね～」

「バイバイ」

俺と母さんは二人と別れる。

「バイバ～イ」

「さようなら」

その時、俺は僅かに魔力を放出する。

「…！！」

なゆたの顔色が一瞬…僅かに変わった。

「どうしたの？なゆた？」

「いや、何でも無いよ…。何でも…」

気を取り直したなゆたは俺の方をやや睨む様に眺める。

「どうしたの？」

俺はとぼけて訪ねる。

「いや、ごめん…何でも…ない」

「変なの。それじゃアレス君、バイバ～イ」

そう言ってなゆたとなのはの二人は翠屋に入って行った。

「…どうだった？やっぱり…なゆたは『クロ』だった？」

母さんが訪ねて来る。

「ああ。間違いなく、転生者だ。俺の魔力に見事に反応した」

「そう…。と言う事は…」

「間違いなく、近いウチに俺に勝負を仕掛けて来ると思う」

「…ごめんなさいね。あたしと陣は能力を封印して転生してるからほとんど人間と変わらないの」

「良いよ。父さんと母さんを巻き込む訳にいかない」

「ありがとう、アレスちゃん…」

そう言って母さんは頭を撫でてきた。

高町家に行って夕食を食べた後。

俺は風呂に入っていた。

母さんと…。

「…一人で入れるのに…」

「駄目よ。5歳と言ったらまだ一緒にお風呂に入るんだから」

満面の笑みで言い放つ母さん。

「分かったよ…分かったから…」

身体を洗った後、一緒に湯船に浸かる。

後ろから抱きかかえる様に入ってるから…。

背中に凄く柔らかい感触が！当たってるんですがね！

「うふふ～アレスちゃんと一緒～」

もの凄くご機嫌だった！

「はあ…」

ちなみに食事の時に聞いたのは高町家の大黒柱でもある士郎さんは大怪我で意識不明と言う事であった。

うむ、この点は予定通りだな。

部屋に帰る。

ちなみに、俺専用の部屋なんだが、母さんがルンルン気分で添い寝に来るのだ。

なんか、このまま高校生になってもこの状態が続きそうで怖いんだが。

「そう言えば…チャクラは何処まで回せるんだ?」

俺は身体に力を入れ、チャクラを回しみる。

「…ふむ、第二チャクラ迄で第三チャクラがちょっとだけ回せる状態か」

せめて9歳頃までに第五チャクラか第六チャクラまで回せる様になっておかないとな。

「うん?」

本棚を見ると…妙な本が目に入った。

「…ちょっと待てや」

俺はその本を本棚から取りだした。

真っ黒い表紙で十字に鎖で封印されてる、見るからに怪しい本だった。

「…何で…夜天の書がここにあるんだよ。これははやてのだろう…」

古代ベルカ式のロストロギア。闇の書と呼ばれて幾多の人を不幸に追いやった壊れた魔導書。

「…む？そう言えば…あの本の表紙の色はダークブラウンに近い色だったよな？」

頭に浮かぶのはややダークブラウンがかった色。

だが、目の前にある本は漆黒で赤い装飾。

よく見ると…違う。

「…そうか、これが今回の相棒…か」

俺は魔導書を撫でる。

もし、夜天の書と同じなら9歳の誕生日に起動するハズだ。

「後4年。待っててくれよな、エヴァ」

『はい、待ってますよ？お兄様』

不意にそんな声が聞こえた…様な気がした。

俺は本を本棚に戻し、ベッドに入って目をつむった。

それから5分くらい経ったらドアが開いて母さんがベッドに入り込んできた…。

拒否したら号泣するに違いない。

だから俺はそのまま眠りについた。

第1話　早速接触！（後書き）

いきなり一人目ですか

そしてなのはの双子の兄ですか

数多くの転生者が転生したこの世界。

アレス君に待っているのは…どんな事件か？

第2話　まずは…一人目！！（前書き）

いきなり現れたのは何と！

なのはの双子の兄だった！

さあ、彼は一体どんな能力持ちでなのはをどうしたいのか！

まあ、一人目なんでこんな感じの終わり方ｗ

序盤から飛ばしてもしょうがないですからね

それでは、どうぞ！！

第2話　まずは…一人目！！

眠りについてから1時間余り。

突然、隣家からあふれ出す魔力。

どうやら獲物が網にかかったみたいだな。

それじゃ、行きますか。初戦だな！

俺は母さんを起こさない様に起きたつもりだったが…。

「お仕事？」

しっかりと起きてました。

「ああ、隣の高町家から魔力があふれ出している」

黒いジーンズを履き、黒いシャツを着る。

「行ってらっしゃい」

「怪我、すんなよ？」

父さんまで起きていた。

「あはは…大丈夫だよ。それじゃ、行って来ます」

俺は玄関から外に出た。

―なゆた視点―

今日引っ越して来たあのガキ…。

間違いなく転生者だ。

パッと見は普通の子供だったが…、今日別れるときに出した…あの魔力！

普通の子供があんな魔力をきちんと制御してたまるか！

おのれ…！なのはとイチャイチャする計画を邪魔されてたまるか！

なのはは俺のモノだ！

あの神から貰ったこの力があれば…あの程度のガキに負けるものか！

さあ、出て来いよ。真っ先に退場させてやるからよ！

俺は魔力を解放した。

すると隣の藤之宮家から出てくる気配。

ビンゴ！

やっぱりあのガキは転生者！

さあ、ぶち殺してやるよ！ククククク！

―なゆた視点・終了―

「やっぱりてめぇ…転生者だったか…」

子供らしくない歪んだ笑みをうかべるなゆた。

「ああ。転生者…だな」

「来いよ。真っ先に退場させてやる」

「そうか。それは楽しみだな。で？何処で戦るんだ？」

「今日出会った公園だ」

そう言って俺達は移動する。

閑散とした公園。

こんな時間に子供がいたらびっくりだ。

当然、公園内には猫1匹すらいなかった。

「さて、一つ聞きたい」

「何だ?」

「お前は、なのはをどうしたいんだ?血が繋がってる…兄妹なんだろ?」

「決まってるだろ?なのはは俺のモノだ!ずっと一緒に…結婚もさせず、俺とずっと過ごすんだ!」

「…そうか…。よく分かった。お前は…この世界にいてはいけない!」

「ほざけ!そうだな、助けが来ない様に、念入りに結界を張って…」

周囲に現れる結界。今の俺では破る事は出来ない。

さて、どんなモノか…お手並み拝見と行きましょうか。

俺は第1チャクラを起動して一気に全力回転まで上げる。

「さあ!雑魚はさっさと…」

なゆたの周りに現れるのは。

剣、槍などの武具。しかも、1本1本が…魔力を秘めた…魔剣、聖剣…！

ほほぉ！王の財宝〈ゲード・オブ・バビロン〉か！

やっぱり数々の二次小説で好んで使われる能力だよな！

「死ねぇ！！！」

一斉放出される宝具。数は30強か。

隙間無い様に見えるが…。

「よく見ると、隙間があるんだよ」

俺はそう呟いて降り注ぐ剣や槍の間をかいくぐる。

「なっ！？」

なゆたの目が見開かれる。

そりゃそうだろう。高速で放たれる武具の弾丸を何の気無しにかいくぐるのだから。

それに手に闇の力で作った手甲を纏って、宝具を叩いて逸らしているのだから。

「な、何なんだてめぇ！あの高速の射撃の中を…！」

「ふむ、確かに速いが…。狙いが雑だな。もうちょっと練習した方が良い」

「おのれぇ！これならどうだ！」

更に現れる宝具。

数は一気に１００本位はいったであろうか？

それが波状となって襲いかかってくる。

「さっきよりはまだマシになったな。だが…」

僅かな隙間をぬって俺はそれを全てかわす。

薄皮一枚切れる位の傷を負ってはいるが全く支障は無い。

「お？今のはなかなか良かったぞ？」

目の前に飛んでくる剣を俺は難なくはじく。

「くそくそくそ！何なんだよ！何なんだ一体！」

なゆたは大声で叫びながら次々に空間から宝具を射出する。

もはや英雄王より凄いんじゃね？この攻撃。

マシンガンで撃つくらいの速さになってるぞ。

「な、何で当たらないんだよぉ！この化け物ぉ！」

「ああ、よく言われるな。それと、この程度の速さでは足りないぞ。これの3倍の速さにして貰わないとな」

そう言って俺は飛んで来る剣を右手で一瞬の内に掴み、なゆたに向かって投げる。

「…！？」

なゆたの右頬をかすって飛んで行った。

どうやら反応出来なかったみたいだな。

そりゃそうだろう、音が後から飛んで行ったみたいだからな。

「ち、畜生！こうなったら…！」

なゆたの手に握られたのは…円筒状の奇妙な…剣？

そして先の部分が回転を始める。

ああ、英雄王の『天地乖離す開闢の星〈エヌマ・エリシュ〉』を放つつもりか。

さすがにアレを避ける程の身体能力は無いし。

無論、防げる程の盾は今は作れない。

「それじゃ、使いますか」

俺は左手の人差し指にはめられている指輪を掲げた。

「起動せよ。理〈ことわり〉の指輪」

そう呟くと指輪から煙の様な蒸気が噴き出した。

「ぶわっ！」

むせかえるなゆた。

「ぐほっ！」

俺もむせかえしていた。こんな煙みたいな蒸気が噴き出すなんて聞いてないぞ、ゼルディア様！

「てめぇ！何しやがった！」

視界がほとんどゼロに近くなった。

周りが全く見えない。

身体が…少しずつ変化していくのが分かった。

背が少しずつ伸びて行く。

そして、魔力と気が溢れてくる。

右手を後ろに回す。柔らかい髪が手に触れる。

間違いない。前世の姿、『アリス＝マクダウェル』に戻ったのだ。

吸血鬼の真祖。

この状態なら竜種すら素手で殴り倒していた。

ちなみに、服装は麻帆良学園女子中等部の制服だ。

少しずつ煙の様な蒸気が晴れて来る。

目の前に現れたのは１０代後半位で身長が１７５?位の中肉中背の男。

眼鏡をかけていて容姿もごく普通の平均的な感じで服はブレザータイプの学生服。

「な、何しや…」

俺の姿を見てなゆたは呆然としていた。

「ようこそ」

「な、何で…エヴァンジェリンが…さっきのガキは!?」

「その前に、自分の姿を確認してみてはいかが?」

「な、何…?」

目の前のなゆたは自分の身体を見て…叫んだ。

「な、なんじゃこりゃあ!?何で…前の姿に…!てめえ!何しやが

った！」

なゆたは右手を掲げる。王の財宝を使おうとしてるけど…。

「出ない！？」

「バカね。貴方は今は前世に戻ってるのよ？前世の貴方は普通の人間だった事、忘れたの？」

「そ、そんな…バカな…！」

なゆたはその場に座り込んだ。

「さて、アタシの名前は…『アリス＝マクダウェル』。貴方が知ってるのは妹の方よ」

「な、何だと！？エヴァに姉が居ただと！？そんなの聞いたこと無い！」

「そりゃそうでしょ。平行世界で存在していたのだから」

「そ、そんなのアリかよ…！」

「アリなのよ。さて、貴方はこの世界に紛れ込んだ『存在してはいけない存在』。よって、一度死後の世界に戻って貰うわ」

「そ、そんな…巫山戯けんな！俺はあの神に殺されたんだぞ！」

「まあ、その点に付いては謝らせて貰うわ。ごめんなさいね」

俺は頭を下げる。

「え？あ、ああ…」

「そうね、大人しく従ってくれるなら…それなりの優遇はさせて貰うわよ？」

「…た、例えば？」

「う～ん、転生先は貴方が元々いた世界がベースだけど…」

ゴクリ。

なゆたは生唾を飲む。

「人生の伴侶が貴方の大好きな『高町なのは』ちゃん似の女の子になるんだけど？」

「乗ったぁ！！！」

0．5秒でなゆたは了承した。

「話が早くて助かるわ」

「ああ…」

嬉しそうな笑顔を浮かべるなゆた。うむ、どう見てもアッチ的な想像をしてる顔にしか見えない。

「良かったわね。ここで拒否してたら…」

「してたら？」

「痛みが快楽になるような死に方を選んで貰ってたから」

俺はそう言って魔力を込めて犬歯が牙になるように伸ばす。

「うぉ…！」

「そして、魂に刻みこんで来世では超ド級のM体質になってるわね。三回くらい輪廻転生したら元に戻ると思うけど…」

「そんな変態体質はイヤじゃ…」

なゆたは身体を抱えて震えていた。

「それじゃ、交渉成立と言う事で」

そう言って俺は天界に念話を飛ばす。

3分後に現れたのはこっちの天界の死神役の天使だった。

ちなみに女の姿であるが、大鎌を持っているのは仕様らしい。

男の要望をしっかりと伝えてから天使はなゆたを連れて天に昇って行こうとした所で。

「あ、高町家の人にはどうすれば良いのかしら?」

俺は天使に訪ねた。

「そうですね…ちょっと聞いてみます」

「あはは、楽しみだな〜」

トリップしてるなゆた。これは放っておいても大丈夫だろう。

「返答が来ました。元々存在していなかった様に記憶等全てを書き換える…と」

「なるほど。分かったわ」

そう言うと今度こそ天使となゆたは天に昇って行った。

しばらくすると身体が縮み始める。

どうやら効力が切れて元の戻るみたいだ。

「さて、とりあえず…一人目だな」

今回はあっさりと終わったが。

次はこんな風に終わるとは思いがたい。

「…そう言えば、この世界を管理してる神は…あいつか」

思い出されるのは、２m近い身長で筋肉隆々のマッチョ神。

髪も眉毛も無い風貌で子供が見たら絶対泣き叫ぶレベル。

しかも、声は『ぶるぅあぁぁぁぁ！！』と吼えたらよく似合う声。

※世間では若〇ボイスと言う

更に服はブーメランパンツをギリギリに面積を減らした超危険なパンツ一丁。

ぶっちゃけ言うと真・恋姫無双に出てきた貂蝉の口を小さくして髪と眉を無くした顔なんだけどね。

だが、口調は相当な紳士的…と言う始末。

「あいつ、多分教育されるだろうな…」

その神はそういったロリで性的欲望を満たす的思考は大嫌いなハズだから教育…いや、調教するだろう。

主に、肉体的言語を使用して。

「ま、転生したらバラ色人生…のハズだから大丈夫だろう、うん」

俺はそう呟いて家路についた。

「ただいま～」

玄関に入ると母さんが立っていた。

「お帰りなさい、アレスちゃん」

そう言って抱きついて来る。

「か、母さん…待ってたの？」

「いいえ。何となく、帰ってきそうな感じがしたから3分位前に待機してたのよ」

ナニその恐ろしい勘。

「あはは…」

「さあ、寝ましょう」

そう言って母さんは俺の部屋に引っ張って行く。

そしてそのままベッドの中に入って眠りについた。

ちなみに、母さんは抱きつき癖が時々発動する。

そして今回は逃げられない様に抱きつかれたのであった。

「ふぅあぁ…」

大きなあくびをしてベッドから起きる。

母さんは既に起きた後で、どうやら朝食の準備をしている様だ。

キッチンに行くと、父さんは既に仕事に出かけた後だった。

「あら、アレスちゃんおはよう」

「おはよ、母さん。ところで、今日から俺はどうすんの？」

「そりゃあ幼稚園に行って貰うわよ？既に連絡してあるからね」

そう言って朝食を出して来る。

「あ～、分かったよ」

ま、５歳児だし。うん、隣のなのはも一緒と言う事になるな。

朝食を済ませ、幼稚園の服に着替える。

家を出て隣に行くと丁度行くのであろうか、恭也さんと美由希さん、そしてなのはも出てきた。

「おはようございます」

「あら、アレス君おはよう」

「おはよ、アレスくん」

「おはよう…」

「なのはちゃんも幼稚園？」

「うん」

「そっか、アレス君となのはは同い年だもんね」

「はい」

「それじゃ、途中まで一緒に行こうか」

「うん」

俺達は一緒になって登校した。

幼稚園で登校と言うのはおかしい気がしないでもないが。

ちなみに、恭也さんは不思議そうな顔で俺の方をチラチラと見ていた。

おかしいな？別に何もしてないんだけどな？

幼稚園も終わる。

バスで帰宅する。

「う～ん」

うなっているなのは。

「どうしたの？」

「うん、お家に帰っても…一人だし」

「そっか。お父さん居ないし、恭也お兄ちゃんも美由希お姉ちゃんもお店の手伝いだもんね」

「うん…」

「なら、一緒に遊ぼう」

「良いの？」

「良いよ。母さんに聞いたら、母さんも翠屋の手伝いするって。だから、なのはちゃんと一緒に遊んでなさいって」

「…うん。アレス君、遊ぼ！」

とりあえず、今日の所はなのはと遊ぶ事になった。

まあ、このまま士郎さんが寝たきりと言うのもなのはに良くは無いだろう。

父親の存在と言うのは結構大きいのだから。

だから…今夜は病院に忍び込んで…治療する。

魔法を使って。

これで、４年先に起きる事件まで、ゆっくりと過ごそう。

昨日の様に真夜中に行くことにする。

ちなみに母さんが何処の病院に入院しているか聞いていてくれたのですぐに向かう事にする。

さすが母さん、俺の事を良く分かってらっしゃる。

「行ってらっしゃい」

そして今宵も母さんに見送られて家を出る。

病院に着いた。

先程、救急車が来たから少し騒がしくなっている。

夜は看護師さんも少ないから救急の方に集中してるから都合が良い。

「よし…」

俺は夜間専用口から進入する。

「さて、士郎さんの病室は…」

俺は病院の通路を歩く。

気配遮断はさんざんやって来たので一般人にばれる事は無い。

これってフツーに泥棒出来るんじゃね？と思うが。

目の前には高町士郎様と書かれたプレート。

ドアを開けて入る。

ピッ…ピッ…と規則正しく心音を計る音が聞こえる。

個室で士郎さんがベッドの上で眠っていた。

「…ほぅ…これは手酷くやられたなぁ～」

俺は士郎さんの様子を見て呟いた。

体中に巻かれた包帯。

どう見ても重傷人にしか見えない。

「下手したら死んでたかもな」

その時、廊下の方から響く音。

俺は瞬時にベッドの下に潜り込む。

音は部屋の前を通って過ぎて行く。

「やれやれ、長居は無用だな」

俺はベッドの下から抜け出て立ち上がる。

「それじゃ、回復しましょうか。完全回復となると問題だから…そうだな。初級呪文で大丈夫だろ。もっとも、俺のは威力は中級だがね」

ポケットから指輪を取り出し、右手の人差し指に装着する。

ちなみに、これは前世で使っていた指輪でもある。サイズは自動で変わるように改造済み。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　汝が為にユピテル王の恩寵あれ。『治癒』」

すると士郎さんの身体が光輝き、顔色が良くなっていった。

「よし…これで大丈夫だろう」

「う～…う～ん」

まずい。今目を覚まして貰っては困る。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　大気よ、水よ、白霧となれ。この者に一時の安息を。『眠りの霧』」

空気中の水分を使って眠りの霧を士郎さんの頭に当てる。

「う…」

寝息を立てて士郎さんは眠りについた。

これなら明日の朝辺りに目を覚ますハズ。

さて、用も済ませたし…帰りますか。

俺は病院から抜け出し、速攻で家に着いた。

部屋に帰ると母さんが眠っていた。

…もはや何も言うまい。

俺は母さんの横に潜り込んだ。

眠っているにも関わらず、母さんは分かったのかすぐに抱きしめて来た。

そしてそのまま俺は眠りについた。

昨日と同じ様に目を覚まし。

昨日と同じ様に幼稚園に向かう。

なのはは昨日と同じ雰囲気を覆っていた。

ふむ、どうやら士郎さんが目を覚ましたと言う連絡はまだだったみたいだな。

多分、今日帰った時に聞くハズなんだが。

一緒にバスから降りてからなのはと別れる。

家に入ると今日は母さんが居た。

「おかえり、アレスちゃん」

「ただいま。聞くまでも無いけど、翠屋は？」

「ええ。ご主人様が目を覚ましたって事で臨時休業」

「そっか」

「凄く嬉しそうにしてたわよ、桃子さん」

「そりゃ良かった」

「お疲れ様、アレスちゃん」

「はは、大した事はしてないよ？」

「嘘ばっかり。アレスちゃんの魔法のおかげよ？」

「きっかけだよ。俺の魔法が無くても士郎さんは回復していた」

「ええ。でも、アレスちゃんのおかげで早く回復して、みんなが笑顔になってる。違う？」

「…まあ、そうだけど…」

「それじゃ、夕飯の準備ね」

母さんはそう言うと立ち上がった。

さて、俺は部屋に戻るとするか。

部屋に帰って窓を開ける。

隣の家から凄い勢いで飛び出して行く人物。

「…やれやれ。美由希さんも結構お転婆なのかな？」

猛スピードで病院に向かって走って行く美由希さん。

そして、なのはを連れて。

「にゃ～！お姉ちゃんどうしたのぉ！？」

「良いから！黙ってお姉ちゃんに着いて来なさい！！」

…なのはの肩が外れない様に祈っておこう。

それから一週間。

翠屋で開かれる全快祝い。

士郎さんはあれから一週間で退院して高町家に帰ってきた。

そして、藤之宮家一同も招待された。

「初めまして、藤之宮アレスです。よろしくお願いします」

俺は士郎さんに挨拶した。

「はは、初めまして。なのはの父、高町士郎だよ」

そう言って士郎さんは頭を撫でてきた。

「アレス君、こっちに来て～」

なのはの明るい声が聞こえる。

やっぱり、早く治して良かったな。

あの体験があったから…彼女のあり方があなったのかも、知れないな。

「うん。士郎おじさん、それじゃ…」

「ああ、行っておいで」

俺は士郎さんの所から離れ、なのはの元に向かった。

―士郎視点―

「とーさん」

「ん？」

呼んで来たのは恭也だった。

「とーさんは…気にならないか？」

恭也の視線は…なのはと遊ぶアレス君だった。

「…ひょっとして、彼の歩き方…かい？」

「やっぱり、とーさんも気付いてたか…」

そうなのだ。私も少し気になったのは、アレス君の歩き方。

まあ、前髪に一部金髪が混じってたり、右目が蒼いと言う特徴も気にはなるが。

だが、それを差し引いても、とても5歳児とは思えない。

長年、武術をやってきた…そんな達人と思える様な歩き方だった。

「俺は結構同級生とか街中で子供を見てきたが、あんな歩き方をする子供は一人もいなかった…」

恭也が呟く様に言う。そうだろう。私も長年生きて来たが、あんな歩き方をする子供は見たこと無い。

「だろうな。私も、恭也と同じだ。初めて見た」

「とーさん…どうだろう?もし、彼が『御神』の技を身に着けたら?」

「…間違いなく私を超えるだろう。恭也は?」

「はは、俺も同じ意見だよ、とーさん」

「そうか。どうだ?彼なら…なのはとは?」

「…ああ。問題無い。下手な男より…よほど良いと思う」

「私も同じ意見だ。彼なら、なのはを任せても良いかも知れん」

「分かった。とーさんがそう言うなら…任せてみよう」

そう言うと恭也は立ち上がって桃子の方に向かって行った。

なのはは良い伴侶を見つけたのかも知れないな。

―士郎視点・終了―

…?

何だろう?

変なフラグが立った様な？

まあ、良いや。とりあえずは…小学3年生迄は大きな事件は起きないだろう。

祝いはかなり遅くまで繰り広げられて…。

俺となのは眠くなっていた。

「う…ん…」

「ね、眠い…」

「あらあら…」

「さすがにこの時間はもう寝る時間よ」

母さんと桃子さんの声が子守歌の様に聞こえる。

「それじゃ、アレスを連れて…」

「…直美さん？」

「ん？どうしました？桃子さん？」

「…ごにょごにょ…」

「なるほど。分かりました」

何か…妙な予感を感じないでもないが…眠気に勝てない。

俺は母さんに抱きかかえられて意識を失っていった。

チュン…チュン…。

雀の鳴く声が聞こえる。

…そう言えば、昨日は士郎さん全快パーティーしてたんだよな。

そして、母さんに抱きかかえられてベッドに入った。

入ったのは良いけど、何で…栗色の髪が…見えるんだ？

首を左に向けるとスースーと寝息を立てて眠ってるなのはの姿。

意味が分からないんだが！

そしてなのはは絶賛俺にしっかりと抱きついて離れないんだが！

その後、なのはは目を覚まして『ふえぇぇぇぇぇぇぇっ！？』と大声を上げていたのは言うまでも無かった。

朝食後、なのはが隣に帰った後、母さんに聞いてみた。

「桃子さんが、なのはあげるから…アレスちゃんの母親にもなりたいって」

「…意味が分からないんだが…」

「…多分、あたしと同じ理由？」

…母さんと同じ…だと？もしや、桃子さんにもショタコンの疑いがあるのか…！？

将来に色々と不安を覚えるが、今はどうしようも無い。

とりあえず、４年後に起こる事件までは平穏なんだ。

ゆっくりと、過ごさせてもらうぜ。

第2話　まずは…一人目！！（後書き）

と言う訳でなゆた君はあっさり退場ｗ

ちなみにこの小説に出てくる転生者達は我欲にまみれて自己中心的な思考の持ち主ばかりです

ズバリ、ろくでなしばかりが揃っていますｗ

それでも穏便に済ませられるなら一応は穏便に済ませますが

どうしようもない外道になると…

凄惨な事になるでしょうね…

もっとも、優遇処置で神界に帰っても

肉体言語を使った調教…もとい、恐育…もとい、教育が待ってますｗ

身長２ｍでスキンヘッドで眉毛無しのボディービルダーもビックリなマッチョ神ｗｗｗ

しかも限界サイズまで布を縮めたブーメランパンツ一丁ｗ

そして太股の太さは下手な女性のウエストより太いｗ

色んな意味で恐いですね～ｗ

でも、来世では自分好みの女の子と結ばれるから我慢出来るでしょう。多分ｗ

もっとも、矯正出来るまでですから１００年でも１０００年でも続くかと

さてさて、転生者達を捕まえるのは始まったばかり

他にもどんな転生者がいるのか！？

あまり期待をしないで下さいｗ

プレッシャーに弱い生き物なんでｗ

それでは、次回に続きます！！

第3話　小学3年生になりました。いよいよ、事件が起こる…ハズ？（前書き）

あくまでこれは自己満足満載な小説です

ツッコミ所満載でしょうが、暖かい目で見守ってください

さて、時間を吹っ飛ばしましたw

さあ、今回から始まるジュエルシード回収話

ユーノと知り合ってなのはの相棒、レイジングハートを受け取ります

だが、そこにはアレスも予想しなかった事が…！

それではお読み下さい

第3話　小学3年生になりました。いよいよ、事件が起こる…ハズ？

みんな、こんにちわ

藤之宮アレスだぜ。

あれから4年の月日が流れて…明日で！

ようやく9歳になるんだぜ？

毎日、勉強…はまあ、適当に済ませて鍛錬の毎日！

目標である第5チャクラまで回せる様になった。

これなら能力が5倍あげる事が出来るから戦いが楽になる。

もっとも、身体がまだ出来てないから無理は禁物だがね。

さて、この4年間で起きた事をお知らせしよう。

まずは俺。

小学校に上がったら何故か、高町家で修業をする事となった。

一体、母さんと士郎さんとどんなやりとりがあったのか知らないが、

ともかく修業する事になったのだ。

と言っても身内にしか高町家の技を教えないので。

身体作りと剣術の基礎をやっている。

ちなみに、俺が無手時に使用しているのは古流武術綾野式と言う…まあ、マイナーな技なのだが。

ぶっちゃけ言うとどっかで見た様な技が沢山ある、とだけ言っておこう。

むろん、母さんから習っている…と言う事なので、多分これが高町家で修業するフラグが立ったに違いあるまい。

なのはも参加しているので、とりあえず運動音痴は治っている。

普通の運動神経にランクアップしている。

そして困った事に、母さんが『念法』をうっかり…いや、確信犯的にばらしてしまい。

ソレを聞いた士郎さんと恭也さんはダボハゼのごとく食い付いて来た。

その後、美由紀さんも食い付いて来た。

と言う訳で、士郎さんは始めるには遅い年齢だった為に半年位前にやっと第1チャクラを回せる様になった。

恭也さんが第3チャクラ、美由紀さんは何と第4チャクラ。

更に言えばなのはも何と第1チャクラを回せる様になっていた！

ぬぅはぁ！高町一族からＴＡＫＡＭＡＣＨＩ一族に進化してしまった！

…なのはに気を魔力に変換するアイテム渡したら…。

魔力無限の極悪砲台が完成してしまうんだが！

小学1年でアリサ＝バニングスと月村すずかと出会った。

出会ったのは良いが、これまた二人とも双子の兄が居たのだ！

当然の事、二人は転生者だった。

で、聞くと前世では二人とも双子の兄弟で。

兄がアリサ派で弟がすずか派。

無論、なゆたと同じ様に光源氏計画を目論んでいたので戦うことに。

能力については兄がドラクエ呪文全部、弟がＦＦの呪文全部と言う仕様。

勿論、魔力は無限と来たもんだ。

もっとも、二人とも格闘術に関しては全く能力を貰ってなかったらしく。

俺が呪文全てを避けるものだから。

3時間に及ぶ戦いはあいつらの根負け。

そりゃ、ずっと避けられるし、体力が尽きる気配が全くしないから、精神的に参ってくるよな。

と言う訳で、前のなゆたの様に優遇条件を出したらこれまたあっさりと了承。

善は急げと言うことで二人もこの世界から姿を消して違う世界に転生して貰った事であろう。

まあ、マッチョ神に肉体的教育をたっぷりと受けてから…だろうが。

出会った時も原作に似たような感じではあったが、今回は俺が穏便に済ませてる。

アリサのデコにデコピンをしただけ。

尤も、『何であんたのデコピンは頭がグラグラするのよ！』と咆吼されたが。

ちなみにすずかは俺の顔を見て真っ赤になっていた。

…まさか、俺の闇の力に気付いているのかも。

大抵のヤツには気付かれないが、やはり闇の力に近い種族ほど気になるのかもしれない。

その後、アリサとすずかとも友達となる。

私立聖祥学園初等部三大美女をいつもはべらせてる憎いヤツと認識されてるが、俺にはどこ吹く風状態である。

と言う事で俺は自室のベッドの上であぐらをかいて待機している。

何故かって？

明日は４月４日。つまりは９歳になる誕生日で、多分この夜天の書もどきが起動するからなのだ！

時間は午後１１時５５分。後５分で４月４日になる。

ちなみに母さんは今晩だけは父さんの隣のベッドでお休みだ。

って言うか、本来の寝床に戻っただけなのだが。

確か、はやての時も誕生日の０時ジャストに起動して守護騎士達を召喚したんだ。

待てよ？この書にも守護騎士達いるのかな？

でも、ゼルディア様の話だと相棒はエヴァだけって言ってたしな。

という事は管制人格がエヴァと言うことであろう。

「さて、後３０秒だ…」

俺は時計を見ながら今か今かと待っていた。

「５、４、３、２、１…」

時計の針がい０の位置で全て並ぶ。

「０」

その時、本棚から魔力が溢れ出す。

鎖で封印された本が浮かび、脈動する。

そして鎖が千切れ飛び、本は開いてページがめくれる。

速い速度でめくれるページ。

【封印を解除します。〈イヒ・エントフェルネ・アイネ・フェアズィーゲルング〉】

本から声が聞こえた。

…見たところドイツ語に似た言語が書いてある。

『グラーファイゼン』『レヴァンティン』『レーヴァテイン』『ゲ

イ・ボルグ』『グラム』等々…

何だこれは？

武器の名前ばかり書かれている…？

確か夜天の魔導書は魔法を記録する為に作成されたデバイスだったはず。

それが、武器の名前ばかりとは…もしや、これは古代ベルカに伝われた武器のデバイスを記録した魔導書？

そして本はバタンという音を立てて閉じて俺の前に浮かんで来る。

真紅に輝く十字の紋章。

【起動〈アンファング〉】

声が響き、俺の胸から黒く輝く玉。

ああ、リンカーコアか。

そして魔法陣が現れて…俺のリンカーコアと合体して光り輝く。

「くっ！」

俺は腕で目を覆った。

数秒経って俺は前を見た。

「『武神の魔導書』、起動しました。私は武神の魔導書の管制人格です」

目の前に現れたのは、黒い服を着て目をつむっている金髪の少女。

見た目１０歳位の小柄な少女。

「…ああ」

俺はベッドから立ち上がった。

「…お久しぶりです、お兄様？」

少女は目を開けて立ち上がった。

藍色の瞳が見える。

「久しぶりだな、エヴァ？」

「ホント、久しぶりです。ゼルディア様も言ってくだされば良いのに。１００年以上は待たされましたわ」

そうか。古代ベルカと言えば結構昔の話だな。その間、エヴァはずっと待っていたのか。

「ゼルディア様は意外とテキトーな所があるからな」

「そうですの？」

「ああ、そうなんだ」

「でも、ようやくお兄様とお会い出来ました」

そう言ってエヴァは俺に抱きついて口づけを交わす。

「んん…」

３０秒位の交わりの後、エヴァは口を離した。

「いきなりだな？」

「てへ。待ち切れませんでした」

舌をちょっと出して笑うエヴァ。

ちなみに俺とエヴァの身長はほとんど一緒である。

「ソレで、名前は？前と同じで『エヴァンジェリン』で良いのか？」

「ハイ。それで良いですよ」

「了解。これからよろしくな、エヴァ」

俺はそう言ってエヴァの頬を撫でた。

「こちらこそ、よろしくお願いします。お兄様…」

頬を真っ赤にして俺の目を見つめるエヴァであった。

「さて、粗方の予想は付いてるが…『武神の魔導書』とは？」

ベッドの上で正座しているエヴァに聞く。

「ハイ、古代ベルカ時代に作られた魔導書です。当時の騎士達が使用していた武器の記録を残す為に作られました」

「やっぱり…。レヴァンティンやグラーフアイゼンの名前が載ってたからなぁ」

「さすがお兄様。あの速い速度でめくれるページを読まれましたか」

「まあ、粗方だが。で、武器のスペックは？」

「同じです。私の姉妹機、『夜天の魔導書』の守護騎士である烈火の将と鉄槌の騎士が持つデバイスと全く同じデータが入っています」

「なるほど…」

これはこれで面白そうだな。同じ武器で戦うって言うのも良い鍛錬になりそうだ。

「それで、登録とかって出来るの？」

「ええ、出来ますよ。まだ半分位の空き容量が残ってますから…」

「ほう」

これなら小太刀二刀も記録出来るな。今度データを作成しておこう。

「それで、ユニゾンデバイスなんだよな？」

「ハイ。お兄様とユニゾンしたら…多分、性別はそのままで前世の姿に戻るかと…」

「…なんですと？」

今、恐ろしい事を聞いた様な。

アリスの姿で性別はそのままだと？

…男の娘かよ！

これはあまりユニゾンはしない方向で話を進めていこうか。うん、そうしよう。

「…まあ、ユニゾンはあまりしない方向で」

「分かりました」

「それで、エヴァ自身の方は？」

「私は前世のままです。吸血鬼の真祖と同等の力と再生力で魔法もそのまま」

「おぅ…」

何と言うチート。下手な魔導師が来ても余裕で撃退出来るな。

「あと、血は吸いませんから」

「了解。それじゃあ…後は追々やっていくとして、明日の朝は母さんに紹介だな」

「バラして大丈夫ですか？」

「大丈夫。母さんも父さんもアテナ姉さんの部下やってる人だから」

「それなら大丈夫ですね」

「それで、家に居る時はその姿で大丈夫だけど、外に出る時は待機モードで」

「分かりました。本の形のネックレスになりますから、お兄様の首にかけて下さい♪」

「ん、分かった」

そう言って俺は布団に潜る。

そしてエヴァも何事も無かった様に俺の隣に潜って抱きついて来る。

「…全く、エヴァは甘えん坊さんだな」

「仕方無いじゃないですか…やっとお兄様と一緒に眠れるんですから！」

顔を真っ赤にしてるエヴァ。

「分かったよ。それじゃお休み、エヴァ」

「もう、お兄様の意地悪」

と言いつつエヴァは抱きしめる力を少し強めた。

身体に暖かさが広がってくる。

そして俺はそのまま眠りについた。

学校が始まって二週間。

その間は何事も無く過ごしていたが…。

とうとう、始まりのフラグが立った。

「…ユーノ」

起き抜けに言った言葉。

まあ、数々の小説等で『淫獣』扱いされてる可哀想な人…。

夢の中で怪物と戦って、力尽きて倒れ、オコジョ…じゃなくてフェレットの姿になっていた。

オコジョだと色々な問題があるならな。

アレこそホントの淫獣だし。

「おはようございます、お兄様」

隣からゴソゴソと現れるのはエヴァだった。

「おはよう、エヴァ」

そう言ってエヴァの頭を撫でる。

「えへへ…」

顔が緩みまくってるエヴァ。

「さて、今日から始まるぞ」

「え？ああ、なのはちゃんとユーノ君が出会うのね？」

「ああ。とりあえず、下校時に出会うハズだからこっそり後をつけて様子を伺うよ」

「分かりました、それでは今日からいよいよ行動開始ですね」

「ああ。デビュー戦だ」

俺はベッドから起きてキッチンに向かった。

そして、いつもの様に学校に向かう。

昼休み。

いつもの様に俺はなのは、アリサ、すずかの3人と昼食を食べていた。

ちなみに場所は屋上でピクニックみたいにシートを張ってその上で食べてるが。

周りには嫉妬の視線を浴びせてくる男子生徒がいるが、その程度の嫉妬目線では俺にダメージなぞ与えられぬ！

「将来かぁ…」

そう呟いてタコさんウインナーをほおばるなのは。

その顔は少し思い悩んでいる。

「アレス君とアリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」

「ウチはお父さんもお母さんも会社経営だし、一杯勉強してちゃんと跡を継がなきゃ…だけど？」

とアリサはそう言っておにぎりをかじる。

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職が良いな…と思ってるけど」

すずかはそう言ってご飯を食べる。

「で、あんたはどうなのよ、アレス？」

アリサがやや睨む様な目で俺を見る。

「俺か？俺はまだな～んにも考えてない」

そう言って弁当の唐揚げをほおばる。

む、これはエヴァがよく作った味。母さんに教えたのか。

「くっ！何か余裕ぶっこいてる様に見えてムカつくわね…」

「アリサちゃん、口調が…」

「そっか、アレス君はまだなのか～」

「ああ、まだだなぁ…。それと、別に余裕ぶっこいてる訳じゃないぞ？」

「どの口が言うのかしら？常にテストで学年内トップ３内に輝いてるアレス君？」

アリサは額に血管を浮かべて俺の方を睨む。

「何を仰るウサギさん。たまたまトップ３内に入ってるだけだ」

「な・に・が・た・た・ま・た・ま・よ！入学以来常に入ってるクセに！それとあたしはウサギじゃない！」

「ほぅ、なら何だね？虎か？獅子か？グリズリーか？」

「何で肉食で凶暴なヤツばかりなのよ！バンビ（子鹿）とかあるじゃない！」

アリサの血管が更に増えた。

「それこそ何を仰るホオジロザメさんだ。なのはやすずかなら柴犬とか子猫とかフェレットとかリスとか合うが、アリサは…」

そう言って俺はアリサの顔をマジマジと眺める。

「な、何よ？」

頬が赤くなるアリサ。

「うん、軍鶏だな。アリサには軍鶏がお似合いだ」

なのはとすずかがお茶を吹いた。それはもう、ドリフのコントのごとく。

「あんたはぁ！今日と言う今日は許さないわよ！」

そう言ってアリサは右手を振り上げて殴りかかってくる。

俺は既に食べた弁当をしまってそれを難なくかわす。

「ほらほら、黙って座ってれば可愛いのに台無しじゃないか」

「うるさいうるさいうるさーい！あんたは大人しくあたしに殴られれば良いのよぉ！」

右から左かボクシングの…某デンプシーロールのごとく殴りかかってくるアリサ。

だが、速さは全く足りないから俺はそれを何の気も無しに避ける。

「さ、避けるな～！！！」

「避けないと当たるじゃないか！」

「当たりなさいよ！」

「当てたきゃパンチの速度をあげろよ、こうやって」

俺は右手でアリサの頬を撫でる。

「ウッキ――――！！！」

顔を真っ赤にして更に殴りかかってくるアリサ。

こうして昼休みは過ぎていく…。

「あはは…アレス君ったら…」

「にゃ～…ああ見るとアレス君って凄いなぁ…」

なのはとすずかは苦笑いで俺達の様子を眺めていた。

放課後。

なのは達3人は塾に行くため俺と別れた。

ちなみに昼休みの決戦は…アリサの勝利に終わった。

敗因は、すずかの助太刀によって。

すずかに羽交い締めにされたあと、アリサに引き渡されてそのあとパロ・スペ○ャルをかけられたから。

しかもきっちり決まってたから結構痛いのなんの…。

ってか、何で社長令嬢のアリサがそんな技を知ってるのか少し疑問ではあるのだが。つーかキ○肉マン読んでるのか。

さてそれはさておき。

3人と確かに別れたが、俺はその3人の跡をつけていた。

無論、俺の穏行術は素人なら絶対にばれない自信はある。

某聖杯戦争でアサシンとして召喚されてもおかしくないレベルだと自負している。

そうこうしてると林の中を通る。

途中、なのはが立ち止まる。

《たすけて…》

ユーノの声だ。

そしてなのははまた立ち止まって周りを見渡す。

《助けて！》

二度目の声が聞こえた時、なのははいきなり走り出した。

アリサとすずかも後を追う様に走り出した。

よし、ユーノを無事に見つけた様だ。

俺は更に後をつける。

少し走るとなのはがフェレットらしい小動物を見つけていた。

それを見たアリサとすずかは少し焦ってる。

少し話をしてすずかが携帯で電話をすると3人はまた走り出した。

更に俺はその後を追う。

暫くすると3人は病院らしい建物の中に入った。
看板を見ると『槙原動物病院』と書かれていた。
「…よし、これで大丈夫だ」
俺はそう呟いてその場を後にした。
これで今夜にはユーノからの救難信号が届くであろう。
それまでは少し休憩だな。

《聞こえますか…僕の声が…聞こえますか！》
「ああ、聞こえてるよ…っと」
ベッドの上に寝ころんでいた所を起きる。
《聞いて下さい…僕の声が聞こえる貴方…お願いです…僕に少し力を貸して下さい！》
「やれ、なんぼでも貸してやるよっと」
俺はいつもの私服に着替える。
黒いシャツに黒のジーンズだ。

《お願い！僕の所へ！時間が…危険が…》

そう言って声は途切れる。

俺は窓のカーテンを開ける。

見ると私服に着替えたなのはが走っていった。

「エヴァ？」

「呼びました？」

ドアを開けるエヴァ。

「行こう。なのはがユーノの所に行った」

「分かりました。それでは待機状態になりますね」

そう言ってエヴァはペンダントになる。俺はそれを首にかける。

《父さん、母さん、行って来るよ》

《分かったわ。気を付けてね》

《おう、行って来い！》

父さんと母さんに念話を飛ばして俺は窓から飛び出した。

ちなみに靴は部屋に置いてあるのだ。

「なかなか速いな、なのは…」

【お兄様が念法教えたのでしょ？体力がほとんど無限になってるから全力で走って行ったのでは？】

「そりゃそうだ…と」

俺は今第1チャクラを回して全力で走っている。

暫く走っていると、目の前にいるのは…。

なのはだ！そしてユーノを抱いて走っている。

そして、上から降ってくるのは…黒い煙の様な化け物。

「浄化の蒼水晶、起動！」

俺は右目に気を通す。

どうやら思念体みたいな感じらしい。

真ん中には水晶みたいな青い宝石みたいなモノが。

アレがジュエルシードか。

「エヴァ、武器に杖はあるか？」

【ありますよ。『レーヴァテイン』が】

「…ああ、そう言えばそうだったな。大体は剣で伝わってるが、杖と言う説もあるらしいからな。それを頼む」

【分かりました。騎士甲冑は？】

「任せる。大丈夫だな？」

【…分かりました。かっこいいのを作ります！武神の書、起動！！〈アンファング〉】

俺の身体が輝き、一瞬にして服装が替わる。

手には手甲で足には頑丈そうなブーツ。

申し訳程度の肩当てに胸の部分に鎧。

よく見るとザフィーラの服に似てるな。

色は黒がベースだが。

そして手には…何かドラクエに出てきた武器、『魔道士の杖』に似たデザインの杖だった。

「よし、これならミッド式の魔導師に見えるだろ」

【残念ながら足下の魔法陣でモロばれですけどね】

「それを言うな」

俺の足下に見えるのは三角形をベースに頂点に円をくっつけたベルカ式の魔法陣だった。

ちなみに色は漆黒。ま、夜だから見えにくいかな？

見ると後少しでなのはに襲いかかる怪物。

「やらせるかよ！」

俺は瞬時に駆け寄り、怪物を杖で思い切り殴った。

「ギャッ！」

吹っ飛ぶ怪物。バウンドして何処かの家の塀に突き刺さる。

「…アレス…君？」

大きく目を見開いて俺の方を見てるなのは。胸元のユーノは呆然と怪物を見ていた。

「こんな夜遅くに出歩くなんて…なのはは悪い子だな？」

俺は口元をつり上げて笑った。

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？何でアレス君が！？」

「そんな事より。胸の獣！」

「え！？」

「アレはどうすれば良い？」

塀に突き刺さった怪物はゆっくりと起き上がって俺の方を向いた。

「そうだ、これを！」

ユーノは真っ赤な色をした丸い宝石をなのはに渡した。

「今から言う呪文を唱えて下さい！」

よし、それなら俺は時間を稼がせて貰おう！

杖と言えどそれなりに扱えるんだぜ？

『突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀。杖はかくにもはずれざりけり』ってね！

俺は左手に杖を持って切っ先の方に手を添えた。

竜の一撃、受けてみろ！

「はあぁぁ！竜牙ぁ！」

一呼吸で５ｍ以上の間合いを詰めて突く槍と刀用の奥義。

まあ、ぶっちゃけ言うと『るろ○に剣心』に出てきた『牙突』と言う技にそっくりなんだけどね。

そこ、パクリとか言わないの。

怪物の胴体？らしき場所を突いて怪物はまたも１０ｍ近く吹っ飛び、違う家の塀に突き刺さる。

「レイジングハート・セーットアップ！！」

「レイジングハート・セーットアップ！！」

なのはとユーノの声が響く。

【スタンバイレディ・セットアップ】

紅い宝石から声が聞こえた。うむ、生レイハさんの声ですな。

その刹那、膨大な魔力がなのはから溢れ出した。

桃色の光が周囲に溢れる。

眩しくてなのはの姿が見えない！

なるほど、大きいお友達対策ですね、分かります。

「とりあえず、これで！」

なのはの声が聞こえた。これで、未来の『魔王』様が誕生しましたな。

【しかしお兄様。私と同等の魔力ですわ】

「そうか。エヴァと同じタイプか…。どうやら魔法に関しては俺よりもなのはが上だな」

【まあ、お兄様は元々は気を使うタイプ。それでもそこまで魔法を使えるのは凄いと思います】

「はは、それでもせいぜいが1．5流だな。悪くて二流だ」

【もう、そこまで謙遜しなくても良いのに。お兄様ったら】

「自慢しまくって天狗になるよりはマシだろ」

【そうですわね】

エヴァと会話してると光は治まり、そこには…。

「…ゑ？」

【…あれ？】

なのはが居た。当たり前だがなのはがいる。

バリアジャケットのデザインは小学校の制服がベースだ。デザインは良い。全く問題無い。

問題なのは色だった。

なのはと言えば白色が目立つバリアジャケットだ。

『管理局の白い悪魔』とか、『管理局の白い魔王』と言う二つ名が

似合う位に。

「…何か、不穏当な言葉が浮かんだの」

「気にするな」

さすがなのは。俺の思考を読んだのか？

まあいい。

それが、服に入ってるラインは良い。濃い青のラインだ。

杖の形も良い。いや、レイハさんのコア部分の形がおかしいが。それは後で述べる。

何故…。

何故、空色なんだ！？

澄んだ水色とでも言えば良いのか！？

これでは『管理局の水色魔王』になるではないか！

そしてレイハさん！貴女の…そのデザインは何ですか！？

なのはの杖の先と言えば、真紅の宝石で球体が付いている、レイハさんです。

それが…何ですか！？

なのはと同じ様な水色で形が正八面体の形は！そして水晶の様に透けていて真ん中にめちゃくちゃ小さく紅くて丸い宝石が見えるだけ！

…

……

……

ちょっと待て。その色、その正八面体…。

俺は背筋に悪寒が走った。

【私も分かりました。あの形…前世でお兄様に見せて貰った…とあるアニメに出てきた…】

「ああ…」

俺はゴクリと生唾を飲んで言い放った。

「第五使徒…ラミエル」

【第五使徒…ラミエル】

俺とエヴァの同時つぶやきはなのはとユーノには聞こえていなかった…。

第3話　小学3年生になりました。いよいよ、事件が起こる…ハズ？（後書き）

どうしてこうなったｗｗｗ

元凶は某ニコ〇コ動画にあるなのはとエヴァンゲリオンの合体動画ですｗ

だって、ラミエルの砲撃の色は桃色だし

なのはの砲撃も桃色だし

どっちも遠距離は鬼仕様だし、防御もどっちも堅いしｗ

ごめんなさい…

でも、後悔も反省もしないぜ！

とりあえず、ディバインバスターとかスターライトブレーカーがどうなるか見物ですねｗ

ひょっとして、エラい人物を作ってしまったのだろうか…？

アレスのデバイス設定（前書き）

今作、アレスが使用するデバイス設定です

アレスのデバイス設定

武神の魔導書『エヴァンジェリン』（ＣＶ．松岡　由貴）

アレス専用の古代ベルカ式ユニゾンデバイス。

前世名は『エヴァンジェリン＝Ａ．Ｋ＝マクダウェル』

腰まである金髪に藍色の瞳をした少女。

外見は１０歳くらいにしか見えない。

身長　１３０？

体重　？？？　？

スリーサイズ　Ｂ６７　Ｗ４８　Ｈ６３

『魔法先生ネギま！』に出てきた６００年近く生きた吸血鬼の真祖。

ただし、こちらは双子の姉と一緒に生きて来たから従順な性格。もはや別の人物と考えた方が良いだろう。

キレると怖いのは一緒だが。（前世で一度だけキレて近右衛門を凍らせた事がある）

結構恥ずかしがり屋。炉利な方が見れば０．５秒で『お持ち帰り～！』と叫えたくなる。

無論、ネギま！に出てきた魔法は全て使用可能。それどころか苦手

だった回復魔法・補助魔法も使えるチート仕様。

得意属性は闇と氷（水）。当然だが『闇の魔法』も習得済み。

合気道も無論の事、アレスのおかげで剣術等も習得。

念法も習得。ただし、第一チャクラしか回せない。その代わりだが体力は無限に続く。

気を魔力に変換する指輪を装備してるから事実上魔力が尽きる事が無い。なんてチート仕様。

夜天の魔導書の双子機として作成されてる。作りは９９％一緒である。言うことは…分かるな？

古代ベルカの技術の全てを結集して作成した魔導書。

名の通り古代ベルカで使用された武器データを入れてある。

無論、シグナムのレヴァンテインとヴィータのグラーフアイゼンも入っている。

当然ながらアレスはシグナムとヴィータの動きも９．５割は再現出来る（予定）から結構強い。ダブルギガントハンマーとか相手が可哀想になりそうだｗ

とりあえず、こんなところですか

追加事項が出来たら追加します

第４話　魔法少女？いいえ、『魔砲少女』が誕生しました（前書き）

いやいや、ちょいと忙しかったので

それと作者は結構遅筆なので

何とかサクサク話を進めて行きたいモノですなｗ

とりあえず、『魔砲少女ラミエルなのは』どうぞｗ

第４話　魔法少女？いいえ、『魔砲少女』が誕生しました

「嘘…何なの？これ…」

呆然と自分の身体と持ってる杖を見て呟くなのは。

「詳しい話は後で！来ます！」

今度はなのはに向けてとびかかる怪物。

弱い方に目標を変えたか！？確かに戦術としては正解だが…！

「きゃあぁぁぁ！」

【プロテクション】

レイジングハートがそう言うとなのはの前に現れる桃色の壁…なんだが。

「…あのさ、俺の目には六角形壁が見えるんだが？」

【ハイ、私の目にも見えますよ？】

どうやら幻覚では無いようだ。

なのはの前に現れる魔力の壁は何故か…ＡＴフィールドに見えた。

本家は赤い色なのだが、なのはのは桃色の壁だった。

ああ、何てタチの悪い…パワーアップ。

なのはも転生者？

だが、四年間一緒に過ごしてきたが…。その様なそぶりは全く見受けられなかった。

それに、俺が追ってる転生者達は全員が何かしら歪んだ思考の持ち主。

わざわざなのはに転生するとは思えないし、そもそも女の子に転生するか？

まあ、中にはいるかもしれないが…。

仕方ない。後で天界に連絡取って聞いてみよう。ひょっとしたら何か聞けるかも知れない。

「グオォォォ！！」

なのはのシールドに当たってはじける怪物。

バラバラになるもすぐに再生する。

「あの忌まわしい怪物、『ジュエルシード』は封印するしかありません！」

「どうやって！？」

「心を澄ませてください。貴女の中に…呪文が浮かびます」

なのははユーノからそう聞くと目を瞑ってその場に立った。
怪物は再生してなのはに襲いかかろうとするが…。
「やらせると思うか？」
俺はなのはの前に立ち、左手の平を前にかざして防御魔法を発動する。
【装甲手楯〈パンツァーシルト〉】
目の前に現れるベルカ式魔法陣。
怪物はそれに阻まれてこっちに来ることが出来ない。
「あの魔法陣は！」
ユーノがそう呟くのを俺はしっかりと聞いていた。
後で追求は免れないかもな。
「アレス君、ありがとう！後は私が！シュート！」
俺はシールドを解いて左に身体を避ける。
なのはのレイジングハートから桃色の砲撃が怪物…ジュエルシードに直撃する。
おかしいな…。ここで砲撃だったか？

しかもレイハさん、いつの間にシューティングモードですか？

「グゥオォォォォォ！」

吼えるジュエルシード。プチ・ディバインバスター級だったが、それでもあの直撃は効いただろう。

「リリカルマジカル…ジュエルシード、ナンバー？？？封印！」

今度は桃色の光の帯がジュエルシードの身体を貫く。

そして、黒い怪物の形をしたジュエルシードは消え去る。

バラバラになったアスファルト舗装の中に光り輝く物が見える。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてください」

「ほぉ…これが」

俺はバリアジャケットを解除してなのはの後ろに立って壊れた道の真ん中を見る。

菱形の形をした宝石…これがジュエルシード。

ってか、今のレイハさんも同じ形に見えるのだが。

【ナンバー？？？】

レイジングハートの中に収納されるジュエルシード。

そして、なのはの身体が光り輝き、元の服装に戻る。
手には真紅の宝石、レイジングハートが握られていた。
「あれ…？終わったの？」
「はい…あなた達のお陰で…ありがとう…」
そう言ってユーノはその場に倒れた。
「ちょっと！大丈夫！？」
なのはがユーノに駆け寄る。
遠くからサイレンの音。この音は…消防車とパトカー…！
「なのは」
「…アレス君」
俺となのはは顔を見合わせた。
冷や汗をかいて頬を引きつらせている。
「…補導歴有りと将来書かれたいならこの場に居ても良いよ？」
「…それは…」
「なら、逃げよう。壊れたてホヤホヤの場所に居た時点で言い逃れ

出来ない」

「うん！」

お互い頷いてその場から走り去った。

「ご、ごめんなさーい！」

周囲になのはの謝る声が響いた。

近くの公園に逃げ込む俺達。

「はあ…」

「ふぅ…」

大きく深呼吸して近くにあったベンチに座る。

「す、すみません…」

なのはの腕に抱えてたユーノが目を覚ましたようだ。

「あ、起こしちゃった?ごめんね、乱暴で…。怪我、痛くない?」

「怪我は平気です。もうほとんど治っているから…」

ユーノはそう言って身体に巻かれてる包帯をほどいた。

「ホントだ。怪我の跡がほとんど消えてる～」

「へえ～」

俺はユーノの身体を眺める。そして腹の辺りをさする。

「あ…ちょ…くすぐったい…！」

悶えるユーノ。結構からかいがいがあるかもな。

「もう、ダメだよアレス君。まだ完治はしてないんだから」

「はは、すまんすまん」

「助けてくれたお陰で残った魔力を治療に回せました」

「そうなんだ。良く分かんないけど…そうだ。自己紹介して良い？」

「え、あ、うん」

「…エヘン。私、高町なのは、小学校3年生。家族とか、仲の良い友達は『なのは』って呼ぶよ」

満面の笑みでユーノを見るなのは。俺も自己紹介しないとな。

「俺は藤之宮アレス。なのはと同じ小学校3年生。なのはと同じく家族も友達も『アレス』と呼んでる」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、『ユーノ』が名前です」

「ユーノ君か。可愛い名前だね」

「うむ。ユーナでも良いな」

「アレス君…それは何か女の子チックな名前だよ？」

ジト目で俺を見るなのは。

「…すみません…。あなた達を…巻き込んでしまいました…」

顔を下に向けてうつむくユーノ。

「気にするな。トラブルに巻き込まれるのは良くある事」

「そうだよ。アレス君と一緒に居ると…結構楽しいかな？だから、私は平気だよ」

「すみません…」

「そうだ、ここじゃ落ち着かないから…私のお家に行こう？」

「そうだな。その方が良いだろう。ああ、俺も会話には参加させて貰うよ？《こうやって…な？》」

「ふぇ？」

「念話を…！」

会話の最後、口を閉じて俺は二人に言った。

《何を驚く。さっきも俺は魔法を使っていたじゃないか》

「そういえば、そうでしたね…。なのは、レイジングハート持っていたらアレスと同じ様に会話出来るよ」

「そうなの？」

《そう言う事。それじゃあ帰ろうか？》

「そうだね。それじゃ、帰ろうか」

俺達は家に向かって歩き出した。

「さて、帰ってきたね～」

「そうだね～」

俺達は高町家の前に立っていた。

女の子の家に送るのは基本だし、それに俺は許可を得てるから叱られる心配は全くないのだがね！

「叱られる…かな？」

「多分。まあ、俺と一緒だったと言えば多少はマシになると思うけど…」

「お願い！アレス君！」

両手で拝んで来るなのは。なかなか可愛い仕草ではある。

「分かったよ…」

俺は高町家の門を開ける。

二人でゆっくりと中に入り、玄関に向かう。

「おかえり。何だ、アレスと夜のデートだったのか。なのはにはちょっと早いと思うのだが？」

横に現れたのは恭也さんだった。

他の二次小説にあるようにシスコン化はしてるが俺には何故か寛容であった…。

「へ？あ…あの…？」

予想外の事を言われてしどろもどろになるなのは。

「ははは、すみません…」

俺もさすがに謝る事にした。

「まあ、同衾した仲だからキスも許すが…」

…この人は一体何を言ってるのだろうか。

ちなみに5歳の時に一緒に寝かされてから最低でも週に一回はなのはがお泊まりに来てるのだが。

「あら、可愛い～」

更に現れたのは美由希さんだった。

なのはに抱えられてるユーノを見ている。

「うん？この動物…」

「ああ、なのははこの子が心配になって出たんだ。出た所をたまたま見かけて俺も一緒に出たんです」

「そうなんだ～。まあ、アレス君が一緒なら大丈夫だね」

そう言って頭を撫でてくる美由希さん。

「ふむ…。そうだな。内緒で出掛けたのは頂けんが、アレスと一緒だったのなら良いとしようか」

「ごめんなさい…」

なのはは頭を下げて謝る。

「それじゃ、俺はもう帰りますよ？」

「ああ。すまないな」

「ありがとね、アレス君」

「ありがと～アレスく～ん」

俺は高町家を後にして自宅に戻る。

「どうだった？」

部屋に帰ると母さんもやって来た。

「ああ、とりあえず原作通りなのはとユーノが知り合って魔法の存在を知ったよ。でも…」

「でも？」

「なのはのバリアジャケットが違うんだ」

「どういう風に？」

俺は母さんに説明をした。

「なるほど…何やら変な因子が混じってるみたいだけど…」

「ああ。転生者にしては色々とおかしい点もあるし…」

「そうですわね～チートにしてはちょっと足りない気が…」

三人で首を傾げている。

「それなら、天界に問い合わせてみたら？」

「やっぱりそうなるか～」

と言う事で俺は天界に念話を飛ばしてみた。

以下、天界でのやりとり。

《ああ、アレスだけど？》

《うむ。どうかしたのかね？》

《ちょいと気になる点が。この世界の『高町なのは』は…どうなってるんだ？》

《ふむ、あの娘か。あの娘は転生者だ》

《何？》

《だが、今回の捕縛する転生者では無い。私の部下がちょいとミス

ってね…》

《…どういう事だ？》

《知ってるだろう？アレは余所の世界の天使。現世に降りた仲間の天使を連れ戻そうと人間と戦って…》

《そう言うことか。殺された弾みでこっちの天界に飛ばされて、この世界に転生されてしまった…と言う事か？》

《そう言うことだ。本来なら元の世界に帰そうとしたのだが、私の部下がミスしてこの世界に人間として転生させてしまったのだよ》

《…お互い、部下の育成頑張ろうな》

《そうだな。言う訳で彼女に関しては天寿を全うさせて貰いたい》

《了解した。この事は俺の部下の中だけの秘密にする》

《頼む。用件はそれだけかね？》

《ああ。ありがとう》

《分かった。それでは転生者達を引き続きこちらに送り返してくれ》

「どうだった？」

「ああ、なのはも転生者。だが、今回の件には全く関係無いとの事」

【それじゃあ、彼女の前世はひょっとして…】

「天使『ラミエル』。それが彼女の前世の名前だ」

「彼女も…複雑な事情があるわね…」

「ああ…」

俺達はお互いに顔を見て苦笑するしかなかった。

母さんはエヴァは揃って料理の本を見ていた。

ちなみに菓子のページ。桃子さんに挑むつもりか…？

それでは、どんな状況か聞いてみよう。

俺はなのはに念話を飛ばしてみた。

《どんな状況だ？》

《アレス君。今、ユーノ君はお母さんとお父さんに構って貰ってるよ？》

なるほど。と言う事は今夜は話になりそうにないな。

《分かった。まあ、用があったら念話を飛ばしてくれ。もっとも、寝てたら返事しないけどね》

《うん、分かった。ユーノ君にも伝えておくね》

とりあえず、念話を止めることにした。

さて、いつもの様に寝ようかとベッドに入る。

ちなみに母さんとエヴァがベッドに入っているのは仕様となってる。

「おやすみ、アレス」

「おやすみなさい、お兄様」

「おやすみ」

左にエヴァで右に母さん。二人とも、腕を抱きしめて来るのは…まあ良いや。

《アレス、起きてる?》

頭に響くのは…ユーノの声。

《ああ、起きてるぞ》

《良かった…。さっきはありがとう》

《良いって事よ。それより、どうした?》

《アレスは…魔法をどうやって知ったの？それと、アレスが使ったシールドの形…もしかして、『ベルカ式？』》

やはり気になったか。ベルカ式の魔法陣はミッド式と形が全然違うからすぐに分かるよな。

《まずは一つ目。魔法を知ったのはつい最近だ。こっちの暦で４月４日…２週間位前だな》

《なるほど…》

《で、二つ目。その通りだ。俺のデバイスに教えて貰ったんだがな》

《珍しいね…ベルカ式は今はほとんど廃れて使う人が居ないんだ》

《そうなのか？》

《うん。僕やなのはが使うのは『ミッド式』。主に射撃とか砲撃が主で遠距離攻撃が多いんだ》

《と言う事は…ベルカ式は…》

《そう。遠距離、中距離を度外視して武器や素手で戦う近接戦闘向きの魔法だよ》

《はは、俺向きの魔法じゃないか。俺はどちらかと言えば近接戦闘型だからな》

《そうなんだ。でも、どうやって入手したの？》

《それがな。親に聞いた話だと俺が生まれた時に何故か家に現れてたとの事》

《え…？》

《面白いだろ？持ち主を選ぶのか知らないが。ちなみに名前はエヴァンジェリンだ》

《へぇ…。でも、アレスが持ってたのは杖だったけど？》

《まあ、あまり人に言わないでくれよ？俺のデバイスな、ベルカの人達が使ってた武器のデータが入ってるんだ》

《…え？》

《何でも、『武神の魔導書』と呼ばれてたらしい》

《凄いな…下手したらジュエルシードと同等の貴重品かも…》

《さあ？そこら辺はよく分からないなぁ。そうだな、明日にでも紹介するよ》

《え？それってレイジングハートみたいに…》

《ああ。結構お喋りだぞ》

《ベルカ式でインテリジェントデバイス…？》

《さて、この辺で終わりにしよう。明日は学校があるし》

《あ、ごめん。それじゃあ、おやすみ》

《おやすみ》

俺とユーノの会話は終わる。

ちなみに、エヴァと母さんはぐっすり眠っていた。

次の日。

俺となのははアリサとすずかと会話した。

簡潔に言うと。

フェレット（ユーノ）はなのはの家で預かる事になった。

何であんたが知ってるのよとアリサ。

昨日、たまたまなのはが出掛けるのを見かけたから一緒に行ったんだと俺。

ふぅん…と何やら言いたげな表情のアリサ。

とそこでチャイムが鳴って授業開始。

授業中にユーノからジュエルシードの事を聞いた。

要約すると…

?:ユーノの世界に伝わる古代遺産である。

?:手にした者の願いを叶えてくれる魔法の石である。

?:ただし、力の発現が不安定で夕べの様な暴走をたびたび繰り返す。

?:そして、人や生き物を取り込んで暴走することもある。

改めて聞くとろくでもない道具だよな。

《そんな危ない物がどうしてうちのご近所に?》

なのはのツッコミももっともだ。

《僕のせいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしてるんだ。そしてある日、古い遺跡の中でアレを発見して調査団に依頼して保管して貰っていたんだけど…》

《だけど?》

《運んでいた時空艦船が事故か何らかの人為的災害にあってしまって…》

まあ、ぶっちゃけ言うとプレシアさんのせいなのだが、ここで言う訳にもいかない。

《そして、２１個のジュエルシードはこの世界にちらばってしまいました》

《２１個だな？》

《ハイ。そして、見つけたのは昨日のを含めてまだ２つ…》

《あと１９個か…》

その時、チャイムが鳴り響く。

だが、先生はまだ授業を続ける。

《あれ？ちょっと待って。それって…別にユーノ君のせいじゃ…》

《それは俺も同感だな》

《でも、アレを見つけてしまったのは僕だから…きちんと集めて、元の場所に戻さないといけないから…》

全く、ユーノは苦労する性格かもな。責任感が強すぎると言うか。将来、ハゲなければいいが…。

《何となく、ユーノ君の気持ちが分かるかもしれない》

《ま、分からんでもないが》

《それで、ほんの少し。僕の魔力が戻るまでの間、一週間…いや。５日もあれは十分だから…》

《それで？ユーノ君は魔力が戻ったら…どうするの？》

《え？その後は一人で…》

《待て待て待て。ユーノ、２日前にジュエルシードにボッコにされてたの…忘れたのか？》

《う…》

《アレス君も夢を見たんだ》

《見てたよ。ま、俺もなのはも巻き込まれた形ではあるが…関わった以上は全部集める迄協力させて貰うぞ？》

《そうだよ。アレス君と私が居たらだいぶ楽になると思うよ？》

《すみません…》

《そう。こちらの世界のことわざに『袖振り合うも多生の縁』とある。なのはとユーノ、そして俺との出会いだって前世の何かかもしれないだろ？》

でもぶっちゃけ言うと俺は違うんだがね…。

《アレス君は難しいことわざを知ってるの…》

《あの、それはどういう意味…》

《道ばたで全く知らない人同士が袖…まあ、この場合は肩にしよう

か。肩が触れ合うのも前世からの縁があったからと言う意味だよ》

《そうなんですか》

《そうなんですよ。こうして3人が知り合ったんだ。だから、協力させて貰う》

《ありがとうございます…》

《なのはも協力するだろ?》

《うん。私だけ仲間外れはイヤだもん。よろしくね?ユーノ君》

こうして時間は流れていった。

夕方。

アリサとすずかと別れてからなのはと一緒に商店街を通って帰る。

「今日のおやつは何かな~」

「はは、なのはは食いしん坊さんか?」

「むぅ~違うもん!」

その時、魔力を感じた。

「これは…」

「アレス君…ひょっとして…」

《…新しいジュエルシードが発動している！すぐ近くに！》

ユーノからの念話。

《分かった。行こう、なのは。ユーノもすぐに来てくれ》

《分かった》

俺となのははは魔力を感じた場所に向かって走り出した。

ユーノと合流して階段を駆け上がる。

確か、この上は神社があったはず。

「なのは、レイジングハートを」

「うん」

さて、俺も準備はしておこう。

右手にペンダント化したエヴァを握っておく。

鳥居をくぐり、目の前に現れたのは。

「原住生物を取り込んでる…」

うん、確かに取り込んでるね。

俺は目の前の生物を見た。犬を取り込んだのだろう。

近くには２０代前半らしき女の人が倒れてる。この姿を見て気絶したのだろう。

そりゃそうだろ。首が3つになった犬なのだから。

ってか、この犬はケルベロスになりたいと願ったのか?ツッコミを入れたいのだが。

「取り込んだらどうなるの?」

「実体がある分手強くなってる!」

「ふん、首が3本に増えた程度で!なのは、セットアップを」

俺はなのはの前に立ち、起動準備にかかる。

「エヴァンジェリン、セットアップ」

【了解です、おにい…いえ、マスター】

さすがに外でお兄様と呼ばせるのはアレだったのでマスターと呼ぶように言ってある。

一瞬にしてバリアジャケットを纏う。

「…あれ？」

「どうした？」

「呪文…忘れちゃった…」

「もう一度僕が言うから！」

目の前のケルベロスが俺達に向かって走ってくる。

「ええい！変身途中は攻撃してはいかんと言う法律を知らないのか！」

そう言って俺はケルベロスの真ん中の頭を杖で上から殴る。

「ギャブン！」

ひるんで後退するケルベロス。

【スタンバイレディ・セットアップ】

なのはが呪文を唱えず起動するレイジングハート。

「さ、行くぞなのは。俺があいつを弱めるから、封印してくれ」

「うん、分かった」

俺はケルベロスに向かって疾走した。

第４話　魔法少女？いいえ、『魔砲少女』が誕生しました（後書き）

とりあえずはこんなもんで

大まかな話はテレビアニメと似てはいます

ただ、多少違う所はありますがｗ

今回は特筆すべき事はありませんねｗ

それでは、次回をお待ち下さい。

第5話　町中が破壊されるフラグはへし折ってしまいませう（前書き）

ラミエルなのはが砲撃を撃ちまくり！を期待していた方々、ごめんなさい！

まだ、そういった戦闘に入るのはまだ先なんです！

だって、砲撃撃ちまくりになるのは無印でも後半…だったはず。

それまでは…まったりとした話で勘弁してください！

それでは、どうぞ！！

第5話　町中が破壊されるフラグはへし折ってしまいませう

「ガアァァァァ！！」

吼えて俺に向かって突撃して来るケルベロス。

「そんな単純な突撃でどうにかなると思うか？」

俺は左に避けて右の頭に杖を打ちつける。

「ギャッ！」

怯んだ所を更に眉間目がけて突きを放つ。

右の首が目を瞑った所、真ん中の首が俺に噛み付こうと口を開けて襲いかかってくる。

「遅い！」

俺は下にかいくぐって顎下から杖で思い切り突き上げる。

真ん中の首は思いっきりのけぞって胴体部分が丸見えになる。

「ハアァァァァ！！！」

一気に第三チャクラを回して身体能力を上げて喉より下の部分を突いた。

「グゥアァッ！？」

ケルベロスの身体が５m程宙に舞い、そして地面に叩き付けられてひっくり返った。

ケルベロスは頭を打ったらしく、ジタバタともがいていた。

「ふぅ、…ん？困るなぁ、なのは。呆然と見てないで封印をやって貰いたいんだが…」

なのはは目を見開いて俺とケルベロスの戦いを眺めていてユーノは顎が外れんばかりに口を開けていた。

「す、凄いのアレス君…あんな怪物でも全く動じないで戦ってる…」

「うん…何か…戦い慣れてるって言うか…」

「もしもし？」

俺はなのはの顔向けて顔を近づける。鼻の頭同士がくっつくくらいに。

「わぁ！」

なのはは驚いて飛び退く。

「いや、封印してくれないと…俺のデバイスは封印機能が無いから…」

「あ…ごめんなさいなの…」

頬がリンゴの様に赤いなのは。

そしてレイジングハートを未だ起き上がろうともがいてるケルベロスに向けて…

「リリカルマジカル…ジュエルシード??…封印！」

レイジングハートから桃色の光線がケルベロスの身体を貫く。

…もはや砲撃にしか見えないのだが。

間違いなく砲撃特化型にしか見えん。

将来は固定砲台か…。魔力無限の。下手な魔導師なら秒殺されるな。

そうこうしてたらジュエルシードと犬が分離して、ジュエルシードはなのはのレイジングハートに収納された。

俺は犬を見た。

子犬だ。こんな子犬がケルベロスとは、何の冗談だか。

俺は子犬の頭を撫でる。特に目立った外傷はなさそうだ。

倒れた女の人も同じく外傷は無いみたいだ。

俺は女の人を担いでお賽銭箱の所に寄りかからせておいた。

さすがに地面の上はアレだし。

暫くすると女の人は目を覚まして周りを見渡した。

「アレ？…疲れてたのかな…」

そう呟いて駆け寄る子犬の頭を撫でた。

「…疲れてたんだよね」

そう言って女の人は神社を降りていった。

これで一件落着…かな？

「それじゃ、帰ろ？アレス君」

そう言って俺となのはは帰路についたのであった。

それから数日は目立った事は無かった。

とりあえず、更にジュエルシードを2つ封印して5つ集まっていた。

そうそう、天界から贈り物が届いた。

前世で使用していた魔法のポシェット。

ぶっちゃけ言うと某猫型ロボットが使用しているポケットと同じで色々な物を収納出来るのだ。

前世で使用した魔法具とかその他諸々が収納されている。

しかも、俺とエヴァ以外の人が手を突っ込んでも反応しないセキュリティ付き！

まあ、問題は見た目のデザインが思いっきり女の子向きである事だ。

前世の姿なら全く問題無いが、今の姿だと…ちょっとアレなんだよね。

外見をいずれ改修しないといけないが、それは先の話だ。

そう言えば、無印編が始まったのに転生者達が現れないな。

４年経つがまだ3人だからなぁ。

狡猾な奴らが揃っているのか、様子をうかがっているのか。

まあ、同じチート同士でつぶし合いしてるのか。

つぶし合いしてくれた方が（作者的に）手間が減って助かるのだが。

うん？今何か変な単語が混じった様な…。

まあ、良いか。詮無きことだ。

さて、本日はジュエルシード探しは少し小休止で俺となのははちょ

っとした事に顔を出していた。
それは…。

「頑張れー！」

「ファイトだよー！」

士郎さんがコーチ兼オーナーを務めてるサッカーチーム、翠屋ＪＦＣの試合であった。

なのは、アリサ、すずかの３人はベンチに座って応援。

俺は試合…ではなくなのはとすずかの間に座って応援していた。

ちなみに士郎さんは俺に試合に出て欲しかったらしく、ギリギリまで俺に頼み込んで来ていたのだが。

まあ、俺サッカーあんまり好きじゃないし。

「しっかし、あんた…」

ジト目で俺を見てくるアリサ。

「どうした？」

「こうしてベンチで応援してるだなんて…男として恥ずかしいと思わないの？」

「ふん。別に試合に出ないと死刑になるわけじゃないしな」

「そりゃあ、確かにそんな極刑にはならないけど…。折角美少女3人が来てるんだから良いところを見せようとか思わないわけ？」

「別に思わないし、そんな下心見え見えで調子こいてると失敗したときの恥ずかしさは3倍に膨れあがる。それと美少女は2人しか見えないが…？」

「ちょっと待ちなさい。ここにも居るでしょうが！」

自分を指差すアリサ。

「ほほぉ？まあ、確かに『黙って座っていれば』美少女と言うカテゴリーに入るのだがねぇ？」

口元を吊り上げて微笑む俺。

「待ちなさいよ！それだと喋るとダメと言ってる様に聞こえるんだけど！？」

「当たり前じゃないか。それに、何処の世界にパロ・スペ○ャルをキッチリ極める女の子が居ると言うのだ」

「それは…乙女の必修科目よ！」

「何を戯けた事を。それならハリケー○・ミキサーも必修科目になるのか？」

「当たり前じゃない！４８の殺人技と５２の関節技を全て修めて初めて乙女になるのよ！」

握り拳を作ってそう言い放つアリサ。
色んな意味で終わってるような気がするのだが。

「それに…」

「それに？」

「アレスはあたしの初めてを破った人だからね…」

アリサは頬を真っ赤にして俺の顔を見ながらそう言い放った。

「誤解を招く言い方はお止め下さい！それと、なのはとすずかと…
士郎さんの視線が突き刺さって痛いんだが！」

見るとなのは、すずか、士郎さんの視線が突き刺さる！

「アレス君…君はなのはが居ながら浮気をしたと言うのかね…」

「アレス君…散々私の裸を見ておいて…」

「！！！」
「！！！」

アリサとすずかの目が見開かれる。

「ちょ！その発言は！」

全てが終わったように思えてしまった。

ちなみに、なのはとはたまにお風呂に入る仲…とだけ言っておこう。

「ほぅ…一緒にお風呂…ねぇ…」

「なのはちゃん…結構大胆…」

顔を赤くしてるのはアリサとすずか。

「だって、アレス君の洗い方…凄く丁寧で気持ちいいから…」

なのはの顔も赤い。

良かった…士郎さんが呼ばれて向こうに行っていて。

ホッと胸を撫で下ろす。

「ふふぅん？」

アリサの邪悪な笑み。

もの凄くイヤな予感しか感じないのだが…。

「さてと…俺はちょっと急用を思い出したから…」

ベンチから立ち上がる俺。

「逃げられると思う？」

左腕を掴んでくるアリサ。

「…そこを逃げる！」

振り払って逃げようとしたが。

「逃がさないよ？」

なんと、すずかも俺の右腕を掴んでいた！

「何だと…！」

「アレス、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましょ？」

「何だそれは！高町式お話はいらぬわ！」

そのあと、俺は今度の温泉旅行で一緒にお風呂に入る事を約束された。

アリサとすずかに…。

こうなったら、ユーノのヤツも道連れだ…。

突然のホイッスル。

見ると、選手の一人が怪我をしたらしくこっちのベンチに帰ってくる。

「弱ったなぁ…今日は補欠の選手は用事があって休みなんだよな…」

そう呟く士郎さん。

すると、士郎さんは俺の方を向いた。

「…アレス君？」

「…まさかとは思いますが？」

「頼む」

両手で拝んでくる士郎さん。

「む～…」

「チーズケーキ、一週間タダ」

「やりましょう」

0．5秒で陥落してしまった。仕方ないだろ、桃子さんのチーズケーキはシャレにならんくらい美味いんだから！

予備の服を借りて俺は着替え、スパイクを借りる。

「頼む、アレス！」

一応自己紹介したから名前は知ってる…のは良いが！

いきなり俺にパスを回すんじゃない！

ちなみに今は０－１で負けてるのだ。

ボールが回ってきた。敵チームが何人かが寄ってくる。

「いただき！」

一人がボールを奪おうと駆け寄ってくる。

「…」

俺はボールを左足で弾いてそれを難なくかわす。

「な！？」

「こいつ、出来る！？」

今度は複数人が一斉に駆け寄ってくる。

「よっと」

俺はボールを右足で弾いて頭に乗せ、軽くヘディングする。

まるで水族館でボールを乗せてるオットセイみたいだな。

「…なあ、アレ…どうすれば良いんだ？」

「あんなのは初めてだ…」

「下手に体当たりしても反則取られるし…」

敵チームも攻めあぐねていた。

「コラー真面目にやりなさいよー！」

ベンチから聞こえるアリサの野次。

「へいへい、分かったよ」

俺はボールを地面に落としてゴールをちょっと見てから左足で思いっきり蹴る。

「何処蹴ってるのよ～！」

またもアリサの野次声が響く。

俺が蹴った先はゴールより外れた…いわゆるあさっての方角。

「良かった…」

「ノーコンだ…あいつ…」

だが、ボールはゆっくりと曲がっていく。

「あ…あれ？」

「う、嘘だろ？何であんなにカーブするんだよ！」

「おい！キーパー！」

気を抜いていたキーパーが驚いてボールに飛びつく。

「くっ！」

何とか反応してはじくのは成功したが、味方が運良く目の前にいたため。

「そら！」

それを蹴ってとどめのゴール。

１－１の同点に追いつく事に成功した。

「やったー！」

「すごーい！」

はしゃぐなのは達３人。

士郎さんも驚いて俺の方を見ていた。

その後はあまり目立たないように…するつもりだった。

が、そうは問屋が卸さないらしく。

仕方なしに俺は遠距離からのシュートを放つ。

ちなみに、『ボールは友達』と明言する少年が得意とするシュートでだめ押しの1点をもぎ取って2－1で俺達のチームが勝利した。

そう言えば、なのはとユーノはサッカーの事とか話をしていたな。

まあ、そこら辺は粗方知ってるからいいか。

その後は俺達は翠屋に行ってご飯を食べる事となった。

ちなみに、「すっげーよな」「チームに入らないか？」「サッカーやってたのか？」等々聞かれたり言われたりしていたが、それなりに応答しておいた。

無論、サッカーはやる気は一切無いがね！

さて、俺の気が確かじゃなくて記憶が確かなら…キーパーの子がマネージャーの女の子にジュエルシードを渡して暴走するんだよな。

まあ、そんなの起きたら大変だから…。

俺はネックレスをポケットに忍ばせていた。

銀で自作したアクセサリー。

何の効力も無いタダの飾りなのだ。

前世の時に魔法具を作る時にどんなデザインにするか試しに作ったヤツだからだ。

何でも取っておくものだな…と思ってみたり。

そして、俺は外のテラスにてなのは達3人と一緒に白いテーブルに着いていた。

真ん中にフェレットになったユーノ。顔には冷や汗がダラダラ流れていたが。

「それにしても…改めて見るとこの子、フェレットと違わない？」

「そう言えば…そうかな…。動物医院の院長先生も他の子と少し違うって言ってたし」

マジマジとユーノを眺めるアリサとすずか。

俺はそっぽを向いてオレンジージュースを飲んでいた。

「まあまあ、ちょっと変わったフェレットと言う事で…ユーノ君…お手！」

なのはが右手を差し出すとユーノも手をその上に乗せる。

「おおっ」

「可愛いぃ～」

驚くアリサと頬を赤くするすずか。

《大変だな、ユーノ…》

《うん…》

「賢い賢い～」

「すご～い」

アリサとすずかはユーノの頭をやや強めに撫でていた。

《ご、ごめんね…ユーノ君…》

《だ、大丈夫だよ…》

俺となのはは苦笑しながらそれを眺めるのであった。

暫くすると翠屋のドアが開いてサッカー選手達が出てくる。

挨拶をして解散した後、キーパーをやっていた少年がスポーツバッグのポケットから青い菱形をした宝石らしい物を取り出し、それを眺めて微笑んだ後ズボンの右ポケットに入れた。

そして、マネージャーと一緒に帰っていく。

「あ…」

なのはが気付いたみたいだ。

ちなみにユーノはアリサとすずかの2人に玩具のごとく構われていたため気付いていない。

《どうした?》

《今、キーパーやってた男の子…ジュエルシードみたいなのを持ってた様な…》

《うん、俺もそれらしい物が見えた。どうする?》

《アレス君も見えたなら…やっぱりジュエルシードだね。どうしようか?》

《そうだな、このまま追いかけて奪うのはほとんど強盗だし。そうだな、一つの案がある》

《どんなの?》

《そりゃあ、物々交換。あれと同等位の何かを渡してジュエルシードを貰う》

《で、でも…私そんなの持ってないよ?》

《大丈夫。こんな事もあろうかと、良い物を持ってきている。テーブルの下で渡すから手を…》

《うん、分かった》

俺はポケットから銀細工のネックレスをなのはの右手に渡す。

《そして作戦はこうだ。俺が魔法の霧であの二人を眠らせるから、なのはが少年のポケットからジュエルシードを取り出してレイジングハートに収納して渡したネックレスをポケットに入れる》

《うん、了解なの》

「あ～面白かった。ハイ、なのは」

アリサはそう言ってユーノを渡してきた。

散々弄ばれたらしく、目を回していたが。

「さて、あたし達も解散だね」

そう言ってアリサとすずかは鞄をテーブルの上に置く。

「そっか、二人とも午後から用事があるって言ってたね」

「そうなの。お姉ちゃんとお出かけ」

「あたしはパパとお買い物！」

「良いね、月曜日にお話聞かせてね」

「そして、俺となのははデートだ」

「にゃ！？」

途端、顔が真っ赤になるなのは。

「ほぅ？あたし達の方こそ、月曜日にたっっっっぷりとお話を聞かせて貰うわよ？」

「そうね。何処まで逝ったのか…そこんとこみっちりと…」

アリサとすずかの雰囲気が変わった。背後に般若の面が見えるのだが。

「ジョークだ。フランス・ジョークだ」

「フランスと言うよりイタリアン・ジョークの様な気がしないでもないけど？」

「…何が言いたいのかね？」

「別にぃ？」

ニヤニヤと笑うアリサ。

これ以上は地雷原に飛び込む様なものだからあえて何も言わない。

アリサとすずかと別れてから行動を開始する。

１５分位走るとさっきの少年とマネージャーが楽しそうに歩いていた。

ちなみにその間にユーノには説明をしておく。

《とりあえず、封鎖領域を作ってから魔法の霧で眠らせる。その後はなのは、お願いする》

《了解なの》

「エヴァ、頼む」

【分かりました。魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

空間が変わって周りの人が居なくなる。

「な、何だ？」

「こ、恐い…」

二人は驚いて周りを見渡していた。

「それでは…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　大気よ、水よ、白霧となれ。彼の者らに一時の安息を。『眠りの霧』」

二人の周りに霧が現れてすぐに二人はその場に崩れた。

「それじゃ、なのは」

「凄く手際が良いの…」

その後、少年のポケットからジュエルシードを取り出し、代わりに銀のネックレスをポケットに忍ばせておいた。

ちなみに、少年の記憶をちょっといじって元からこのネックレスを持っていたと記憶させておく。

「これで良しかな」

「だね」

二人を近くのベンチに座らせておいて…結界を解除する。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　花の香りよ、仲間に元気を、活力を、健やかな風を。ｒｅｆｅｃｔｉｏ」

さわやかな香りが二人の周りに集まる。

そして、二人は目を覚ます。

「あ…あれ？」

「…ここは…」

目をこすりつつ周りを見る。

何事も無かったかのように歩く人、道路では車が走っていた。

「疲れてたのかな…」

「わ、私も…かな？」

二人は顔を見合わせて微笑んでいた。

「これで良し」

「良かった良かった」

俺となのははは二人の様子を見て一安心していた。

「で、人が持って発動していたらどうなってたんだ？」

「そうだね…前回の犬とは比じゃない被害が出ていたかも…」

「だってさ、なのは。もし、なのはが気付いていなかったら…街が大変な事になってたかもな」

「うん…」

「終わりよければ全て良し…。さあ、帰ろうか」

俺となのははそのまま家に帰っていった。

数日後。

俺はなのはに連れられて月村邸に遊びに来る事となった。

ちなみに本日は恭也さんも一緒である。

すずかの姉、忍さんと恭也さんは恋人同士である。

月村邸に着いてドアをノックする恭也さん。

ドアが開くとメイド長の『ノエル・K・エーアリヒカイト』…ノエルさんが現れる。

「恭也様、なのはお嬢様、アレス様。いらっしゃいませ」

一礼してお出迎えである。

「ああ、お招きに預かったよ」

「こんにちわ～」

「こんちわ」

微笑んでお出迎えのノエルさん。

恭也さんやなのはにはフツーの対応なのだが…。

「アレス様？」

何故か俺だけは身体検査を行う。

何回も何も持ってないですよ？と言っても聞かない。

ちなみにその時の様子は頬が妙に赤く、目が潤んでいる。

…気のせいだと思いたい。まさか、俺の身体をなで回したいだけ…と思いたくない。

「はい、今日も変な物は持っていませんね」

「…ハイ」

藪をつついて蛇…いや、餓えた虎を出したくないからあえて何も言わない。

その後は普通に案内される。

部屋に通されると忍さんとアリサとすずかがテーブルに着いて紅茶を飲んでいた。

そして、周りには猫、猫、猫、猫…。

猫屋敷かここは。

すずかの後ろでは専属のファリン嬢が立っていた。

「いらっしゃい、恭也、なのはちゃん、アレス君」

忍さんが立って恭也さんの前に立つ。

なのはに聞いた話だと恭也さんと忍さんは高校の頃からの同級生…とのこと。

まあ、今はしっかりと恋人同士と言う雰囲気がプンプンと…。

「それじゃあ、私と恭也は部屋に居るから…」

「分かりました。それでは後で紅茶をお持ちします」

ファリン嬢とノエルさんはお茶の準備に向かい、恭也さんと忍さんは自室に行って…まあ、詮索は止めよう。

俺となのはもアリサ達が着いてるテーブルに着くと…。

「ニャー」

「ファー」

「キシャー」

妙に猫達が寄って来て周りに座る。

なのはにも寄ってるが、俺の方が多いのだ。

ちなみに最後の鳴き声も一応は猫だ。決して地球外生物ではない。

「しっかし…あんた…今日も猫が寄ってくるわね…」

「言うな…」

「あんたって…マイナスイオンでも放出してるの？ウチに来ても犬がやたら寄って来てるし…」

目を丸くして俺の方を見るアリサ。

確かにマイナス側の闇の力だがマイナスイオンかどうかは分からんわ。

「アレス君はマイナスイオン製造器なの？それならウチも欲しいなぁ～」

すずかさん、それだと俺に婿に来いと言う遠回しの発言なのですか？

「確かに…犬を躾るのにもってこいよね…。駄犬を躾るのは主人の役目だし…」

アリサ。違うキャラ入ってないか？異世界から使い魔でも呼んだのか？

「ダメだよ…アレス君は…」

何やらブツブツ呟いてるなのは。あえて聞かないぞ、俺は。

気を紛らわそうと周りを見るとユーノが猫に追いかけ回されていた。

…まあ、殺される訳じゃないから大丈夫だろ。

俺は放っておくことにした。

《た、助けて～》

《頑張れ》

ユーノから救難の念話が来たが一応、応援だけはしておいた。

「は～い、お待たせしました～。イチゴミルクティーとクリームチーズクッキーで～す」

お盆を持ったファリン嬢が現れ、その足下をユーノと子猫が走りまくる。

「あ、あわわわわ」

ファリン嬢はバランスを崩して倒れそうになる。

俺は瞬時に駆け寄り、ファリン嬢を支える。

「はわわわ、アレス君ごめんなさい…」

どうにか惨事にならず、一件落着と言ったところか。

暫く、お茶を飲んで菓子を食べて会話を楽しんでいた。

ちなみに俺は会話にはほとんど参加はしていない。

と言うか、アリサと軽い口喧嘩になるからだ。

まあ、彼女は俺を嫌っている訳でもないし、俺もこういう関係は嫌いではない。

「む？」

魔力反応が現れた。

どうやらジュエルシードが発動したみたいだ。

《アレス君…ユーノ君…》

なのはからの念話。

《すぐ、近くみたいだ。どうする？》

《どうするも…ユーノ、レッツゴーだ》

《え？》

《ユーノが突然茂みに飛び込む。そして俺となのはが探すと言ってこの場から離れる。何の違和感も無い》

《そうだね…それが良いよ》

《善は急げ、だ。頼む、ユーノ》

《分かった。それじゃあ行くよ》

そしてユーノはなのはの膝元から離れて草むらに飛び込んで行った。

「あ…」

「どうしたの？」

「何か…見つけたのかな？探してくる」

「それじゃ、俺も一緒に行くよ。アリサとすずかは待っていてくれ。すぐに戻ってくる」

「うん、分かった。早く戻ってきなさいよ？」

「分かってるって」

俺となのはは魔力反応があった場所に向かって走り出した。

「ユーノ、封鎖領域を」

「了解。僕に出来るのはこれくらいだからね」

そう言ってユーノはミッド式魔法陣を展開する。

すると、周りの空間が切り離される。

その直後、森の上に何かが見えた。

「…あれは…」

俺達は呆然とした。

「…でかい。でかいんだが、子猫…だな」

「…うん…」

「……」

ユーノは呆然としていた。

高さ7～8ｍはあると思われる…子猫。

でかい子猫とはこれまた如何に！？

ドシンドシンと大きな足音を立てて子猫は歩いて行く。

「アレは…」

「た、多分、あの子猫が願った『大きくなりたい』と言う願いが叶ったのかな…と」

「確かに間違ってはいないのだが、何か釈然としないんだが」

「同感…」

俺は子猫を見ながらそう呟いた。

「だけど、このままだと危険だから…元に戻さないと」

「そ、そうだね…」

「まあ、こんなでかい子猫見たらすずかとアリサが卒倒するな」

「確かに…」

苦笑してるなのは。

「それじゃ、さっさと元に戻そうぜ」

俺はペンダント化したエヴァを握りしめる。

最近、空気化してるが気にしない。

レイハさんもあまり喋ってないし。

「うん。レイジングハート！！」

なのはが胸元から真紅の宝石を取り出した瞬間。

後ろから来るのは…！

「来たか…」

呟くが二人には聞こえていない。

黄金色の魔力光。

その魔力光は子猫に当たって子猫は泣き叫んだ。

「ミャアァァ！」

「誰！？」

なのはが後ろを振り返った。

１００m位後ろの電柱の上に立っていたのは…金髪のツインテールをした女の子だった。

手には黒い杖の様な物が握られていた。

「バルディッシュ、フォトンランサー電撃」

【フォトンランサー・フル・オート・ファイア】

金髪の女の子から放たれる魔法。どうやら電撃タイプだな。

まあ、知ってるんだが！！

数発が放たれ、子猫に当たって更に子猫はよろける。

「なっ！魔法の…光！そんな！」

「レイジングハート、お願い！」

【スタンバイレディ・セットアップ】

「エヴァ、頼む！」

【了解です、マスター。起動〈アンファング〉！！】

俺となのはは同時にバリアジャケットを纏う。

その時、もう一つの反応が現れた…！

「これは…」

何かが違っていた。これはなのはの手には負えない…！

まさか、転生者!?

もし、転生者ならなのはではなく…俺の仕事だ！

「なのははあの女の子を！俺は現れたもう一つの反応を見る！」

「分かった！」

なのはは子猫の方に向かって飛んでいった。

ィン…

僅かに聞こえた…投擲音!?

「くっ！」

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉！】

エヴァが自動で目の前に障壁を展開する。

何本かがシールドに当たって弾かれ、地面に刺さる。

「…この短剣は…ダーク！?」

地面に刺さった短剣を見ると、Ｆａｔｅで真・アサシンが使用していた投擲用の短剣に酷似している。

「へぇ…転生者の分際でわざわざベルカ式を使ってるとはね…」

現れたのは黒を基調としたバリアジャケットを纏う男だった。

黒髪で手には紅く輝く魔力光で出来た鎌を持っていた。

身長は１５５?位で年齢は１４歳前後か?

切れ長の目に漆黒の瞳。見ると濁って見える…。

こいつ、善人では…ないな!

「そう言うお前だって、ミッド式を使ってるじゃないか」

「ふん。郷に入っては郷に従えってね。デバイス無しで魔法を使うのなんて怪しいじゃないか」

「ま、そりゃそうだ」

俺は左手の杖を握る。

「しかし、変なヤツだな。ベルカ式なのに見た目はミッド式の杖だなんて」

「俺の趣味だ」

「ふぅん、そうかよ」

男はそう言って鎌をかざす。

「行くぜ、ハサン。フォトンランサーだ！」

【イエッサー】

男の周りに現れる紅い玉。それが一斉に襲いかかってくる。

数は…３０前後か！

俺はそれを避けて弾きつつ男に近づく。

「やっぱりベルカの使い手だけあって近接戦闘で来るか」

「まあ、な」

何となくだが、イヤな予感を感じる。

何だか分からないが、俺の六感が何かをささやくのだ。

『理の指輪』は今は使えない。近くではなのはとフェイト、見てないけどユーノとアルフも戦ってるんだ。

巻き込む訳には…いかない！

「さて、と。ここでちょいと交渉と行かないか？」

「何？」

男は鎌の先を地面に下ろす。

「あんたの狙いはなのはだろ？なら俺はそれ以外のキャラを頂いても良いよな？」

…この男は何を言ってるのだ？

もしや…。

「…まさか、フェイトやはやて、アリサやすずかも…」

「ご名答。なのははあんたに譲るが、その他の女の子は俺が幸せにしてやるよ！」

男の口元がつり上がる。久しぶりに見たぜ、あんな邪悪な笑みは。

「楽しみだ！ああ、楽しみだぜぇ！股ぐらがいきり立つ！フェイトとはやては同時に頂いた方が良いよなぁ！？」

だんだんと腹に黒い物が溜まっていく。

この外道は…極刑に値する！

「黙れ…」

「あん？」

「黙れぇ！！！！」

俺は一気に第四チャクラまで回して身体能力を上昇させて男の鳩尾を突く。

「ぐぅはぁ！」

男は１０m位吹っ飛び、木に激突する。

「貴様の様な外道と組むつもりは毛頭無い。さっさとこの世から消し去ってやる！」

魔力を放出して自動障壁も展開させる。

「てめぇ…ネギま！の魔法も使えるのかよ…」

男は口から出た血を手で拭うとゆっくりと立ち上がった。

「さて？何の事だか？」

「ナメやがって…だが、この技を見ても貴様は戦えるかな？」

男は右手を掲げた。

空中に現れる霧の様な物。そして、それは固まってある形になっていった。

「…心臓…？」

俺は何となく、イヤな予感を感じた。

「くくく…宝具『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』」

第5話　町中が破壊されるフラグはへし折ってしまいませう（後書き）

いやはや、外道な転生者を考えるのも意外と大変ですｗ

あと、外道な能力を考えるのも…なかなか。

Ｆａｔｅネタばかりもアレなんですが

直接的攻撃じゃなくてこういった呪殺みたいな能力を持ったヤツって意外と少ないと言うか、作者の勉強不足と言うかｗ

でも、調べると意外と楽しいのも事実。

まあ、だんだんと違う事ばかり調べてしまうのがネックかとｗ

さて、次はどんなヤツ出そうかな～

第6話　聖〇士に同じ技は二度通用しないと言うのを忘れたか？（前書き）

お気に入り登録が少しずつ増えてるんだが…

こんなナメた小説を気に入ってくれる人がいるとはね…

さて、今回のアレス君は…

いえ？モゲロとか言わないでね？

彼はこういう運命なのですよ？ｗ

あと、ノエルさんがエラい事になってますがこの小説ではこういう仕様です。あしからずｗ

第6話　聖〇士に同じ技は二度通用しないと言うのを忘れたか？

「くくく…宝具『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』」

それを聞いて俺は即座に無詠唱の魔法の矢3発を地面に刺して爆発させた。

爆風が周辺に覆われて視界が見えなくなる。

あの技はダメだ。

魔力が高ければ防げる率は高くなるがゼロにはならない！

ここで死んでしまっては色々面倒になる！

そして、回避して…もしなのはとかユーノを人質に取られたら…。

ダメだダメだダメだ！

こうなったら…アレを使うか。

「奥義・二重身〈ドッペルゲンガー〉」

俺はそう呟くと魂を2つに別れた。

分身体を囮として本体である俺はひとまず隠れるしかない！

仮にあの技をしのいだところで下手をしたらなのはの心臓を握りつぶすかもしれない！

今回は、逃げるしかないみたいだな…！

俺は気と魔力を完全にゼロにしてその場を離れた。

―分身体アレス視点―

本体は…よし、ここから離れてるな。

あくまで俺はここであいつの足止め。分身体の俺が死んでも本体に戻るだけ。

結構、便利と言えば便利な技かもな。

「くくく、目くらましをしても無駄だ！『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』」

その言葉と共にグシャッと言う音が響き、同時に俺の心臓が潰された。

「ぐ…が…」

俺はその場に片膝を付いた。

「残念だったな？目くらましをしようが俺のこの技からは逃れられん！」

「ぐ…」

「さて、このまま放っておいても貴様は死ぬだけ。後は…まあ、なのははゆっくりと手に入れるとしようか」

男は後ろを振り返ってそのまま飛んでいった。

「くくく…ざまぁみろだな…」

俺はそう呟きつつその場に倒れて意識を失っていった。

―分身体アレス視点・終了―

なのはの元にたどり着くと既に負けていたのか、気を失って倒れていた。

ちなみに子猫も元の姿に戻っていた。

その後はなのはを治療してすずか達の元に帰っていった。

その夜。

なのはは恒例と化してしまった俺の家でお泊まり。

無論、ユーノも一緒である。

「アレス君…負けちゃった…」

ベッドの上で正座をして下を向くなのは。

まあ、確かにラミエルの力でパワーアップはしてるがまだまだ戦いに関しては素人の域を出ない。

「ああ、俺も何とか逃げるに精一杯だった」

「そんな…アレスでも？」

「いや、勝てるには勝てたんだが…」

「？」

「あいつの切り札がな…」

俺は切り札である『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』の事を教えた。

「嘘…」

「そんな…」

二人は目を見開いていた。

「まあ、魔力が高ければ防げただろうが、もし防げたとしてもなのはやユーノを人質に取られたら…」

「ごめんなさい…」

「気にするな。俺だって１００％防げる自信は無いし、それになのははあの金髪の女の子と戦うんだろ？」

「うん…」

「ま、この調子だと次も出会うだろうから…俺はその時に借りを返してやる」

【そうですわね。お兄様は同じ相手からの二度の敗走はありませんもの】

「あ…」

エヴァはいつもの調子で喋ってしまった。

「こ、こらエヴァ」

【あ…】

なのはとユーノ、２人の目線が妙に冷たい。

「ねえ、ユーノ君?デバイスに『お兄様』って普通呼ばせる?」

「いや、僕は聞いたこと無いよ?」

【私もありませんね】

レイハさんもバッサリだった!

「へぇ?アレス君ってそういう趣味があったんだ」

「いや、ちょっと待て。なのはは勘違いしているぞ?」

「今度アリサちゃんとすずかちゃんに教えてあげようかな…」

「待て待て待て!すずかは良いにしてもアリサに教えた日には…!」

ここぞとばかりにおちょくって来るに違いない!

満面の笑みで『お兄様?』と言ってくる!間違いなく!

その後、今度の温泉旅行では一緒に洗いっこしようね♪と言われてしまった。

え?混浴はもう逃れられないのですか?

そもそも、海鳴温泉に混浴はあるのですか?

世間は連休に入りました。

所謂ＧＷ（ゴールデン・ウィーク）と言うヤツです。

まあ、当然の事ながら…俺は旅行に出掛けてます。

高町家、藤之宮家、アリサと月村家（メイドさん含む）と言う大人数。

車で揺られること2時間半。

温泉宿に到着した俺達は…。

少し周りを散策した後、颯爽と風呂に入りました。

「どうしてこうなった…」

俺は今、世の中の男性が大喜びする桃源郷、女湯に来ていた。

無論、混浴ではない。つーか、女湯だって言ってんだろ！それに、そうそう混浴の温泉なんぞあってたまるか！

理由は単純明快。

温泉入り口に張ってあった紙。

『女湯への男児入浴は１１歳以下のお子様のみでお願いします』

ちょっと待てやコラ。

このネタはＳｔＳのネタじゃないのか？

それとも、またやるのか？

…まあ、メタ発言は止めておこう。

ちなみにユーノも強制連行済み。

淫獣と淫魔人の二つ名を刻もうじゃないか！

…母さんに泣きつかれたから拒否は出来ないんだけどね…。

エヴァが一緒に入りたい～と言ってるが今はダメだろと何とか断ってるが。

腰にタオルを巻いてからゆっくりと行く。

ユーノは入る前から既にのぼせているように見えるが。

後で水をかけておこう。

「アレスく～ん、背中洗って～」

なのはが頼んで来る。

ちなみに、ここの描写はかなり制限させて貰うぜ。

「はいはい…」

言われるがままになのはの背中を洗う。

「やっぱりアレス君の洗い方が一番良いよ。丁度良い加減で洗ってくれるし…」

少し頬が赤いなのは。

ちなみに左右に分かれてアリサとすずかの二人がジーッと眺めていた。

「…ゴクリ」

「ホント気持ち良さそう…」

二人の頬も赤かった。

なのはの背中を流した後。

「さあ、アレス！あたしの背中も洗いなさい！」

15分後

「あ、あんたのその…あ、あ、洗い方は…どういう事よ…」

顔が茹で蛸の様に真っ赤になっていたアリサがいた。

「どういう事と問われても。普通に洗っただけだが…」

「巫山戯ないで…あんたのその洗い方は…何というか…」

アリサは千鳥足の様な感じで湯船の方に向かって歩いていった。

「次は私の番だよね？」

15分後

「ふあぁぁぁ…」

もはや言葉になってないんだが。

アリサと同じように真っ赤になったすずかがここに居た。

「大丈夫か？すずか？」

「だ、大丈夫…だよ…？」

やや目が虚ろになってませんか？

「すっごいね～アレス君は」

「そんなに気持ちいいのかしら？すずか？」

背後に現れたのは忍さんと美由希さんだった。

更にノエルさんとファリン嬢と…母さんと桃子さん。

ものすげーイヤな予感を感じるのですが。

以下、ダイジェスト風にお送りします。

「くっ、この洗い方は…！」

「な、何なのこの絶妙な…」

「これは…！」

「はわわわっ凄く気持ち良いです～」

「さすがはアレスちゃんね～やっぱり気持ちいいわ～」

「な、直美さん、週一でも良いからレンタルをお願いして良いかしら？」

桃子さん、俺はレンタル物件では無いのですが！

６人の女性方を洗ったのでようやく自分の身体を洗うことが出来る。

「ふぅ、これ以上居たらのぼせちまう」

スポンジを泡立てて腕をこすろうとしたら。

「…あら？」

握っていたスポンジは何故かノエルさんの手に。

「お礼に洗ってあげます」

「そうね。お礼は大事よね」

後ろからは桃子さんの声が。

「へ？あの…自分で…」

「何か言いました？」

ノエルさんの目が据わっておられました。逆らえません。

あと、鼻から赤い液体が流れてる様な気がするんですが。鼻から出る忠誠心なら某紅魔館のメイドさんの得意技であってノエルさんが習得して良い技では無いのですよ？あと、それは忍さんとすずかにお願いしたいのですが！

「それでは行きます！」

結果的にはノエルさんは前の方を。

桃子さんは後ろの方を。

洗って頂きました。

ええ、上手でしたよ。

上手でしたが…まあ、ここはあえて言いませんが！

その後はなのは、アリサ、すずかの3人も来て頭を洗って貰いましたよ…。

ええ、隅々と…綺麗にさせて貰いました。

何、この後宮的な扱いは…。

その後はなのは達3人に連れられて旅館内を散策。

ちなみに、全員浴衣を着用している。

すると、前から来るのは額に宝石みたいなモノを入れてる橙色髪の女の人。

まあ、アルフさんですね、分かります。

「はぁい、おチビちゃん達」

そう言って俺達の元に歩いてくる。

「…そんな…あんたは…確か、あいつが…」

アルフは驚愕の表情で俺を見る。

大方、あの男があの小僧なら葬ったとか病院送りにして当分出てこられないとか言ったのであろう。

「ん？何か…用ですか？」

俺は何事も無いかの用に返した。

「い、いや、何でも無いよ…」

そう言ってなのはの方を見る。

「ふぅん、この子が…ねぇ…」

《どうした？重傷、もしくは死んだと伝えられてた俺がいてびっくりしたのか？》

アルフに念話を飛ばす。

「っ！」

俺の方を見るアルフ。

《まあ、あの男に伝えておく事だな。俺をそう簡単に殺せると思わないことだ…と》

《…伝えておくよ》

「ちょっと？何処のどちら様ですか？」

アリサがアルフに詰め寄る。

「あははは、ごめんごめん、ちょっと…知ってる子に似てたからさ」

アルフは頭をかきながら笑い出す。

「そうですか…」

「あら、可愛いフェレットだね～」

そう言ってユーノの頭を撫でるアルフ。

《まあ、いいさ。今は挨拶だけ。忠告はしておくよ。子供はお家に帰って仲良く遊んでな。おイタが過ぎると…ガブッと行くわよ?》

アルフは八重歯を見せながら微笑んできた。

《くくく、子供だからと言ってナメてると…そちらがガブッとやられるかも知れんぞ?》

《良いね～悪ガキを躾るってのも…悪くないね》

《ほぅ?悪さをする『狼』を躾るのも悪くなさそうだな?》

俺は少しだけ…殺気を放出した。

《くっ…》

アルフは俺から目を逸らした。

「さぁて、俺は行くが…なのは達はそのお姉さんと遊ぶのか？」

俺はアルフの横を歩き出した。

「あ、待ってよアレス君」

「待ちなさいよ！」

「待って～」

なのは達3人も俺の後を付いて来た。

その後は俺達は卓球をやった。

ちなみに、アリサ・すずかペアと俺・なのはペアになってプレイした。

接戦だったが、俺となのはペアが勝った。

アリサは顔を真っ赤にして咆吼していたのは言うまでも無かった。

更にアリサは俺にシングルでアリサ・すずかはペアと言う変則対決を強制。

代わりとして俺はラケット二刀流でやらせろと提案。

結果は…。

圧勝だったがね！

その時アリサは…

「何でそんなに早く反応するのよ！どういう目をしてるのよ！？」

と叫えました。

まあ、ライフル程度なら止まって見えるんですが…。

「し、しかも…右でも左でも凄く器用に打ち込んでくる…」

すずかも肩で息をしていた。

「にゃははは…アレス君…両手利きなんだよ？」

なのはは知っていたがアリサとすずかは知らなかった…と言うか、教えていなかったり。

「聞いてないわよ！」

そんなこんなで時間は流れる。

就寝時間。

大人部屋と子供部屋に別れて寝る俺達。

朝起きたら母さんが布団に潜り込んでいそうで恐いんだが。

アリサとすずかは既に眠っている。
なのはは…モゾモゾと時折動いてるからまだ起きてるのだろう。
《眠れないのか？》
俺は念話をなのはに飛ばした。
《うん…》
《…あの金髪の娘が気になるのか？》
《うん…。あんな寂しそうな瞳…してるんだもん…》
《そうか。俺は見てないから何とも言えないが…》
《きっと、アレス君も見たら分かるよ。何もない…空っぽな瞳だから》
《そうか。彼女とは…どうする？》
《友達になりたい》
《そうだな。なのはとなら、良いお友達になれそうだ》
《うん。それに、アレス君とも友達になったら彼女も幸せになれるかな？》
《…どういう事だ？》

《だって、アレス君と知り合った時に嬉しいことがあったから…お父さんが…退院してくれたから…》

《なのは…》

《アレス君もお友達になってくれるよね？》

《ああ》

その時、魔力反応を察知した。

どうやら、ジュエルシードが出たみたいだな。

《アレス君》

《ああ。どうやら…ジュエルシードだな。ユーノ、起きてるよな？》

《う、うん…》

こ、こいつ…俺となのはの会話を…聞いてるハズは無いか。

なのはにだけ行くように調整してるはずだし。

その後、俺となのははこっそりと抜け出して外に出た。

ちなみに、母さんと父さんには他の人が気付かないように誤魔化す様にお願いをしておいた。

行く途中。

俺は、なのはに話を持ちかけた。

「あの黒衣の男は俺が転移魔法で転送してから戦う」

「うん。私はあの子だね」

「僕は、あの使い魔を押さえるよ」

ちなみにアルフの正体は既になのはに伝えてある。

「ああ、頼む。だが、黒衣の男はなのはとユーノを人質に取るだろう」

「それは…」

「う…」

「大丈夫だ。それをさせない為に俺は…一つ能力を使う」

「能力？」

「ひょっとして、レアスキル？」

ユーノの問いに俺は頷いて答える。

「なのはとユーノに一つ約束がある。それは、俺のこの能力を口外しないで欲しい」

「うん」

「分かった。レアスキルは希少故に狙われる対象になる事だってあるからね」

二人は頷いてくれた。

「ありがとう。それじゃあ、俺の能力…『二重身〈ドッペルゲンガー〉』」

そう呟くと俺の身体が二つに分かれる。

「なっ…！」

「アレス君が…二人に…！」

「これが俺の能力、『二重身〈ドッペルゲンガー〉』だ。まあ、魂を二つに分けて分身体を作る大技…かな？」

「た、魂を…」

「二つに…分ける…」

なのはとユーノは呆然と俺達を見ていた。

「本体と分身体に別れて、分身体は一定のダメージを喰らうと本体に強制転移する」

「故に、分身体の心臓が潰されても…本体にはほとんどダメージが残らないんだ」

俺達はお互いに見合っていた。

「そうか、それなら…アレスが言っていた技を回避出来る！」

「そう言う事だ。今からは分身体が一緒に行くから本体は気配を完全に消して様子をうかがう」

「うむ、それじゃあ行くぞ？なのは？ユーノ？」

「何か…変な感じなの…」

「僕も同感…」

なのはとユーノは俺の分身体と共にジュエルシードの方に向かって走り出した。

―分身体アレス・視点―

俺達が魔力源に辿り着くとジュエルシードを手にしたフェイトとアルフ、そして黒衣の男。

全員が俺達の方を向いた。

「て…てめぇ！」

全員が驚いた視線で俺達を見ていたが、特に男の目は見開かれていた。

「よう、また会ったな？」

俺は口元を吊り上げて微笑んだ。

「慎二？」

金髪の少女…フェイトは不思議そうに男…慎二を眺めた。

「気にするな、フェイト。あいつらは敵だろ？」

「うん…そうだね…」

フェイトはジュエルシードをバルディッシュにしまうと黄金色の魔力刃を出して構えた。

「どうやって復活したかは知らんが…」

慎二は両手を掲げた。

そして、両手に現れる疑似の心臓。

「今度こそ、念入りに…ぶち殺す！」

俺は杖を持って構えた。

「おっと、動くなよ?動けば…なのはの心臓がグッシャリ逝くかも知れないぞ?」

口を三日月の様に吊り上げて微笑む慎二。

所謂、邪笑と呼ばれる笑い方だ。

「慎二!やりすぎだよ!」

フェイトが慎二の方を向いてそう言った。

「何を言ってる、フェイト?あいつはひょっとしたら…お前の母さんを殺すヤツなのかもしれないんだぞ?」

「…っ!」

「そうだよ、フェイト!あたしは旅館でキツめの殺気を受けたんだ!あいつは…あたしとフェイトも殺すかもしれないんだよ!?」

…まずったな…。旅館で少々やりすぎたか?

心の中で苦笑するしかなかった。

「そんな!アレス君はそんな人じゃないよ!」

「くくく、君は騙されてるんだよ!さあ、僕が救ってあげるよ!『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』!!!」

慎二は左手の疑似心臓を握り潰した。

同時に俺の心臓も握り潰された。

こいつ…こいつの宝具は…少し強力になってるみたいだな…。

だんだんと意識が遠くなっていく。

「アレス君！」

「アレス！」

なのはが俺に駆け寄る。

《上手い演技だ、なのは》

《えへへ》

《僕はどんな感じ？》

《ユーノもなかなかいい感じだな。俳優としてデビューするか？》

《い、いや、それはさすがに…》

「ははは！今度は復活しないように死体をバラバラにして海に捨て去ってくれるわぁ！」

慎二が左手にデバイスを持って来ようとしたその時…。

「残念ながら、そんな機会はもう来ないぜ？」

本体の俺が後ろから慎二の右手を掴んで捻っていた。

―分身体アレス視点・終了―

俺は慎二が左手にデバイスを持って歩み寄ろうとしたとき。

一気に第五チャクラまで回してから背後に寄ってこう言った。

「残念ながら、そんな機会はもう来ないぜ？」

後ろ左腕を首に回して、右腕を慎二の右手首を掴んで背中に回して捻りあげる。

右手の上に現れていた疑似心臓は霧散した。

「そ、そんな！？」

「な、何で！？」

フェイトとアルフは目を見開いて俺の顔を見ていた。

「その声は…！てめぇ！どうして…！」

「ふん。よく見てみろ」

慎二はなのは達の方を見る。

倒れていた俺は亡霊みたいに透けてから俺の方に飛んできて…合体する。

「な…！『偏在』か！ゼロの使い魔の魔法も使えたのか！？」

「まあ、そう言う事にしておいてやるよ。頼む！エヴァ！」

【了解です。次元転送します】

足下に広がるベルカ式魔法陣。

「き、貴様！」

「てめぇとは…1対1〈サシ〉で勝負したいんでな！」

一気に視界が変わる。

次元転移で簡単に戻れない場所に転移したのだ。

周りに広がる…地平線。

周りには草木が生えてない荒れ地。岩や石がゴロゴロ転がっている…不毛な大地だった。

「そう簡単に逃げられないように…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック…」

【そうですわね、魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

同時に展開される結界魔法。

ネギま！式とベルカ式の両方で展開されてるからそう簡単に逃げる事は出来ない。

「くっ…てめぇ…だが良いか。どうやら本体だから…てめえをぶち殺せば結界も解けるって訳だ」

慎二は左手に鎌のデバイスを持ち、また右手を高く掲げた。

そして、また疑似心臓が現れる。

俺は第五チャクラまで全力運転、魔力も限界まで身体に張り巡らせて防御に回る。

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉】

目の前に現れる漆黒のベルカ式魔法陣。

「今度こそくたばれ！『妄想心音〈ザバーニーヤ〉』！」

慎二は右手の心臓を握り潰した。

パキィン

甲高い音を立てて…何も起こらなかった。

どうやら防御は成功したみたいだ。

「そ、そんな…幾人もの転生者共を葬って来た俺の宝具が…！」

「残念だったな。『聖闘士に同じ技は二度通用しない』という法則があるのを知らないのか？」

「な、何だよ、それ！」

「それに、お前はそんな事をしていたのか？」

「わ、悪いか！？お前だって、転生者を葬ってきたんだろ！？」

「いや、礼を言わせて貰う」

「へ？」

「ま、ぶっちゃけ言うと俺はお前らみたいに転生した奴らを捕まえに来たんだよ」

俺はそう言うと左手の指輪を掲げた。

「『理の指輪』起動」

そう言うと煙の様な蒸気が噴き出して結界内に広がる。

「うわっ」

身体が少しずつ変化していく。

…何だ？隣に…誰かが…この気配は…！

隣に現れる、誰か。忘れるものか。１０００年、一緒に生きてきたのだから。

俺の隣に現れたのは、前世の妹、エヴァであった。

そう、麻帆良女子中等部の制服を着ていた。どうやらエヴァも前世の姿に戻ったみたいだ。

俺も下を向くと分かる。エヴァと同じ制服。

さあ、ヤツはどんな反応をしめすかな？

俺はゆっくりと慎二がいた方角に向かって歩き出した。

「ち、畜生！何だよこの蒸気みたいなのは！」

慎二が腕を振り回していた。

ゆっくりと視界が開けて見ると…。

「…これは」

「あらぁ…」

俺とエヴァはちょっと驚いた。

慎二と呼ばれた男は、そう。黒髪でちょっとウェーブかかった髪型。

黄土色の学生服。

まあ、ぶっちゃけ言うとＦａｔｅの間桐慎二そっくりだったのだ。

「ひっ！エヴァンジェリンが…二人！？」

顔を真っ青にしてその場に座り込む。

ふむ？エヴァの存在を知ってると言う事は…Ｆａｔｅの世界とは全く関係ない、そっくりさんなのだろう。

しかし、ここまでそっくりとは。

「さて、と。貴方の外道っぷりには随分と辟易させてもらったわ」

「ひっ…」

「エヴァ？貴女はどう思う？」

「そうですわね。私も…ちょっと許し難いかな…と」

ゆっくりと慎二もどきに近づく。

「それじゃ、栄えある貴方は…」

「貴方は…？」

「痛みが快楽に変わる体質に変わって貰ってから天に召されるのよ」

俺とエヴァは魔力を込めて八重歯を牙に変えて…慎二もどきに襲いかかった。

結界内に慎二もどきの叫び声が木霊した。

慎二もどきを天界から来た天使に引き渡し、元の世界に転移した。

着いた時は既に決着が着いたのであろう、フェイトとアルフが帰る所だった。

うむ、記憶の書き換えも無事に済んでるのであろう。

「さっすが、あたしのご主人様♪それじゃあねぇ～おチビちゃん」

アルフはそう言って飛び立っていった。

フェイトも飛び立とうとしたが…。

「待って！」

なのはが呼び止める。

「出来るなら、もう私達の前に現れないで。もし、次があったら…今度は止められないかも知れない」

フェイトは背中を見せながらそう言った。

「名前…貴女の名前は！？」

「…フェイト。フェイト・テスタロッサ」

「あの…私は…」

なのはが自己紹介しようとしたらフェイトはそのまま飛び去ってしまった。

「行っちまったな…」

「うん…」

「…負けたのか？」

「うん…」

なのはは今にも泣きそうな顔をしていた。

「そうか。強く…なりたいか？」

「…うん…」

「そうか…」

俺はなのはに抱きつく。

「…アレス君…」

「一緒に、魔法の練習するか？」

「うん…。アレス君…ユーノ君…私を鍛えて」

「分かった。なのは、君を最強の魔導師にしてあげよう」

「分かったよ、なのは。僕も協力する」

こうして、フェイトとの戦いに二連敗したなのはは俺とユーノの元、魔法の練習を開始するのであった。

第6話　聖〇士に同じ技は二度通用しないと言うのを忘れたか？（後書き）

今回はなのはの戦闘シーンがほとんどありませんが、大まかな流れは原作と同じと言うことで

ラミエルの力を得て砲撃と防御は原作以上ですが、接近戦の技術は原作に毛が生えた程度です

故にフェイト嬢に負けてます

べ、別にフェイト嬢も実は転生者で強いのですよ？と言う訳ではありません。多分ｗ

しかし、話が進んでるようで進んでないような？

まあ、ゆったりやりますので、お付き合いくださいませｗ

第7話　さて、これは…どうしたものか（前書き）

ユーノ君は原作では独身貴族を謳歌していましたので…

救済策としてこうしてみましたw

何処まで出番があるか分かりませんが…

なま暖かい目で見守ってくださいw

第7話　さて、これは…どうしたものか

温泉宿での戦いから1週間が過ぎた。

あの日からなのはと俺は魔法の練習と模擬戦を行うようになった。

なのはの上達具合は凄まじいモノがある。

特に、収束型の砲撃は…威力は原作のディバインバスターを凌駕してプチ・スターライトブレイカー級になってなおかつそれが6連射が可能になっていた。

あと、他の射撃も一度に40個の魔力弾をコントロール出来る様になっていた。

しかも一撃が下手な魔法障壁を突き破ると来たもんだ。

そして、接近戦の回避能力も格段に向上。俺の攻撃も5回に1度は回避出来る様になっていた。

俺の動きに慣れたら大抵のヤツは遅く感じる事だろう。

…これでカートリッジシステムを使用した日にはどうなるのか。

背中に寒いモノが走るぜ。

そう言えば、なのはは魔力切れを起こしにくいな。

あれだけ巫山戯た砲撃を撃っておいて尽きる気配がほとんど無い。

…リンカーコアにＳ２機関でも搭載してるんじゃなかろうな。

まあ、そのうちスターライトブレイカー１２連射とか出来そうになりそうだから…機会を見て気を魔力に変換する指輪を渡しておこう。

魔王を超えた『魔皇』を作ったかもしれないが気にしない事にした。

気にしたら…負けだ！

いつもの様にジュエルシードを散策していると。

かつてユーノが倒れていた場所に…。

《お腹すいた…》

念話が聞こえて来たので見ると、ユーノと同じ様な姿をしたフェレットが倒れていた。

「…っ！」

ユーノが動揺しているのが分かった。

「…ユーノ君？」

なのはがユーノを見る。

「あの…この子は…」

冷や汗をダラダラ垂らしているユーノ。

「どうした？押し掛け女房か？」

「…ハイ…」

小さな声で呟くユーノであった。

…え？マジですか？

ユーノにこんな恋人がいたと言う話は聞いたことが無い。

ひょっとして、転生者…？

うむ、例によって後で聞いておこうか。

俺達は行き倒れになっているフェレットを拾って俺の自宅に戻っていった。

なのはの自宅からユーノが寝てる籠を持ってきてその中に寝かせる。

そしていつもユーノが食べてるビスケットを持ってきて傍に置いておく。

「…ユーノ君の匂いだ…」

そう言いながら籠の中でゴロゴロ悶えてる様に見えるフェレット。

「それで？このフェレットとはどう言う関係？」

「…彼女の名はユナ・スクライア。僕と同じ部族で育った幼馴染みなんです」

おいおい、マジかよ。

高確率で転生者じゃねぇかよ…。

「血は繋がってません。彼女とは…将来を約束した仲なんです…」

少し、俯いてそう語るユーノであった。

その割には…彼女を恐れてる様に見えるのだが？

「ただ…彼女は…常にベッタリで…」

…ひょっとして…

ヤンデレ属性が付与されとるんかいな？

「僕が女の子と話をしていると…ちょっと不機嫌になると言うか…」

「へぇ～ユーノ君、愛されてるんだね」

にこやかな笑顔で話すなのは。

「行かないで！！ユーノ！」

大声を上げて起き上がるユナ。
そして周りを見渡す。
「ここは…ああ！見つけた！」
そう言ってユーノに抱きつくユナ。
「ぎゃあぁぁぁ！背骨が折れる！」
相撲のサバ折りのごとく抱きつくユナ。そして叫ぶユーノ。
やはり俺の家に連れてきて良かった…と思う俺がいた。

まあ、ユナは何処に住むようになったかと言うと。
当然高町家だった。
今更一匹増えても大差無いだろうし。

「ああ、ユーノと二人っきりでお風呂に入りたい時は俺の家を使うと良いぞ」
「アレスー！」
「あ、ああ、ありがとうございます！！それじゃあ、早速お借りしますね！！」

そう言ってユナはユーノを引きずって風呂に向かって逝った。いや、『行った』だった。

「で、なのははどうする？もう少し、俺とイチャイチャするか？」

ボンッ

何か爆発したのかと思ったらなのはの頭から蒸気が。

「あああ、も、もう帰るね！そろそろご飯だと思うから！」

そう言ってなのははすっ飛んで出ていってしまった。

【なかなかやりますわね、お兄様？】

「まあ、意外となのはは純情みたいだからな」

【お兄様も純情でしょうに…】

「何か言ったか？」

【いいえ。それより、ユナの事は？】

「そうだな、ちょっと聞いてみるか」

俺は例によって天界に念話を飛ばしてみた。

《ああ、久しぶり。アレスだけど？》

《ああ、久しぶりだな。どうしたのかね？》

《ユーノの幼馴染みのユナって子の事だけど》

《何？ちょっと待ちたまえ。調べてみるから…》

5分経過

《どうやら、元見習神の仕業らしい。聞けば、ユーノの幼馴染みと言う立場で転生してなのはに近づく予定だったみたいだが…》

《もしやとは思うが…》

《うむ。うっかり女性として転生させてしまったらしくてな。どうやら魂は身体に思い切り引っ張られてしまったか、うっかり記憶を消し去ってしまったか…》

《…何処の『あかいあくま』だ。で、どうする？アレもそっちに送った方が良いのか？》

《君の目から見てどう思う？》

《…。多分、大丈夫じゃね？ユーノ以外眼中になさそうな雰囲気だと思うし…》

《そうか。ならば君の判断に任せる。もし、害をなそうとするのであれば天界に送り返して欲しい》

《ああ、分かった。とりあえずは様子を見ることにするよ》

《それでは、頼む》

【どうでした？】

「ああ、ユナも転生者だが…」

俺は説明をした。

【ん～…何とも言い難いですねぇ…】

「だろ？まあ、ユーノに取ってはいい話なのかもしれないが…」

俺は顎に手を当てて考えた。

ユナのベタ惚れぶりは演技とは考えにくい。

前世で男だったのがあそこまで演技出来るとは思いがたい。

まあ、前世では男でも今世では女として生まれてるし。

本人が良ければそれで良いだろう。なのは達に害は無いだろうし。

尤も、嫉妬が暴走してなのは達に害が及ぶ可能性は否定できないが。

そこら辺は何とかするしかあるまい。

【お兄様?】

「ま、暫くは様子を見ておこう。多分、大丈夫と思うけどね…」

と同時に部屋に入ってくるのはユナとユーノ。

フツーに人間の姿で入ってくる。

ちなみに、ユナは何かユーノに似た雰囲気の女の子であった。

つーか、ユーノも女の子に見えなくもないが。

そしてユナはほっぺが艶々していてユーノは何故かゲッソリとしていた。

お前ら、風呂でいかがわしい事してないだろうな…。

そう思わずにいられない雰囲気を漂わせていた。

「ふぅ、さっぱりしました♪」

「……」

ユーノは何も答えなかった。

「…ツッコミを入れて良いか?」

「やぁん!突っ込むだなんて!」

一瞬、天界に送り返したろかと思う。

「…君達は人間だったのか？」

「へ？」

ユーノが惚けた様な声で返答する。

「はて？俺はユーノと出会ってからずっとフェレット姿しか見ていなかった様な気がするのだが…」

「……」

ポクポクポクチーンといった擬音が聞こえそうだな。

「ああ！そう言えば人間になれるって言ってなかった！」

手をポンッと叩いて驚くユーノ。本来ならこっちが驚きたいのだが。

「もう、ユーノったら♪お茶目なんだから～」

そう言って頬をつつくユナ。

こ、こやつはいちいち惚気ないと話が出来んのか。

「なるほどな。まあ、なのはには自分から伝えておけよ」

「うん、分かったよ」

ま、そのまま忘れてアースラで披露してなのはが『ふぇぇぇぇぇぇ！？』と驚くのだろうが。

その方が面白そうだし。黙っておこう。

「で、聞くのを忘れていたが…ユナがここに来た目的とは？」

「へ？決まってるじゃないですか！ユーノを追いかけて来たのですよ！浮気しないように！」

予想通りの答えをありがとう。

「…そうか。なら、ユーノ。君がしっかりと説明をしておけよ」

「…うん、分かったよ…」

そう言ってユーノとユナはなのはの家に帰っていった。

何とも言い難い気分であったが、まあ、ユーノの将来は約束されたから大丈夫だろ…多分。

ある日の事。

俺はなのはと別れてジュエルシード探しを行っていた。

街を歩いたり、住宅街を歩いてみたりとしてはいるが、一向に見つかる気配は無い。

「しっかし、他の二次小説の人達ってどうやってジュエルシード探してるんだ?アニメとかは何処にあるのか描写は無いし…」

【お兄様。あまりメタな発言してますと作者から天罰が届きますわよ?】

「エヴァ、君もメタな発言をしてるじゃないか…」

【うふふ】

その時、車道を一台のワゴン車が通りすがる。

ほう、日○のキャラ○ンか…大体なら○タのハイ○ースを選ぶのだがな。

しかし…助手席と運転席以外の窓は全部フルスモーク貼って中がほとんど見えなかった。

見えなかったのだが、もの凄く…何かがひっかかった。

杞憂で済めばそれで良い。

【お兄様?】

「追うぞ。何か…妙な予感を感じた」

【分かりました。お兄様の勘は…意外と当たりますからね】

俺はそのワゴン車を追う事にした。

引き離される事無く俺はワゴン車が到着した場所に着いた。
そこは港で人気が全くない倉庫だった。
「…あれは」
物陰に隠れているとワゴン車の後ろのドアが開いた。
「早くしろ！」
男が数人降りて人を抱えていた。
「…！アレは！」
目を疑いたくなった。
アリサ、すずか…そして、『八神はやて』。
何て事だ。もうすずかと知り合ってたのか。
そして、アリサとすずかの誘拐に巻き込まれたのか！
男達はアリサ達3人を抱えて倉庫の中に入って、シャッターを閉めた。
【お兄様…】
「分かってる。どうやら3人は眠らされたみたいだ」

グッタリした様子だったからだ。

さて、中に進入を…む、あそこにあるのはエアダクトか。あのサイズなら俺でも充分通れるな。

６０？四方の四角いダクトの中に飛んで入る。

こういう時は空を飛べるとかなり便利だな。

通気口の金網を気の力で斬り破って中に入る。

《さてさて、どんな風になってるかな？》

《お兄様、僅かですが…何か力を感じます…》

《何？》

《魔力とは違う…何かです。用心して下さい》

《分かった。ひょっとしたら転生者が居るかもな》

俺は物音を立てずダクトの中を進む。

暫く進むと、出られそうな場所を発見。

またも金網だったが同じように斬り裂いて出る。

勿論、周囲の確認は忘れずに。

どうやら吹き抜けで俺は二階部分に当たる箇所に居るみたいだ。
下を見たら…手足を縛られたアリサ、すずか、はやてが居た。
目を覚ましているようだ。金切り声を上げてアリサは暴れていた。
その周りには男が3人。そして、見張りと思われる男が7人。
10人か、とりあえずは。
「静かにしやがれ！」
男がアリサの頬を叩いた。
アリサは1m位吹っ飛んでしまった。
「へっへっへっ…今からお嬢ちゃん達に男の味ってヤツを味わって貰うからよ…」
アリサとすずか、はやてに襲いかかろうとする男達。
ズボンのベルトを外して…パンツを脱ぎ、反り返ったモノを見て3人は悲鳴を上げた。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

―アリサ視点―

目の前の男の姿を見てあたしは恐怖した。

あんな…汚らわしいモノが…！

いやよ…！散々陵辱されて…最後に殺されるなんて！

そして、この地で自縛霊として残るなんて！

助けて…助けて…助けて…

アレス…助けて…

まだ…死にたく…無いよぅ…

「アレスッ！！助けてよ――――――――――――っ！！！」

あたしは渾身の力を込めて叫んだ。

「ハアアアアアアアアッ！！！」

聞き覚えのある…声…。

そうか…神様は…あたしの願いを…聞いてくれたのね…。

頬に走る…涙。

あたしは声の主を見て安堵した。

―アリサ視点・終了―

《エヴァ、頼む！》

《了解です！起動〈アンファング〉！》

一瞬にして騎士甲冑を着込む。武器は例によって杖のレーヴァテイン。

「アレスッ！！助けてよ――――――――――――っ！！！」

アリサの渾身の叫び声！

俺は一瞬にして男達の背後に回り、３人を殴り飛ばす。

「ハアアアアアアアアッ！！！」

３人は一瞬にして倉庫の壁に激突して気絶する。

残りの７人は驚いた目で俺を見ていた。

「呼んだか？アリサ？」

俺は微笑んでアリサ達を眺めた。

「く、来るのが遅いわよ…アレス…」

「あ、アレス君…」

「だ、誰や…？」

はやてのみは困惑した表情で俺を見ていた。

「何だこの小僧はぁ！」

体格の良い男が殴りかかってきた。

俺は殴りかかってきた右手を左手で逸らして杖で男の喉を突く。

「ぐえぇ！？」

男はのたうち回って倒れる。俺は男に向かって杖を振り下ろし、右太股の骨を一撃で折る。

鈍い音が周囲に響く。

「こ、こいつ…」

たじろぐ男達。

「何やってんだ！たかがガキ一人じゃねぇか！」

リーダーらしき男が周囲の男達に一喝する。

男達は目線を合わせると一斉に襲いかかってきた！

「…遅い！」

俺は一人目の胸元を杖で突いて吹き飛ばし、二人目を横払いで横腹を殴って吹っ飛ばす。

「背後ががら空きだぜぇ！」

背中から聞こえる声。

ああ、ダメダメだな。普通のヤツなら有効だろうが…。

「ほほぉ？」

杖を頭の上に掲げて男の一撃を防ぐ。どうやら鉄パイプ辺りで殴ろうとしたのだろうが。

「な…！？」

「ヒヨっこめが！！」

左足からの回し蹴りで男の鳩尾を蹴る。

「ぐぅぇ！！」

男はその場に崩れる。

「くたばれぇ！」

同じく鉄パイプで殴りかかってくる男。
それは身体をずらしてかわしてから杖で男の顎目がけて突く。
「ぐがっ！」
後ろに倒れる。
「てめぇ！」
更に殴りかかってくる男。俺は男の右手首を掴んで投げ飛ばし、倒れた所を杖でスネを殴って骨を折る。
俺の周りには身動きしない男達が寝ていた。
残ったリーダーは懐から拳銃を取り出した。
「へへへ…動くなよ…動けばてめえの眉間に大穴が開くぜ？」
男はニヤニヤ笑いながら近づいて来る。
「ほら、その杖を捨てろよ」
男は拳銃を構えていた。
「卑怯者～！！」
「黙ってろ！どんな手でも勝てば官軍、負ければ賊軍ってね！」
「…ああ、そうだな」

俺はレーヴァテインを床に投げる。

「へっへっへっ…あばよ」

パンッ

乾いた音が鳴り響いた。

「アレスッ!!」

俺は顔を傾けて弾を避けた。

あの程度の速度なら容易い。

「え…?」

男の呆然とする顔。

「どうした?しっかり狙わないと、当たらないぞ?」

「く、くそっ!」

男は連射した。弾が飛んで来るが俺はそれを全て避ける。

「ど、どうなってるんだよ!?」

5発鳴り響いたあと、むなしく響く拳銃の撃鉄音。

「…さてと…」

「ひっ…！」

俺は床にあったレーヴァテインを拾う。

「言いたいことは？」

「お、俺達は…頼まれたんだ！」

「へぇ？」

「あの３人を浚えば、金をやるって…」

…３人だと？

はやても…浚う対象に…なっていたのか！？

「…どんなヤツだ？」

「背広を着た普通のヤツだったが…」

「が？」

「３人の屈強な男が…」

「お喋りはそこまでにして貰おうか」

声が響いて何かが飛んで来た。

「がぁぁ！！」

男の胸に刺さる槍の様なモノ。そして血が噴き出した。

「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

アリサ達の叫び声。まずい…！この光景は見せるわけには！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　大気よ、水よ、白霧となれ。彼の者らに一時の安息を。『眠りの霧』」

アリサ達の周りに霧を発生させて眠らせる。

「ほぅ…魔法使いか…」

背広を着た男。

手にはアーム型のコンピューター。

あんな形は見たことは…待て。

頭にゴーグルみたいなのに線が伸びて繋がっている。

…そして。男の背後に立っているのは…中華風の服を着た男達。

一人は左右にちょび髭みたいな感じで優しそうな雰囲気。

一人は豹のようなゴツゴツした頭にグリグリの目玉、エラが張った顎には虎髭。

一人は身長が２mを超えているであろう、そして５０?の黒くて長い髭…。

さっき、男の胸に刺さった武器は…槍だが…独特な刃先…。そう、アレは…『青龍偃月刀（せいりゅうえんげつとう）』

そういう事か。

あいつは…真・女神転生の様に悪魔だけでなく、人物までプログラム化して…召喚して戦うのか！

そして、呼び出したのは…古代中国において戦乱の世を生きた武人。後に三国志と呼ばれる時代で『蜀』と言う国を建て、そして『桃園の誓い』で義兄弟の契りを交わした伝説の武将…

「劉備玄徳、関羽雲長、張飛益徳…！」

第7話　さて、これは…どうしたものか（後書き）

ついに来ました、アリサ＆すずか誘拐イベント！

そして、おまけに将来の狸嬢までｗ

だんだんと道が外れてきましたよ？

だが、作者は自重も後悔もしない！

～おまけ～

※1本編とは全く関係ありません

※2リリカルと関係ありません。東方ネタです

※3台本形式です

アレスはとある世界、幻想郷に呼ばれていた

アレス「…いきなり呼んで…何の用だ？」

八雲紫「いえ、たまには良いじゃない」

八坂神奈子「そうそう」

八意永琳「そうですわ。最近、来なかったから皆が寂しがってましたよ？」

ア「…ってか何であんた達3人なんだ？幻想三大…」

紫「それ以上言ったら…スキマの旅に招待しますわよ？」

ア「すみませんでしたー！」

神「まあ、その事についてなんだがな」

永「ええ。何故、私達は…」

紫「熟女とか年上とかば、ＢＢＡとか言われなければいけないのかと…」

ア「何故、俺に聞く？」

神「そりゃあ、あんたの世界で『あたし達が創作として存在している』んだよね？」

ア「うむ。極悪弾幕シューティングとしては有名だが？」

永「そして、それを貴方は私達に見せてくれた」

ア「うむ」

紫「そこまでは良かった。けど…」

ア「けど？」

神「あのニコ○コ動画だっけ？あの動画は…なんだありゃ」

永「まるで私達が変態みたいじゃないですか！」

ア「…それは…」

紫「それに私が出るといつも『ババア』『ババア』と…。私は少女なんですのよ？」

ア「…（その策士的な行動と服の趣味に問題があったんじゃね？）」

神「あたしなんか…ガンタンクとかガンキャノンとか…」

永「私は…本当は姫様と大差無い外見なのにいつの間にか大人びた容姿に…」

紫「どうしてくれるのですか？あの動画を天狗（射名丸文）に見られて…記事にされて…それから私は霊夢と魔理沙に年寄り扱いですわ…」

ア「…それはすまなかった。その点は謝るが…その酒は？」

神「萃香の所からちょっと拝借してきた」

ア「さいですか…」

永「そういう事でアレス君」

ア「はい？」

永「今晩はつき合って貰うわよ？」

ア「ゑ？」

紫「そうそう。私達の弾幕ゲームにね？」

ア「…ちょっと急用を…」

西行寺幽々子「逃がしませんよ～？」

聖白蓮「そうそう。私達のゲームにつき合って貰いますよ？」

ア「ぬぅおぉぉぉ！？東方五大老…！」

五人「…」

ア「あ、あれ？皆さん…何か雰囲気が…？」

紫「その名は…幻想郷内で禁句なんですよ？」

神「ああ。その通り名を言ったヤツは…」

永「どんな偉い人でも…」

幽「例外なく」

白「ルナティック弾幕祭りの刑なんですよ♪」

ア「ちょw」

紫「そうですわね。終わった後はアレス君は更に私達と三日三晩の

酒宴につき合ってもらいますか♪」

神「そりゃ良いな！」

幽「そうねぇ～せっかくですからねぇ～」

白「そうだな。久しぶりに私も一発お願いしたいし」

ア「誤解を招く言い方はおやめ下さい！」

神「さあ、あたし達の弾幕につき合ってもらうぜ！」

幽「逝きますわよ～」

ア「幽々子さん、字が違う！ア――――――ッ！！！」

それから四日後、アレスはゲッソリとした顔で神界に現れたのであった…。

ア「恐るべし…五大老…ぐふっ」

単なるネタです。

頭にピンッと降臨しましたw

それでは、次回をお楽しみに～

第8話　時の庭園に行ってみよう（前書き）

ハッハッハッ

ちょいと間が開いてしまいましたが

いや～

急にＦＦ？がやりたくなりましたｗ

友人から『あのゲームは回避率が重要だ』と言う話を聞きまして

今まではパーティーアタックでＨＰを増やしてましたが…

無駄な事と知りましたｗ

防具？

あんなのは飾りです！パーティーアタックでＨＰを増やす人には分からんのですよ

と言いたくなりましたｗｗｗ

昔の偉い人（少佐）は言いました

『当たらなければ、どうと言う事は無い』

とｗ

さて、今回はちょっと長めですかね

それに、話が段々とずれてまいりました。

ま、今更って感じですがねｗ

それでは、どうぞ！！

第8話　時の庭園に行ってみよう

「劉備玄徳、関羽雲長、張飛益徳…！」

俺は背筋に冷たいモノが走った。

かつての力を取り戻していたら勝てるであろうが、今はそのかつての7割～8割迄しか使えない。

身体がまだ出来てないのだ。

あの3人の能力が上乗せされていたら…負けを覚悟しないといけない。

いよいよとなればエヴァにも手伝って貰わないといけないかもな。

「へぇ、良く知ってるじゃないか」

「当たり前だろ。特に関羽は神格化して『関帝聖君』と呼ばれるまでになってるじゃないか」

頭に思い出すのは違う神界で模擬戦した時の事だった。

双剣か徒手空拳なら何とかなるが同じ槍とか剣だと勝てる自信が無い。それ程までに強かったのを思い出す。

もし、それ以上に腕力と速さが上がってるなら勝率は更に下がることになる。

う～ん、虎牢関の戦いの再現みたいに俺が『方天画戟』でも持って戦えば良いのか？

…一応、エヴァの中に登録はしてあるが…俺は『呂布』程には扱えない。絶対に負ける。

こうなったら…仕方が無い。双剣に切り替えるか。小太刀二刀流に…。

「さあ、行け！！あの小僧をぶち殺せ！！」

一斉にかかってくる劉備、関羽、張飛の３人。

「エヴァ、双剣『天照〈アマテラス〉』と『月夜見〈ツクヨミ〉』を出してくれ」

【了解です。モード『天照〈アマテラス〉』『月夜見〈ツクヨミ〉』】

手に持ったレーヴァテインが変化して長さ６０？の小太刀が左右に握られる。

ちぃ、これが恋姫の３人なら劉備こと桃華嬢が戦いでは話にならないから関羽こと愛沙と張飛こと鈴々の２人だけになるのにな！

「はぁ！」

関羽は振りかぶって上段からの切り落とし。

俺はそれを避けて間合いを詰めて下から左手で突く。

「ぬぅ！」

関羽は左手の手甲でそれを弾く。そして、左膝蹴り！

「っ！」

俺は後方にバックステップでかわす。

「でやぁ！」

左、３時の方向から張飛が蛇矛で突いて来る。

「はっ！」

俺はそれをジャンプしてかわして蛇矛の上に乗り、その上を走って張飛の頭目がけて剣を振り下ろす。

「くっ！」

だが、それは済んでの所で劉備の剣で止められる。

さすがに上手い…！

そして後ろから関羽の横凪ぎ払いが来る。

ここで下手にかわしても張飛の突きか劉備に斬り落とされる！

「ちぃ！」

俺はギリギリのタイミングで飛んで関羽の青龍偃月刀の上に乗る。
久しぶりだよ、剣や槍の上に乗ってかわすなんて。

「…！」
「…！」
「…！」

3人は声を出してはいなかったが、驚いてはいたみたいだ。

「ヒュ～♪驚いたぜ。その3人の猛攻をかわしているなんてよ」

男が口笛を吹いていた。

「はは、そうだな…」

「面白いじゃねぇか。まるで、虎牢関で3人が苦戦した…『呂布奉先』じゃねぇか」

男は口元を釣り上げて笑っていた。

「まあ、あれほど上手いかは分からないがね」

「…なるほどな。よし…」

男はコンピューターをいじる。

すると、3人はコンピューターの中に帰っていった。

「…？」

「それなら、希望にお答えして出してやるよ」

「何だと…！？」

コンピューターの中から出てきたのは…先程の関羽と同じくらいの背丈（２１０？）位の筋肉隆々の屈強な男だった。

頭に２本の黒い羽根飾りを着けて、手に握られているのは…『方天画戟』！

畜生…！この状態では勝てる率が更に下がってしまったぞ…！

「さあ、お前が何処までいけるか…見せてくれよ」

男の右手にも方天画戟…！まさか…！

「お前…まさか…」

「そう。俺の身体能力は全く呂布と同じにしてあるんだ」

男の言葉で少し目が眩みそうになった。

体格の差はあれど、要は呂布を二人同時に相手にしろだと！？

「さあ、耐えて見せろよ！」

男と呂布が同時に斬りかかって来た！！！

どれぐらい、斬り合ってきたのか？

１０分なのか、１時間なのか、時間の感覚が狂ってしまう。

「ふぅ～」

深く深呼吸する。既に第一チャクラは全力回転だから体力が尽きる事は無い。

相手も特に疲労の色は見られない。

せめて、魂と身体のリンクして感卦法が使えれば負ける気はしないのだが…。

あちこちに擦り傷があるが、戦闘に支障は全くない。

だが、決定打が無いからジリ貧と言えばジリ貧。

あの嵐の様な斬撃と突き、一瞬の気の緩みで頭をかち割られて終わってしまう。

「大したガキだよ、呂布を二人相手にしてその程度で済むなんてよ…」

「褒めて頂いて幸いだよ」

せめて、第六チャクラが回せれば。ギリギリ何とかなるかも知れないのだが。

やってみるか…？一途の望みをかけて、第六チャクラを起動させる

のを。

ちょいと危険な賭けになりそうだが、このまま無惨に殺されたら。

まあ、一応復活は出来るが、こっちの時間で一週間かかる。

その間にアリサ、すずか、はやての3人は…この男の毒牙にかかるやも知れない。

巫山戯るな。もう、俺の前で…同じ目に遭わせるわけにはいかない。

かつて、前世の前世で16歳になる妹を俺の目の前で陵辱され、無惨に殺された…あの光景を忘れたか。

忘れるモノか。周りの大切な人を守れなくて…何が世界の守護神だ。

ゼロじゃない。僅かな望みをかけて…やる！

俺は身体に気を巡らせる。

「第六チャクラ…起動！」

第一から第五までのチャクラを全力運転。

身体から溢れる闇の力。

だが、第六チャクラは回る気配はしない。

「くそ…」

「何をするかと思えば。何も変わってないな」

男と呂布はゆっくりと俺に近づいて来る。

《お兄様、私を出して下さい！》

《ダメだ、エヴァ。エヴァの技量ではキツイ。それに、なるべくならお前の存在は知られたくないんだよ》

《でも！》

《頼む。なるべくなら…お前が出るのは姉妹機、夜天の魔導書の戦いの時にしたいんだ》

《分かりました…お兄様…》

我が儘を言って悪いな、エヴァ。傷つく姿を見たくないんだよ。

「こうなりゃ仕方ない。粘って粘ってお前達が疲れるのを待つか…」

俺は双剣を構えた。

その時…。

俺の後ろから走り寄ってくる、気配。

それも、二人。

前の男と呂布の様子を見るが、…気付いて…いない？

と言うことは、後ろから来るのは…相当の手練れと言うことか。

「くくく、随分と消極的な戦いに…」

男の言葉が終わる前に俺はしゃがんだ。

「はぁっ！」

「ふっ！！」

背後の二人は空中に飛んで男と呂布に跳び蹴りを喰らわせる。

「くっ！？」

「…！？」

男と呂布はそれぞれの武器で防いだが、よろめいた。

後ろから跳び蹴りを喰らわせた二人は空中でクルクル回転して俺の前に着地した。

「…はは、マジかよ…」

俺は意外な人物に驚くしかなかった。

そう、月村家のメイド、ノエルさんと…バニングス家の執事、鮫島さんだったからだ。

「大丈夫ですか？アレス様！」

「助太刀に参りました」

二人は俺の方を見てそう言った。

鮫島さんはいつもの執事服だったが、ノエルさんはいつもより短いスカートのメイド服だった。

「…なるほどね。アリサとすずかの救援に…それと、二人の援護ですか？恭也さん」

「やはり、分かったか。そうだ、俺も来てるぞ？」

後ろにいた気配はやはり恭也さんだった。

４対２。勝率は少し上がった。

「やれやれ、少し…時間をかけすぎたか」

男は方天画戟を持って構える。

「失礼ですが、藤之宮様。あの方は…もしや…」

「ええ、想像通りです。三国志にて虎牢関の戦いで劉備、関羽、張飛の３人と引き分けた飛将軍、『呂布奉先』ですよ」

「…っ！！」

恭也さんの驚きの顔。

「ほほぉ、これはこれは…」

鮫島さんの口元が少し、つり上がった。

「出来れば、若い時にお相手したかったですな…」

鮫島さんは構えた。あの構えは…八極拳！しかも、かなり鍛錬を積んで来たモノと思われる。

一応、俺も八極拳は使えるが、鮫島さん程ではない。

「恭也さんとノエルさんはそっちの男を。俺と鮫島さんで呂布と戦う」

「…分かった」

恭也さんはそう言って男の方を見た。

「では、バニングス家元ゴミ処理係…鮫島、参る！！」

その後の戦い？

ええ、だいぶ助かりましたよ。

結構時間がかかりましたが、男を撃退。

撤退したあと追いかけて、例によって結界に封じ込めてから前世の

姿に戻してからは皆様の予想通り。

痛みが快楽に変わる呪いを受けてから天使に引き渡しました。

改心の見込みが全くありませんでしたからね。

現場に戻ると鮫島さんはアリサを既に運んだのか、居なかった。

ノエルさんだけが残ってた。聞けばファリン嬢に任せたとの事ですずかの姿は無かった。

恭也さんも居なかった。聞けばはやてを運んで行ったとの事。

「アレス様には何とお礼を言って良いのか…」

そう言ってノエルさんは俺の手を両手でしっかりと握って離さない。

「いえ、その、お気になさらずに…」

「いいえ！それでは私の気が済みません！どうか、私の身体を好きにして良いですから…」

その時、ノエルさんの後頭部に衝撃が走った。

見ると忍さんがハリセンを持って立っていた。

「全く、何をやってるのかしら？」

「し、忍様…」

「まあ、確かにアレス君が可愛いのは分かるわよ。でもね?貴女はウチの専属メイドなのよ?そこんとこを…」

ああ、説教モードに入りましたね。

ノエルさんは忍さんに手を引っ張られて行ってしまった。

「ああ、アレス様!お礼はいずれしますから…お待ち下さいね!」

いえ、ノエルさんのお礼はイヤな予感を感じますからいらないんですがね!

無事に家に帰る。

しまった、全員の記憶を改竄するのを忘れてた。

…まあ、別に知られても良いか。魔法を知られたらオコジョにされるとかそう言った罰は無いし。

『魔法少年やってます♪』とでも言っておこう。

そう言えば、ミッドの方では魔法文化の無い世界では魔法を教えるのは禁止とか言ってたな。

別に俺は管理局員じゃないし。知ったことじゃないね~。

俺はベッドに潜る。そして一日が過ぎていった。

次の日。

いつもの様になのはとバスに乗ると…。

アリサとすずかの二人がおられました。

「おはよう、アレス、なのは」

「おはよう、アレス君、なのはちゃん」

いつも通りの挨拶。いつも通りの雰囲気だ。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう、アリサ、すずか」

いつもの様に端っこのなのはの隣に座ろうとしたら。

「アレスはこっち」

アリサに手を引っ張られてアリサとすずかの真ん中に。

「お、おい…」

「さて…アレス。今日の放課後は空いてるわよね？」

俺の目をジッと見つめて来るアリサ。瞳の奥に炎が見えそうだ。

「いや、どうだったかな…」

「…あたしの家でお茶会があるの。来てくれるわよね？」

声のトーンが低いです、アリサさん。

「…ああ、わ、分かった…」

「了解。すずか、忍さんとノエルさんにも連絡しておいてね」

「うん」

「にゃー！私は！？」

思いっきり仲間外れのなのは。

「なのはも…来る？アレス君の秘密…知りたい？」

「え…？」

アリサの言葉を聞いて呆然とするなのは。

《どういう事なの？アレス君…》

《まあ、簡単に言うぞ？》

《うん》

《アリサとすずかにバレた。魔法が》

《にゃ――――――――――――――――っ!?ど、どどどどどう言う事!?》

《まあ、昨日…アリサとすずかが誘拐された時に魔法を使って救出したのをしっかりと見られてしまった》

《き、昨日!?》

《うん、まあ、（精神的に）疲れてたから言ってなかったけど》

《にゃ――――――――――――――――――――っ!!》

「どうしたの、なのはちゃん?頭抱えて…」

「あ、あははは…何でも無いよ?」

冷や汗をかいてるなのは。顔が少し青くなっていた。

「で?なのはも来るの?来ないの?」

「…行きます…」

「了解。良かったじゃない、愛しのアレス君の秘密が聞けるんだから♪」

「え!?そ、そんなのじゃないよ～!!」

時は流れ。

あっという間に放課後。

俺はアリサとすずかに連れられて校門に着く。後ろにはなのは。

既に到着していた黒のリムジン。

そして、鮫島さん。普段はフツーの執事なのだが…あの呂布との戦いは武人としか見えなかった。

見かけによらないとはこの事だな、うん。

そして俺達はバニングス家に連れて行かれるのであった。

応接室に着くと、忍さん、恭也さん、ノエルさんにファリン嬢。そして、はやても来ていた。

そして、俺達が到着すると鮫島さんが紅茶を持ってきてくれた。

俺はその紅茶に角砂糖2個放り込んで溶かす。

一口飲んでみて…。

「ぬぅ…足りぬ」

もう1個放り込んで溶かした。

「あんた…どんだけ甘党なのよ…」

アリサがツッコミを入れてきた。

「やかましか。俺は甘いモノ大好きなんだ」

「そうだよね、アレス君はウチのお母さんのケーキ大好きだもんね」

「なるほど…ねぇ…」

アリサとすずかの目が光ったように見えた。

「さて、全員揃ったようね」

忍さんが全員の顔を見てから言った。

「それでは、アレス君に月村家当主としてお礼を言わせて貰うわ。
すずかを助けて頂き、誠にありがとうございます」

立ち上がって深くお辞儀する忍さん。

「私からもお礼を言わせて頂きます、アレス様」

同じくお辞儀するノエルさん。

そしてあわててお辞儀するファリン嬢。

「私からもです、藤之宮様。後に家の方へ旦那様と奥様もお礼に参ります」

そう言ってお辞儀する鮫島さん。

「いえ、たまたま…ですよ」

俺は頬をかいて視線をアリサとすずか、はやてに向けた。

「私からも…お礼を言わせてな？ありがとう。あ、私の名は『八神はやて』や。よろしくな」

はやても車椅子に乗ってお辞儀してきた。

「ああ、俺は藤之宮アレス。アリサとすずかと同じ学校に通ってる同級生だ。こちらこそ、よろしくな？」

俺ははやての方に向かってお辞儀した。

「さて、アレス君。貴方は何者ですか？その幼い身体で１０人の大人を…撃退した」

忍さんが目を細めて俺の方を見た。

室内の空気が少し、冷たくなってきた。

「さてさて、何と言いましょうか…。そうですね、『魔法少年』と言うことでお願いできませんか？」

「へ？」

「いや、悪いヤツを退治するのは魔法少女とか正義のヒーローが居るじゃないですか。俺が使ってるのは、魔法。そして少女じゃなくて少年だから…」

「ふむ。確かに…」

恭也さんは顎に手を当てて頷いていた。

まあ、魔法以外も使用してるが面倒だから魔法扱いでいいや。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！魔法だって言うなら杖とか…」

「持ってたじゃないか」

「え…あ…」

「そう言えば、丸い宝石みたいなのが付いた杖みたいなの持ってたね…」

すずかは顎に手を当てていた。

「…まさかとは思うが、アニメに出る魔法少女みたいなファンシーな杖を想像していたんじゃあるまいな？」

「ま、まっさか～？」

俺の顔から視線を逸らすアリサ。

「…なのは、すずか、あとははやてとかが持ってるなら似合うが、俺が持ってたらどうかと思うだろ？」

「…何であたしの名前が入ってないのよ？」

「…自分であんなファンシーな杖持って『ラミ○スラミパスルルルル～』みたいな呪文唱えたいか？」

俺はアリサの目を見つめて言い放った。

「…くっ…無理だわ…」

テーブルに突っ伏すアリサ。

アリサの場合はモーニングスター振り回して『突撃ぃ！』の方が似合っている様に思える。

「魔法…ね。ここで見せることは出来る？」

「はい、構いませんよ。っと、その前に紹介しておきましょう。エヴァ？」

【はい、おにい…コホン、マスター。皆様、初めまして。武神の魔導書、エヴァンジェリンと申します】

俺は首から待機状態のエヴァを取り出してみんなに見えるように掲げた。

「ネックレスが…喋った…」

「ま、これが変身するアイテムみたいなモノかな？頼む、エヴァ」

俺はゆっくりと広いところに向かって歩く。

【了解です、マスター。起動〈アンファング〉】

俺の身体が光り輝き、騎士甲冑を身に纏う。

「おー…」

「かっこいい…」

アリサとすずかの声。

「めっちゃかっこええ…」

遅れてはやての声。

「とまあ、昨日誘拐犯達をボッコにした時もこの服装でした」

「へぇ～。で、防御力はどれくらいかな？」

…忍さん…何かスイッチが入りませんでしたか？ノエルさん。身体が小刻みに震えてますよ？抱きつきたいとか言わないでくださいよ？

「…試した事はありませんが…かなりの防御力かと。物理攻撃はどうか知りませんが…」

「盾とか出せるの？」

「一応は。頼む、エヴァ」

【はい、装甲手楯〈パンツァーシルト〉】

俺の前に現れるベルカ式魔法陣。

「か、かっこいい…」

「ええなぁ～」

…はやてさん。貴女ももう少ししたら同じの出せますよ。

「ま、分かったわ。これならすずかをお嫁に出しても大丈夫ね」

…ちょっと待て。何の話だ？

「ふむ。藤之宮様ならお嬢様の身の安全をお守りすることが出来ますな」

鮫島さんも何を言ってるのだ？

「アレス君は私のなの…」

なのはの呟きが聞こえるが俺には何も聞こえない！！聞こえないったら聞こえない！！！

「…しかし、どうやってその本を入手したのだ？」

恭也さんが聞いてきた。

「はい、実は生まれた時から本棚にあったのです」

エヴァは元に戻って今度は本形態になる。

「…そんな!?」

はやての呟き。

俺は聞こえないふりして続ける。

「そして、9歳になる今年の4月4日。丁度一ヶ月半前ですね。その時にこの本が起動してこうなったわけでして」

「へぇ～生まれた時からか～」

「アレス君は選ばれた訳だね」

「…」

はやての顔が少しずつ青くなっていく。

「…どうした?はやて?」

「あんな…聞いてくれるか?私の家にも…似た本があるんよ…」

「!」

俺とエヴァ以外の全員が息を呑んだ。

「エヴァ?」

【ハイ、マスター。私と同じ姉妹機、『夜天の魔導書』があります。外見はかなり酷似していますから…それでしょう】

「はやてちゃんも…なの？」

なのはも驚きの顔ではやてを見ていた。

「まだ、アレス君みたいに動いてないけどな…私の誕生日…来月の6月4日で9歳になるんよ…」

「なるほどな。多分、俺と同じように動くハズだ。俺の時も0時ジャストで起動したんだからな」

「そっか。私もアレス君みたいな魔法少女になるんかぁ…って、この足じゃなぁ…」

自分の足を眺めるはやて。

【はやてさん。今度、その本を見せていただけませんか？】

「え？ええけど…」

【私とその夜天の書は契約してもそんな足が動かなくなると言う事はありません。もしかしたら、何か致命的な欠陥が生じてる可能性があります】

「え？」

【ですから、はやてさんが9歳になった6月4日以降で一度、見せ

てください】

「うん…分かったわ…お願いして…ええよね？」

「ああ。俺は全く構わない」

「なるほどねぇ～。不思議な事もあるもんだねぇ～」

忍さんは紅茶を飲んで微笑んでいた。

《なのははどうする？》

《…決めた。私も…みんなに言う！》

なのはからの念話。彼女も決心したみたいだ。

「あの、聞いて欲しいの！」

なのはも魔法少女と言う事で全員がまた驚いていた。

途中、ユーノとユナも現れて（呼びつけたとも言う）、更に人間の姿になってから更に事態は少し大きくなった。

「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！ユーノ君が…ユーノ君が！！」

「あああああ…あんた…海鳴温泉の時にしっかり見てたのね！？」

「ち、違う…僕はアレスに連行されて…！」

「ユーノ、浮気…したんだね？」

ユーノは壁際に追い込まれていた。

ユナに両肩を掴まれ、隣にアリサが仁王のごとく立っていた。

《骨は拾ってやるぞ、ユーノ。だから…安心しろ》

《助けてくれないの！？》

《…地雷原に飛び込めと？》

《そもそもアレスのせいだよね！？アレスが僕を風呂に連行したから…！》

《俺は過去を振り返らない主義なんだ》

《鬼！悪魔！》

《頑張れ》

俺はユーノに向けてサムズアップしておいた。もちろん、満面の笑顔で。

「なるほどな。ご近所にこんなモノがバラまかれたのか」

ジュエルシードをじっくり見てる恭也さん。

「ええ。あまり、大事にしたくは無かったので…」

「全く。こういうのは大人の役目。分かったわ、私も大学で見かけた人がいないか聞いてみる」

「そうですね。近所でも聞いてみます」

「では、私も…」

忍さん、ノエルさん、鮫島さんが協力してくれる。

「なのは…」

「うん。お父さん、お母さん、お姉ちゃんにも話すね」

こうして、魔法の存在を話すこととなった。

原作と離れたけど…良いよね？

ちなみに、はやてはファリン嬢と話をしていた。

高町家にお邪魔してから全てを話した。

「ふぅむ…魔法少女か…」

「良いなぁ～」

「ねえねえ、私もアレス君と一回パートナー組んでみたいんだけど？」

桃子さん、貴女は何を仰るのですか…。

「えっと…なのは…さん以外は魔法が使えるリンカーコアが無いみたいなので…ちょっと厳しいかと…」

ユーノの言葉を聞いて両手、両膝を着いて落ち込んでる桃子さんが居た。桃子さんの周囲の空気だけ暗くなってた。

「まあ、俺と美由希が探して…」

「そうだな。俺と桃子で喫茶店に来る常連さん達に聞いてみよう」

「すみません、何から何まで…」

「良いんだよ。ウチだって、近所にこんな物騒なモノがあっても困るし」

「そうそう。何かの縁だと思って…ね？」

こうして、みんなを含めたジュエルシード探しが始まるのであった…。

3日後。

午後7時過ぎ。

俺となのははいつもの様にジュエルシード探し。

町中を歩きつつ散策していた。

ユーノとユナも一緒で近くをフェレット姿になって散策している。

「見つからないねぇ～」

「まあ、そんなに大きくないし、数が数だしね」

その時、町中に魔力が溢れ出してきた。

「！？」

「これは！？」

《そんな！？町中で強制発動！？》

そう言えば、そんな話があったな。

《ほら、ユーノ。広域結界張るよ》

《わ、分かった…》

これは将来は尻に敷かれると言う事で。がんばれ、ユーノ…。

同時に光の柱が立ち上る。どうやらジュエルシードだ。

「なのは！」

「うん、レイジングハート、セットアップ！」

【スタンバイ・レディ・セット・アップ】

バリアジャケットを纏うなのは。

「エヴァ、頼む！」

【了解です！起動〈アンファング〉！】

俺も騎士甲冑を纏う。手にはいつものレーヴァテイン。

そして、なのはは砲撃モードに入る。

「見えた！ジュエルシード…シリアル？？…封印！」

桃色の光線がジュエルシードに当たる。

見ると黄金色の魔力光も当たってるから…フェイトも来てる！

数秒後に光の柱は治まる。俺達はその場所に向かって走っていった。

宙に浮いてるジュエルシード。

周りを見てもフェイト達は来てる様子は無い。

「ふむ…」

「やった！さあ、早く封印を！」

「そうはさせるか！」

ビルの上から降ってくるのは…アルフか！

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉！】

右手を上にかざして魔法陣でアルフの攻撃を防ぐ。

「ちぃ！堅いシールドじゃないか！それに…見たことない魔法陣だよ！」

そう言ってアルフは弾かれてから８ｍ位先に着地した。

そして、ゆっくりと降りてくる…フェイト。

「いけ、なのは」

俺はなのはを歩かせる。

「こないだは…自己紹介出来なかったけど…私はなのは。高町なのは！私立聖祥大付属小学校３年生！」

バルディッシュが鎌の形になった！

そして、上空に飛んで斬りかかってくるフェイト。

「っ！」

なのははフライヤーフィンを発動して空に逃げる。

さあ、なのは。俺との特訓を見せてみろ。

俺はなのはとフェイトの戦いを眺める事にしようとしたが。

「…む？」

妙な…感じだ。何か、感覚が…おかしい。

「…」

俺はジュエルシードを見た。

何やら…発動しそうな。

「エヴァ？」

【はい、とりあえずジュエルシードの周りに結界を張っておきますね。魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

「どこ見てんだよ！」

アルフが後方から襲いかかってくるが。

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉】

エヴァの自動防御でそれも防ぐ。

「な、何なんだよ…あたしの方を見ないで…簡単に防いじゃってさ！」

「ふむ？なら、俺と遊ぶか？」

俺はゆっくりとアルフの方を振り向いた。

「くっ…」

「念の為に言っておくが…俺はあの水色の娘とは違って…」

「違って…？」

「接近戦が得意なんだぜ？」

俺はアルフとの間合いを一瞬で詰める。

アルフの頭に杖をそえる。

「は、速い…！」

「ま、俺としてはあの戦いをちょいと眺めていたいのだがね？」

俺はなのはとフェイトの方を見る。

「隙あり！」

アルフは俺の左腕に噛みつこうとしたが…。

「甘い」

そう言って飛びかかって来るアルフの鼻先にデコピンを喰らわせた。

「〜〜〜〜！！！」

その場で声にならない叫びをあげてのたうち回ってるアルフ。

《凄いね、アレスは。相手を見ないでも攻撃を当てるんだから…》

《ああ、鍛錬すれば誰でも出来る。空気の流れを読んでるからな》

《…どれくらい鍛錬すれば良いの？》

ユナからのツッコミも入る。

《さあ？人によるけど…3年あれば何とかなるんじゃね？》

《…ホントに？》

《まあ、目隠しして生活出来るようになれば》

《イヤイヤイヤイヤ、それはおかしいから》

「な、何なんだよあんたは！何であたしの方を見ないでそう簡単に…」

「ああ、空気の流れを読んでるだけだ」

「…何なのよ…この達人は…おかしいよ…」

アルフはその場に座ってしまった。
下を俯いてしょげてる様に見える。
「お、接戦だな」

―なのは視点―

フェイトちゃんが斬りかかってくる！
でも、アレス君の方がよっぽど速かったの！
私は斬りかかってくるフェイトちゃんの攻撃をかわして一気に後ろに回り込む。
「っ！」
【ディバイン・バスター】
私が一番得意とする砲撃をフェイトちゃんに向かって撃つ。
【ディフェンサー】
バルディッシュがシールドを張って防ごうとするけど…。

「私のディバイン・バスターはその程度では止められないの！」

ガラスの様に砕け散るフェイトちゃんのシールド。

「っ！そんな！」

かろうじて避けるフェイトちゃん。まだまだなの！

「レイジングハート、お願い！」

【イエス、マスター！ディバイン・バスター６連射】

私は動いているフェイトちゃんに向けてさらなる砲撃を繰り出す。

「ひぃ！」

次々に砲撃がフェイトちゃんに向かっていく！

驚いた顔でフェイトちゃんは全ての砲撃を避ける！さすがはフェイトちゃん！

「全部避けるのなら…レイジングハート！」

【イエス！マスター！！ディバイン・バスター１２連射！】

今度はさっきの２倍！これならフェイトちゃんに当てられるの！

さあ、私のお話を聞いて貰うからね！

―なのは視点・終了―

「…」

【…おに、いえ、マスター？】

「何も言うな、エヴァ」

何となく、イヤな予感は感じていた。

なのは…意外と熱くなりやすい性格なんだな。

なのはは砲撃を避けるフェイトに向けてディバイン・バスターを撃ちまくっていた。

フェイトの後方のビルは崩壊して更にその奥のビルも崩壊していた。

このまま放っておくと周辺が焼け野原になりそうだし、いくら非殺傷設定と言ってもフェイト…半年は再起不能になるぞ…。

「ちょっと！フェイトが殺されるよ！な、何なんだよあの砲台は！」

アルフが詰め寄ってきた。

《アレス…どんな鍛え方したの？》

《どんなって…ただ模擬戦しただけ…》

《どんな様子だったの？》

《そりゃあ、俺があまりに避けるからなのはもアレを終いには６４連射とか…》

《死んじゃうよ！？非殺傷だって言ってもあの一撃が戦艦並みの砲撃喰らったら…あの子…重傷になるよ！？》

《だよな…？だって、俺のシールドでもヒビ入ったし…》

いや、あの時はさすがに背中に冷や汗かいたからね～。

「わ、分かったよ…止めて来るから」

俺はなのはの背後に回ってハリセンで叩く。ちなみに、これはエヴァの中に登録してある専用のハリセンだ。

「やりすぎ」

「にゃっ！？」

砲撃は止まった。

フェイトは肩で大きく息をしていた。

目が潤んで…いや、少し泣いてる様に見える。

「ハア…ハア…」

トラウマにならなきゃ良いが…。

「も～何で止めるかな…後少しで撃墜出来たのに…」

「…もう少し、加減と言うモノを考えんかい」

更に俺はなのはの頭を叩いた。

「いや、すまんすまん。この子には後で聞かせておくからさ…アレ、持っていって良いよ」

「！？」

「にゃ！？」

「あれだけしておいて…持って帰れるか？」

俺はフェイトの背後を指差した。背後には瓦礫が無くなった更地と化していた。

「う…」

言い詰まるなのは。

「ってな訳だ。今回は、こちらの反則負けで良い」

「…ありがと…」

「じゃあ、な」

俺となのははフェイトの前から立ち去る。

俺は二重身〈ドッペルゲンガー〉で二人に分かれた後、分身体でなのは達を自宅に送る。

【フェイト達の居場所が分かりました。隣の遠見市のマンションです】

「ふむ。確か…明日にフェイト達は母親の元に向かうなよな？」

【ええ。原作ではそうなってましたが？】

「よし、こっそり後をつけよう」

【分かりました。それでは、明日ですね】

とりあえず、俺達は自宅に帰り、明日の為に準備をして眠りについた。

目を覚ましてから二重身〈ドッペルゲンガー〉で二人に分かれた後、分身体を学校に行かせる。

まあ、三日は大丈夫だから良いか。

その後は遠見市に向かって転移した。

超高層マンションの屋上に来た。

予定通り、フェイトとアルフが立っていた。

フェイトの手にはケーキを詰め合わせたであろう箱があった。

無論、二人は俺に全く気付いていない。

《エヴァ、会話は聞こえるな？》

《ハイ、大丈夫です》

《頼む。俺は風の音で途切れ途切れにしか聞こえない》

《了解です》

しばし会話をしたあと、魔力が溢れる。

そして、光に包まれてフェイトをアルフの二人は消え去った。

「エヴァ？」

【大丈夫です。きちんと転移先を聞いていますから。次元転移！】

足下に広がるベルカ式魔法陣。そして、俺の身体を包み込んでいっ

た。

「ここは…」

【…変ですねぇ？】

確かに、時の庭園と思われる場所に着いたのだが…。

「思ったより位置がずれたか？」

【そうかもしれませんね】

俺達は散策しながら歩いていった。

「うん？」

歩いていると、何かの気配。

だが、視界には何も映ってはいない。

【どうかされましたか？】

「いや、何かがいる様な気配が…浄化の蒼水晶」

右目に気を通して起動させる。

すると、通路に佇むおぼろげで透けて見える女の人。

白い基調の服で頭に白い帽子。ベージュ色っぽい髪。
そして、お尻から猫みたいな尻尾が生えていた。

「…」

「…」

女の人は俺の顔を眺めていた。

「…見えるのですか？」

「ああ、見える。君は…幽霊か？」

「はい。私の名はリニス。プレシア＝テスタロッサの使い魔をしております」

「…プレシア？」

「ええっと…フェイト＝テスタロッサと言う女の子はご存じで？」

「ああ、知ってる」

「その子の母親です」

「なるほどね…」

「ぶしつけですが…プレシアを…助けて頂けませんか？」

リニスは涙を流していた。

リニスから大まかな話を聞いた。

昔、最愛の娘『アリシア』を事故で亡くした事。

そして、最愛の娘を甦らせる為に娘のクローン『フェイト』を造った事。

だが、プレシアは納得せず今度は死者蘇生でアリシアを復活させる事。

「なるほどね…」

「今のプレシアは…病魔に冒され、余命幾ばくも無いのです。せめて…フェイトに母親として接して欲しいのですが…」

さて、どうしたモノか。

病魔に冒されてるから視野狭窄に陥っているのかもしれない。

余裕が無いからフェイトに情愛を捧げていられないのかもしれない。

病魔を治せば…何とかなる…だろうか…？

とにかく、病魔を治さないことにはどうにもならないな。

「うん、とりあえずはプレシアに会ってみないことには何とも言い

難い」

「そうですか…」

「…さて、リニスさん」

「はい？」

「もう一度、生を謳歌してみる気は？」

「…え？」

「もう一度、フェイトとアルフに会う気は？」

「叶うなら…会いたいです。この手で…頭を撫でたいです」

「分かった。ところで、貴女の身体は？」

「…どうなさるのですか？」

「ま、それは見てのお楽しみと言う事で」

「…。分かりました。私の遺体はこちらです」

リニスに連れられて歩いていった。

とある部屋に到着するとミイラ化した猫らしいモノがあった。

「ほほぉ…」

骨だけだとちょっと厄介だったが。

組織が残ってるなら…何とかなるかもしれない。

「あの？」

「ふむ。これなら何とかなるだろ」

「それなら…！」

「まあ、あわてなさんな。すぐに復活と言うのは無理だから…遺体を箱に詰めて…と」

俺は部屋を探って箱を探し、リニスさんの遺体を箱に詰める。

で、メモに大雑把な事情を書いておいて、箱に貼っておく。

中に入れておくと開けた時に母さんがビックリするからね。

「エヴァ」

【はい、次元転送！！】

ベルカ式魔法陣が発動して箱は俺の家に転移された。

「！！貴方は…古代ベルカの使い手ですか！？」

「ああ。ま、詳しいことは家に送るから…母さんに聞いてくれ」

リニスの足下にも同じくベルカ式魔法陣が発動する。

「わ、分かりました…」

リニスは光り輝いてその場から消え去った。

「さて、寄り道したがフェイトを探してみよう」

【お兄様、魔力反応が二つ。多分、プレシアとフェイトちゃんでしょう】

「分かった。そこに転移してみよう」

【分かりました。それでは、転移!!】

足下が光り輝いてから俺はその場から転移した。

転移した先は…丁度プレシアがフェイトに罰を与えていた所だった。

「…あらあら…小ネズミが進入していたと思っていたけど…」

プレシアが俺の顔を見てそう言った。

「あ、貴方は…」

フェイトは部屋の中央で釣り下げられていた。

身体には生々しい傷跡が残っていた。

「…やれやれ、お仕置きにしてはちょいとやりすぎじゃないのか？プレシアさんよぅ？」

第8話　時の庭園に行ってみよう（後書き）

さあ、段々と話がおかしくなってきましたよｗ

作者の頭もおかしいからそこら辺は気にしない方向でｗ

なんか、転生者の出番が少ない様な気が…

大本はそこなんだから多少増やした方が良いかな…。

描写はありませんが、転生者同士で戦って相打ちとかして少しずつ数が減っていってるんですよ？

作者の脳内に保管してるから意味無いけどねｗｗｗ

ちなみにアレス君は意図的にフラグを建ててる訳ではありません

勝手に建ってるんですｗ

前世の前世において濃厚な蜂蜜も裸足で逃げる位の甘い夫婦生活を営んでいたから恋愛に対してはそこまで気にしていないのです

ただ、来る者は拒みませんｗ

去る者も追いませんが、既に逃げられなくなっていますｗ

それでは、次回をお楽しみに～

第9話　原作から乖離しはじめました（何を今更）（前書き）

少しずつ、キャラ達がおかしくなってきてますが気にしないでくださいｗ

それと、ジュエルシードの能力が捏造されてます。公式設定では無いので本気にしないでくださいｗ

それではいってみよう～！

第9話　原作から乖離しはじめました（何を今更）

「…やれやれ、お仕置きにしてはちょいとやりすぎじゃないのか？プレシアさんよぅ？」

「私の名を何処で…！」

「何処だって良いだろ？フンッ！」

俺はフェイトを吊っている魔法の鎖を解いた。

【次元転送！】

魔法陣に包まれるフェイト。そして、姿が消える。

何処に送ったかって？扉の外にいるアルフの所だよ。

《フェイトを連れてどっかに行け！》

《そ、その声は！何でアンタが…！》

《良いから、早くフェイトを連れて転送しろ！》

《わ、分かったよ…》

そう言って扉の外の気配は無くなった。どうやら転移したと思われる。

「あらあら、いきなり来て何のつもりかしら？」

「娘を虐待する母親をちょいとお仕置きに」

「娘？」

「さっきの子は娘じゃないのか？」

「あはははは！あの失敗作が娘！？冗談は止めて貰いたいわ！」

大声を上げて笑うプレシア。

「…そうか…失敗作か…」

「そうよ！あんな人形、私の娘ではないわ！」

狂気に満ちた表情で俺を見るプレシア。

「エヴァ。カートリッジロードだ」

【え…アレは…まだ…】

「いい。さすがの俺もちょっと頭に来たぜ」

【…分かりました。無理はしないで下さいよ？爆発〈エクスプロズィオーン〉！！】

ベルカ式魔法の真骨頂、カートリッジシステム。一時的に魔力を高めて戦闘力を上昇させるシステムだ。

身体にちょいと負担がかかるからいずれは改良しようとしていたの

だが。

ちょっとこのオバハンにお仕置きしてからだ！

「それは！ベルカ式…！貴方はベルカの騎士！？」

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！竜の一撃、受けて見ろ！竜牙！」

左手に持ち替えての片手突き。

プレシアの前に防御の魔法陣が現れるが…。

「その程度で止まると思うか！」

一瞬止まったが、魔法陣はガラスの様に砕ける。

「くっ！」

プレシアは2層目の防御魔法陣を展開する。

「無駄無駄無駄ぁ！この突撃を止めたければその3倍の強度の魔法陣を構成するんだなぁ！」

あっさりと砕け散るシールド。

「く…！何て言うパワー！」

プレシアは3層目の防御魔法陣を展開。

「何枚展開しようが！」

「ぐ…ゴホッ」

その時、プレシアの口から血が溢れ出す。

「…」

俺は突きを止めてプレシアの前に立つ。

「…ゴホッ…どうしたのよ…」

「どうしたも、こうしたも。病人相手にお仕置きしてもな」

「そう。だから、私には残された時間は無いの…」

プレシアは口元を拭う。

「さて、一つ聞きたいのだが。ジュエルシードを集めて…何がしたいんだ？」

「…貴方に関係無い話よ」

「…そうか。そうそう、俺のデバイスはな…古代ベルカで造られた『武神の魔導書』と言う名前らしいんだが？」

「…っ！まさか…夜天の魔導書の双子機として造られた…僅かな文献だけで実在するかどうかも怪しかった魔導書が…」

「そう言う事だ。昔の古い事も知ってるかもな？」

「アルハザード。かつて、死者をも復活させた技術を持つ伝説の都よ。私はそこに行きたいのよ」

プレシアから聞いた話はこうだった。

事故で死亡した娘、アリシアを復活させたい。

クローン人間でフェイトを造ったけどアリシアでは無かった。

まあ、確かに同じ遺伝子でも環境が違えば違う人格になるのは当たり前だろう。

「なるほどね～」

「…で、貴方のデバイスにその記録が載ってるのか知りたいのよ」

「どうなんだ？エヴァ？」

【ハイ、記録ありますよ？】

1秒待たずのエヴァからの回答だった。

「お、おおお教えなさい！！」

俺の両肩を掴んで来るプレシア女史。目が真っ赤になってますが。

「…条件がある」

「…何よ…」

「フェイトを実の娘として接すること。それが条件だ」

「…今更…散々ひどい仕打ちをしてきた私に…」

「今ならまだ間に合う。このままだとフェイトの心に深い傷が残るぞ」

「…でも…」

「…それと、後ろの方でフェイトに似た女の子がふくれ面してアンタの事を見てるのだが？」

「へ？」

口を開けて呆然とした表情で俺を見るプレシア女史。

「言ってなかったな。俺の右目は幽霊とか精霊とかそう言ったモノを見ることが出来るんだ」

俺は自分の蒼い目を指差して笑った。

「え？　へ？」

「まあ、アンタには見えないだろうが…。その子がアリシアと言う子ではないのか？」

俺は右手に魔力を込めて一時的に普通の人が見える様にした。

「お母さん！」

「ひっ！？」

驚くプレシア女史。ゆっくりと、後ろの方を向いた。

そこには両手を腰に当てて頬を膨らませてプンプンと言った感じが似合う様子の金髪の女の子が立っていた。

「あ…アリシア…？」

「アリシアじゃないよ！って…やっと私の事気付いてくれた～！」

アリシアはプレシア女史の方に駆け寄ってきた。

抱きしめようとしたが、アリシアはプレシア女史の身体を通り抜けてしまった。

「あ、あれ？」

「ほらほら、アリシアは身体が無いから…」

俺は苦笑いしてアリシアの方を向いた。

「そっか、私の身体はアッチの方にあったんだ」

舌を出して笑うアリシア。

「…どういう事かしら？」

「どういう事も。ここに居るのはアリシアの魂だよ。どうやら成仏はしてなくてずっとここに居たみたいだけどな」

「え〝…」

俺の言葉を聞いて顔が青くなるプレシア女史。

「そうだ！お母さんにずっと言いたかったんだ！せっかく妹が出来たのにお母さんったら！！！」

そこからはアリシアの説教タイム（別名・ずっと私のターン）が始まった。

プレシア女史は正座してアリシアの言うことをずっと聞いているのであった…。

小一時間経過したらアリシアの身体が透け始めた。

「あ…あれ？」

「時間だよ。見えなくなるだけだから…」

「そっか…」

ちなみにプレシア女史は某ボクサーの様に真っ白に燃え尽きていた。

「ま、俺はずっと見えるけどね」

その言葉を聞いてプレシア女史は俺の腕を掴んで来た。

「…えっと？」

「…ずっとここに居る気は無いかしら？」

顔を近づけて来るプレシア女史。鼻と鼻が当たってるんですが…。

「仰る意味が分からないですが？」

「貴方が居てくれたらアリシアと会話が出来る。そうでしょ？」

「まあ、確かに。俺はアリシアの姿と声は確認できますが？」

「それに…よく見ると…貴方、可愛い顔してるじゃない？」

プレシア女史は頬を赤くして俺の頬を撫でてきてるのですが？

もの凄く、イヤな予感を感じるんですが？

「ますます訳が分からんのですが？」

「まあ、単刀直入に言うわ。私の義息子になりたいと思わない？」

「…なぬ？」

「アリシアかフェイト、どちらかをお嫁にあげるから…それとも、二人とも欲しいならあげるわよ？」

プレシア女史はアリシアに説教されて頭のネジが外れたのか？

『お母さんったら！もう！でも…お兄ちゃんならお嫁さんになっても良いな～』

プレシア女史の後ろでは顔を真っ赤にして頬に両手を当ててやたらクネクネ動いてるアリシアの姿が目に入った。

見えぬ！俺には何も見えんし聞こえんぞ！

「ま、まて…俺はまだ9歳だぞ…？」

「あら、婚約と言う形を取っても良いわよ？」

「その前に、フェイトの確認くらい取ってから…」

「そうね。多分、貴方なら大丈夫だと思うけどね。ま、確認しておきましょ」

ニヤリと口元をあげて笑うプレシア女史。

確かに大丈夫そうだから恐いんだが。

「…ほれ」

俺は小瓶をプレシア女史の方に向けて差し出した。

無論、魔法のポシェットから出したのだが。

「何かしら？」

「とりあえず、アンタの胸にある病気を治せ。アリシアが蘇生してもアンタが亡くなっては意味がない」

「確かに…。でも、私のこの病気は…」

「騙されたと思って、飲んでみろ。治るハズだから」

「…分かったわ。騙されたと思って飲んでみるわ…」

まあ、完治はするのは間違いない。前世で俺とエヴァが二人で共同開発した秘薬なのだから。

問題は、言葉に言い表せない位に不味いと言う事だ。水を飲んでも、歯磨きしても最低3時間は口の中に味が残るのだ。

良薬は口に苦し。まさにこの事だな。

でも、それで病が治るなら良いと思うがね。

【あ、お兄様？】

「どうした？」

【アルハザードに行くにはどのみちジュエルシードがいりますわよ？】

「何？」

【万全を期すなら全２１個で最低でも９つ必要ですわ。元々はアルハザードの門を開ける為の宝石でしたのよ？】

「そうだったのか。そう言う事ならなおさら集める必要があるなぁ…」

「へぇ…それは知らなかったわね…ところで…貴方、デバイスに『お兄様』と呼ばせてるの？」

プレシア女史がニヤニヤしながら寄ってきた。後ろではアリシアが未だにクネクネしていた。

「…う」

【あ…】

「まあ、人には色々な事情があるからこれ以上の詮索は止めておくわ」

それでもプレシア女史はニヤニヤと笑っていた。

「く…俺は帰るぞ。いいか？その薬を飲んでおけよ」

「分かったわよ。それじゃ、またお会いしましょう？小さな勇者さん？」

「…藤之宮アレス。それが俺の名だ」

「分かったわ。アレスちゃん？」

プレシア女史、貴女もちゃん付けで呼びますか…。

「…ああ」

俺は時の庭園から転送した。

「おや？」

転送してみたら何故かフェイトとアルフが居た。

「な、何でアンタがここに…」

フェイトに包帯を巻いているアルフ。フェイトは気を失っていた。

「ああ、うっかりここに転移したみたいだな、ハッハッハッ」

「ハッハッハッじゃないよ、全く…。でも、アンタにはお礼を言わないとね。ありがとう、フェイトを救ってくれて」

「気にするな。たまたま転移したらあそこに飛んだだけだ」

「…ま、どこまでがホントかアタシは突っ込まないけどさ。それでも、フェイトを救ってくれた事は間違いないだろ？」

「そうだな。結果としてはフェイトを救ってるな」

黙々とフェイトの腕に包帯を巻き始めるアルフ。

「治癒魔法、使わないのか？」

「アタシが魔法を使うと、フェイトに負担がかかるからさ。とりあえず、応急処置だよ」

「なるほどね」

俺はアルフの横に移動する。

「どうしたんだい？」

「ああ、せっかくだから…ちょいと魔法を…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　汝が為にユピテル王の恩寵あれ。『治癒』」

フェイトの身体が光り、傷がどんどん塞がっていく。

「へぇ…凄いじゃないか。あれだけの傷を一瞬で…」

「まあな。魔法のセンスは無いんだが」

「冗談。アレで魔法のセンスが無いって言ったら大半のヤツが魔法のセンスが無いって事になるよ」

「それでもだ。フェイトの方が上だよ。魔法の才能は…ね」

「ううん…」

フェイトからの呻き声。
見るとフェイトの目がゆっくり開いた。
「ここは…」
「自宅だよ、フェイト」
「そう…じた…」
俺の顔を見て動きが止まるフェイト。
「フェイトを助けてくれたんだよ。あの鬼婆の所から転移させて…傷まで治してくれたんだ」
「そう…ありがとう…」
そう言ってソファーから起き上がるフェイト。
「さて、と。他に異常は無いか？」
「…ん…無いよ」
その時、フェイトのお腹から可愛い音が聞こえてきた。
「…」
「…」
「…ま、そっちは正常だな」

耳まで真っ赤になってるフェイト。隣ではアルフがニヤニヤ笑っていた。

「乗りかかった船だ。飯の準備位してやる」

俺は立ち上がってキッチンと思われる場所に向かって歩いていった。

「…何も無いんだが」

俺は冷蔵庫を開けて愕然とした。

見事に空っぽだったからだ。調味料一つ存在しない冷蔵庫。

いや、奥に消臭剤のキムコはあったが。

【さすがのお兄様もこれではどうしようもありませんね…】

「…買いに行くか」

俺は街に転移した。

適当に食材と調味料を買ってきた俺はキッチンで料理を始める。

まあ、それなりに料理は出来る。…が某赤い弓兵の様にはいかないが。

「さて、出来た」

俺は料理をテーブルに並べた。

「わあ…」

「お、美味そうな肉じゃないか～」

テーブルの上に並べたのはサイコロステーキ、ツナを入れたコーンサラダ、ワカメが具の味噌汁に白いご飯。

後は豆腐の上にショウガを乗せた冷や奴だ。

「ほら、しっかり食べないと大きくなれないぞ」

「アンタだって大きくなれないよ？」

「やかまし。俺は良いからフェイトの方だろ」

「…うん…」

そう言って俺達は食事を始めた。

「そう言えば、アンタの名前って？」

アルフが肉をほおばりながら俺の方を向いた。

「…言ってなかったか？」

「いいや、聞いてない」

フェイトの方を見ると首を横に振っていた。

俺は顎に手を当てて思い出した。

確か、なのはは自己紹介してたけど…俺は言った記憶が無いな…。

「確かに言った記憶は無いな…」

「でしょう？」

「それでは、改めて。藤之宮アレス。年齢は9歳。こないだ会ったなのはの幼馴染みだ」

「なのはって…」

「こないだ戦った水色の子だよ」

「極悪固定砲台の子だね…」

酷い言われようだが、大体合ってる。

「それで？何で、ジュエルシードを集めてるんだい？」

「うむ、それはだな…」

俺は事情を説明した。

「なるほどねぇ」

「私も…頼まれてるから…」

「良いよ。まあ、プレシアさんと話をしてるから俺もフェイトの協力をする。なのはとユーノにも俺から言っておく」

その言葉を聞いてアルフとフェイトが目を見開いた。

「そんな…あの鬼婆が…」

「母さんが…」

「ああ、あの後…誠心誠意を持ってプレシアさんとお話したぞ？」

「ホントにぃ？まあ、確かにあんたの腕ならあの鬼婆もそう簡単に勝てないだろうけど…」

「そう言えば、アレスの魔法って…何か違うね…」

フェイトは冷や奴を口に運んでいた。

「ああ、俺の魔法はベルカ式と言う形式でフェイトやアルフ、なのはにユーノが使ってる魔法とはちょっと違うんだ」

「そう言えば、リニスに聞いた事ある。かつて、アタシやフェイトが使ってるミッド式と二分する位、繁栄してた形式だって」

「うん。ミッド式は遠距離、広域魔法とか射撃系が多いけど、ベルカ式はその遠距離と広域魔法を度外視して対人戦、主に近接戦闘向きの魔法だってさ」

「へぇ～」

「それに、俺は武器を使った戦いなら得意分野だし」

「確かにねぇ～。背後からの攻撃でも簡単に避けるんだもん。どうすりゃ勝てるか、アタシは困ったよ」

「簡単、簡単。前からの攻撃なら俺の動体視力を上回る速さで攻撃、背後からなら完全に気配を消して空気を全く動かさずに攻撃するとか」

俺は味噌汁をすする。うむ、今日もいい感じに出汁が取れてるな。

「どうすりゃ空気を動かさずに攻撃しろと。それに、アンタの動体視力はどれくらいなんだ？」

「ん？フェイトがよく撃ってる魔法の弾が止まって見える位」

「ブーッ！！」

豪快に味噌汁を噴き出すアルフ。

「あ、アルフ！？」

「こらこら、ドリフのコントしてるんじゃないぞ？」

「フェイトのアレが止まって見えるって…アンタの目はどういう作りしてるんだい！？」

「どういう作りと言われても…説明しようが無いのだが？」

「ベルカの魔法で強化してるとか？」

【ベルカにはその様な魔法はありませんよ？お兄様の生来の目ですよ？】

エヴァが突然喋った。ってか、もうマスターって呼ばないのね？

「エヴァ、マスターって呼ぶ気は無いのね？」

【もう、いいじゃありませんか。お兄様はお兄様なんですから！】

エヴァが開き直りやがった！

「…デバイスにお兄様呼ばわりねぇ…」

「バルディッシュ？」

【私は聞いたことありません】

レイハさんに続いてバルディッシュ卿もバッサリだった！

アルフとフェイトの目が妙になま暖かかった。

「…まあ、俺とエヴァの関係は置いといて…」

「…アンタ、妹が欲しかったとか？」

「…何が言いたいのかね？」

アルフの口元が妙につり上がってるように見えるのだが。

「いや、デバイスにわざわざお兄様呼ばわりさせるなんて…シスコンとか？」

「何を戯けた事を。そもそも俺は一人っ子だ」

「なるほどねぇ～」

アルフは腕を組んでウンウン頷いていた。

「一人っ子故に妹が欲しかったと…。うん、そうかそうか…」

アルフはどこからかハンカチを取り出して目を拭いていた。

嘘泣きだろ、コラ。

「そっか、アレスも寂しかったんだね…」

何故かフェイトにまで同情の眼差しを受けていた！

どうしてこうなったんだ！？

「うが～！俺は別に寂しかったわけじゃねぇ！」

食事も終えて後片付けを済ませる。

アルフとフェイトは風呂から出てきた所だった。

「俺はもう帰るぞ」

「ああ、ありがとね」

「ありがとう」

「そうそう、今度機会があったら一緒にプレシアさんの所に行こうか？」

「え？」

「誠心誠意持ってお話したから大丈夫だ」

「う…うん…そうだね…」

少し、戸惑ってるフェイト。

「ま、もうちょいジュエルシードを集めてからだな」

俺の足下にベルカ式魔法陣が展開される。

「それじゃ、俺は帰るぞ。しっかり食事取って、体調管理しろよ」

「うん…」

「分かったよ」

俺は自宅に向けて転移した。

自室に着いたらリニスさんが体育座りしていじけていた。

「…遅いです」

「すまん、フェイト達の所に行ってた」

「そうですか。元気にしてました？」

「ああ。ちょいと顔色悪かったから食事の準備して飯を食ってきた」

「そうですか…ありがとうございます」

「気にするな。で、俺の母さんから話は聞いたか？」

俺はベッドに上着を投げた。

「ハイ、一通りは。凄いですね、古代ベルカ式と言えば滅多にお目にかかれないんですよ？」

「そうなのか？」

「ハイ。しかも、『武神の魔導書』と言えば存在するかどうか疑わしかった伝説の魔導書。そんなのを持っているなんて…下手したら管理局に狙われるかも？」

「…まあ、その管理局が来たにしても…ここはそいつらの管轄になるのか？」

「いえ、管理外ですね」

「なら、大丈夫だろ。来ても撃退するし」

「…まあ、アレスさんなら大丈夫そうですけど…」

「そう言うこと」

「そうそう、直美さんがご飯の準備してましたけど？」

「なぬ？」

【お兄様？直美さんにご飯がいらない事を伝えてましたか？】

エヴァの言葉を聞いて俺は背中に少し、冷や汗が流れた。

そう言えば、念話で今日の晩ご飯はいらないと伝えた記憶は…無い。

「アレスちゃ～ん？帰って来たの～？ご飯出来てるわよ？」

そう言って部屋に母さんが現れた。

「あ…母さん…実は…既に外で済ませたと言うか…」

「え…？」

母さんの目が見開かれて驚愕していた。

そして、ハンカチを口にくわえて言い放つ。

「ああ…アレスちゃんが……とうとう反抗期に…外でご飯を済ませて来るなんて…」

当然、嘘泣きなのはバレバレなのだが。

「だから、うっかり伝え忘れたんだって…」

「いいえ。あたしのご飯が不味いからなんでしょ？」

「いや、母さんのご飯は美味しいから…」

「それじゃ、何が不満なの!?量？おかずの品数が少ないとか!?」

「いや、それも問題ないから…」

「分かった！あたしが食べさせてくれないからなのね!?分かったわ！今度からあたしが食べさせてあげるから！」

「そ、それだけは止めてくれ！」

なのはが泊まりに来た時にそれをされたら…どんな要求が来るか！

同じように『あ～ん』させられるに違いない！

「それなら、忘れないように連絡頂戴ね？今度忘れたら…問答無用であたしが食べさせてあげるから♪」

そう言ってかあさんは俺の部屋から出ていった。

「…」

リニスを見ると…『何この変な親子』と言いたげな表情で俺の方を見ていた。

さて、リニスを復活させるのだが。

この家にはそんな設備は無い。

「さて、久しぶりにアレを出すか」

そう言って俺はポシェットからダイオラマ魔法球を出す。

無論、修業用の部屋もあるが今は使用する気は無いので扉は開かないように封印してある。

「ここに設置して…と」

俺は部屋の真ん中にダイオラマ魔法球を置く。

「時間は…よし、1日1時間のままだな」

外の1時間がダイオラマ魔法球の中では1日。便利は便利だが、今回は寿命があるからあまり使用しないようにしようか。

床に魔法陣を書いて発動させる。これで中に入れる寸法だ。

「あの…これは…」

まあ、中に入って説明するよ。

俺はリニスさんの遺体が入った箱を持ってからリニスさんに魔法陣の上に乗るように促す。

「分かりました」

そう言って俺達はダイオラマ魔法球の中に入る。

「わ～凄いですね～」

リニスさんは城の窓からの景色を堪能していた。

青い空にジャングルの様な森、先には青い海も見えた。

「これもベルカ式の魔法なんですか？」

「う、うん…そんなもんかな…」

とりあえず、ベルカ式と言うことにしておいた。

説明となると色々と面倒になるし。

確か、3階にクローンシステムの設備があったよな…。

俺は3階に向かって階段を昇る。

部屋に入ると生体ポッドとかそれに繋がれた、いかにもと言った機械が鎮座していた。

「これは…？」

「ん、ぶっちゃけ言うとクローン作る機械」

「ええ！？」

「まあ、リニスさんの身体を復元してそれにリニスさんの魂を定着させる。多分、1週間くらいで出来ると思うよ？」

「す…凄いです…プレシアが見たら大喜びするかも…」

確かにプレシア女史なら狂喜乱舞するかもしれないな。

「それでは、リニスさんの身体を…」

箱から取り出してテーブルの上に置いた。

組織片を機械に入れてリニスさんの遺伝子情報を解析する。

ちなみに、この機械は前世の前世において未来の人から貰った機械である。

本来は身体を失った人の腕とか足とかを復元させる機械なのだが。

無論、全身全て復元可能と言うとんでもない機械。

故に、あまり人には見せられないんだよね。

リニスさんにも喋らないように言っておこう。

「あ、リニスさん」

「はい？」

「ここで見たこと、余り喋らないでくださいね？」

「あ、ハイ。分かりました。折角生き返らせて貰うんですからね」

そう言ってリニスさんは機械をジロジロ眺めていた。

暫くすると機械が本格稼働しはじめた。
生体ポッドの中に肉片みたいな何かが出来始めた。

「これって…」

「そう。リニスさんの身体になるんだよ。後は時々様子を見に来るくらいでやることは無いよ」

「そうですか」

「さて、後は出来るまでは休憩だ」

この別荘内で3日後。外ではまだ3時間しか経っていない。
様子を見に来た。
生体ポッドの中には猫らしき生き物が浮いていた。

「…そうか、リニスさんは…」

「ハイ。私は山猫の素体だったので…」

人の身体ならもうちょっと時間がかかったであろうが、山猫ならもうじき完成するかもしれない。

【お兄様、出来たみたいですよ?】

ディスプレイを見ると１００％完了と出ていた。

すると、ピーピーと音が鳴って生体ポッドの中の培養液が抜き取られる。

「おお、出来た出来た」

俺はリニスさんの身体を取り出し、魔法陣が描かれた絨毯の上に置いた。

「後は…魔力供給してリニスさんの魂を入れたら無事に復活だな」

「えっと…ひょっとして…」

「主人はとりあえず俺にしておこうか。まあ、プレシアさんは俺の薬を渡したから病気は治ってるだろうけど…」

「あ…そうでしたね。確かに負担をかけるわけにはいかないですし…」

そして魔力供給を開始する。

ラインは繋がってリニスさんの身体が光り輝いてきた。

「よし、後はリニスさんが身体に触れて」

「分かりました！」

リニスさんは自分の身体に触れる。するとリニスさんの魂は身体に入っていった。

すると、目の前の山猫が変化して…

「…マジですか？」

人間形態で全裸のリニスさんが横たわっていた。

「うん…」

目を覚まして起き上がるリニスさん。

凄く…大きいです…じゃなくて！

「ずっと山猫形態かと思ってたら！こういうオチかよ！」

俺はバスタオルをポシェットから取り出してリニスさんに渡す。

「あ、ごめんなさい。私ってずっと人間形態で山猫形態ってほとんどとってなかったから…」

そう言ってリニスさんはバスタオルを身体に巻いた。

…はちきれんばかりの胸は…凄まじい。シグナムと同等かもしれない。

そして、視線を下に向けると…。

下が隠れて無いんですが。パ○パンなんですか？リニスさん…。

これ以上はリニスファンに刺される恐れがあるからあえて言わない。
見えぬ！俺には何も見えぬ！

「あ～…下で服を探して来ますね」

俺は2階に向かって服を探すことにした。

リニスさんに合うのが紺色のメイド服しか無かったので仕方なくメイド服をリニスさんに渡す。

ぶっちゃけ言うと胸のサイズが…メイド服しか無かったのだ。

まあ、デザインは古来からのロングスカートタイプで落ち着いた雰囲気が出てる。

リニスさんにはお似合いだと思ってる。

「ん～…召使いの人がよく来てる服の様な…」

知ってましたか、リニスさん。

「あ～…まあ、確かに召し使い用の服ですよ？」

「そうですよね。私はアレス君の召使いですものね。それでは、不肖のメイド・リニス。夜の奉仕も頑張らせて頂きます！」

「ぶ――――――――――――――――――――っ！！！」

もの凄くとんでもないことを言い放つリニスさん。

「どうされました？」

「リニスさん…俺の年齢知ってて言ってるのかな？かな？」

「…そう言えば、そうでしたね。アレス君の年齢は…確か９歳？」

「ええ。こちらの世界のこの国では成人扱いにされるのは２０歳なんですよ？」

「でも、実際には子供を作れるのは早い人で１１歳とかでも大丈夫なんですよね？」

…まあ、個人差はあるが…。確かにそれでもアレを迎える人は迎えるよな。

ってか、このネコ耳メイド（ネコ耳は生えては無いが）は何を言ってるのだろうか。

「ああ、まあ、個人差はあるが…可能と言えば可能なんですが…」

「分かりました！それでは来年にアレス君が子供を作れるように夜の鍛錬を私が手伝えば良いのですね！？」

『我が骨子は捻れ狂う』もビックリする位の勢いで身体を捻って飛んでいきたいんだが！

「そっちの鍛錬はどうでもいい！いいから、リニスさんは普通に過

ごして良いですから！」

「はい、分かりました。それと、夜の奉仕は冗談ですよ」

そう言ってリニスさんは舌をちょっと出して笑っていた。

うぬぅ…からかったのか…。

「…くっ…やられた…」

「それとも、ホントにします？私の舌って、素体が山猫だからザラザラしてるんですよ？」

そう言ってリニスさんはしゃがんで来て俺の右手を取り、指先を舐めて来た。

確かに、ネコに舐められた様な感覚が指先に広がる。

「おぅ…くすぐったいと言うか…ホントにネコの舌なんだ…」

「これで色んな所を舐められたら…どうなるかな？」

リニスさんから妙な色っぽさを感じてくるんですが…。

【さっきから…黙って聞いていたら。ダメですよ？お兄様は私が奉仕するんです】

エヴァが乱入してきた！

大体は黙っているのに…さすがに耐えきれなくなってきたのか！

「あら、さっきから気になってたのですが。アレス君は自分のデバイスに『お兄様』と呼ばせてるのですか？」

口元がつり上がってるんですが…リニスさん。

「いや、これは…」

【お兄様はお兄様なのです！ポッと出の使い魔にそんな役目はさせません！】

「うふふ」

そう言ってリニスさんは立ち上がって俺の頭を撫でて来た。

「？」

「冗談ですよ。アレス君は私を助けてくれたのです。アレス君の望まない事をするわけないじゃないですか」

「…また…騙された…」

「それにしても…エヴァでしたか？デバイスの身でどうやってアレス君に奉仕するのか…気になりますね」

【私はユニゾンデバイスなのです。身体はちゃんと持ってるのです！】

「あ！まだそれは…！」

【あ…】

エヴァが暴露しやがった！ドジッ娘属性が付与されてたか！？

「わ！そうだったの！それじゃあ姿を見せて～！」

もはや言い逃れは出来そうになかった。

仕方なくエヴァは姿を変えて本来の姿に戻った。

金髪の幼女姿に。

ちなみに服装はリインフォースさんと同じ服装なのだ。言ってなかったが。

簡単に言うと、エヴァンジェリンがリインフォースさんのコスプレをしてるような感じだ。

「わー！可愛い姿じゃないですか！」

そう言ってエヴァの頭を撫でるリニスさん。

…まさか、ロリの気は無いですよね？

「アレス君の姿も可愛いかな～と思ってたけど、エヴァちゃんの姿も可愛いわね～」

ひょっとしたらロリとショタが５０対５０なのかもしれない。

「え～重ね重ね言いますが…エヴァがユニゾンデバイスと言うのは…」

「分かってます。アレス君が秘密を明かすまで黙っておけば良いのですね？」

「お願いします」

「うふふ。アレス君と秘密の共有ですか。それにしても、アレス君とエヴァちゃん…並んでも違和感が無いわね」

「まあ、確かにそうですが…」

「それに、アレス君。君が大きくなった時…ロリコン扱いされるんじゃない？」

「…それは。まあ、その時に考えます」

来年に成長が止まる事は言わなかった。

言う必要が無いから。

あ～、なのはとかアリサとかすずかがショタコンでない事を祈る。

桃子さんと母さんは…放っておこう。実害があるのは俺だけだし。

「それで、お兄様。リニスさんは…どうなさいますか？」

「そうだな。魂と身体が馴染むまで2週間はかかると思うから」

「そうなんですか？」

「ああ。頭を強くぶつけたらショックで幽体離脱するかも知れないから気を付けてね」

「分かりました。大人しく生活しておきます」

リニスはダイオラマ魔法球の中で2週間位生活することに。

彼女の家事能力は高いから一人でも大丈夫だろう。

まあ、2週間経ったら外に出るように言ってるし。

さて、リニスさんも復活させたし、本格的にジュエルシード集めましょうかね。

ってか、俺の役目は転生者を天界に送り返すのが役目なのになぁ…。

第9話　原作から乖離しはじめました（何を今更）（後書き）

とりあえず、リニスさん復活。

これでアリシア復活させれば良いんじゃね？とかツッコミは入れないでくださいｗ

そうポンポン未来の技術をプレシアさんに見せる訳にもいかんでしょうｗ

リニスさんの復活はある意味サプライズ的にするつもりなのです。

原作ブレイクも程々にするのが面白いのですよ？

しかし、リニスさんって某双子ネコ姉妹より人気高いんじゃね？

他の二次ではあの姉妹、意外とボッコにされてますしｗ

ワタシの場合はボッコにはしませんが、恥ずかしい目に遭うかもしれませんｗ

それでは次回をお楽しみに～

第１０話　そう言えば、管理局が来ないなぁ（前書き）

アレス「なあ？」

作者「どうした？」

ア「転生者は？」

作「…気にするな」

ア「大本は転生者を捕まえるんだろ？」

作「一応はそうなってるな」

ア「なら出さないと。これだと俺がリリカル世界で暴れてる様に見えるだろ」

作「実際に暴れてるじゃないか」

ア「まあ、確かにそうなんだが。それと、周りにショタな方が多い様な気がするんだが」

作「そういう仕様だ」

ア「意味が分からんのだが！」

作「面白いじゃないか」

ア「そりゃあ見てるお前は面白いかも知れないがなぁ！襲われてる

俺の身にもなってみろ！」

作「その時は１８禁板に移動かな…」

ア「サラッととんでもないこと言うなよ…誰も見なくなるだろ…」

作「移動するならＳｔＳ編になってからだろ。無印とＡ’ｓでそれはヤバいだろ…」

ア「まあ、そうなんだろうな…まだ９歳だし」

作「と言う訳で、ボチボチ外道転生者達も出しますよ？」

ア「ま、テキトーにお願いするわ。面倒だし」

作「そうだな、ドラ○ンボールの孫○空の能力を持ったヤツを…」

ア「ちょっと待て」

作「どうした？」

ア「如何に言っても負けるだろ！銀河を破壊出来る様なヤツじゃないか！」

作「気合いだ」

ア「気合いで勝てるかよ！アレこそチートじゃないか！」

作「分かった分かった、それなりのヤツを用意するよ」

ア「全く…恐ろしい作者だ…」

作「それでは、今回は少し短いですがお楽しみ下さい！」

第１０話　そう言えば、管理局が来ないなぁ

次の日。

学校は滞りなく終わってジュエルシード探し。

恭也さんと忍さん、ノエルさんと鮫島さんとアリサとすずか。ファリンと美由紀さん。ユーノとユナ。俺となのは。

と言った組に分かれて捜索。

まあ、そう簡単に見つからないみたいだ。

と思ってたら海鳴臨海公園の方から魔力反応が。

「なのは！」

「うん！」

俺達は頷き合ってから公園の方に向かって走り出した。

到着するとユーノとユナが結界を展開して木に取り憑いたジュエルシードが暴走していた。

お前はドラ○エに出てきた人面樹かとツッコミたいね。

「ヴォォォォ！！」

人面樹もどきは咆吼して地面から抜け出て来た。
周辺に根っこが出てから暴れ始める。
「なるほど、ああなるわけですか」
「あれ？」
見ると恭也さん、忍さん、ノエルさん、鮫島さん、ファリン嬢に美由希さん、アリサ、すずかも居た。
「うっわー」
「わぁ、人面樹…それともウ○ラーかな？」
ウ○ラーなら青い身体で葉っぱが赤いでしょうが。
うむ、ヤツなら世界樹の葉を持ってるからアリシアを生き返らせそうなのだが。
ってかすずか。貴女はドラ○エやったことあるのか。そもそもこの世界にドラ○エあるのか。
「ふむ…木○拳を思い出しますな」
「そうですね。映画があった次の日に学校で男子が真似してましたね」
鮫島さんとノエルさんが人面樹もどきを眺めながらそう言った。

いやいやいや。アレの何処が木○拳かと。ジャッ○ーさん吹っ飛ばされますよ。

「そう言えば、怪○くんにもあんなヤツが出てたな」

「そうね～懐かしいわね、○物くん」

懐かしいな～って！何で知ってるんだよ！年代がおかしいように思えるんだが！

ツッコミ所満載ですよ、恭也さんに忍さん！

「よく、指輪物語にあんな感じのヤツ出てきてなかったけ？」

「ロード・オブ・ザ・リ○グですか？そう言えば、トレ○トって言う名前で出てましたね」

と会話してるのは美由希さんとファリン嬢。

ああ、確かに出てたよね。もっとも、こっちのヤツは凶暴化してるからトレ○トさんに失礼かと思いますが。

「…エヴァ。とりあえず、大丈夫なように結界を」

【ハイ、魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

そう言って俺は全員の周りに結界を張っておく。

「それじゃ、俺はなのはの所に行きますね」

人面樹もどきの所に行くとなのはとフェイトも現れていた。

二人の共同作業で人面樹もどきは秒殺されてジュエルシードが空に浮いていた。

「アレス君？フェイトちゃんにジュエルシードをあげるってどういう事かな？かな？」

なのはの目がおかしい。据わってる。

アニメ的表現を言えばハイライトが無い。所謂ヤンデレ目になってる。

あと、その台詞はなのはじゃなくてティアナだと思う。

なのはなら『にぱー☆』であろう。

「あ、すまん。言ってなかったな。だから、そのシューティングモードになったレイハさんを下ろせ！あと身体の微妙な揺れをどうにかしろ！」

手がガタガタ震えてるなのは。アルコールが切れた人に見えるぞ。

【アレス、早く説明して下さい。このままではマスターの魔力で私が壊れそうです】

おおぅ。大容量と言われてるレイハさんを破壊に導くとは。なのは、恐ろしい娘！

「うう…」

同じくガタガタと震えてるフェイト。

いつぞやの砲撃連射を思い出してるのだろうか。

「そんなのはどうでも良いの！だから、早く説明を！早く〈ハリー〉早く〈ハリー〉早く〈ハリー〉！！」

いつからアー○ードになったんだよ！

「まて、落ち着け！今から説明してやるからな！」

※説明中

説明してるとユーノとユナもやってきた。

「ええ！そうだったの！？」

エヴァからジュエルシードはアルハザードに行く為のキーと聞いてびっくりのユーノ。

「とまあ、一度使用してアッチに認証登録しておけばあとはフツーにアルハザードに行けるらしい」

「へー」

…なのははよく分かって無いと思う。俺には分かる。

「お願い…」

フェイトはなのはの手を握っていた。

「アタシからもお願いするよ」

いつの間にか来ていたアルフも人間形態に戻って同じくなのはの手を握っていた。

「う…ユーノ君は…」

なのはは冷や汗をかきながらユーノを見る。

「僕ははんた…」

「ユーノってね、昔…部族にいた女の人の下着を…」

「わ――――――――――――――っ！良いよ！どんどん使って良いよ！」

ユナの説得〈きょうはく〉によってユーノは折れた。

ま、こっそりユナに向けて《ユーノを説得したら3日間お風呂使っ

て良いぞ》と念話しておいたのだが。

ちなみにユーノとユナがウチのお風呂を使うと妙に長い上、使った後に入ったら妙な空気が漂っていたからだ。

別に変な匂いがした訳でも無いのだが、俺の六感と言うか何かが訴えてきたから使用を禁止していたのだ。

なのはとフェイト、アルフの視線が妙に冷たかった。ただし、ユーノに向けてだが。

「うん、分かったの。これからはフェイトちゃんの協力するね」

「ありがとう…」

フェイトの目から涙が溢れていた。

そんなこんなで人面樹もどきから取ったジュエルシードはフェイトが持つことになった。

なのはが持っていたジュエルシードもフェイトに渡してある。

…そう言えば、この戦いの後にクロノが乱入して来たような。

周りの気配を探ってみても誰も転送してきた様な気配は無い。

おかしいな～？確か、この戦いの時に来たと思ったんだけど…。
まあ、良いか。居ても居なくても今回は問題ないし。
「また明日～」
「うん」
そう言ってフェイトとアルフは転移した。
そして、俺達も解散して自宅へと帰っていった。
「おおぅ…そう言えば」
「どうかなさいましたか？お兄様？」
風呂に入り、ご飯も平らげてからエヴァと二人で部屋の中でくつろいでいた時の事。
「いや、確か…今日辺りにクロノが乱入して来るはずだっただろ？」
「…そう言えば…そうでしたわね」
顎に指を当てて考え込むエヴァ。
「考えてみたら。管理局がここに来た原因はなのはとフェイトが戦って、ジュエルシードを暴走させて次元震を起こしたから来たんだよな」

「…あ」

「そう。なのはとフェイトが戦ってたけど、ジュエルシードは次元震を起こしていない」

「そうですわね。今日も起こしていない」

「だから、アースラはまだここの所在地が分かっていない」

「そりゃ～来るわけありませんわね、お兄様？」

俺とエヴァは冷や汗を垂らしつつ笑い合っていた。

「どないしよ…」

「どうしましょう…」

ふと思う。実際、管理局来ても…なんか役に立ったか？

無印では時の庭園に突入してプレシアさんにボッコにされて退却だろ？

Ａ'ｓでは…最後にアルカンシェルと言う波動砲もどき撃って闇の書の防衛プログラムを消滅させた位だろ？

ＳｔＳでは…無限の欲望に良いようにボッコボコにされてたよな。

でも、無限書庫はそれなりに役立ちそうだよな…。

ユーノが散々こきつかわれそうだが。

でも、今回は同じ能力持ちのユナもいるから…。

一応、かかわり持っても良いけど、本格的に入局するなら高校生が終わってからにしようかな。

中卒は…こっちの世界に帰ってきた時に色々とキツそうだし。

委託魔導師でまったり頑張るかな。

なのは、フェイト、はやての3人は…どうするかな。

…。ま、その時考えるかな。

「う～ん。ま、そのうち来るんじゃね？」

「そうですわね。お兄様の事だから…」

「ああ。関わりは持つが、入局はしない。委託魔導師でのんびり過ごす」

「ですわよね～」

「あんな子供の頃からこき使う組織、信用なるかって。どさくさに紛れて最高評議会ぶっ潰しておこうかな…」

「あまり大きな行動をすると他の転生者達の的になりかねませんわよ？」

「…そうだった。俺の役目は転生者達をとっ捕まえる事だったんだ」

「…忘れてたとか…」

「よくある話だ」

「…ま、作者もよく忘れますし」

「だから、メタな発言は止めろと…」

こうして夜は更けていった。

―アースラ艦内―

「はっくしょん！」

「あら？風邪かしら、クロノ？」

機械チックなブリッジにいるのは黒い髪をした黒い服装に身を固めた少年『クロノ・ハラオウン』。

そして、そのクロノに話しかけたのは水色っぽい髪をして額にマークがある女性、『リンディ・ハラオウン』。

「いえ、別に…誰かが僕の噂をしてるのかと…」

「あら、例えば…ここにいないエイミィとか？」

「…何でそこでエイミィの名前が出るんですか？かあさ…じゃなくて艦長？」

クスクス笑ってるリンディ。手には湯飲みが握られていた。

「さあ？どうしてでしょうねぇ？」

そこへ、ドアが開いて栗色っぽい髪をしたショートヘアの女性が入ってきた。

「艦長、次の捜索場所ですけど…」

「あら、ご苦労様、エイミィ。ところで、さっきクロノの噂とかしてなかった？」

「か、艦長！」

「え？してませんよ。どうしたの～クロノく～ん？風邪ならお姉さんが看病してあげようか～？」

そう言ってクロノの頭を撫でるエイミィ。

「風邪じゃない！それと上官の頭を撫でるな！」

「良いじゃないの。リンディ艦長も頭を撫でるのいかがですか？」

「そうねぇ…。最近、クロノも少し背が伸びてきたからねぇ…。ど

っかに可愛い男の子いないかしら…」

そう言って遠い目をしてお茶をすするリンディ。

「…かあさ、艦長…」

「リンディ艦長…いい加減に幼い男の子を毒牙にかけるのはどうかと…」

「人聞きの悪い事を言わないで頂戴。可愛い男の子と一緒に寝たりとかお風呂に入ったりする位だから！」

「…」

「…」

クロノとエイミィの眉間に皺が寄っていた。

『ダメだこりゃ』

二人の頭にこんな台詞が浮かんでいた。

「…まあ、リンディ艦長のアレは今に始まった訳じゃないし…」

「…はぁ…世の中こんなハズじゃなかったのに…」

「ところで。エイミィ？何か報告か用事があったのでは？」

「ああ、そうでした。次の捜索場所ですが…」

そう言ってエイミィは空間ディスプレイを切り替えた。

「あら、綺麗な星ね」

「第９７管理外世界でこの惑星の名は『地球』と言います」

「ふむ。で、魔法は？」

「無いですね。文化レベルはＢで次元移動手段も無し」

「なるほど…。ここは確率は低そうだから違う世界に…」

クロノがそう言おうとした時。

「…何を言ってるの、クロノ。私の勘が騒いでる。ここに私が望む男の子が…」

「エイミィ？違う世界にしよう」

「ダメです。ここからだと違う世界に行くにはロスが多すぎます。とりあえず、調べてからにしましょう」

「…そうか。分かった」

そう言うとクロノはブリッジから歩いて出ていく。

「…何かしら…この星には何かがあるわ」

リンディは画面の星をジッと見つめていた。

「（艦長の勘は意外と当たるからねぇ～。ま、可愛い男の子がいる

のは間違いないでしょうけど）」

「何か言ったかしら？」

「いいえ。それじゃあ、クロノ君の調査を待ちましょうか」

そう言ってエイミィとリンディはそれぞれの席に着いて仕事を再開した。

「…？」

妙な寒気を感じた。

何だろう？

この肉食獣に狙われてる草食獣的な予感は…。

う～む？もしや、リンディさんもウチの母さんや桃子さん、プレシア女史みたいにショタ属性が付与されてるとか…？

「それはさすがに無いか」

この時ばかりは俺の先行きの甘さを後悔するしかなかった。

第１０話　そう言えば、管理局が来ないなぁ（後書き）

アレス「おい」

作者「どうした？」

ア「リンディさんが大変な事になってる様に見えるのだが？」

作「この小説では標準装備です」

ア「意味分かんねぇ！桃子さんとプレシアさんに続いてリンディさんもかよ！」

作「ＳｔＳが楽しみだ」

ア「…どういう事だ？」

作「なのは達は１９歳。もう大人ですね」

ア「ああ、そうだな。一年後には成人式だ」

作「ショタコンの真骨頂だ」

ア「神界に帰って良いか？」

作「まさか。きちんと仕事してくれよ」

ア「ならさっさと転生者共を出せ！全員出して俺を神界に帰らせろ！」

作「いやいやいや、まだまだ続きます」

ア「この外道作者め…」

作「頑張れ」

ア「その満面な笑みがムカつく！殴らせろ！」

作「そんなに殴りたいかね？」

ア「ああ、殴りたいねぇ」

作「そうか…分かった」

ア「よし！それじゃ…」

作「だが断る」

ア「てめぇ！某漫画家の真似してんじゃねぇ！」

作「これが『だが断る』の正しい使い方らしい」

ア「んなことはどうでも良いんだよ！殴らせろ！」

作「それでは明智君さらばだ」

ア「逃げんなぁ！！！」

とりあえず、続きます。

第11話　近状報告とはやての家に行ってみた（前書き）

間が空いてしまったぜw

ちょっとゴタゴタした上に何かストーリーが浮かばなかったというか…

よくある話だよねw

ツッコミ所は満載だろうけど、流してくれたら幸いですw

それではどうぞ！

第11話　近状報告とはやての家に行ってみた

それから2日後。

土曜日を迎えて学校は休みだ。

本来ならジュエルシード探しと思っていたが、フェイトが一緒にプレシア女史の所に行こうと誘ってきた。

ふむ、薬を飲んで体力も回復しただろうから一度行ってみた方が良いだろう。

今回はフェイトとプレシア女史の和解…まあ、和解だよな、一応。

仲直り的な目的で行くのだからなのははお休みだ。

出る時になのはに捕まり説明したら『う～』と薄目で睨まれた。

今度、連れて行ってやるから我慢しろと言って何とか納得して貰った。

そんなこんなでフェイトとアルフが住むマンションの屋上に転移した。

「来たぞ～」

来るとフェイトとアルフが待っていた。

「うん、時間通りだね」

「遅れたらたっぷりとイヤミを言ってあげようと思ったのに…」

その時はそれなりの反撃はさせてもらうからな？

「それは残念。ほら、土産だ」

俺は翠屋のケーキを入れた箱を渡す。

「ありがとう。良いの？」

「良いよ。俺からの快気祝いと言う事で」

「気が早く無いかい？」

「ま、アレで治ってなかったら考える」

そう言って俺達は時の庭園に向けて転移した。

「チィーッス、三河屋で～す」

転移した先にはプレシア女史が椅子に座っていた。

「…三河屋？」

「…？」

フェイトとアルフはよく分かってないらしい。

「あら、丁度良かったわ。醤油がきれてたのよ。あと、可愛い男の子分が不足していてね…」

そう言ってプレシア女史は立ち上がって俺達の方に向かって歩いてきた。

最後の台詞がもの凄く、イヤな予感を感じたんですがね！

そして、頭を撫でてくるプレシア女史。

「あ…」

「おぅ…」

フェイトとアルフは驚いた顔で俺とプレシア女史の様子を見ていた。

「おかえり、フェイト、アルフ」

そう言ってフェイトの頭を撫でるプレシア女史。

「…た、ただいま…母さん…」

フェイトの目から涙が溢れてきた。

「うんうん…」

アルフの目からも涙が溢れていた。

『えへへ、良かったね』

いつの間にか俺の隣に来ていたアリシア。

無論、プレシア女史、フェイト、アルフにはアリシアの姿は見えていない。

「やっぱり親子ってああでないとな」

『そうだね。後は、あたしが復活するだけだね』

「そうだな。アリシアもフェイトと一緒に居たいだろ？」

『当たり前だよ、アレスお兄ちゃん！復活したらアレスお兄ちゃんのお嫁さんになるんだからね！』

「…気が早いだろ、アリシア…」

俺は苦笑するしかなかった。

気が付くとプレシア女史、フェイト、アルフが不思議そうな表情で俺の顔を見ていた。

「…ひょっとして、アリシアがいるのかしら？」

「アリシア？」

「アリシア？」

プレシア女史のツッコミとフェイトとアルフ同時のツッコミ。

「ああ、居るぞ。念の為に言っておくが、独り言呟いてる訳じゃないぞ」

「…ごめん、思い切り独り言かと思ってた…」

両手の指をつついて顔を赤くしてるフェイトが居た。

「…まあ、説明してやれ」

「分かったわ。実はね…」

プレシア女史の説明が始まった。

「そうだったんだ…」

「ごめんなさいね、フェイト。貴女は私の娘よ」

そう言って頭を撫でていたプレシア女史。

「良かった…良かったよ…」

アルフも目から涙を流していた。

「…そうそう、思い出したわ」

そう言って俺に早足で近づいてくるプレシア女史。

「あの薬は何？」

「あれか？難病と言われてる病気を一発で治す万能薬だが？」

「ええ。確かに、飲んだら胸の苦しみが取れたから凄い万能薬と言うのは分かったわよ。けど…」

プレシア女史は一呼吸置いてから言った。

「あの味は何？言葉で言い表せなかったわよ？」

「…あの薬の欠点でな。そこは我慢してくれ」

「それならあの時に言って貰いたかったわね…。飲んだ瞬間、吐きそうになったわ。それに、水飲んでも歯磨きして口の中を洗っても味がずっと残ってたわよ…」

プレシア女史の顔が青くなっていた。

『お母さんったら、半日は凄く苦虫潰した様な顔してたのよ？』

隣ではアリシアがクスクス笑っていた。

う〜む。今度、エヴァと一緒に幻想郷に存在する永遠亭のえーりんさんの所に行って薬の作り方を教わってこようかな。

あの人なら同じ効能でもうちょっと美味い味の薬を作れるだろうし。

なんせ『あらゆる薬をつくる程度の能力』と言う能力を持ってるからなぁ。

ま、その話は置いといて。

「良いだろ。病気は治ったんだから」

「そりゃ、確かに全快したけど…。何か釈然としないわね」

「気にするな。フェイトとアルフに紹介しなくて良いのか？」

「え？」

「誰を？」

フェイトとアルフは目を丸くしていた。

「誰って…フェイトのお姉さんだよ」

「え？アリシア姉さんは…事故で亡くなったって…」

「死んだ人をどうやって紹介するんだよ～」

「まあ、ここにいるぞ？」

さっきから俺の横でニコニコ微笑んでるアリシア。

「…ひょっとして、アリシアはそこにいるのかしら？」

「俺の右目を忘れたのか？」

「…そうだったわね。貴方のそれは…もはやレアスキルだわ…」

「さっきから何の話してんだよ～！」

アルフが吼えた。

「だから、アリシアを紹介するんだよ。ほれ」

俺は右手に魔力を込めてアリシアの頭を撫でた。

すると、アリシアの身体が光り輝いた。

「えへへ。フェイト、あたしがアリシアだよ」

「え…？ええ！？」

「ちょ…フェイトにそっくりな…」

「アリシア～！」

プレシア女史がアリシアに抱きつこうとしてまたすり抜けていた。

「あ、身体が無いんだった…」

「…説明を求む…」

「私も…これは…」

フェイトとアルフは呆然とプレシア女史の姿を眺めていた。

俺は二人に俺の右目の能力を教えた。

「は～トンでもないスキルだよ、それは…」

「幽霊…ホントに居たんだ…」

フェイトとアルフは俺の顔を呆然と眺めていた。

「ま、俺は常にアリシアと会話出来るんだ」

「良いなぁ～私もアリシアとお話したいなぁ…」

「ん～…まあ、こればかりはちょっと仕方ないと言うか」

「だよね。無理言ってごめん」

「それで…ジュエルシードはどれくらい集まったのかしら？」

俺とフェイトの所に来るプレシア女史。

後ろではアルフとアリシアが会話していた。

「えっと…１５個…」

そう言ってバルディッシュからジュエルシードを取り出す。

「そう、後６個ね。頑張ってるわね、フェイト」

「ううん、私だけじゃない。アレスやなのはも一緒だから…」

「なのは？」

「ああ、俺の幼馴染みだよ。フェイトと同じミッド式の魔法を使うんだ」

「へぇ～。そう、今度連れて来なさい」

「母さん…うん、紹介するね」

もう、プレシア女史とフェイトは大丈夫だろう。

だいぶ話が変わってしまったが、これで良かったと俺は思う。

「…そう言えば、ジュエルシードは輸送中に何かに襲われて地球に落ちたらしいんだが？何か、知ってるか？」

「…」

俺がプレシア女史を見ると顔を青くして、妙な汗をかきながら視線をあさっての方に向けた。

「…母さん？」

フェイトが怪訝な顔でプレシア女史を見る。

「…まさかとは思うが…プレシアさん…アンタの仕業とか…」

「…」

無言で頷くプレシア女史。

「管理局のお尋ね者か？」

「多分…」

「どうすんだよ。自首するか？」

「そ、それは…アルハザードに行ってアリシアを復活させるから…捕まる訳には…」

だよな。捕まったらどんな結果が待ってるか、明らかに分かる。

それに、プレシア女史の能力を考えると。管理局に良いようにこき使われる可能性が高い。

「さて、どうしようかね」

【それなら、やはり偽装死ですね。プレシアさんはジュエルシードの暴走に巻き込まれて次元の狭間に旅立ってしまいました～と】

エヴァの提案。うむ、喋らないと空気と化すからな。

「ウチのデバイスからの案はどうだ？」

「う～ん、それだとずっとアルハザードに居る事になるわねぇ…」

「それなら、地球に来いよ。あそこは管理局の管轄にならないし」

「そうね。あそこなら管理局員達も来ないと思うし。そこにしましょうか」

「そうだな。っと、そうそう、最近知り合った女の子なんだが。どうも、俺の持つ『武神の魔導書』の姉妹機を持ってる可能性が高いのだが」

その言葉を聞いて眉をピクリと上に上げるプレシア女史。

「…夜天の魔導書かしら？」

【ええ。私と全く同じデザインと言えば夜天の魔導書しかありません。その子、足が悪くて動かないんですよ】

「…そう言えば、その夜天の書は確か１０年位前に何か事件を起こしてた様な」

「そうか。壊れてる可能性が高いな」

「そうね。…遠回しに、私に直せと？」

「いんや。オリジナルを持ってる俺でも修復可能と読んでる。ただ、興味は？」

「非常にあるわね。ついでに言えば、貴方のデバイスと身体も」

…何を言ってるのだろうか、この人は。ツッコミを入れたら話が変な方に進むからあえて入れない…！

「母さん？」

不思議そうな表情でプレシア女史の顔を見るフェイト。

「コホン。そうそう、フェイトに聞きたい事があったのよ。フェイト、アレスちゃんのお嫁に行かない？」

「へ？」

口を開けて呆然とプレシア女史を見るフェイト。

「だって、こんな可愛い義息子が出来るのよ？貴女かアリシアがアレスちゃんのお嫁さんになればアレスちゃんは私の義息子になるのよ？」

「か、母さん？」

「あたしがなるー！！」

突然乱入してきたのはアリシアだった。

アルフは床に座っていた。狼形態になって。

「あ、アリシア！？」

「フェイトがアレスお兄ちゃんのお嫁さんにならないならアタシがお嫁さんになるよ！」

「そう、それならアリシアにお願いしようかしら？」

何を勝手に話を進めてるのか。俺の意見はどうなってる。

「（母さんの期待に応えなきゃ…！）わ、私がアレスのお嫁さんになるよ！」

フェイトが暴走を始めた模様。暴走特急フェイト号は止まりそうにありません。

「そう？私はアレスちゃんが義息子になるなら構わないわよ？」

「…それは確定事項なのか？」

「アレスお兄ちゃんはアリシアの事嫌いなの？」

「アレスは私の事嫌いなの？」

右側にアリシアが涙を浮かべて立って、左腕にはフェイトが抱きついてきていた。

え？何この美少女二人に責められてる様な展開は？

「いや、二人とも嫌いでは無いが…」

「やった～♪」

「ほっ…」

安堵の息を漏らす二人。

「ま、仮にフェイトと結婚してもあたしはアレスお兄ちゃんの愛人になるけどね」

「ぶ――――――――――っ！！！」

アリシアのとんでも発言で俺は盛大に噴き出した。

「プレシアさん、アンタどんな教育を…」

プレシア女史を見ると首が千切れん位、横に振っていた。

「…まさか」

俺はアルフを見た。

「～♪」

わざとらしい口笛を吹くアルフ。

「…ちょっと、身体を動かしたくなったな…」

「え〝…？」

「ヲヲ、そこの可愛い狼さん。ちょっと俺の模擬戦を…やらないか？　エヴァ、頼む」

【…全殺ししちゃダメですよ、お兄様？半殺しを目標にしてくださいね。起動〈アンファング〉】

不穏当な台詞をかわしつつ俺は騎士甲冑を身に纏う。

「プレシアさん、どんなのが見たいですか？」

「そうね、大剣は出来るのかしら？」

「大丈夫だ。エヴァ、『素戔男尊〈スサノオ〉』モード」

【了解です。モード『素戔男尊〈スサノオ〉』】

いつも使ってる杖のレーヴァテインが長さ１．７m、幅４０?位、厚さ４?位の大剣に変わった。

「わ、大きい」

「凄い…」

「あらあら、これは凄いわね」

アリシア、フェイト、プレシア女史の順で感想を述べる。

「ちょっとー!!そんなの喰らったら死んじゃうよ!」

「大丈夫だ、きちんと非殺傷設定にしておく」

「そ、そんなでかい剣…が…」

アルフはすこしずつ後ずさりする。

「さて、純真無垢な女の子に妙な事を吹き込んだ悪い狼さんにお仕置きしないとな」

「え?アルフなにか悪いこと言ったの?」

「ええ。アリシアにちょっとイケない事を教えたからね。フェイト、貴女は手出ししちゃダメよ」

「うん、分かった」

「助けておくれ～フェイト～！」

「楽しいお仕置きタイムだ！！！」

アルフと俺の強制模擬戦が始まった。

「きゅ～」

目を回して気絶してるアルフ。

頭には大きなタンコブが出来ていた。

「わぁ～アレスお兄ちゃんつよ～い」

「あんな大きな剣でも素早さが全然変わってない…」

「全く、私は大魔導師と呼ばれてるけど、貴方とだけは戦いたくないわ…」

プレシア女史は苦笑いしてアルフの様子を見ていた。

「ま、お粗末様でした」

俺は騎士甲冑を解除して元の服に戻る。

「あ…」

アリシアの身体が透け始める。

「やれやれ、時間だな」

「そう…バイバイかな？」

「と言ってもここから居なくなる訳じゃない。見えなくなるだけできちんと居るからな」

「あ、そっか」

そしてアリシアの姿が見えなくなる…のはプレシア女史とフェイトだけの話で俺にはしっかりと見えてるが。

「さて、とりあえずは１５個。確かに納めたからな」

「分かったわ。後６個、お願いね？フェイト」

「うん、母さん」

「それじゃ、俺達は帰るぞ」

俺は気絶してるアルフを背中に背負って転送魔法を発動させる。

「ええ。また会いましょう」

『バイバイ、アレスお兄ちゃん、フェイト』

「じゃあな、プレシアさんにアリシア」

「バイバイ、お母さん、アリシア」

俺達は元の場所に向けて転移した。

次の日。すずかからはやての家に遊びに行こうと誘われた。

無論、なのはも誘われた。そしたらなのはがフェイトちゃんを紹介しようと言い出した。

善は急げとフェイトを呼び出す。

フェイトはすぐにやって来た。

アルフの事を聞いたら今日は家でごろ寝するとの事。

ユーノとユナは…デートだった。

まあ、単にユーノがユナに強制連行されただけだが。

フェイトもやってきて、なのはとお話。

昨日の顛末を話す。

「今度、お母さんに紹介しなさいって言われたから招待するね」

「うん♪」

等々、色々話をしながら月村邸に到着した。

玄関に居たのはアリサとすずか。

「あ、来た来た」

「チッ、遅れたらここぞとばかりに責めてあげたのに…」

アリサ、俺に恨みでもあるんかい。

「来て早々それかい。俺に恨みでもあるのか？」

「恨みは無いわよ。まあ、将来の結婚生活に置いて有利になるだろうと…」

…結婚生活…？アリサ、とうとう頭がバグったのか？

「…アリサ、俺は大人しい、可憐な少女が好みなんだが…」

「目の前にいるじゃない！」

「…モーニングスター持って団体に殴り込みをかけそうな少女はちょっと…」

俺の言葉を聞いてなのはとすずかは肩を震わせていた。笑いをこら

えてる模様。

「そっか…アレスはそう言うのが好みなんだ…」

フェイトの呟きはスルーだ。聞こえないぞ…。

「ちょっと!?あたしはそんなの持って殴り込みなんてかけないわよ!」

「だが、俺には違和感が無いように思えるのだが…」

「あんた、あたしの事どう思ってるのよ!?」

「さあ?それはアリサの想像に任せるよ」

「吐け!良いから吐きなさい!!」

アリサが俺に組み付いて来そうになるが。

「さて、はやての家は何処だ?」

「避けるな!」

俺はアリサからの攻撃を避ける様に歩き始めた。

ちなみに、すずかとフェイトはいつの間にか自己紹介を交わしていた。

はやての家に到着。

道中にアリサとフェイトも自己紹介を交わしていた。

そして、魔法の話もしっかりとしていた。

インターホンを鳴らしてからはやての指示で中に入る。

うむ、生八神家ですな。

しかし、車椅子の少女が一人で生活とは…。何か釈然としないな。

はやての自室に通される。

…。なのは達は良いが、俺まで通すのはいかがかと思うのだが。

フェイトの自己紹介。ああ、これで未来の機動六課3人娘が揃ったのか。

「お茶入れてくるな～」

「あ、私も手伝うよ」

そう言ってはやてとフェイトは出ていった。

ちなみに、俺達は菓子を持ってきていたのでそれも渡してある。

中に入ると本棚だらけ。本が沢山ありましたよ。

活字だらけの本だけかと思ったら、漫画もありました。
有名どころの本から結構マニアックな本もチラホラと。
そして、俺は一角を見て背中から冷や汗が流れた。
「『魔法先生ネギま!』…。あったのか…」
俺は聞こえないように呟く。
《お兄様…これって…》
エヴァが念話で俺に語りかける。
《ああ。俺達の前世の世界。尤も、エヴァは双子じゃないから話はだいぶ違うが…。世界観は全く一緒だ》
《…私の名前、どうしましょう?》
《今更、変更出来ないだろ。まあ、エヴァのファンなんだと言って誤魔化すさ》
《ごめんなさい、お兄様…》
《謝るな、エヴァ。まさかこの世界に『ネギま!』があるなんて俺も予想外だったんだ》
俺はネギま!を手に取る。
1巻を手に取って中を開く。

前世の前世で読んだ内容と全く一緒だった。

3巻を手に取って中を開いた。

ああ、なまはげ扱いの恐いエヴァです。

多分、俺のデバイスと関係無いと思われたら良いけど、多分無理か。

俺はそう思いつつ本を元に戻す。

「アレス君もネギま読んでるの？」

後ろからすずかの声が。

首を後ろに向けるといつの間にかすずかが後ろに立っていた。

「いや、何となく、気になったと言うか…」

「何よ？アンタもハーレム系のラッキースケベ属性に憧れてるのかしら？」

アリサも食い付いて来た！

「何や何や？面白そうな話やなぁ」

「何の話かな？」

はやてとフェイトもお茶を持って登場してきた！

「アレスがね、女子中学生に揉みくちゃにされたいんだって」

アリサがロクでもないことを言い放った。

「ほほぉ～なかなかワルですな、お代官様？」

はやてがニヤニヤしながら俺の方を見ていた。

考えてみたら、今の状況もそれに近い様な気がするのだが。

ちなみに、なのはとフェイトはイマイチ分からないからネギま！を読んでいた。

「お代官じゃねぇ。そんな事してたら『ご老公』とか『暴れん坊』とかそう言うのに成敗されるだろうが」

「そんなの呼ばなくても、あたしが成敗してあげるわよ？」

アリサがニヤニヤ笑っていた。

「ほほぉ？またいつぞやみたいに頬を撫でて撫でて撫でまくってやろうか？」

「あんた…可憐な美少女の頬を撫でてタダで済むと思ってるの？」

「んん～？俺はタダで済むと思ってるが。それとも、違うところ撫でてやろうか？」

「撫でてみなさいよ。その時は責任取って貰う為にアンタに嫁ぐから」

「ごめんさない…カイザーナックル装着して殴ってくる様なお嫁さんはちょっと…」

「あたしがいつそんな物騒なモノ装着して殴って来たのよ！！」

そう言ってアリサは殴りかかってきた。

「ほら、装着はしてないが殴りかかってきてるじゃないか！」

「うるさいうるさいうるさーい！アンタが減らず口を減らせばそれで万事解決なのよ！」

「ホンマ、仲がええんやな」

「そうなの。大体学校でもこんな感じなのよ」

すずかとはやてが俺とアリサの戦いを面白そうに眺めていた。

「これ…」

なのはがネギま！を見ながら口を開いた。

ちなみに戦いはまたもすずかに捕まって、アリサの関節技を喰らってしまった。

今度はオ○ップと言うパロ・ス○シャルの対として開発された技…だった。

アリサ…キ○肉マン？世も読んでるのか…。

「どうしたの？なのは？」

フェイトがなのはに問いかける。

「この漫画の魔法…どっかで聞いたことあるの…」

「え？そんな…どう見ても私達の魔法とは違うよ？」

…もの凄くイヤな予感を感じるのですが…。

眠らせるか？イヤイヤ、面倒だし、あんまり記憶改竄ばっかりするのもアレだし。

《私は凄くイヤな予感を感じるんですけど…》

《ああ。だが、ここでわざとらしく逃げるのもやばい。知らんぷりするしか無いな》

《果たして、逃げられますか？》

《…逃げられんかもしれん…》

といった念話でのやりとりをエヴァとしていた。

「この『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』って言う単語…何

処かで聞いたの」

「これって、吸血鬼の真祖、エヴァンジェリンの始動キーだよね」

「エヴァンジェリン…？」

「そう言えば、アレスのそのデバイスだっけ？それの名前も『エヴァンジェリン』って言ったわよね？」

全員の視線が俺の方を向く。

背中に冷や汗が流れる…！

「あ、ああ。エヴァンジェリンの大ファンなんだ」

「あ～そっか。どっかで聞いたことあるような声かと思ったらその子の声、アニメ版ネギま！のエヴァと声が似てるんや」

はやてが手をポンと叩いていた。

「あ、確かに」

すずかも食い付いてきた。貴女も知ってますか…。

「そんなに似てるの？」

「うん。ホンマにクリソツって言うヤツかな？似てるんよ」

そう言ってはやては…アニメ版ネギま！のＤＶＤを取り出してきた。

「それじゃあ、ちょっと見てみようか」
こうしてアニメ鑑賞会が始まった。

1時間後。

エヴァとネギが戦うシーンを見終わった。

「ホント似てる…」

「そっくりなの…」

「似とるやろ？アレス君のデバイスの声とそっくりや」

まあ、同一人物だから似てるのは当たり前だろ…。

「ふうん？」

「じーっ」

アリサとすずかも俺の方を眺めていた。

「な、何だよ？」

「アンタ…何か隠してない？」

「な、何を隠せと？」

「アンタのそのデバイスよ。偶然にしては出来過ぎてないかしら？」

「偶然とは重なるモノだ」

俺はお茶をすする。

「あ――――――――っ！思い出したなの！」

突然、なのはが叫び出した。思わずお茶を噴き出しそうになった。

「どうしたの？なのは？」

驚いた顔でなのはを見るフェイト。

「前にアレス君が人が拾ったジュエルシードを取る時にその呪文を使ってたの！」

ああ、確かに前に使ったよね。まさか、この世界にネギま！が存在してると思わなかったから。

今度、アニメとか漫画をきちんと確認しておこうと思いました。もっとも、後の祭り〈アフター・ザ・カーニバル〉とはこのことですが。

「ホント？なのは？」

「聞き違いとかじゃなくて？」

「ホントなの！レイジングハート、記録してる？」

【ハイ、きちんとしてます】

レイハさん、こう言う事はキッチリしてるよね…。

そして、音声が再生される。

“それでは…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　大気よ、水よ、白霧となれ。彼の者らに一時の安息を。『眠りの霧』”

はい、実にクリアな音声で俺の声が流れましたね。

誰が聞いても俺の声にしか聞こえません。

「この後、2人いたけど…その2人は霧に覆われてからすぐに眠りについたの」

なのはの説明でフェイト、はやて、アリサ、すずかの視線が俺に突き刺さる。ザクザクと突き刺さる。

「ああ、お茶が美味い」

俺は素知らぬフリしてお茶をすする。

「…」

「…」

「…」

「…」

アリサが俺の右側に、すずかが左側に回り込む。
そして、肩を掴んでくる。指が肩に食い込んで痛いのですが。
前に回り込むなのは、フェイト、はやての3人。
「さあ、キリキリ吐いて貰うで？」
「アレス、隠し事は良くないよ？バルディッシュ！」
【…イエッサー】
「私達に隠し事は許されないの！レイジングハート！」
【…イエス、マスター…】
なのは、レイハさんを起動させるな。
フェイト、お前もだよ。バルディッシュが何か切なそうだぞ。
「どうしても言わなきゃダメか？」
「往生際が悪いで。さあ、私らに隠し事は無しや！」
「言えば、解放してくれるか？」
「そうだね。言えば解放してあげるよ」
「そうか…分かった」

「そうそう、始めからそうやって言えば良かったの」

「だが断る」

俺は言い放った。

「なっ！言いなりなると見せかけて断る…それが本当の『だが断る』の使い方！アレス君…やるやないか！」

「それ程でも」

【それは良いんですけど、お兄様？状況が悪化してると思いますけど…】

なのはとフェイトの目が据わってます。

ヤバいです。あの目なら睨むだけで人を殺せそうです。

アリサとすずかの目もヤバいです。一言で言い表しますと…『目がイッてる』と言う雰囲気です。

「…」

「…」

「…」

「…」

無言が恐いです。

肩を掴む手の力が更に増してます。

レイハさんはバスターモードで俺の胸に、バルディッシュ卿はハーケンモードで俺の首筋に。

どう見ても死亡フラグ満載の状況だな…。

ま、俺と前世の事を喋っても別に問題は無いしな。

「あー分かったよ。話す…話すから解放してくれ」

そう言うと俺を解放してくれた。

解放はしてくれたが、全員が俺の周り居て逃げる隙は無い。

まあ、逃げる気は無いけどね。

「さあ、話して貰うで！何でアレス君がネギま！の魔法が使えるのか！」

「そうなの！アニメの魔法が使えるなんて…びっくりなの！」

「ワクワク」

「さあ、どんなお話かしら？」

「楽しみだね～」

全員目を輝かせて俺を見つめてる。

「さて、みんなは『輪廻転生』を知ってるか？」

「え？輪廻転生って言ったらアレやろ？死んでから違う生き物とかになってまた生まれる…アレやろ？」

「うん、確か色んな宗教でも伝わってるよね…」

はやてとすずかは顎に手を当ててる。

「それが一体どういう関係があるのよ？」

「うむ、簡潔に言うと俺には前世の記憶が残ってる」

「え？」

「それって…」

なのはとフェイトがビックリ顔で俺を見つめる。

「そう、俺は前世ではその『ネギま！』世界で魔法使いだった」

「う、嘘やろ？この世界にはそんな麻帆良とかあらへんで？」

「ああ。『パラレルワールド』を知ってるか？ある時空から分かれた平行する『もう一つの世界』」

「そうか、そう言う事ね。アレス君の前世が生まれた世界はこっちと違った魔法使いがいる世界…つまりは『ネギま！』の世界だった

のね？」

「まあ、そんな所だ。まあ、俺が使ったのは前世で習った魔法なんだよ」

「それじゃあ、始動キーがエヴァと同じなのは？」

「…それは。良いか？これは誰にも言わないで欲しい」

俺は全員の顔を順に見ながらそう言った。

「うん、分かった」

「分かったで」

「分かったわよ」

「分かったなの」

全員が了承して、一斉にお茶を飲む。

「…俺の前世の名は『アリス＝マクダウェル』。ネギま！の世界で６００年生きた吸血鬼の真祖、『エヴァンジェリン＝Ａ．Ｋ＝マクダウェル』の双子の姉だ」

「ぶ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

「ぶ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

「ぶ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

「ぶ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

「ぶ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

全員一斉に茶を噴き出した。

【そして、私の前世の名は『エヴァンジェリン＝Ａ．Ｋ＝マクダウェル』と申します】

エヴァがそう言うとはやては上半身を傾けてなのは、フェイト、アリサ、すずかの４人はすっころんだ。

「おー、４人一斉に転けると壮観な眺めだな」

俺はそう言って茶を啜った。

「ど、どどどどどどどどういう事や！ぜ、前世がそんな…エラい凄い事になってるやないか！」

「アレス君…凄い…」

「アレ…？ちょっと待って。と言うことは…アレスの精神年齢って…」

「…そこんとこ、どうなのよ？６００歳超えてるの？」

「…うむ、１０００歳まで生きてたからな」

「あ、あかん…。１０００歳って…おかしいやろ」

テーブルに突っ伏すはやて。

「それに、そのデバイスがさらっと恐ろしい事言ってなかった？」

「そうなの。『エヴァンジェリン＝A．K＝マクダウェル』って言ってたの…」

「…ギャグとかじゃなしに？」

【私はギャグはほとんど言いませんよ？本当に『エヴァンジェリン＝A．K＝マクダウェル』と言う名前でした】

「…と言うことは、アレスの事をお兄様と呼ぶのは…」

【ハイ、お兄様は前世ではお姉様でしたのよ？】

「納得なの…」

「そっか、前世からの絆…」

【これは驚きです。アレスはデバイスにハァハァと欲情していたわけでは無かったと】

【それなら納得だ】

レイハさん、毒吐きまくりですが。

バルディッシュ卿は納得して貰えたようで。

「と言うことは。アレス、アンタ…漫画の中であの修学旅行で鬼を倒したじゃない？あんな魔法使えるの？」

「あ～、俺が得意だったのは闇と炎だ。だからあそこまで凍らせる

のは…どうだろうな」

「ほー」

【私は原作と同じで闇と氷です。同じ真似が簡単に出来ます】

「あ…あかん…なんかテンションが上がってきそうや…」

「私もだよ…リアルで出来る人がいるなんて想像してなかった…」

はやてとすずかの羨望の眼差し。顔が赤くなっていた。

「ねぇ、火が出せるのかな？」

「ああ、出せるぞ。『火よ灯れ』」

俺は指先から炎を出す。

「おー！って、杖は？」

「ここだよ」

俺は右手の人指し指を指し示す。

「これって…」

「もしかして、杖代わりの指輪？」

「ああ。認識阻害をかけてるから気付きにくいが、魔法を使うための指輪だ」

「も、もう無理や！アレス君！魔法を教えて！！」

「わ、私も！」

はやてが迫ってきてすずかが抱きついて来た。

「わー！お、教えてやるから…離せ！」

「やったー！」

「あ、あたしにも教えなさいよ！」

アリサが顔を真っ赤にしていた。

「分かったよ、教えてやるよ…」

もはやため息をつくしかなかった。

まあ、アリサとすずかは一応魔力があるみたいだし、そこそこの魔法は使えると思うが。

「で、なのはとフェイトは？」

「う～ん…」

「う～ん…」

二人は腕を組んで考えていた。

「ま、今のミッド式に慣れたら少しやってみるもの良いかもな。今は二人とも発展途上だし」

「そうだね…」

「うん、慣れて来たらお願いしようかな…」

「そう言えば、前世では何処まで強かったん？」

「そうだな、とりあえず…竜種を笑いながら殴り倒せる位」

「…バグキャラやろ」

「バグキャラだね…」

「失敬な。俺をあんなジャックみたいなヤツ一緒にして貰っては困る」

「で、ジャックと戦った事は？」

「ああ、１５４戦１５４勝０敗だな」

「やっぱりバグキャラやん…」

「チートだね」

はやてとすずかの視線が冷たかった！

「何と仰る。たかが咸卦法を使った位で…」

「ちょい待ち！吸血鬼の真祖で咸卦法とか…」

「ひょっとして、今も使える？」

「いんや。今は身体が出来てないから使えない。１５歳以降になれば使えると思うけど…」

「あかん…。私、絶対にアレス君怒らせんで。死にとうない」

「私も。チートが身近にいるなんて…」

はやてとすずかは身震いしていた。

「気と魔力を合成して爆発的に戦闘力をあげる戦闘法…あんた、チート街道も大概にしなさいよ…」

「ほっとけ。それにエヴァだって『闇の魔法』で信じられない位強かったのだぞ？」

「ど…どれくらい…？」

フェイトがおそるおそる聞いてきた。

「俺が咸卦法使って最大攻撃で殴ってもかすり傷を付けるのが精一杯だった」

「お、おかしいのー！アレス君もエヴァちゃんもおかしいのー！」

ディバイン・バスターを６４連射出来るなのはに言われたく無いんだが！

「とりあえず、分かったわ。アレスもエヴァもチートだと言う事に」

【イヤですわ、アリサさん。お兄様はチートですけど私は一般的な魔法使いでしたわよ？】

「どの口が言うのよ！あの鬼を一瞬で凍らせただけでも充分おかしいわよ！」

そんなこんなではやての家での騒動は続いていった…。

第１１話　近状報告とはやての家に行ってみた（後書き）

ハイ、アレス君の前世がバレてしまいましたｗ

確認をしてなかったので自業自得かとｗ

まあ、原作通りにはもはや進みません。

はっきり言ってオリジナル展開ですね。

さあ、どんな展開になるのかは作者の気分次第と言うことでｗ

それでは、次回お楽しみに～

第１２話　ついに現れた管理局！（前書き）

いやはや…

随分と遅れました

夏は暑いですからねｗ

それではいってみよう！

第12話　ついに現れた管理局！

八神家で俺の前世を暴露されてから数日経ちました。

あれからはやて、アリサ、すずかの3人はネギま！式魔法の鍛錬を行っています。

まあ、そう簡単には出来ませんがね！

ちなみに、悪用は絶対にしない事と言及はしておきます。

もっとも、あの3人なら大丈夫と信じているが。

そのうち、ダイオラマ魔法球の事も言及されるだろうけど、今は黙っておこう。

さあ、海にあるジュエルシード回収しようかな。

管理局は来そうに無いし、このまま探すのもアレだし。

そんなこんなで本日もジュエルシードを捜索していました。

本日のなのははフェイトと一緒になって探しています。

「…？」

何か視線を感じた。

俺は立ち止まって周りを見る。

周りは買い物帰りの主婦、中学生、高校生、会社帰りの人などが大勢いて皆俺の事など気にせず歩いていた。

【お兄様？】

「…気のせいか。何か視線を感じたのだが…？これは…上？」

【気のせいではありませんわ。上空に何か魔力反応があります】

「何？」

俺は上を見つめた。

上空に浮かぶ何か。俺はそれに向けて視線を集中した。

人だ。人が浮いていた。

赤毛の少年。背広を着ているが、何処か幼げな雰囲気。

「…ビンゴ。アレは…転生者だ。この世界にあんなヤツは居ない」

俺はビルとビルの隙間に入る。

「頼む、エヴァ」

【ハイ、お兄様。起動〈アンファング〉！】

騎士甲冑を纏って一気に上空に飛び上がる。

「!?」

赤毛の少年は俺の顔を見て目を見開いた。

「エヴァ、結界を頼む」

【了解です。魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

瞬時に展開される結界。この中にいるのは俺と目の前の赤毛の少年だけだった。

「君は…」

赤毛の少年は驚いた顔で俺の方を見ている。

俺は赤毛の少年の顔を見て驚いた。

魔法先生ネギま!の主人公、『ネギ＝スプリングフィールド』だったからだ。

もっとも、少しつり目気味でちょっとだけ雰囲気が違っていた。

だが、俺には分かった。

こいつは…邪悪な気が満ちている。

巧妙に隠しているが、こいつは…。

「…なあ、少年?」

「はい、何でしょうか？」

「君は、高町なのは、フェイト＝テスタロッサ、八神はやて。この3人に何か用があるのかな？」

「何の事でしょうか…？」

とぼけたフリをしているネギもどき。

その頬には冷や汗らしきモノが流れていた。

「それとも、アレかな？アリサ＝バニングスか月村すずかに用があるのかな？」

「何が言いたいのですか？」

「ああ、彼女達は既に俺の恋人になってるのだが？」

「！！」

その言葉を聞いてネギもどきの魔力が膨れあがってきた。

「ん…？どうした？」

「ククク、そうか。それなら…お前を殺せば彼女達は俺のモノになる訳だ」

本性を現したネギもどき。

「ほぅ？彼女たちをどうするのか、教えて貰おうか？」

「知れた事を！俺のハーレムの一員にするんだよ！！」

分かりやすい目標を有り難う。

とりあえず、こいつは天界に送り返す事が決まった。

「そうかそうか…」

俺は右手に持つレーヴァテインを握りしめた。

「認めると思うか！？魔法の射手・火の１０１矢！！」

レーヴァテインから繰り出される炎の矢がネギもどきに向かって放たれる。

「なっ！？」

驚いて魔法障壁を張って攻撃を防ぐネギもどき。

「ふむ、この程度は防ぐか…」

「てめぇ！ベルカかと思ったら…俺と同じ魔法を！」

「それなら…奈落の業火」

闇の炎が巻き起こり、ネギもどきに向かって飛んで行く。

「ちっ！」

ネギもどきは避ける。意外と余裕があるよけ方だ。

「くそっ！千の雷！！固定、掌握、魔力充填『術式兵装』、雷天大壮！！！」

ネギもどきは千の雷を取り込んで精霊状態になる。

あの状態になると下手な攻撃は効かなくなる。

「ふん！斬魔剣　弐の太刀！！」

俺は斬撃をネギもどきに向かって放つ。

精霊状態でも斬る事が出来る奥義だ。

前世の時に詠春から習った奥義だ。

滅多に使う事は無かったが、習っておいて損は無いな。

「っ！」

ネギもどきはそれを避けて一瞬で間合いを詰めて殴りかかってくる。

どうやら、オリジナルと一緒で中国武術も使うみたいだ。

下からの右パンチ。

俺は上体を逸らしてかわす。

雷並みの速度だが、弱点はある。

ジャックが見つけた、先行放電。

ネギもどきが攻撃する時、攻撃箇所に僅かな放電が起こる。

まあ、雷天大壮2は時間がかかるから出来ないのだろう。

さすがにアレになると手こずるのが目に見えてる。

「精霊状態でも、俺はダメージを与える事が出来るんだぜ？」

右手と左手の手甲に闇の気を纏う。手甲の色が黒く染まる。

「な、何だよてめぇ！」

「さぁて？とりあえず、お前みたいなヤツを捕まえる任務を負ったんだよ！」

ネギもどきの腹に向けてパンチを繰り出す。

「ごふぅ！」

鈍い音が響き、ネギもどきの身体がくの字に曲がる。

足にも気を纏ってからネギもどきの顔に蹴りを入れる。

「がぁ！」

ネギもどきは５０ｍくらい吹っ飛んだ。

「どれ、氷漬けにしてやろう。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが！！」

その時、結界が破れて誰かが進入して…。

「！？」

「あ」

その人物に当たって周辺が一気に凍ってしまった。

当然、人物はその中で氷漬けとなってしまった。

「…」

「…」

【…】

俺とネギもどき、後エヴァも呆然としていた。

「くっ、誰か知らないが今は感謝するか…」

そう言ってネギもどきは穴の開いた結界から飛んで出ていった。

「追いかけたいが…」

【お兄様！早くしないと本当に氷漬けになりますわよ！】

仕方が無い。今回はあのネギもどきは諦めて氷漬けになったヤツを助けるか。

誰だよ、わざわざ結界破って入って来るヤツは。

こんな事なら俺も結界張っておけば良かったかな…。

「ん～『おわるせかい』やったらヤバいよな？」

【中の人が粉々になりますわよ…？】

「仕方ない、『奈落の業火』」

俺は闇の炎を出して氷を少しずつ溶かしていく。

「おー、これだけでかいと溶けないな。ちょっと壊していこう」

俺は氷を殴って少しずつ砕いていった。

「…そう言うことか」

【運が悪いと言いますか…】

少しずつ砕いていったら中心にいるのは…クロノだった。

しかし、よくベルカ式の結界を解いたモノだ。

ひょっとして原作より有能なのかもしれない。

だが、今回はその有能さが仇となったみたいだ。

炎の魔法で少しずつ溶かしていってようやく終わるとクロノは気絶していた。

脈はあるし、一応呼吸もあるから死んではいないようだ。

おんぶして結界を解くと魔法陣が広がり、真ん中に画面が。

あ、リンディさんだ。

青色の髪をした妙齢とは言い難い女の人が映っていた。

「クロノ！ようやく連絡がと…」

リンディさんの目が俺の顔を捉えた。

「あ……か…」

リンディさんの口は開いたまま。

そして、何故か頬が赤くなっていく。

…ああ、リンディさん。貴女もアッチ側の人でしたか。

俺は心の中でため息をついた。

「え、えええっと…あ、あ、貴方は…？」

少しどもってるリンディさん。

「えっと。何て言いましょうか…。ひょっとして、背中のこの人の関係者ですか？」

「え、ええ！その子の母親をやっているリンディ＝ハラオウンと申します！」

「藤之宮アレスと言います」

「アレス…ちゃんね。よし！覚えたわ！」

「どうしましょうか。この人…ちょっとした事故で気を失ってしまって…」

「それならこちらから転送ポートを開きます！すぐに来てください！」

リンディさんの手が鬼の様に速くキーボードを叩いていた。

すると、俺の横の方に緑色の転送ポートらしき場所が現れた。

《お兄様…》

《なるようにしかならんだろ…。幸い、俺達がジュエルシードを集めてるのは知らないはずだからな》

《そうですわね。今回も単にクロノさんが巻き込まれただけですからね》

そう念話でエヴァと会話しながら俺は転送ポートに乗ってアースラに向かっていった。

アースラに着くと栗色髪の女の人がやって来た。

「ありゃ～見事に気絶してるね、クロノ…。あ、私はエイミィ＝リミエッタだよ」

「藤之宮アレスだ」

「それじゃあアレス君。クロノをこっちに連れて来て～」

俺はエイミィさんに連れられて医務室に行った。

クロノを医務室に連れて行ってからエイミィさんに連れて行かれたのは…。

見事な和室だった。

盆栽が3段に並べられて、獅子脅しが音を立てて、何故か茶道で使う茶釜がある。

何故、ここまで揃えられたのか…ツッコミを入れたい！

誰かがミッドチルダに日本製品を持ち込んだのか…と！

「艦長、お連れしました」

赤い絨毯がしかれ、その下は一応畳らしいのが。

そして、リンディさんは正座をしていた。

もっとも、ウズウズといった擬音が似合いそうな雰囲気で座っていたのだが。

「さあ、どうぞどうぞ♪」

そう言って目の前に座るように促すリンディさん。

…あの、俺とリンディさんの膝頭が当たってるのですが。

「…艦長。それだとお茶とお菓子が出せないんですけど…」

「ああ、ごめんなさいね！」

そう言ってリンディさんは後ろに下がる。

そして俺とリンディさんの前にお茶と羊羹が置かれた。

ミッドチルダは羊羹売ってるのか…。

「それじゃあ、詳しい事情を教えて貰えるかしら？」

俺は事情を話すことにした。

「なるほどね、たまたまクロノがそこに入ってしまって…」

「はい。俺の魔法が当たってしまって」

そう言って俺は茶を啜った。

うむ、苦いぜ。

「しかし、凄いね～。クロノ君もろとも周囲を凍らせるなんて」

エイミィさんも目を丸くしていた。

「でも、アレスちゃんはどうやって魔法を？この世界は魔法は無いと思ってたけど…」

「あ～。まあ、確かに魔法は無いのですが、魔力を持った人はたまに生まれるみたいで。で、俺は漫画で見た魔法を真似したら出来たと言う事で…」

「漫画…」

エイミィさんは苦笑いしていた。

「（欲しいわねぇ～。クロノを一瞬で凍らせるなんて、かなりの使い手だわ。でも…無茶をしてアレスちゃんに嫌われるのは…ダメよ

！そんなの！）」

「…」

何となくだがリンディさんが何を考えてるのか分かってしまった。

と言うか、百面相の様に表情が変わってるのだが。

「あ、ご、ごめんなさいね。艦長は考えると表情が出る時があるから…」

口元が引きつっているエイミィさん。

「う～酷い目にあった…」

そう言って現れたのはクロノだった。

無事に回復出来たみたいだ。

「紹介するわね、私の息子のクロノよ」

「クロノ＝ハラオウンだ。よろしく」

「藤之宮アレスだ。こちらこそよろしく」

クロノはリンディの隣に正座した。

「君が魔法を使えるのはさておき。ちょっと聞きたいことがあるのだが…」

うむ、ジュエルシードの事だろう。

「ジュエルシードと言う物を知ってるか？青い色をして菱形の形をした宝石みたいな感じのヤツなんだが…」

「さあ？初めて聞きました」

「そうか。知らないか…」

そう言ってお茶を啜るクロノ。

「ところで…だ。君が張ったその結界…かなり強固だったな」

その時、リンディさんとエイミィさんの目が光った。

ひょっとして、俺が張った結界に興味が出たとか？

ああ、古代ベルカ式だもんね。ミッド式が主流だと分からないよな。

「ん？そうですかね？」

とりあえず、とぼける事にしてみた。

「そうよ。アレス君が張った結界は見たことない術式だったからかなり手こずったよ」

「そうね。まるで私達と違う術式の様な…」

目が少し細くなるリンディさん。ひょっとして、知ってるんじゃなかろうな。ベルカ式だと言う事に。

「君の見た目は確かに僕と同じに見える。だが、使用している魔法の術式は僕達と全く違う」

「そうね…アレス君は知ってるんじゃない？自分が使ってる術式を…」

「さて？何の事でしょうか？」

俺は羊羹を口に放り込んだ。甘い味が口に広がった。

「しらばっくれてもダメよ？アレスちゃん？貴方が持ってるその杖…古代ベルカのとある神官騎士が使用していた武器、『レーヴァテイン』と形状がそっくりなのだから」

しっかりばれてました。

なるほど、神官騎士ね。そう言うのもいたのかもしれないな。

「…君はベルカの使い手なのか？」

「なるほど、今はほとんど使い手が居ないベルカ式だったのか…」

エイミィさんは顎に手を当てていた。

「はぁ…分かりましたよ」

俺はそう言って騎士甲冑を解除して私服姿に戻る。

ちなみにエヴァはネックレス状態だ。

「さて、俺が使ってるのは確かにベルカ式ですよ。そして、全員に一つだけお願いがあります」

「それは、何かしら？」

「俺が持ってるデバイスを秘密にして欲しいと言う事です。皆さんが見たら…必ず驚くでしょうから」

「どういう事だ？」

「約束出来ないなら喋りません」

「分かったわ。他ならぬアレスちゃんの頼みですものね。クロノもエイミィも良いわよね？」

リンディさんがクロノとエイミィさんの顔を見た。

何だろう…？『私の邪魔をしたら殺すわよ』的な何かを感じたのだが。

「…分かりました、艦長」

「了解です、艦長」

クロノとエイミィさんも了承してくれた。

「それじゃあ、アレスちゃん？」

「分かりました。エヴァ、ブックモード」

【了解です、お兄様】

ネックレスを手に取ってエヴァに頼む。

ネックレスが光り輝いて一冊の本が俺の手元にあった。

「…！！！」

「そ、そんな…！」

「そ、それは…闇の書…？」

三者三様に驚く。

「さて、俺が聞いた名は『武神の魔導書』。あなた方が言う闇の書では無いですよ？」

「…武神の魔導書…？」

「…そう言えば、違う。違うわ。あの時見たのは…ダークブラウンで黄色の装飾が施してあった。でも、これは…」

「母さん？」

「クロノ。これは違う。あの時見た本と色が全然違うのよ」

「そうなのですか？」

そう言って、俺の本を眺めるクロノ。

「ああ、違うぞ。エヴァ、自己紹介だ」

【了解です。初めまして、私の名は『武神の魔導書』の管制人格、エヴァンジェリンと申します】

「…何かしら？エイミィと声が似てるような…」

「艦長もそう思いましたか？何か他人の様な気がしなくて…」

リンディさんとエイミィさんは首を傾げていた。

まあ、確かに似ているよな…と心の中で呟いていた。

「武神の魔導書か。確か、闇の書は魔法のデータをためておく蓄積型デバイスだったな…」

「これは古代ベルカの騎士達が使っていた武器のデータが入っているだけで魔法は入っていません」

「なるほど、だから『レーヴァテイン』が入っていたのね…」

「そして、闇の書と呼ばれた『夜天の魔導書』の姉妹機として制作されたデバイスだ」

「！！」

「だから、そっくりだったのね…」

「闇の書の姉妹機ならロストロギアに該当するな…」

クロノはジッと俺の手にある本を眺めていた。

「う～ん、闇の書の姉妹機なら確かにロストロギアに該当はするけど…」

「実際には被害とかは報告は聞いたこと無いですし…」

「そもそも、実在するかどうか怪しかった本だからな…。それに、アレスは制御してるから暴走する事も無い」

「そうね。この本に関してはアレスちゃんにお任せしとこうかしら」

どうやら大丈夫そうだな。難癖つけて取ろうとしたら全員眠らせてから脱出するところだったぜ。

「分かりました。この件に関しては上層部に報告はしないと言う事で」

「そうね。テキトーに報告書を書いて提出して頂戴」

そんなので良いのか、管理局。

ってかクロノ、意外と砕けてる？

「それでは、俺は無罪放免と言う事で」

「待って頂戴」

リンディさんからの引き留め。

「…何か？」

「アレスちゃんに、ジュエルシードの捜索をお願いしたいのだけど…」

目をウルウルさせて俺の手を握りしめるリンディさん。

ああ、崩壊してますね、色々と。本来なら一晩考えてきてね～と言って相手から頼ませるのに。

「か、艦長！？」

「クロノは黙ってなさい。私のライフワークの邪魔をするのかしら？」

「…」

クロノは黙ってしまった。

エイミィさんは額に手を当てて上を向いていた。

『ダメだこりゃ』

不意にエイミィさんの声が聞こえたような気がした。

「分かりました、分かりましたよ。そんなに懇願していて断るのはアレですから」

「やった♪」

ウキウキ気分で羊羹を食べ始めたリンディさん。

「…とりあえず、よろしく頼む」

疲れた表情でお茶を飲むクロノであった。

「と言う事があったんだ」

俺は後日、プレシア女史の所にやってきた。

なのはとユーノ、ユナを連れて来てフェイトとアリシアを紹介してから5人はそれぞれ話をしていた。

おっと、アルフも当然含まれてるぞ。

俺とプレシア女史はこっそり離れてから昨日あった事を話した。

「…なるほどね。とりあえず、一つだけ分かったわ」

「何が？」

「そのリンディさんとは美味しいお酒が飲めそうだ…と」

「何故に」

「そりゃあ決まってるでしょ？」

プレシア女史は俺の頭を撫でてきつつ一呼吸おいてから言った。

「アレスちゃんの可愛さが分かってると言う事よ」

急に時の庭園から逃げ出したくなった。

「帰って良いか？」

「何を言ってるのかしら？アレスちゃんはこれから最低1時間、私とお話をするのよ？」

プレシア女史はニコニコ笑ってるのだが、俺は妙なプレッシャーを感じていた。

それから暫くは雑談が続くのであった。

さて、管理局と知り合ってしまったから早くジュエルシードを揃えてしまおう。

ま、ショタ化したリンディさんならそれなりの手が使えそうだし…。ばれても大丈夫だろう。

問題は、逃がしたネギもどきだよな。

俺の姿見られたし、そう簡単に尻尾は掴めないだろうな…。

ちなみに、今は寝室でベッドに潜り込んでいた。
もちろん、隣には母さんとエヴァが添い寝していた。
…まあ、なるようになれってヤツだな。
あいつの動向は注意しておこう。

と言う事で次の日に俺は海に来ていた。
エヴァの探索で海の中にジュエルシードが６つあるとなのは、フェイト、アルフ、ユーノとユナに話す。
ちなみに捜索に協力してくれた人達は今回はお休みだ。
空飛べないから仕方が無い。

「さて、海の中にあるジュエルシードをどうやって回収するかだが…」

「魔力弾撃ち込んで強制発動は？」

フェイトさん、何をトンチキな事を…。

「…フェイトさん。そんな事したら管理局がすっ飛んでくるでしょうが…」

ちなみに管理局の事は全員に教えてある。

「あ、そっか…」

ふむ。まあ、風の魔法を使って俺の周りだけ空気の玉を作って捜索が良いかもしれないな。

全員となるとちょっとジュエルシードが発動するかもしれないから俺一人が良いだろう。

一応、15分位なら息を止めていられるから大丈夫だろう。

「とりあえず、俺が潜って取ってくる。皆は監視していて。もし、誰かが来そうになったらどっかに隠れるなり逃げてくれ」

全員が頷くと俺は空気を纏って海の中に潜り込んだ。

あっという間に見つけて6つのジュエルシードをエヴァの結界魔法で封じてから空中に持っていく。

「見つけたぞ〜」

「早いね〜」

そして6つのジュエルシードはフェイトに渡す。

フェイトはそれをバルディッシュの中に入れる。

「これで全部集まったと…」

「だな。さあ、プレシアさんの所に持っていこうか」

「うん」

その時、俺は感じた。

遠くの方から何かが飛んで来るのを。

そして見た。アレは…雷で出来た…槍。

巨大な槍がこちらに向かって飛んで来るのを！

「エヴァ！！！」

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉】

ベルカ式魔法陣の盾でその槍を止めた。

衝撃が走り、身体に少しだけ痛みが走った。

「ど、どうしたの！？」

「て、敵の攻撃！？」

「一体誰が！？」

全員が俺の方を見て驚いていた。

「これは…！」

俺は飛んできた槍を見て驚いた。

「これは…！『雷神槍・巨神ころし』！！！まさか…！」

遙か遠くに浮かぶ…ネギもどきの姿。

野郎…！この時を待っていたのか！！

【お兄様！この火力は私の盾では防げません！！】

「なら俺以外の5人を転送しろ！このままだと巻き込まれる！」

【分かりました！転送！】

「あ、アレス君！？」

「何をするんだ！？」

「悪いな、アレは俺に用があるみたいでな」

「そ、そんな…！」

そして全員転送した。とりあえず、人質に取られる事は無いだろう。

【もうダメです！お兄様！回避してください！】

「はぁ！！！」

シールドが破れ、槍が俺の腹をかするように突き刺さった。

「ぐぅあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

体中に走る電撃。

血液が沸騰しそうな位に身体が熱くなる。

【お兄様ぁ！！！】

「だ、大丈夫だ…エヴァ…何とか避けはしたが…」

「ふふふ、それでもかなりのダメージだね…」

そう言って俺の前に現れたのはこないだのネギもどきだった。

既に戦闘状態になっていた。

しかも、両手で『千の雷』を取り込んだ状態、『雷天大壮2』になっていたのだ。

これはかなりまずい状態かもしれない。

あの状態は常時雷化で思考速度も半端なく上がっている。

「だが、ここで引く訳には行かないんだよ！第五チャクラ起動！！！」

俺はチャクラを回して身体能力を上げた。

「はあぁぁぁぁぁ！」

「遅い！」

殴りかかるも払われて顔に衝撃が走る。

「ぐぅ！」

「まだまだいくぜぇ！！！」

ネギもどきの連続攻撃が俺の身体に突き刺さる。

「がっ！ぐぅ！がはぁ！うぐっ！」

「どうしたどうした！こないだの勢いは何処に消えたんだよ！」

ネギもどきの動きは分かるのだが身体がついてこない！

ダメだ、今の状態ではこいつに打撃を当てることも出来ない！

１秒間に２０発以上の打撃が俺の身体に突き刺さる！

着実にダメージが蓄積されていく…。このままでは負けてしまう。

「ははははははっ！さっさとくたばれよ！そうすればなのは達は俺の恋人兼性欲処理係にしてやるからよ！！！」

その言葉を聞いて頭に血が上った。

その時、頭にガチャンと撃鉄が落ちた様な感覚が襲ってきた。

《お兄様！私を出してください！このままではお兄様が殺されます！！！》

《待て…》

《お兄様…？》

《今なら…全チャクラ回せる！そうすれば、咸卦法で…こいつを葬る！》

《分かりました…お兄様…》

「なめるなよ…小僧！第六、第七チャクラ起動！！！」

今度は完璧だった。

身体の力がかつての力に戻ったのだ。

だが、長時間はまずい。短期決戦で決めないと…どんな副作用があるか分からない。

一気に膨れあがる闇の力。

身体の動きが軽くなった。

さあ、反撃開始だ！この小僧に今までのお礼をたっぷりとしないとなぁ！！！

第１２話　ついに現れた管理局！（後書き）

ついに接触しました！

けど、リンディさんが重度のショタコン化してますから

アレスの敵に回ることはありません。むしろ管理局の敵に回る可能性がｗ

ジュエルシード編では管理局はほとんど空気化しますからね～

出ても最後の方でしょうｗ

クロノも意外と砕けてますから原作の様に堅物化もしてませんｗ

むしろ原作より有能化かも？

それでは次回をお楽しみに～

第１３話　旅立ちの時＆サプライズ・プレゼント（前書き）

…最近、東方も良いなぁと思いつつあります。

でも、書くならリリなのを終わらせてからですね。

その前にゼロ魔もあるし、出来れば前世であるネギま！編も書きたいし…。

時間が欲しい！文才も欲しい！

そんなこんなでどうぞ、お楽しみ下さい

第１３話　旅立ちの時＆サプライズ・プレゼント

「これでとどめだぁ！」

ネギもどきが右拳を大きく振りかぶって殴りかかってくる。

その瞬間、俺はその拳を受け止めて手首を持ち、捻りを入れて投げる。

「ぐっ！？」

ネギもどきは俺から少し離れる。

その隙に咸卦法を行うべく、左手に魔力、右手に気を込める。

「左手に魔力、右手に気…合成！！」

瞬間、俺の身体から爆発的な風圧が発生する。

「て、てめぇ！咸卦法も使えるのか！？」

「ふん。前世では１０００年の時を生きていたんだ。咸卦法の一つ位使えてもおかしくはあるまい？」

「前世で１０００年の時…だと？」

「俺の前世の名は『アリス＝マクダウェル』と言う名だった」

「マクダ…ウェル…！？」

「そうだ、小僧。平行世界の可能性の一つ、エヴァンジェリンに双子の姉が存在していた世界だ」

「…っ！」

「その世界では俺は『吸血鬼の真祖』として生きていたのだよ！斬魔剣　弐の太刀！」

俺はレーヴァテインを振りかざしてから一気に切り裂く。

衝撃波がネギもどきを襲い、左腕を切り裂いた。

「ぐぅあ！？」

「この程度で済むと思うなよ？」

俺は更に連続で弐の太刀を放つ。

今度は左足に当たり、ネギもどきの雷化が解けて普通の状態に戻った。

「今度こそ、逃がしはしないぞ」

【魔法の監獄〈ゲフェングニス・デア・マギー〉】

俺とエヴァで念入りに結界を張る。

「ぐ…」

「さあ、大人しく捕縛されるか、苦しみながら天に召されるか…選べ」

「誰が…捕まるかよ！」

無詠唱で魔法の矢を２０本くらい飛ばしてくるネギもどき。

俺はそれを障壁で全て弾き飛ばす。

「ひぃ！く、来るな！来るなぁ！！」

ゆっくりと近づく。

「大人しくしろ」

「ひぃ…」

そう言ってネギもどきと目が合った。

「喰らえ！！」

ネギもどきの目が光り、俺の頭に妙な違和感を感じた…。が、それだけだった。

別に足下から石になるとか、頭痛が起きたとかそう言った事は全くなかった。

「…」

《お兄様…アレは魅了の魔眼みたいですわよ？》

《ほぅ？》

《でも、私もお兄様にも効かないんですけどね》

エヴァは吸血鬼の真祖のスペックそのままだから魅了とかその手の精神攻撃は効かないが、俺はある理由があって人の身であろうとその手の攻撃は一切効かないのだ。

う～ん、チートだな。

「ははははははは！これでお前は俺の言いなりだ！」

「…」

俺は黙ってその場に浮いていた。

「さあ、忠誠の証として…自害しろ！」

「分かりました…」

俺はエヴァをレヴァンテインモードに切り替えた。

「へぇ…シグナムの剣だな…。まあ、どうでも良いか。そうだ、お前が死んだ後はそのデバイスを使ってやるよ！感謝しろ！」

馬鹿笑いをするネギもどき。

「感謝します」

そう言って俺はネギもどきの身体を切り裂いた。
左肩から右わき腹にかけて袈裟斬りにした。
「がっ!?な、な…ん……で……?俺の魅了は…どんな…ヤツでも…!」
血が噴き出し、口から血を流すネギもどき。
「残念だったな。俺には魅了とか催眠とかその手の精神攻撃は一切効かないのだ」
「ちくしょう…そんなの…アリかよ…」
そう言ってネギもどきは気絶して下に落ちて行く。
俺はそれを受け止めてから天界に連絡を取って天使を呼んだ。
「それではお届けしますね～」
ネギもどきの魂を壺に封印する。
「ああ。それと、そいつの来世は『陵辱される女の子の気持ちがよく分かる』と言う存在が良いのだが。無論、記憶は残ったままで」
「分かりました。一応、報告はしておきます」

そう言って天使は天界に帰っていった。

【お兄様…かなり鬼畜な所業かと…】

「ふん。ああいった輩は一度その立場にならんと分からんだろ。それに、俺はそう言ったヤツは大嫌いだ」

【まあ、女の子を肉奴隷としか見えない男は私も許し難いですけどね】

「そう言う事だ。さ、帰るか」

俺はなのは達の所に転移した。

なのは達の所に戻るとなのはとフェイトの二人からいきなり抱きつかれた。

「わ…いきなり何だよ…」

「それはこっちの台詞だよ！」

「一人で戦うなんて…」

二人とも目に涙を浮かべていた。

ふと、周りを見るとボロボロになったアルフとユーノ、ユナが居た。

…何故3人ともそんなにボロボロになってるんだ?

「…どうしたんだ?」

俺はユーノに声をかけた。

「…なのはとフェイトが…アレスと助けに行くって言って…僕達が止めてたんだ」

そう言うことか。

それにしても、よくなのはを止められたな。

そしてフェイトも加われば相当な戦力になってたのに。

「そう言う事か。よく止められたな…」

「…自分でも奇跡かと思ってるよ…。スターライトブレイカー…まさに星を破壊する桃色の光線だった…」

スターライトブレイカー…もう完成させていたのか。

まあ、ユナもいたから何とか止められたのかもしれないな。

ユーノとアルフの2人だったら撃墜されていたな…。

「それで、さっきの相手は?」

「ああ、捕まえて知り合いに引き渡した。だから安心しろ」

「そっか…」

「それで？さっきの相手って何だったの？」

「…さあな。俺にもよく分からなかった」

「…ホントに？」

なのはの目が少し細まった。

「…ああ」

「…嘘や隠し事…してないよね？」

「してないぞ」

「…もし、嘘ついてたら…お仕置きだからね？」

「ああ…」

ひょっとしてなのはは気付いているのかもしれない。

こうして俺達は無事にジュエルシードを全て集める事が出来た。

明日に時の庭園に行く事を伝えてフェイトとアルフと別れる。

そして今日はなのはが俺の家にお泊まりに来る日だった。

…何か忘れてる様な。

「ただいま〜」

「あら、おかえりなさい」

そう言って出迎えて来たのはリニスさんだった。

ああ、リニスさんは魂と身体の同調が安定したからもう外の世界で生活してたんだ。

「…アレス君？この人は…？」

「…説明するから…」

仕方がないからなのは、ユーノ、ユナを家に入って貰ってから説明することにした。

「へぇ〜」

「ほぉ〜」

ユーノとユナは不思議そうにダイオラマ魔法球を眺めていた。

なのはは身体を揺らしていた。

『うずうず』と言う表現が似合う状態だった。

「はやてはアリサ、すずかにはまだ言うなよ…」

「分かったなの。アレス君と二人だけの秘密なの」

「まあ、明日は一時フェイトとお別れになるからはやてとアリサ、すずかも連れて行こうか」

「そうだね」

といった感じで夜は過ぎていった。

そして運命の日。

ちなみに管理局はここの居場所は突き止めてはいない。

例によってアリシアに魔力を与えてから全員に見えるようにしておいた。

恒例の自己紹介が始まっていた。

俺とプレシアは今後の事について話を進める。

「で、アリシアを復活させたら俺の家の隣に引っ越して来るんだな

？」

「ええ。なるべく早くお邪魔しようかと思ってるわ」

「まあ、来る時は連絡をくれ。俺も父さんに言って戸籍とか準備があるからな」

「分かったわ。きちんと連絡するわ」

そう言ってプレシア女史はなのは達の方を見た。

「貴方がいてくれたおかげでフェイトとアリシアの笑顔が見ることが出来たわ」

「気にするな」

「気にするわ。だから、アリシアとフェイトはきちんとお嫁に行かせるから貰ってね？」

「…その時まで本人が望むのならな」

もはや何を言っても無駄であろうと思って了承するしかなかった。

「さて、これからジュエルシード２１個を起動させてアルハザードへの道を開く」

俺は全員の顔を見ながら言った。

「その前に、プレシアさんに紹介する人がいる」

「え？私に？」

「あ、あの人だね？」

なのはの言葉に俺は頷いた。

「エヴァ、頼む」

【了解です、お兄様。召喚！】

俺の前にベルカ式魔法陣が展開され、真ん中から人が現れた。

ベージュ色の髪をした女の人、リニスだ。

「あ、貴女は！」

「り、リニス！？」

「そ、そんな…！？」

「リニ…ス？」

プレシア、フェイト、アルフ、アリシアの４人は目を見開いてリニスを見ていた。

ちなみにアリサ達への説明はなのはが行っている。

「どうして…貴女は私と契約を破棄したから既に亡くなっているは

ず…」

「ええ。確かに私はプレシアとの契約を破棄され、魔力を失って死んでしまいました」

「なら、どうして…？」

「そこに居るアレス君のお陰ですよ」

リニスが俺の方を向いて微笑んでいる。

俺は視線を逸らして口笛を吹いていた。

「私も、アリシアの様に幽霊となって時の庭園の自室へずっと居たのですよ？」

「そう…だったの…」

「そして、たまたま現れたアレス君の手によってこうして復活出来たのです」

「…ちょっと待ちなさい」

首をギリギリと音を立てる様な感じで俺を見るプレシア女史。

「どうした？」

「貴方…どうやってリニスを復活させたのかしら？」

「ん～？地下にあるリニスの自室にあったリニスの遺体を使っただ

けだが？」

「…その遺体ってどんな感じだったかしら？」

目が段々と細くなっていくプレシア女史。

「そりゃあ、ミイラ化してたが？」

「…ミイラ化してたリニスをここまで復活させるなんて…さあ！アリシアを復活させなさい！」

両肩を掴んで俺の鼻に当たる位まで顔を近づけるプレシア女史。

「お、お母さん！？」

「プレシア！？」

「待て待て待て！いかに俺でもミイラ化した遺体から復活出来る方法は持ってないわ！」

「ならどうやって復活させたのか言いなさい！」

「ええぃ！言ってやるから！ちっと落ち着け！」

俺はプレシア女史の額にデコピンを喰らわせた。

「ぐっ！？」

思いっきりのけぞって倒れそうになる。

「うわぁ…」

「つくづくアレスのデコピンっておかしいわよね…」

「下手したら首がもげるんちゃうか？」

外野からの声は聞こえないフリで対処した。

「ったく。もうこうなったら…俺も一緒にアルハザードに行く！そこで説明してやるから良いだろ！？」

「え？」

「ちょ、ちょっと！アンタ、学校とかどうするのよ！？」

「言っても三日だけしかいないからな。三日であっちの環境を整備してやる。それで良いな？」

「…分かったわ。折角アレスちゃんと一緒に過ごせるから…構わないわ」

「ちょ、ちょっと！学校三日も休むつもり！？」

アリサのツッコミが入る。

「大丈夫だ。学校は休まない」

「でも、アンタはアルハザードに行くって…」

「随分と矛盾した事を言ってるように聞こえるけど…」

「アレス君なら何か秘策があるんちゃうか？」

アリサ、すずか、はやての言葉。

「アレス君、アレ使うのかな？」

「多分、同時に存在するならアレしか…無いよね」

なのは、ユーノの呟きが聞こえる。

「さ、全員を信頼してるぞ？俺のこの能力を他言しないと思ってな。奥義・二重身〈ドッペルゲンガー〉」

俺はそう告げると2人に分裂した。

「は？」

「え？」

「嘘…！？」

「何で！？」

「ふ、二人になった！？」

「分身の術！？」

「ど、どないなっとるんや！？」

全員が驚いていた。なのはとユーノは除くが。

「これが俺の能力の一つだ。魂を分割して存在出来る奥義だ」

「そして、一定のダメージを受けるか、３日立てば分身体は自動的に本体に戻るんだ」

俺と分身体はお互いを見て頷いた。

「それなら…確かにアルハザードに行って学校にも行けるよ…」

「にしても…どんだけ技を隠してるのかしら？」

アリサがジト目で俺の方を見ていた。

「さあ？これで終わりかも知れないしな？」

「嘘仰い！アンタの事だからもう３つか４つは何か隠しているに違いないわ！」

「私もその意見には賛成だわ。私の勘が訴えとる。だから、キリキリ吐いて貰うで？」

「ちょっと待たらんかい！これから旅立つって言うのに何を！」

「そうなの！アレス君の秘密は分身体の方に聞けば良いの！」

なのはも何を言ってるんだ…。

「…。分身体は死と言う概念無いからな。脅しは効かないぞ」

「…そうだった…心臓が握りつぶされても大丈夫だった…」

「…何それ恐いわ…」

「とりあえず、そろそろ旅立つぞ」

俺と分身体は合体して元に戻る。

「それじゃ、プレシアさん。ジュエルシードを床に並べてくれ」

「分かったわ」

大広間の真ん中に円を描くように置かれたジュエルシード。

「おっと、ジュエルシードが起動して俺達が行ったら、なのはとユーノ、ユナの3人で一斉封印してここから退去してくれ。多分、時空管理局が現れると思うから」

「うん、分かった」

「分かったわ」

「それから俺が戻ったら何食わぬ顔でジュエルシードを管理局に返す。これでこの事件は終わる」

「うん」

全員が一斉に頷いた。

「それじゃ、エヴァ」

【了解です、お兄様。ジュエルシード、起動！】

魔力を込めてジュエルシードを発動させる。

もの凄い魔力がほとばしるが、俺とエヴァが制御するから暴走する気配は一切無い。

そして、空間に割れ目が走り、穴が開いた。

向こうは虹色の様な不思議な色をした空間が広がっていた。

「これは…」

「…どうした？」

「まずいわね。虚数空間かしら…？魔法が使えないかも知れないわ」

そう言えばそうだったな。

どうだろうか。魔力は確かに無効化するが、気の力は大丈夫だろうか？

それなら俺が全員を連れて行くしかないな。

「ふむ？」

俺は再び2人に分身してから分身体の手に縄をくくってから虚数空間に飛び込ませてみた。

「アレス君！？」

「あっちが分身体で俺が本体だ」

「見分けがつかないから凄く紛らわしい…」

「大丈夫だ」

空間の中で俺は飛んでいた。どうやら気の方はキャンセルされないみたいだ。

「え？嘘…魔力は使えないはず…？」

「さあ、行くぞ。今は安定してるがどうなるか分からない。全員、手に縄を繋いでおけ」

プレシア女史、フェイト、アルフ、リニスはそれぞれ手に縄をくくった。

アリシアは俺の背後に憑依状態でいて貰うことにした。そう簡単に離れないようになっている。

「それじゃあ、俺は3日後には帰ってくるからな」

「分かったなの」

「しっかりやりなさいよ！」

「頑張ってね」

「しっかりや～。お土産、期待してるで～」

といった感じで俺はプレシア女史達を連れてアルハザードに向けて旅立った。

空間に入ると全員の４人分の体重が腕に来る。

腰に回せば良かったかな？と思いつつも俺は更に二重身で分かれた。

「え？」

「嘘でしょ？」

「アレスが…」

「５人いる？」

全員の手を繋いで俺は虚数空間の中を飛んだ。

全員が驚いて俺と分身体達の顔を見ていた。

「さてさて？俺は２人だけとは言ってないぞ？」

「…確かに、分身出来ると言ってたけど…２人までとは言ってなかったわ」

「じゃ、じゃあ…何人まで出来るんだよ」

「本体入れて12人まで。ちなみにその場合は力と素早さが3分の1に落ちる」

「へぇ～凄いとしか言いようが無いよ…」

「えへへ。これなら私とフェイトと同時にデート出来るね♪」

俺の背中で笑ってるアリシア。

「…別に、アリシアとフェイトと二人同時で良いんじゃね？」

「お兄ちゃん分かって無いなぁ～。二人っきりになりたい時もあるんだよ？」

「…それもそうか」

そう言えばそうだったな。

神界に行ってからはアテナと元仲間の妖子とのダブルデートが基本になってしまって本来は二人っきりなんだよな。

「うふふ。これもなのは達には秘密にしてるのでしょう？」

プレシア女史が微笑みながら俺の方を見た。

「ああ。いつかはビックリさせるつもりだから…フェイト、アリシア？この事は秘密な？」

「うん…分かった」

「分かったよ～お兄ちゃん♪」

「アルフとリニスもな？」

「分かりました、アレス君」

「あたしはどうしようかな～？美味しいお肉を所望するけど…」

「…アルハザードに行ったらネギ祭りだな」

「ちょ！狼の素体であるあたしにそんなの食わしたら身体壊すよ！」

「アルフ、お願い」

「分かったよ～フェイトがそう言うなら黙ってるよ」

「それならアルハザードに着いたら肉料理作ってやるよ」

「ラッキー！ありがと、アレス」

そんなこんなで俺達はアルハザードに向かってひたすら飛び続けた。

第１３話　旅立ちの時＆サプライズ・プレゼント（後書き）

…まあ、ツッコミ所満載かもしれませんが

虚数空間で『気』が使えるのは独自設定です。

ジュエルシードがアルハザードに行く為のキーと言うのも独自設定です。

さて、次で無印編最後です。

第１４話　アリシア復活（前書き）

ちょっとアレなシーンがありますが気にしないで下さいｗ

９歳児の特権ですよｗ

それではいってみよう！

第１４話　アリシア復活

無事にアルハザードに着いた。

もうちょい廃墟化してるかと思ったら意外と綺麗な状態であった。

ちなみに見た感じはいかにもと言った未来都市的な作りだ。

前世の前世において見た科学都市になった東京を思い出す。

【ここの管理室で認証登録しておけばジュエルシード無しでアルハザードに来る事が出来ます】

管理室らしい部屋に来た俺達は全員分のデータ全てを入力しておく。

もっともアリシアは後で登録することになるのだが。

「これならそんなに時間はかからないだろう」

「そうね。しかし、凄いわね。昔の技術なのに今の技術より優れてるなんて」

プレシア女史は周りの機械を眺めながら呟いた。

「ああ。これだけの技術を持っていながら滅んだのか…」

「やはりどんなに優れた技術を持っていても自然には勝てないのかしらね…」

「そうだなっと。ここはどうだ?ここなら居住区と…どうやら生体工学の研究施設の近くだ」

俺はコンピューターから地図を出して指で指し示した。

「どれどれ?良いわね。ここにしましょうか」

俺達は地図の場所に向けて移動した。

着くと大きめな建築物に辿り着いた。

中に入るとちょいと埃まみれだったが掃除をすれば問題は無い。

と言う訳で俺は最大限に分裂して掃除等雑用にとりかかる。

「…その能力はかなり便利ね…」

「ネコの手も借りたい時に重宝しますね…」

リニスさん、貴女ネコでしょうに。

全員が目を丸くして俺が複数になって片づけていく様を見ていた。

一段落ついた所でリビングに集まって休憩した。

「さ、どうやってリニスを復活させたのか…言って貰うわよ?」

目が据わってるプレシア女史を眺めつつ俺はリニス復活の経緯を話した。

「なるほどね…異世界の技術…ね…」

顎に手を当てて考え込むプレシア女史。

「プレシア、この技術が管理局に知れ渡ったら…」

「まずいわね。絶対に人造魔導師とかろくでもない使い方しかしないわね」

「それに俺だって何かしら制限をして来るだろう」

「そうね。アレスちゃんが持ってるデバイスだってロストロギアみたいな物だから奪って保管せよ！って言う馬鹿が出るに違いないわ」

【まあ、私はお兄様以外に使われる位なら自爆しますけどね】

サラリと恐いこと言うな、エヴァは。

「え？自爆機能あるの？」

【ええ。どうやら当時のベルカの技師が付けたみたいで。『自爆はロマンだ』といった記述が私の中に残ってます】

「…やはり今も昔も科学者は自爆装置は好きみたいね…」

苦笑しているプレシア女史。

「…」

その会話を聞いて不安な表情を見せてバルディッシュを眺めるフェイト。

【私にはそんな機能はついてません】

「良かった…」

ホッと安心した呼吸をするフェイト。

「…私は自爆装置はつけませんよ?フェイト?」

「いや、リニスを疑ったわけじゃ…」

リニスが頬を膨らませて、フェイトが大慌てで弁解している光景を俺は眺めていた。

そう言えば、複雑な機構を全て廃して『ボタンを押すだけで自爆出来るロボット』を作成していた科学者がいたな…。

起動実験でボタン押して自爆してたが。

自爆マニアもあそこまで行くともはや理解しがたい。

次の日。

そんなこんなでアリシアを復活させる算段が整った。

生体工学所と思われる場所で俺達は準備を進める。

生体ポッドの中にアリシアの身体を入れてチェックをする。

全裸ではあるがアリシアからの許可は取ってある。

『将来のお婿さんだから隅々まで観察して良いよ～』

『私も全く構わないわ。好きなだけ観察して勉強しなさい』

プレシア女史もアリシアも頭が少しバグってる様だ。

フェイトは頬を膨らませて『う～』と唸ってるし、リニスとアルフは苦笑していた。

まあ、『前世は女だったからそんな観察とか必要は無いんだぜ！』とは当然言えない。

ちなみにプレシア女史がメイン、俺とリニスが補佐、フェイトとアルフとアリシアは見学だ。

キーボードをカタカタと叩いて機械の操作をする。

とりあえず、今はアリシアの身体の状態をチェックする。

このチェックでアリシアの身体にある損傷等を探し出して修復するのだ。

そうすればアリシアは復活出来るはず。

とりあえず、機械がチェックに入ったので俺達は休憩する。

機械の方から完了と思われるブザー音が聞こえた。

ディスプレイを見る俺とプレシア女史、リニス。

「…これは…」

「なるほど、これが原因か…」

「さすが失われし技術。ここまでの精度を…」

身体の絵が出て頭の部分にチェックが入っていた。

どうやら頭の部分に何か問題があるから身体が蘇生出来なかったのだろう。

「それじゃ、治療してもらおうか」

3人お互い顔を見合わせてから機械のプログラムを開始した。

とりあえずセット出来たのでまたも俺達は終わるまで待つことになった。

さて、無事にアリシアを復活出来たなら俺はお払い箱だろう。

適当に頃合いを見て帰ることにしよう。

「そう言えば、私とアリシアはどんな立場になるの？」

不意にフェイトが訪ねて来た。

「そうねぇ…生まれた順で言えばアリシアが姉でフェイトが妹になるんだけど…」

と言ってプレシア女史はポッドの中に入るアリシアとフェイトを見比べていた。

「見た目はフェイトが姉になるんだけど…」

「いや～！あたしがお姉さんなの～！！」

アリシアが駄々をこねる。

「そうは言ってもねぇ…」

確かにそうなのだ。

アリシアとフェイトを並べると、アリシアが頭半分くらい低いのだ。

まあ、フェイトは数えで9歳、アリシアは5~6歳位で事故にあったためそこで成長が止まってるのだ。

要は同じ身体年齢を二人とも同じにすれば良いのだ。

となると、方法はとりあえず2つ。

薬を使用して強制的に身体を大きくするか、ダイオラマ魔法球を使用して自然に身体を大きくするか。

プレシア女史に聞いてみるか。

「なら、アリシアの身体を大きくすれば良いだろ」

「そうは言ってもねぇ…」

「俺が提示出来るのは2つ。薬を使って強制的に成長させるか…」

「薬はちょっと…」

「なら、これを使う」

俺は魔法のポシェットからダイオラマ魔法球を取り出した。

「何かしら?コレは?」

不思議そうな顔で魔法球を見るプレシア女史。

「魔法の箱庭だ。時間の流れが違うように細工してある。中の1日は外の1時間に当たる」

「へ？」

「つまり、外では1日だがこの中では２４日過ぎる事になる。外の時間で６０日入っていればえっと…１４４０日か？ちょいと多いが、４年分。兎に角、アリシアの身体を成長させることは出来る」

「…それこそ魔法じゃない…」

唖然としているプレシア女史。

リニス以外も目を丸くして魔法球を見ていた。

「プレシアさん、１日おき位に入っていけば良いから。もっとも、早く歳を取りたいならずっと中に入っていても…」

「入るわけないでしょうが…」

プレシア女史の背中に般若の面が浮かんでいた。

「私が入ります。元々寿命はあってないような物ですし」

リニスなら大丈夫だろう。多分…。

そうこうしてたらポッドのディスプレイから音が鳴り響いた。

どうやら完了したみたいだ。

プレシア女史がアリシアの身体を取り出してから近くのベッドに寝かせる。

「さて、これで大丈夫だと思うが？」

「ですが、心臓が動いていません…」

「…とりあえず、俺の気を少し送ってみるか」

俺はアリシアの頭に手を当ててから気を少し送ってみた。

「…どう？」

「…大丈夫です。心臓が動き出しました！」

「アリシア？」

「…うん」

アリシアが頷いてから身体の所に行って重なる。

少し光輝いてから光が収まる。

「…ん…」

ベッドの上に眠っていたアリシアの目が開いた。

「あ、アリシア…！」

プレシア女史が抱きついた。

「お母さん…」

「アリシア…やっとこの手で…」

プレシア女史の目から流れる涙。

見るとリニス、フェイト、アルフも目に涙を浮かべていた。

さて、感動の対面だから俺はちょいと席を外すかな。

俺は外の空気を吸いに建物から外に出た。

「どうしてこうなった…」

俺は今、浴場に来て呆然としていた。

一人ではなく、プレシア女史、アリシア、フェイト、リニス、アルフの５人と一緒に。

どうしてこうなったのか、時を少しだけ戻す。

アリシアを蘇生した後、全員で食事を取って俺は帰ろうと思っていた。

そこへフェイトがサラッと言って来た。

「お風呂に入ろうか？」

何を躊躇せずにサラッと言うのかね？

「何？」

「お風呂。なのはと一緒に入ってるんでしょ？」

なのは、何を教えてるのかね。そんなのは軽々しく言ってはいけないと…教えてなかったな。

「あ、まあ、確かに…たま～に入ってるが…」

「なら入ろ？アリサやすずかとも入ったのでしょ？」

おぅ…いつぞやの旅行の時の事まで聞いてるのね。

「う…うん…」

「お兄ちゃんずるい～！あたしも一緒に入る～！！」

更に追い打ちをかけるかの様にアリシアも参戦してきた。

「え、あ、お、おぅ…」

「あらあら。なら私も一緒で良いわよね？」

そう言って背後に回るのはプレシア女史。

だから頬を撫でるのは…クセなのか？

「そうですね、皆で一緒に入りましょうか」

「良いね～、一家団欒だねぇ～。酒持って行こ」

リニスとアルフも一向に止める気は無いようだ。

あんた方、俺が男だって言うの忘れてるんじゃあるまいな！？

とまあ、今に至る訳だが。

腰にタオル巻いていたらそんなのはいらないよ～とか言ってアリシアにはぎ取られるし。

何かプレシア女史の視線がまったりと絡んでくると言うか。妖しい雰囲気を帯びてるし。

確かになのはや母さん、エヴァと一緒に入ってるから多少の免疫は出来てますが！

違う人となるとやはり緊張はするんだがね！

プレシア女史とリニスさんの胸はたゆんたゆんと揺れてるし！

アルフは程良い大きさでスラッとした体型だし！
フェイトとアリシアは子供体型だ。
…ロリが見たら鼻血を噴くだろうが。
熱い衝動を抑えつつも俺は身体を洗おうと思ったら。
「えへへ」
そう言って目の前に現れたのはアリシア。
前を隠せよ！堂々と腰に手を当てて立ってるんじゃありません！
「…どうした？」
「お兄ちゃん、洗って～」
そう言って俺の横にあった椅子に座った。
ちなみに今入ってる浴場は大人数対応の銭湯みたいな作りになっている。
「しょうがないなぁ～」
そう言って俺はアリシアの身体を洗う。

１０分後。

「えへへへへへへへへ」

顔を赤くするアリシア。

うむ、俺が身体を洗うと皆こうなるんだよな。

「…なのは達から聞いてはいたけど…」

驚いた表情で俺とアリシアの様子を見ているフェイト。

「…私も洗って」

そう言って俺の隣に座るフェイト。

アリシアはふらふらしながら湯船に向かっていった。

ちなみにその先にはプレシア女史が居たが。

「…ああ」

俺は同じようにフェイトの身体を洗うことにした。

１０分後。

「…はぅ」

目が虚ろになってるフェイトが居た。

顔がリンゴの様に真っ赤で酒に酔ったのか？と問いたくなるくらい赤い。

「…大丈夫か？」

「…だ、大丈夫…」

そう言って俺はフェイトの背中から湯をかける。

「なのはの言うとおりだった…。アレスに身体を洗って貰うと凄く気持ち良いって…」

「…そりゃ、ありがとう」

「時々で良いから一緒に入ろ？」

「…ああ。分かった…」

断る事が出来なかった。

「娘二人を堕とすなんて…ね」

そう言って俺の背後に現れたのはプレシア女史。

あと字が違う様に思えるのだが。

スゲーイヤな予感。

フェイトはフラフラとした足取りで湯船に向かって行った。

「お礼にアレスちゃんの身体を洗ってあげるわ」

やはりこのパターンかよ！

「いえ、ひ、一人で洗え…」

「遠慮しないの。（男の子の身体を洗ってみたかったのよ）」

何か最後の方は聞こえなかったが。でも、妙な予感は感じる。

「ほらほら」

そう言ってプレシア女史は俺の背中を洗い出した。

ああ、気持ち良い。意外と上手に洗う。

「痛くないかしら？（プニプニしてて柔らかいわね…）」

「あ、ああ…」

次に腕を取って同じように洗う。

これも同じように程良い力加減で気持ち良い。

「それじゃあ、前ね」

そう言ってグルンと対面になるように回転させた。

まて、エラい力を発揮しなかったか？

「…」

「どうしたのかしら？」

プレシア女史の目が少し血走ってる。しかも据わってる。

暴走しないだろうな…。リニスさんが止めてくれるのを期待するしかない。

「何でもない」

「そう」

プレシア女史は俺の胸、腹と洗う。

少し妖しい雰囲気を醸し出しているが、大丈夫そうだ。

足を洗う。足の指から綺麗に、丁寧に洗ってくれる。

このまま何事もなく終わってくれるだろうと思ってたら。

「…」

「…」

プレシア女史は何事も無かった様に俺の股間に手を伸ばして洗う。

「…」

「…」

お互い何も言わない。

無言の空気が流れる。

湯船ではリニスさん、アルフ、フェイト、アリシアが談笑していてこちらには気付いていないようだ。

「…」

「…」

……エラい丁寧なんだが。

他の箇所よりも明らかに丁寧に洗ってくれている。

「…（この歳で既に…皮が…）」

「…」

何が言いたいか分かった。

俺の……そうだな、アームドデバイスと仮称しておこうか。

ぶっちゃけ言うと、俺のアームドデバイスは…装甲が無くて剥き出し…と言っておこうか。

「…（コレは…アリシアもフェイトも泣かされるわね。ついでに私も…）」

「…いつまで洗ってる？」

「あ！」

プレシア女史は驚いて俺のアームドデバイスを強めに握る。

「おぅ！？」

「ごめんなさい！」

その後、ついでに頭も洗って貰う。

そして湯船に向かう。

見ると全員少し赤くなっていた。

アルフは酒で出来上がっているだけだが。

プレシア女史はリニスさんに向かって何やら耳打ちしている。

リニスさんは驚いた顔で俺の方を見て…僅かに視線を下に向けた。

…何を報告してるんだ。

今度はリニスさんがプレシア女史に耳打ちして…。

フェイトとアリシアの方を見てから大きく頷いていた。
もうイヤな予感しか感じないよ、勘弁してくれ。
「えへへ」
「…うん」
両脇にはアリシアとフェイトがしっかり腕を取って抱きしめていた。
そんな感じで俺達の風呂は過ぎていった。

「それじゃ、俺は帰るぞ？」
「ええ。アレスちゃんには返しても返しきれない恩が出来たわ」
「気にするな」
「気にするよ。あんたのお陰でフェイトも…全員笑い合える事が出来たんだから」
アルフが少し涙を浮かべていた。
「ありがとう、アレス…」
「アレスお兄ちゃん、ありがとね」

「アレス君には感謝しきれません…」

フェイト、アリシア、リニスさんもそれぞれお礼を言ってきた。

「じゃあな。ま、一週間に一度位は来ようと思うが…」

俺はエヴァを見た。

「そろそろ、『アレ』が目覚める。『アレ』が目覚めたらちょっと来にくくなるかもしれない」

「ああ、『アレ』…ね」

『アレ』とは闇の書。いや、夜天の魔導書と言うべきだな。

はやての誕生日は6月4日、あと少しだ。

「アレって？」

フェイトが不思議そうに聞いてきた。

「ああ、プレシアさんから聞いた方が良いだろう。多分、フェイトも協力をお願いするだろうが」

「うん、分かった。母さんに聞いてみる」

「ぶ～、あたしは～？」

「アリシアはまだかな。でも、いつかはアリシアにも何かしらお願いするから今は我慢してくれ」

「…うん、お兄ちゃんがそう言うなら…待ってる」

「さて、と。そろそろお暇するぞ」

「うん、また会おうね」

「バイバイ、お兄ちゃん」

「アレス君、また会いましょう」

「へへ、ありがとう、アレス」

「アレスちゃん、また会いましょう」

そう言って俺は次元の穴に飛び込んで元の世界に向かって飛んでいった。

テスタロッサ一家とアルハザードで別れてから3日。

俺はなのは、ユーノ、ユナを連れてアースラに来ていた。

用件はジュエルシードを渡す為。

アルハザードに登録しておいた俺にはもう必要ない代物だ。

なのは達を連れて行く時は一緒に転送すれば問題ない。
例によって畳敷きの部屋に通された。

「いや～、まさか俺の幼馴染みが集めてたなんて…」
しれっと俺は言った。当然、嘘だがね！
「偶然って恐いわねぇ…」
「いや、ホントホント」
俺とリンディさんは笑い合っていた。
「ホントはアレスちゃんも協力してたんでしょ？」
笑顔でリンディさんは俺に向かって言い放った。
「さあ？」
「…まあ、良いわ。無事に全部揃った事だし。これ以上の詮索は無用ね。（アレスちゃんに嫌われたくないし）」
そう言ってお茶を啜るリンディさん。
「しかし、少し無謀ではあったな…」

「すみません…」

「何よ！ユーノは頑張ったんだからね！」

クロノはユナの責められていた。

「そうそう、スクライア一族からあなた達二人の捜索願いが出てたけど…」

「そうですね。一旦帰ります」

「そうだね…。あたしも何も言わずに飛び出して来ちゃったし…」

ユーノとユナは帰宅するみたいだ。

「にゃはは、コレで一件落着かな？」

「だな」

俺となのはは見つめ合ってから少し微笑んだ。

「そうそう、貴方達にお願いがあるんだけど…」

リンディさんがキラキラした目で俺達を見てきた。

「…まさかとは思いますが…」

「そのまさかよ。管理局に入らない？二人とも相当のランクだし」

魔力総量ランクを計ったのだが、なのはは『S』で俺は『A』だっ

た。

僅か9歳でこれならリンディさんでなくとも入局を勧めて来るわな。

「えっと…」

「嘱託魔導師で良ければ」

「え…」

ビックリ顔のリンディさん。簡単に話が進むとは思わなかったのだろう。

「まだ小学生ですからね。もし本格的に入局するなら高校を卒業してからにしますよ」

「え、ええ。それで構わないわ」

「なのはは？」

「私もアレス君と同じ。嘱託魔導師でお願いします」

なのはも俺と同じになったか。

「それじゃあ、書類とかお願いね」

「あ、俺はリンディさんの下でお願いしますね。それか、リンディさんの目に叶った人物で」

「ええ！分かってるわ！（アレスちゃんみたいな子、そう易々と渡

さないんだから…。特にレティみたいなのには…）」

最後の方は聞こえなかったが、大方ろくでも無い事だろうからスルーすることにした。

こうして、俺となのはは管理局と関わる事となる。

ちなみに、学業優先だからそんなに出動出来ないかもしれないとの旨は伝えておく。

一通りの書類を書いてエイミィさんに渡す。

ちなみにミッド語は英語と類似してるから俺は大丈夫だった。

前世で大抵の言語は覚えてるから。

隣ではなのはが頭から煙を出していた。

要勉強であるな、うん。

そして、ユーノとユナとお別れの時。

「お世話になりました♪」

「ああ、かなりな」

ユーノとユナは主に俺の家の風呂で。

結構入りに来たんだよね。

「ありがとう、アレス」

「頑張れよ、色々と」

「…うん」

俺とユーノは握手を交わす。

ユーノが大人の階段に差し掛かったらユナに食べられるであろう、性的に。

「なのはもありがとう」

「にゃはは…そんなに役に立ってないような気がするけど…」

苦笑いのなのは。

「そんな事は無いと思うけどな…」

「アレス君の方が凄かったよ」

「俺を引き合いに出すな」

「確かに…アレスは…ねぇ」

ユナも俺の顔をジロジロと見ていた。

「俺はいいんだよ」

俺は転送ポートの方に向かって歩く。

「エヴァもありがとう」

【お気になさらずに。私は大したことしてませんから】

「それじゃ、お別れだね」

俺達は頷いた。

「またな」

「バイバイ、二人とも」

「ありがとう、アレス、なのは」

「また会いましょうね、アレス、なのは」

こうして俺達は別れて元の生活に戻っていった。

はやての誕生日まで、あと僅か。

さあ、夜天の魔導書が目醒める。

リィンフォース、あんたは消滅させないからな。

第１４話　アリシア復活（後書き）

と言う訳で無印編は終わりました。

日常編を１話、挟んでからＡ’ｓ編に入ります。

ぶっちゃけ言うとＡ’ｓ編は原型をとどめてない位話が破壊されるでしょうｗ

そして短い可能性が高いと言うｗ

出来ればそれなりの話数にしたいのだが…

ついに目覚める守護騎士達！

だが、蓋を開けてみたら…

それでは次回もお楽しみに～

第１５話　日常生活編？（前書き）

アレス「なあ？」

作者「どうした？」

ア「いつから月刊になったんだ？」

作「…大丈夫だ、問題ない」

ア「問題だらけだろ」

作「おふぅ！」

ア「パッパッと更新しないと読む人減るぞ？」

作「う、おぅ…」

ア「で、俺が神界に帰る算段はついたのか？」

作「まさか」

ア「…」

作「とりあえず、ＳｔＳまではやるつもりだから」

ア「分かった…。とりあえずはそこまでは我慢してやる」

作「終わった後はゼロの使い魔ね」

ア「はぁ！？」

作「お前にはやって貰うことが沢山あるからな」

ア「…どんな立場だ？」

作「言ったら面白くないだろ？逝ってからのお楽しみだ」

ア「待て。今、字がおかしくなかったか？」

作「幻聴だ」

ア「…（こいつ、いつか殺す）」

作「さぁ、ルイズ以外はショタ属性付与させておくか」

ア「今殺す！！！」

作「貴様！作者殺し出来ると思うなよ！？」

ア「やかましい！俺が初の作者殺しのキャラになってやるわ！」

作「返り討ちにしてやるわぁぁぁぁぁ！！！」

第１５話　日常生活編？

～はやて、アリサ、すずかの魔法訓練～

ユーノ達と別れてから３日後。

いつも通りの生活を満喫していた。

今はなのはと模擬戦を行っていた。

ギャラリーははやて、アリサ、すずかの３人。

３人には双眼鏡を渡しおいた。

地上で俺となのはの戦いを眺めていたのだ。

「ディバイン・バスター！！」

なのはの砲撃が俺に向かってくる。

【装甲手楯〈パンツァーシルト〉】

俺の前にベルカ式魔法陣が現れる。少し傾斜を付けてなのはの砲撃を逸らすようにする。

「くっ！」

それでも身体に衝撃が走る。毎回思うがこれは本当に非殺傷設定なのか、疑問は尽きない。

「にゃあ！それならディバイン・バスター１２連射！！」

【イエス、マスター！！ディバイン・バスター１２連射！！】

連続で桃色の砲撃が繰り出される。毎回思うが、あの砲撃を連射とかオリジナルを超えてるだろ！？それとレイハさんがやたらハイテンションだ。

さすがにアレを逸らすのはイヤだから俺はそれを全て避ける。

なのはの杖の向きを見てから砲撃の来る方向を予想しているからかわすのは簡単だ。

「俺に当てたいならもう少し工夫をすることだな！」

俺は避けながらなのはの間合いを詰めて行く。

「ひゃ！」

なのはの喉元にレーヴァテインを突きつける。

「終わりだな？」

「ううぅ～…参りました…」

【これでマスターの８９連敗目が決まりました】

レイハさん、傷口に塩を塗り込むような言動を…。
こうして俺となのははははやて達の所に降りる。

「…」
「…」
「…」

3人は呆然と俺達を見ていた。

「どうだった？」

「色々と言いたいことはあるけど…」

「なのは！アンタ…何よ、あの砲撃は！固定砲台になってるじゃない！」

「にゃ！？」

アリサに頬をつねられてるなのは。

「あかん…あんなの見てるとなのはちゃんに勝てるか自信が…」

はやての顔が少し青くなってた。

「アレス君も…。あの砲撃を易々と避けるし…」

すずかも苦笑していた。

「まあ、俺はちょっと特殊と思わないと。１０００年の経験があるし」

「そうやね…」

「そうだったね…」

「なのはの方は…アレだけど」

「初めてまだ1ヶ月半位やろ？この先どうなるか…。私はなのはちゃんと戦いとう無いで」

「私も。アレはバグとしか言いようが無いよ…」

酷い言われようである。確かに1ヶ月半位であの始末だからな。

「アレス！」

「な、何だよ…」

「あの巫山戯た弾幕を易々とかわして…！どうなってるのよ！？」

「どうなってるって…俺には見えるんだから」

「何処ぞのニュータイプみたいに『見える！』って感じかな？」

暗い部屋、ベッドの上で一人爪を噛んでろと言うのか。

「まあ、アレス君の動体視力は凄いからねぇ…」

【お兄様の見切りは凄いのですよ？額に付いた米粒が切れて皮膚は切れない間合いで剣でもかわすのですから】

「何処の宮本武蔵よ…」

まあ、出来るのだから仕方ない。

「だからお兄ちゃんとお父さんもアレス君に当てられないんだ…」

なのはの言うとおり、今は恭也さんと士郎さんと稽古してるが未だ当たったことが無いという。

どんだけチート仕様だと自分でもツッコミを入れたいねぇ。

「それで、調子はどうだ？」

俺ははやて、アリサ、すずかの3人に訪ねる。

言わずとしれたネギま！式魔法の練習の事だ。

なのはは後ろで魔力弾を缶に当てる訓練をしていた。ってか、既に連続１５０回超えてるのだが。

そして弾速も速いから『カカカカカカカカカカカカ』とか言ってるし。

缶が粉々になりそうだな。

それでも疲れた様子が無いのは…どういう事だか。

「う～ん、まだ火は出ないわ」

「わたしもや」

「わたしも」

3人ともまだ火は出ない様だ。

あれって結構時間がかかるんだよね。

原作の夕映でも相当練習してやっと出したんだし。

「まあ、急がずゆっくりとだ」

「ダイオラマ魔法球使えば？」

そう言って俺の後ろから言い放ったのはなのはだった。

「なのは？」

「あ…ごめん♪」

謝ってるわりにはニヤニヤ笑ってないか？

「ちょい待ち」

「それは聞き捨てならないわ」

「考えてみたら…アレス君の前世はエヴァのお姉さんだから…」

黒いオーラを立ち上らせて俺の前に立つはやて、アリサ、すずかの3人。

「何で早く気付かなかったのかしら…」

「アレ使えば早かった…」

「さあ！あるなら早く出して貰うで！！」

「すまん、アレはフェイト達に貸してる」

「なんやとー！？」

俺は事情を説明した。

「なるほど、それなら仕方ないわ…」

「姉が小さいんじゃ、威厳も何も無いわ…」

「と言うことは、今年中に二人とも転校してくるんか？」

「ああ。一段落が付いたら俺の家の隣に引っ越してくる予定だ」

ちなみに何故か俺の家の隣はここ何年も買い手がついてないと言う。

何かあるのだろうか…？

「アレス君の隣…？」

「アレスの家の隣…？」

「隣…やて？」

3人の表情が怪訝な感じに変わる。

そして3人はなのはを連れて少し離れてひそひそ話を開始する。

会話の様子（アレスには聞こえてない）

「なのはちゃん、フェイトちゃんとアリシアちゃんが抜け駆けせんように見張りをお願いするわ」

「にゃっ！？」

「無論、アンタも抜け駆けしたら…どうなるか分かってるわよね？」

「なのはちゃん、私達、親友だよね？」

「わ、分かったなの…」

何となく、あの3人が言う事は予想は出来るが。

まあ、大丈夫だろ。

そんなこんなでこの日は3人の訓練は続いていった。

～初出勤～

学校帰り。

なのはと二人で下校途中の事。

アリサとすずかは別の用事で別れてる。

《アレスちゃん、なのはちゃん》

突然の声。どうやらリンディさんだ。

《どうかされました？》

《突然でごめんなさい！近くの次元世界に犯罪者が逃げ込んだの！》

なるほど、要は捕まえろと言うことか。

《良いですよ。犯人は…》

《データを送るわ。近くに転送ゲートを開くからすぐにお願いね！》

「と言うわけだ。行こうか？」

「うん」

俺達は近くに現れた転送ポートに入った。

着いたら何やら大勢の人達が。

見ると一般局員と思われる人達が５人位。

全員がビックリした顔で俺となのはを見る。

「君達は…？」

「あ、リンディさんの依頼で応援に来ました、藤之宮アレスと言い

ます」

「同じく、高町なのはです」

全員が驚いた顔をしていた。

「リンディ提督から聞いていたが…君達が…」

「詳しいことは後で。どんな状況ですか？」

「すまない。何とか包囲することは出来たのだが、相手は魔導師ランクＡＡＡ級の魔導師で少し手を焼いているのだ」

確かにＡＡＡ級は一般局員達から見たらかなり手強いだろう。

「で、君達のランクは？」

「えっと、俺は魔力総量ランクはＡでした」

全員が『ブッ！！』と噴き出していた。

「私は魔力総量ランクはＳです」

全員が某吉本劇場みたいにすっころんでいた。

「おー…」

「わ、分かった…とりあえず、君達ならあいつに勝てるだろう…」

隊長さんと思われる人が犯人を指差した。

確かにあれぐらいなら勝てそうだ。

よし、初の実戦だ！行ってみようか。

「なのは、なのはは後ろで援護射撃。大丈夫、俺は当たらないから」

「うん、分かった」

「すいません、俺となのはの二人で行きますんで」

「あ、ああ。分かった。任せよう」

「それじゃ、エヴァ？」

【了解です！起動〈アンファング〉！】

俺の足下にベルカ式魔法陣が広がって一気に騎士甲冑を纏う。

「レイジングハート！」

【セットアップ】

なのはも同じようにバリアジャケットを身に纏う。

「ベルカ式だと！？」

「あの子…凄い魔力量だ！」

周りが少し騒がしくなる。

「行きます！なのは、頼む！」

「了解なの！」

俺は一気に飛行魔法で相手の方に向かって飛んで行く。

「何だてめぇは！ＡＡＡランクの俺に勝てると思ってるのかよ！ヒャッハー！」

明らかに雑魚的な台詞を吐くな。でもＡＡＡランクと言えば結構強いんじゃなかったのか？

相手が魔法弾を１０発近く放ってくるが俺は全て避けて更に間合いを詰める。

「げげっ！速い！？」

「遅い！！」

俺はレーヴァテインで殴りかかる。

「うひょお！？」

男はシールドで俺の攻撃を防ぐ。

「てめぇ…殴りかかってくるなんて…」

「俺は遠距離は苦手でね」

そして俺は右に身体をずらす。

その直後、桃色の砲撃が男に直撃した。

バリアが砕ける音が聞こえてから爆発音が響く。

俺はシールドを張って爆発から逃れる。

「さすが、超遠距離砲撃でもこの精度か」

【相も変わらず凄まじい砲撃ですね】

あっさりと勝負が付いて拍子抜けした。

その後、ボロボロになった男を担いでからさっきの場所に戻る。

「ありがとう、助かったよ」

「いえ、大したことはしてません」

「いや、君達がいなければまだ被害が出ていたかも知れない」

「まあ、確かにそうですけど…」

「これからも、頼むよ。リンディ提督に報告しておくから」

「分かりました」

そんな感じで俺となのはの初出勤は終わるのであった。

～看板娘と看板息子？～

学校が終わってから帰宅すると玄関にメモが置いてあった。

「何々…『翠屋に来てねｂｙ母より』か。何だろう？俺の誕生日はとっくに過ぎてるし…？」

【何でしょうね？】

俺とエヴァは首を傾げるしかなかった。

着替えてから翠屋に向かおうと玄関に出ると丁度なのはも出てきた。
出掛けるのであろうか、私服に着替えていた。

「なのは？」

「アレス君？」

「お出かけか？」

「うん。メモがあって翠屋に来てって」

なのはの言葉を聞いて何だか妙なモノを感じた。

「俺の方も同じ様に翠屋に来てくれってメモがあったんだが…」

「アレス君も？」

「まあ、とりあえず行ってみよう」

「そうだね」

俺となのはは翠屋に向かって歩き出した。

扉を開けて中に入ると…

「いらっしゃ…あら、アレスちゃんになのは」

「来た来た」

母さんと桃子さん。それに近所のおば…げふんげふん、お姉さん方が集まっていた。

「可愛い～」とか「良いわねぇ～」とか「少年…食べたい」とか。

最後の方は危険な雰囲気が漂っていたのですが！

「何事？」

「何も言わずにコレを着なさい」

そう言って母さんは箱を渡してきた。

何となく、イヤな予感を感じるのだが。

「拒否権は？」

「あると思う？」

「…分かった」

そう言うと俺は更衣室に向かっていった。

ちなみに今日はなのはが泊まりに来る予定だから拒否すれば母さんから夕飯を食べさせられる事態になるのだ。

「そう言う事か」

俺は箱を開けて納得した。

中には執事服が入っていたからだ。

着てみると少し大きいがピッタリだった。

「母さんの仕業だな」

俺の身長が１３５?きっかりで止まると知ってるから用意したのだろう。

ちなみに今は１３０?を超えたかどうかといった具合だ。

とりあえず、店内に戻るか。

「きゃあ！」

「似合ってる…！」

「藤之宮さん、一日いくらで貸してくれるの！?」

奥様方の黄色い歓声が店内に響く。

「かっこいいの…」

なのははメイド服を着せられていた。

「なのは…なのはも可愛いぞ」

ボンッ

なのはの頭から蒸気が出ていた。

「こ、これは…良い」

見ると鼻にティッシュを詰めていた桃子さんが。

…見なかったことにしよう。

「で？説明を求めたいのだが？」

俺は『してやったり』と言いたげな母さんの顔を見ながら訪ねた。

聞けば今日は店員さんが急遽出られなくなったと。

それを聞いた母さんが秘密裏に用意していた執事服を着せて俺に手伝いをして貰おうと。

ちなみになのはは半分おまけらしい。

そしてたまたま近所の奥様方が俺が執事服を着て手伝うと聞いて連絡して呼んだらしい。

『可愛い男の子を愛でる会』と言う集まりらしい。

とどのつまりは『ショタ』の集まりだろ…。

「分かったよ」

断る理由は無いのでとりあえず今日は翠屋でウエイターとしてお手

伝いすることにした。

終わってみたら過去最高の売り上げを記録したとか。

確かに女子高生とか女子大生とかＯＬみたいな客が多かった。

俺の方を見ては顔を赤らめていた。

その中に混じって背広を着た男性客も数人いた。

目線はなのはの方ばかり追っていたが。

どさくさに紛れてロリの方も来ていたのか…。

この世界の海鳴市はショタが多いのか？

何となくやるせない思いをしながらも時は流れていった。

第１５話　日常生活編？（後書き）

はい、今回は３本立ての短編集でした。

特に言うことは無いですねぇ。

とりあえず、アレスの周辺に住む奥様方はショタが多いですｗ

それでは、次回お楽しみに～

第１６話　ついに目覚めた魔導書（前書き）

ついに始まりました、Ａ'ｓ編！

だが、原作通りに進む訳が無い！

完全オリジナルになったＡ'ｓ編…

お楽しみ下さい！

第１６話　ついに目覚めた魔導書

６月３日。

とうとうこの日がやってきた。

明日ははやての誕生日だ。

今夜の０時になったら夜天の書が起動して守護騎士４人が召喚されるのだ。

そんな訳で、俺は八神家に泊まる事となった。

晩ご飯ははやてのお手製で舌鼓を打つ。

９歳でこの腕なら将来が楽しみである。

ちなみに魔法の事を知ってからはウチの母さんやすずかの所のノエルさんとファリン嬢がはやての世話をしに来ていた。

車椅子の生活で９歳の女の子が一人だなんて物騒だしおかしいだろうに。

多分、認識阻害の魔法がかけられていたに違いないだろう。

そんな事はどうでも良い。

今現在の問題は、はやてがお風呂に入れてくれと言ってるのだ。

そりゃあ、足が不自由だから風呂に入るのも一苦労だろう。
それは分かる。湯船に入る時は下手したら滑って怪我とかするだろう。
問題は、俺と一緒に入って欲しいと、裸で。
断ろうとしたが…。
「私の身体はなのはちゃんやアリサちゃん、すずかちゃんよりも見苦しいんか？」
しっかりとなのは達から聞いてたのね。
「…分かったよ」
と言う具合に一緒にお風呂に入ることになった。
風呂に入ってはやての身体を洗ったら言われたよ。
「アレス君、あかん…それはあかんよ…。毎日一緒に入りとうなるわ…」
顔を真っ赤にして言われましたよ。
その後は一緒に湯船に漬かって軽く暖まりましたよ。

ちなみにはやてはこう言いました。

「裸で抱き合うって何か恥ずかしいわ」

その後、はやての頭を軽く叩いておきました。

一緒にゲームしたりと時間が過ぎていく。

そして、はやての寝室に入ってベッドの上に向き合って座る。

時計を見ると時刻は午後１１時５０分。

あと１０分で午前０時になる。

俺の時と同じなら…夜天の書が起動して守護騎士４人が召喚されるはずだ。

原作ははやてのみだったから気絶して大騒ぎになったが。

今回は俺が居る上に知ってるから気絶することは無いだろう。

「なあ、どんな人が召喚されるんや？」

【私も一度しか会ったことはありませんが。確か、女性が３人で男性が１人です】

「ほぉー」

【名前は『烈火の将シグナム』、『鉄槌の騎士ヴィータ』、『湖の騎士シャマル』、『盾の守護獣ザフィーラ』と私の記録に残ってます】

「何かかっこいい名前やね」

【確か当時、最強とまで言われた4人のデータを元に作られたとか。少なくとも戦闘面ではかなりの使い手と思います】

「戦闘面…ね。私は家族が居ればそれでええんよ」

はやては俺の顔をジッと眺めた。

「将来の旦那様や」

「俺より良い男は世の中に沢山居るぞ」

「私はアレス君が良いんよ?」

「大きくなったらな。その時まではやてが俺を好きで居てくれたら…な」

「アレス君は私の事…嫌いなんか?」

「嫌いな訳無いだろ」

「分かった…。でもなのはちゃんやアリサちゃん、フェイトちゃん

にアリシアちゃん、すずかちゃんには負けへんで？」

はやては俺の顔を見て微笑んだ。

時計を見たら丁度０時を指した。

その時、本棚から魔力が溢れ出す。

鎖で封印された本が浮かび、脈動する。

そして鎖が千切れ飛び、本は開いてページがめくれる。

速い速度でめくれるページ。

中は何も書かれていない。

そして本はバタンという音を立てて閉じてはやての前に浮かんで来る。

黄色に輝く十字の紋章。

【起動〈アンファング〉】

声が響き、はやての胸から青白く輝く玉。

はやてのリンカーコアはあんな色なのか。

そして魔法陣が現れてはやてのリンカーコアと合体して光り輝く。

「くっ！」

「まぶしい！」

俺とはやては腕で目を覆った。

数秒経って俺とはやては前を見た。

「っ！」

「『闇の書』の起動を確認しました」

桃色髪の女性が喋る。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

金髪の女性が喋る。

「夜天の主の元に集いし雲」

青色髪の男性が喋る。

「ヴォルケンリッター、なんなりとご命令を」

赤髪の少女が喋る。

４人はひざまずいて目を瞑っていた。

「…」
「…」

俺ははやてを見た。

目を見開いていて視線の先はさっき召喚された４人に向けられていた。

「こりゃっ」

「…はっ！」

俺ははやての頭を軽く叩いた。ペチッと言う音が響く。

「…」
「…」
「…」
「…」

４人はずっと同じ体勢で動かない。

「はやてが命令しないと動かないぞ？」

「そ、そやな…えっと、みんな目を開けてくれないかな？」

はやてがそう言うと全員が目を開けてはやての方を見た。

わずかだが、俺の方も一目見る。

「とりあえず、全員こっちに来て自己紹介やな。アレス君、リビングにお願い」

「うむ」

俺ははやてを車椅子に乗せるとリビングに向けて押して行く。

その後ろを4人は付いて来る。

リビングに着いてから全員をテーブルに座らせる。

「アレス君、何か飲み物をお願い」

「ああ。とりあえず…麦茶で良いな？」

「そやね」

俺は全員分の麦茶を用意して全員の前に置いた。

「…」

「…」

「…」

「…」

全員が怪訝そうな顔で俺を見る。

…とよく見たら桃色の髪の女性・シグナムと金髪の女性・シャマルの視線は…何か引っかかるモノを感じた。

まさかとは思うが。いらない属性（ショタコン）が付与されてるんじゃないだろうな。

「それじゃあ自己紹介や。私の名は『八神はやて』や。この家に住んでる主や」

「…私の名はシグナム」

桃色髪の女性が喋った。

「私はシャマル」

金髪の女性が喋った。

「我はザフィーラ」

青色髪で犬耳を付けた感じの男性が喋った。

「あたしはヴィータ」

赤髪の少女が喋った。

「シグナムにシャマル、ザフィーラにヴィータやな。覚えたで」

はやては全員の顔を眺めながら喋った。

「俺は藤之宮アレス。はやての友人だ」

「え？恋人違うん？」

「まだだろ。今はまだ友人だ」

「いけずやなぁ～。でも、『まだ』って言うことは脈ありやな♪」

どさくさに紛れて何て事を教えようとしてるんだ、この狸嬢は。

「まあ、アレス君の事は置いといて…や…。と言っても皆の事は分かってるで。この書を完成させるんやろ？」

「はい。それを完成させたら主は強大な力を手に入れることが出来ます」

「強大な力…ね。私はそんなのはいらんわ」

「なっ！？」

はやての言葉にシグナムは驚きの声を上げた。

「それに、完成させるには…どうするんや？」

「…魔力です。人から魔力を蒐集して６６６ページになった時に完成します」

「あかん！人様に迷惑かけるなんて…あかん！」

「そう…ですか…」

うなだれるようにしてるシグナム。

他の3人もうなだれるようにしている。

「残念だが、はやて。それはある程度蒐集しなきゃダメだ」

「え？な、何でや？」

【その疑問は私がお答えします】

エヴァが喋ると4人は驚いた顔で俺を見つめた。

「ああ、俺も魔導師だ。言っておくが、はやての味方と言うのは理解して頂きたい。だから恐い目で睨むんじゃない」

ヴィータとザフィーラが目を細めて俺を見つめていた。

【初めまして…いえ、久しぶりと言いましょうか。ヴォルケンリッターの皆様。私は武神の魔導書と呼ばれるデバイスです】

「武神の…魔導書…？」

「何か…ひっかかるわね…」

【どうやら忘れてしまってる様ですわね。お兄様？ブックモードになりますわ】

「ああ」

そう言って俺の首にかかってるネックレスが本の形になる。

「！？」

「そ、そんな!?」

「な、何で…闇の書が!?」

「な、何故だ!?何故お前がその本を!?」

全員が驚いていた。

はやての手にはこげ茶色のカバーに装飾は黄金色の本が。

俺の手には黒いカバーで装飾は真紅の本が。

【私はその闇の書の姉妹機として作られたのです。もっとも、魔法を蒐集するのではなく、武器を蒐集するのですが】

「武器を…蒐集…」

【そして、そちらにも私と同じ管制人格がいるはずです。ある程度のページを蒐集すれば管制人格が起動するはずです】

「と言うことは…その管制人格を起動させなきゃいけないんやな?」

【そうです。それが起動しない事にはその本の能力は発揮出来ないし、修復も出来ません】

「…修復?」

シグナムが怪訝な顔でこちらを見つめてきた。

【残念ですが、その書は壊れています】

「な、何だと!?」

【おかしいと思いませんか?私のマスターは私と契約しています。見ての通り、五体満足です。ですが、貴方達の主、はやてはどうですか?】

「…下半身不随…ですね」

シャマルがはやての方を見ながら呟いた。

【私の記録では、その書と契約しても別に身体に異常は来していません。それと一つ聞きます。貴方達の前の主はどうなったのですか?】

「前の主だと?決まってる。書を完成…む?」

「…おかしいわね…。前の主の記憶が…無い?」

「…確かに…おかしい。記憶が…残ってねぇ…」

「記憶が…無い?」

4人は頭を抱えていた。

【それと、その本が起動してからはやてさんの魔力を吸う量が多くなりました。このままでは…年末辺りに下半身麻痺が胸まで来て命を落とす可能性があります】

「…！」

４人は息を呑んだ。

「マジ…で？」

【マジです。ですから、魔力蒐集を行う事をオススメします】

「そうは言ってもなぁ～。人様に迷惑をかけるのは…」

「ならば余所の世界に行って魔法生物から死なない程度に魔力を蒐集するしかあるまい。後は俺から魔力蒐集するか」

「前者の案はともかく、後者の案は論外で却下や」

０．５秒で否決されました。

「なら、違う世界に行って魔法生物から死なない様に魔力蒐集と言う事で。皆も良いか？」

「うむ…主の為だ…」

「そうですね」

「…分かった」

「従おう」

４人は不承不承ながら納得してくれた。

「さて、それなら俺も魔力蒐集に協力させて貰うからな」

「ええの？」

「良いも何も。姉妹機のデバイスのマスターとして、そして大事な友人を助ける為だ」

「…ありがとう…アレス君」

涙を浮かべてるはやて。

「さて、と。こうなったらアレをやるか」

「え？アレって？」

「エヴァ、起動だ。双剣『天照〈アマテラス〉』と『月見夜〈ツクヨミ〉』だ」

【了解です、お兄様♪】

俺は騎士甲冑を身に纏う。

ヴォルケンリッター達は驚いて身構えた。

「待て待て。俺の足下の魔法陣見てみろ」

「…これは」

「私達と同じ…ですね」

「ベルカ式…」

４人は俺の足下に広がる魔法陣を見て驚いていた。

手には双剣が握られていた。

俺はそれを腰に指してからはやての前に行ってひざまずいた。

「え!?アレス君!?」

「闇の書…いや、夜天の魔導書の主、八神はやて。武神の魔導書の主、藤之宮アレスが剣となり、盾となりて守護することをここに誓おう」

【同じく武神の魔導書、エヴァンジェリン。微少な身ですが私も貴女をお守りいたします】

「了解…や。よろしくお願いするで?かっこいい騎士様♪」

顔を赤らめて俺の顔を見つめるはやて。

そして俺は立ち上がってヴォルケンリッター達の前に立った。

「…これからもよろしくな?」

俺は手を差し伸べた。

４人は顔を見合わせてから同じように俺の手の上に手を差し出した。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム」

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ」

「ヴォルケンリッター、湖の騎士シャマル」

「ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラ」

一呼吸置いてから、言った。

『我らヴォルケンリッター、藤之宮アレスを友として主、八神はやてを守護する事を誓う』

第１６話　ついに目覚めた魔導書（後書き）

はい、ついに召喚されましたヴォルケンリッター！

ヴィータとザフィーラの性格に関しては原作と大差無いです。

シグナムとシャマルはショタ属性が付与されてますｗ

初めて会った時はそこまででもありませんが、段々とおかしくなっていきますｗ

原因ははやてのせいなんですがねｗ

さあ、次回は…

はやての誕生パーティーが開催されます

無論、普通に終わるわけないんですがねｗ

それでは次回お楽しみに～

第17話　誕生パーティー…？（前書き）

アレス「遺言は？」

作者「…俺は悪くない！全て世の中が悪いんだ！」

アレス「そうか。なら入滅しろ」

作者「ぬわ――――――――――――――――――っ！！！」

第17話　誕生パーティー…？

次の日。

その後、明日の予定を立ててから俺達は眠りについた。

住と食は良いとして衣の方が問題あった。

ヴィータははやてのおさがりで何とかなるにしてもシグナム、シャマル、ザフィーラの3人の服は、はやての家には存在しなかった。

「私が主なら、全員の衣食住はきちんと面倒見たらなあかん！」

と言う訳でデパートに買いに来ました。

無論、俺も一緒に来ています。

ってか、はやては自分の誕生日の事を忘れてるみたいだな。

仕方が無いから俺は二重身で分かれてから分身体をなのは達に向かわせて誕生会の準備を進めるように伝えた。

それとフェイト達も一旦こっちに来て貰う為にエヴァも分身体に持たせてから向かわせる。

多分、服とか日用品買うのに時間がかかるだろうから帰るのは夕方になるだろう。

その頃にはパーティーの材料とか色々買ってはやての家に着いてる

頃だろう。

ダイオラマ魔法球内でパーティーだからな。

さて、来るメンツは俺の両親、高町家、テスタロッサ家、月村家にアリサ、それとユーノとユナ位だな。

まあ、分身体にまかせておけば大丈夫だろう。

シグナム、シャマル、ヴィータの3人ははやてにまかせる事にした。

服だけならまだしも、下着までとなったら俺の出番は無い。と言うかそんな出番はいらぬ。

そんな訳で俺はザフィーラの服を見立てる事となった。

「さて、何か希望はあるか？」

「…普段は狼形態だから服はいらぬのだが…」

「ずっと言うわけにはいくまい。たまに気分転換でその形態で出掛ける時に同じ服と言うのも味気ないぞ？」

「…うむ…」

そんなこんなでザフィーラの服を選んでいく。

黒、青、紺系統の服を5着選ぶ。

ザフィーラは肩幅が広いからやや大きめの服を選ぶ必要がある。

そもそも、こんな体格の良い人はなかなか居ないよな。

見てると通りがかる人とか驚いた顔してザフィーラを見ていた。

もっとも、あの獣耳で驚いてるのかも知れないが。

そしてたまに俺とザフィーラの顔を見てから顔を真っ赤にして足早に通る女の人も居た。

もしや、妙な想像をしとりゃせんだろうな…。

俺は心の中で少しため息をつきながらザフィーラの服を選んでいった。

はやて達と合流したのは良いが…。

「…また買い込んだな」

「えへへ…」

照れ臭そうに笑うはやて。

シグナム、シャマル、ヴィータの両手に持たれた買い物袋。
はやての膝上にも買い物袋。
「そっちも結構買ってるじゃねーか」
ヴィータがジト目で俺とザフィーラを見ていた。
ザフィーラの両手に買い物袋、俺の片手に買い物袋。
無論、全部ザフィーラの服だった。
「う～ん…全部コインロッカーの中に預けた方がええんやろか？」
この後、日用品も買わないといけないのだ。
「ってか、帰る時に地獄を見そうなのだが？」
「そうよねぇ～。一旦帰るのも面倒やし…」
「それなら俺のコレに入れよう」
「へ？」
はやては呆然とした顔で俺の腰にあるポシェットを見ていた。
他の４人は『どう見ても入らんだろ…』的な目で俺を見ていた。
「…周りの人は…大丈夫だな」

周りを見渡すが誰もこちらの方は見ていない。

「これぞ魔法のポシェット」

と言って俺は自分の手荷物をスルスルっとポシェットの中に入れた。

「は！？」

はやてが目を見開いて俺の方を見ていた。

「何と…！？」

「ど、どうなってんだ？」

「むぅ…」

「あら…コレは凄い…」

４人は驚いて俺のポシェットを見ていた。

「ほれ、次々に入れるぞ」

そう言って俺は全員に荷物を次々取ってポシェットの中に納めた。

手ぶらになった俺達はファミレスに入った。

無論、禁煙席に向かって俺達は思い思いに席に座る。

6人席に着いたのは良いが、俺の右隣にシグナム、左隣にシャマルが座った。

対面にははやてで隣にヴィータとザフィーラ。

…何か妙な感じがするが…。気のせいだろう。

「ほら、先にそっちが頼め」

そう言って俺はメニューをはやて達に渡す。

「ありがと。う～ん…どれにしようかな…」

「…あたしは…これが…」

ヴィータが指したのはお子様用のメニューだった。

「なら私もこれやな。ヴィータとお揃いや」

はやてもヴィータと同じメニューだ。

「…」

ザフィーラが無言で指差したのは…ステーキセットだった。

はやてやヴィータと同じメニュー指したらどうしようかと思ったが、

その様子なら大丈夫だ。

「なら次はそっちや」

そう言ってはやてがメニューを渡してきた。

俺はメニューを開く。

シグナムとシャマルも隣から覗き込んでくる。

覗き込んでくるのは良いが、俺の肩の部分に柔らかいモノが当たってるのだが…。

「とりあえず、満腹になりたいならここら辺のメニューで、程々にしたいならここら辺だ」

そう言って俺は二人に説明する。

「ふむふむ…」

「へぇ…」

ますます俺の肩に当たるのが激しくなってるような気がするのだが…。

ちらりと二人の顔を見るが全く気にしていない様に見える。

前を見ると、自分の胸を見ながらため息をついてるはやての様子が見えたが俺はスルー。

「私はコレだ」

「私はコレ」

シグナムが指したのはハンバーグセットでシャマルはスパゲティ・カルボナーラだった。

「じゃあ、俺はコレだ」

俺が指したのはシグナムと同じハンバーグセットにサラダをつけたヤツだった。

「じゃあ、店員さん呼ぶな～」

そう言ってはやては店員を呼び出すボタンを押した。

その後俺達は何事も無く食事を終えた俺達は日用雑貨を買って。

そしてヴィータに『のろいうさぎ』を買ってから家路に着いた。

家に着いた俺達は荷物整理をしてからリビングで少しくつろいだ。

「今日の晩ご飯は何にしようか～？」

「今日は作らなくて良いぞ」

「へ？」

「これから全員で行くところがあるからな」

全員が不思議そうな顔で俺の方を見る。

「こっちだ」

そう言って俺達ははやての部屋の隣の空き部屋に入る。

家具も無い部屋の真ん中にポツンと置いてあるのはダイオラマ魔法球。

その隣に魔法陣が描かれてる。

まあ、俺の分身体が来てたから抜かりは無いだろうとは思うが。

「アレス君…これって…」

「はやての想像通りのモノだぞ？」

「…なるほどなぁ…」

ニヤリと口元を釣り上げて微笑むはやて。

「これは…？」

「ダイオラマ魔法球。魔法の箱庭と言ってな…」

俺は説明した。

「ほぅ…」

「スゲーな…」

「ベルカ時代でもこんなのは無かったわ…」

「と言うわけだ、俺とはやてが入ったら同じようにそこの魔法陣の上に立ってくれ。そうしたら中に入れる」

４人は頷いた。

その前に、変なヤツが来ないように結界を張っておいて…と。

それと空間を操るヤツが来ても良いように少し空間をいじって…と。

「それじゃ、中に入るか」

俺達はダイオラマ魔法球の中に入った。

中に入るとはやてとヴォルケンリッターの４人は驚いていた。

豪華な城に周りは自然に囲まれた環境。

ちなみにオプションの砂漠とか極寒の雪山とかは繋げていないから行くことは出来ない。

手すりも何もない高所の所を５００m歩けば城に到達する。

さて、俺の分身体が全員をあの城の中に招待してるはずなのだが。

「さあ、行こうぜ」

城の大広間の扉前に着いた。

「なあ、何で私らを…」

「入れば分かるさ」

そう言って扉を開けて中に入った。

鳴り響くクラッカー。

『お誕生日おめでとう！！！』

中に入るとなのは達が居た。

「へ…？」

呆然とするはやて。

「ほら、今日ははやての誕生日だろ？」

「…あ」

「ほら、行こうぜ」

「…ありがとな…アレス君…」

一通りヴォルケンリッター達の紹介も終えて。

全員が思い思いの場所で会話をしていた。

まずはシグナム。

高町一家の所に居ました。

やはり剣士と言う所に惹かれたのか、士郎さんと恭也さん、美由希さんの所で会話をしていた。

時々俺の方を見るのは…何故だ？

ヴィータは黙々と料理を食べている。

隣でアリシアも同じように料理を食べている。

時々、アリシアがヴィータに料理をあげたりしている。
悪くない雰囲気のようだ。
ザフィーラはアルフ、リニスさんと一緒に居る。
ふと視線を変えて一角を見ると。
母さんと桃子さん、プレシアさんが居た。
会話が弾んでいるのか、3人とも微笑んでいた。
だから何故俺の方を見るのか…。
「アレス君」
俺を呼ぶのはなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかの5人だった。
「と言う訳で。アレス君には洗いざらい吐いて貰うことにしたで」
「何がと言う訳でだ。俺は何も悪いことはしとらん」
「ダメだよ?アレス君の秘密は私達が知る権利があるから」
すずかはサラッととんでもないことを言ってるように思うのだが。
「秘密も何も、これ以上は何も無いのだが…」
「12人まで分身出来るの聞いてなかったけど?」

なのはの台詞で少し背筋が寒くなった。

「…何が？」

「フェイトちゃんから聞いたの。アレス君は最大１２人まで分身出来るって」

「フェイト？」

「ごめん…私も命は惜しい…」

どんな事言われたんだ、フェイト…。

「１２人…」

そう言ってアリサはなのは、フェイト、アリシア、すずか、はやてを見る。

「まだ半分ね」

「何が！？」

「何がじゃないわよ。アンタの事だからまだ増えるんでしょ？」

「言ってる意味が分からんのだが…」

「お嫁さん候補だよ？」

すずかが底冷えする様な声で言う。

「いや、増やしても日本は一夫一婦制じゃないか」

「法律は破るためにあるんだよ？」

なのはの台詞は明らかにおかしかった。

「おかしいから！その論理はおかしいから！」

「ええツッコミやなぁ」

「大丈夫だよ。私とアリシアは妾でも良いから」

誰だ、フェイトにこんな事を吹き込んだのは…。

「二号さんかぁ…。まあ、アレス君と一緒に過ごせるならええかな…」

「私もお姉ちゃんは恭也さんと結婚するから大丈夫かな…」

「う～私は正妻が良いなぁ…」

はやて、すずかは妾でも構わなくてなのはは正妻か。

「…」

俺は無言でアリサを見た。

「…あたしも正妻が良いけど…。でも、アレスとつき合いが一番長いのはなのはなのよね…」

アリサはブツブツ呟いていた。

「良いわ。正妻はなのはに譲る。あたしも妾で良いわ」

ってか、何でこんな話になったんだ？

「…アリサは確か一人娘かと思ったのだが…？」

「パパとママには言っておいたわ。『アレスに初めて破られた』と」

「ぶ――――――――――――――――――――っ！！！」

俺は盛大に噴き出した。

「わわっ」

「ひゃっ」

「アリサ、お前は一体どんな説明したんだ！？」

「どんな説明も何も…将来の旦那様に決まってるじゃない」

サラリと旦那様発言かよ。俺はフラグを立てたつもりは無いのだが。

「まあ、色々ツッコミたい事はあるが、会社はどうするんだよ」

「その点なら大丈夫よ」

「ほぅ？」

「あたしの従兄弟に継がせるわ。同い年だしね」

アリサに従兄弟が居るとは初めて知った。原作でもそんな描写は無かったし。

「ふーん。どんなヤツだ？」

何となく、面白そうなので聞いてみることにした。

「平賀。平賀才人って言うのよ」

「…」

ちょっと待て。

もう、何処からツッコミを入れて良いのか分からなくなってきたぞ。

これはアレか？将来は空中に浮いた鏡に入って異世界に召喚されてピンク髪のツンデレ女の子に駄犬扱いされるのか？

「これがとんでもないコンジョー無しでね。駄犬も良いところなの」

…アリサと某ピンク髪の少女が重なって見える。

中の人が同じだからって良いのだろうか…。

ってか、そんなコンジョー無しなヤツに会社継がして良いのか？

まあ、アリサの家庭事情だから口出しはしないが…。

「なんや、『ゼロの使い魔』の主人公と同じ名前やな」

「そうだね…。将来ホントにハルケギニアに召喚されたりして」

はやてとすずかが呟いていた。

どうやら『ゼロの使い魔』は存在するみたいだ。

「あ、そう言えばあの小説の主人公と同姓同名だったわね。けど、あっちの方がまだマシよ」

アリサが口をとがらせていた。

「そ、そうなのか…？」

「そうよ！全く、あいつときたらね…」

そう言ってアリサの愚痴が始まったのであった。

「少し、良いか？」

俺の所に来たのはシグナムだった。

「どうした？」

「主はやての為に手伝ってくれると言ったよな？だが、我々はアレスちゃんの腕がどの程度なのか分からない」

…ん？

今、このピンク髪はサラリと俺をちゃん付けで呼んだ様な気がしたのだが。

…まあ、ツッコミを入れるのは止めておこう。

「ああ、そうだな。紹介も兼ねて模擬戦でも行うか？」

「それはありがたい提案なのだが、まだ我々は主から騎士甲冑を承ってないのだ」

そうか、ヴォルケンリッターのあの騎士甲冑デザインを考えたのははやてだったよな。

「なるほど。それなら…手伝いする人があと2人いるからその2人の紹介も兼ねる事にしようか」

「すまない」

「良いって事よ」

そう言って俺はなのはとフェイトの所に行って説明することにした。

と言う訳で始まった模擬戦。

なのはとフェイトの二人組と俺一人の模擬戦だ。

「さて、頼むぞ？エヴァ」

【了解です、お兄様】

そう言って騎士甲冑を身に纏う。

手に持たれたのは杖・レーヴァテインだ。

「フェイトちゃん、アレス君と戦ったことは？」

「あるよ。何回か、模擬戦をやったことがある」

「勝ったことは？」

「ダメ。リニスとアルフと組んで3対1で戦っても勝てなかった」

「…やっぱり…」

「なのはも？」

「うん。私もユーノ君とユナちゃんと組んでも勝てなかったの」

二人の会話が耳に入ってくる。

下の方からは…。

「いけー！アレスを叩きのめしちゃえー！！」

とアリサのヤジが飛んでいた。

そんなに俺が負ける姿を拝みたいのか。

ひょっとして、俺がいたぶられる姿を見て快感を得たいのか。

そうか、アリサはＳだったのか。

「だから、全力でいかないとアレス君に勝てないの！」

そう言ってなのはの魔力弾が３０個一斉に襲いかかってきた！

１５分後。

「きゅ～」

「もうダメ～」

なのはとフェイトは気絶していた。

「どうだ？こんなもんだが、手伝うことは出来そうか？」

「…」

「…」

「…」
「…」

ヴォルケンリッターの４人は呆然と俺の方を見ていた。

「…シグナム？」

「あ、ああ！すまない。大丈夫だ、アレスちゃんのその腕なら充分過ぎる」

「う、うん！大丈夫よ！」

「すっげーな…さすがのあたしでもあの砲撃魔とはあんまりやりたくないぜ…」

「うむ…」

ヴォルケンリッターの４人の評判は上々だった。

ちなみに台詞順番はシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの順だ。

「あ～少し良いかい？」

そう言って来るのは士郎さんだった。

「どうしたのですか？」

「恭也と美由希も手伝いたいと言ってるのだが…」

なるほど。

二人は既に気で空を飛べる様になったし、飛び道具も持ってる。

接近戦も結構出来る。これならローテーション組んでも良いし、少々強い所に行っても大丈夫だろう。

「大丈夫ですよ？」

「それで、アレス君と模擬戦がやりたいと言ってるのだが…」

「え？」

「いや、ウチでやってるのは剣術のみの鍛錬だよね？戦いの模擬戦はやってないよね？」

確かにこういった模擬戦は恭也さんと美由希さんとはやってない。

「それは…全く構いませんが…？」

こうして俺は連続で模擬戦を行う事になった。

「…アレ？」

気が付いたら目の前にはかなりの人数が居た。

その後、アリサが『どれくらいの人数ならアレスを沈められるのか』と言った事が発端になって。

そこへエヴァが【全員でも大丈夫ですよ】と言ったからさあ大変。

あれよあれよと参加する人が増えて…。

今に至った。

俺の前に居るのは、なのは、フェイト、ユーノ、ユナ、アルフ、リニスさん、恭也さん、美由希さん。

8対1ッスか！？

流石にレーヴァテインだとキツイ…かな？

「あ～…」

俺は手を挙げた。

「拒否は認めないよ？」

「いや、武器の変更を求める」

「それくらいなら構わないよ」

「ありがたい。エヴァ、『天照〈アマテラス〉』と『月夜見〈ツクヨミ〉』を頼む」

【了解です、お兄様♪】

そう言って俺の両手に片刃の双剣が現れる。

「悪いな、流石にこの人数になったらコレでないとキツイ」

俺はそう言って構えた。

そして、模擬戦が始まった。

―はやて視点―

さすがのアレス君でもキツイんちゃうかな?

8対1やろ?

普通なら袋叩きや。

そう思っている時期がありました。

「…何でや…」

私の目に映るのは8人からの攻撃を綺麗にかわし、そして防ぐアレス君の姿が見えました。

そして、フェイトちゃんや恭也さん、美由希さんからの剣戟を防ぎ、

かわす。

なのはちゃんの砲撃、魔力弾をかわす。

ユーノ君、ユナちゃん、アルフさんのバインドをかわす。

リニスさんも指示を出しつつ魔力弾を発射してるけど、ことごとくかわして、時に剣で切り裂いている。

あかん…アレはもうバグの領域や。

確か、前世はバグキャラのジャックを沈めていたとか。

バグじゃなきゃチートかな?

「…」

「…」

アリサちゃんとすずかちゃんを見ると呆然と様子を眺めていた。

「…」

「…」

「…」

「…」

ヴォルケンリッターの4人を見ても同じ様子で眺めていた。

「…シグナム?」

「…素晴らしい」

「シグナム？」

「あ！す、すみません、主はやて」

「なあ、シグナム達はアレス君に勝てる？」

「…正直、勝てる自信がありません」

「そっか…やっぱりアレス君は相当強いんやな？」

「はい。アレスちゃんのあの二刀流は天性と相当の鍛錬を上乗せしたまさに『剣神』と呼んでもおかしくない腕前です」

…シグナムが何かサラッとアレス君の事をちゃん付けしとるのが気になるんやけど…。

「ヴィータはどうや？」

「あたしもシグナムと同意見だ。あいつの動きは…ホントに9歳児の動きか？あたしには…相当の年月を重ねた老練の戦士の様にも見えるぜ」

やっぱり。

アレス君のあの両腕の動き。独立して綺麗に動いてる。

ってちょい待ち。関節の動きがおかしいわ。

曲がってはいけない方向に曲がってる…。

そして、背後から魔力弾が来ても見向きもせずにかわしたり魔法の盾で防いでる。

まるで、背中にも目があるように見えるわ。

「シャマルはどうや？」

「私は後方支援ですから…。アレスちゃんにかないっこありません」

シャマルもちゃん付けか…。

「なるほど。で、ザフィーラは？」

「…正直、厳しいと言うのが現実です」

「そっか～アレス君はそんなに強いのか～」

「はい。先程の杖を使うのならば我ら４人がかりでも何とかなると思いますが、あの双剣ならば我ら４人がかりでも歯が立たないかと」

シグナムの言うとおり、アレス君のあの剣技は…素人の私から見ても凄いとしか言いようが無い。

なのはちゃんのお兄さんやお姉さんも双剣…じゃなくて小太刀二刀で戦ってるけど…。

あ、二人の小太刀が弾かれた。

…その後、二人が気絶したみたいやな。

いつの間に一撃入れたんやろか。私の目には見えなかったわ。
はぁ～…仮に魔法が使えたとしてもアレス君には一生勝てへんかも。

―はやて視点・終了―

「!?」

手足が動かない!?

見れば魔力の鎖が俺の四肢に絡みついていた。

「やっと、捕まえた…」

「これなら、さすがのアレス君でもそう簡単には!」

よく見るとユーノ、ユナ、アルフ、リニスさんの４人共同のバインドだった!

「これならアレス君を沈める事が出来るの!」

「今回は勝たせて貰うよ!」

上空にはなのはとフェイトの2人。

2人のデバイスに魔力光が集まってくる。

…まさか…『スターライト・ブレイカー』と『プラズマ・ザンバー・ブレイカー』か!?

いかに俺でも原作より3倍以上強化されたスターライト・ブレイカーとプラズマザンバーブレイカーの同時攻撃は防げない!

【お兄様!】

「く、凶悪なバインドだな!」

【お兄様でもあの直撃を喰らっては…】

「さすがに撃沈だ。だから、咸卦法を使う」

ネギもどきと戦った時はアリスの身体だったから大丈夫だったが、転生してから使ってない。まあ、大丈夫だろう。

身体がまだ出来上がって無いから長時間は使いたくはないが。

【それなら大丈夫ですね】

「さて、早くしないと超巨大な砲撃が来るぞ。っと、手は塞がってるから…体内で合成だな」

右手に気、左手に魔力を込めて合成した方がイメージしやすいが、慣れてきたら別に体内で合成も出来る。

「受けてみて！これが私の『全力全壊』！！スターライト・ブレイカー！！！」

「行くよ！プラズマ・ザンバー・ブレイカー！！！」

桃色と金色の砲撃が俺の方に向かって飛んでくる。

もはや回避は不可能。

「くっ！気と魔力の合一！」

その瞬間、四肢に絡まっていた鎖が砕け散る。

「エヴァ、シールドを！」

【了解です！装甲手楯〈パンツァーシルト〉！】

「闇の盾〈ダークネス・シールド〉！！」

俺の前に展開されるベルカ式魔法陣の盾と漆黒の盾が現れる。

その瞬間、身体に強烈な衝撃が襲いかかってきた。

「ぐぅ…！！！」

【うぅ…！】

長い砲撃が続く。

【ああ、ダメです…！もう持ちません！】

エヴァの言葉通り、ベルカ式の盾にヒビが入り、粉々に砕け散った。

そして、俺が作った盾に直撃する。

「うぁ…！これだけの砲撃を喰らったのは久しぶりだ！」

俺の盾にもヒビが入ってきた。

咸卦法で強化したにもかかわらず、俺の盾を破るのか…！

なのはとフェイトの強烈かつ凶悪な砲撃に俺は舌を巻くしかなかった。

「だ、ダメか！俺の盾でももたねぇ！」

【精神甲冑〈パンツァーガイスト〉！！！】

エヴァが全身を纏うタイプの装身型バリアを展開する。

後は、俺の騎士甲冑の強度に期待するしかない。

両手の籠手に気を纏わせて強度を上げる。

その刹那、俺の盾も砕け散って全身に衝撃が襲いかかって来た。

「ぐぅおぉぉぉぉ！？ホントにコレが非殺傷設定か！？」

両腕を顔の前に上げてガード体勢で砲撃を防ぐ。

そして、３０秒くらい経ってから砲撃が止んだ。

「これ、普通のヤツならとっくに撃沈だよな？」

【ええ、お兄様だからこそ耐えられたかと。あと、私でも何とか耐えられるけど…】

周りからは「さすがにコレを喰らって耐えたら…」とか「アレを耐えられたらもう勝ち目無いよ」とか聞こえる。

そして俺は言った。

「ならばもう勝ち目は無いと言うことだな？」

「っ！！！」

全員が息を呑んだ。

下の方からは「何であの巫山戯た砲撃を耐えれるのよー！！」とアリサの野次が聞こえたが。

「悪いな、さすがにアレは耐えられそうになかったから咸卦法を使わせて貰ったぞ」

「そ…そんな…」

「ま、全員良かったぞ？俺に咸卦法を使わせるまで追い込んだんだからな」

俺は双剣を腰に差して無手になる。
ちょっとタカミチの技を借りるとしようか。
「さあ、多分、大丈夫だろうけど、全員耐えろよ？」
下の方から「あかん！みんな逃げて～！」とか「アレが来るよ～！」とはやてとすずかが叫んでいた。
どうやら2人は俺がこれから使う技が分かったみたいだ。
「とりあえず…全員に一撃プレゼントだ！『豪殺居合い拳』！！！」
左右の手から放たれる拳圧が全員に襲いかかる。
轟音が辺りに響き渡る。
「うぁ！」
「うそっ！？」
「そ、そんな！？」
「ぐっ！」
「ダメ！」
「にゃあ！？」
全員シールドで防いだが、なのは以外シールドにヒビが入っていた

のを見逃すはずも無かった。

「もう一丁！」

連続で放たれる居合い拳。

ガラスが砕ける様な音が周囲に響いてなのは以外全員吹っ飛ばされ、なおかつ気絶していた。

さすがなのはのシールドはそう簡単に破れそうにない。

ミッド式の魔法陣と後ろに六角形のシールドが現れていたから。

ＡＴフィールドにしか見えないが。

「うぅ～…」

「あの盾は半端無い堅さだな…」

【そうですねぇ～】

「…なら、斬るか」

【分かりました。カートリッジロードですね？】

「ああ」

俺は双剣を手に取る。

「エヴァ、カートリッジロード！！」

【了解！起爆〈エクスプロズィオーン〉！！！】

双剣から一本ずつ薬莢が排出される。

「そんな…！」

「いくぞ、なのは！その盾、斬り裂いて見せよう！！神鳴流奥義・二刀連撃斬岩剣！！」

その瞬間、なのはの盾は四分割に切り裂かれて砕け散った。

そして、なのはの首筋に剣を当てて寸止めする。

「…参りました…なの」

全員を一通り治療したあとシグナム達に総評を聞いてみた。

「合格だ。むしろ我々がお願いしたい位だ」

「そりゃあ良かった」

「しっかし、あの巫山戯た砲撃を耐えるのか～」

ヴィータが目を丸くしていた。

「うむ。いかに我々とて、あの砲撃を耐える自信は無い…。ザフィーラは？」

「…状況次第だな。それでも防げる率は1割を下回るだろう…」

「一番防御が高いザフィーラでそれなら私は秒殺ですね…」

シャマルが苦笑いしていた。

ってか、ザフィーラ…アレを何とか防げる方が凄いと思うのですが。

「アレスー！」

遠くからすっ飛んでくるのはアリサだった。

後ろからすずかも来る。

「どうした？」

「どうしたもこうしたも…あ、ああ、アンタ！あんな波動砲みたいなの喰らって大丈夫なの！？」

「…まあ、咸卦法使ったし」

「…なるほどね。アレ使ったから何とか防げたと？」

「ぶっちゃけ言うとその通り」

「うぅ～ん…アレス君に勝とう思ったらアレを超える砲撃が必要なんか～」

顎に手を当てて考え込むはやて。

「アレを超える砲撃って…」

「人の身で出せるのかしら…？」

アリサとすずかも同じ様に考え込んでいた。

そんなに俺が負ける姿を拝みたいんかい。

「さて、風呂に入ってさっぱりするかな」

「ねぇ、アレス」

「どうした？ユーノ？」

「僕達、何でこんな所に居るの？」

「…気にするな」

「気にするよ！」

俺とユーノは大浴場の入り口で佇んでいた。

ユーノの声が浴場内に木霊する。

「ほらほら、ユーノ♪」

ユナがユーノの手を引っ張って行った。

「うあぁぁぁぁぁ……」

とりあえず、俺は胸の前で十字を切っておいた。

「南無三…」

「ほら、アレス君も行くよ」

「えへへ、背中流してね♪」

俺はなのはとアリシアに2人に手を握られて浴場に入っていく。

どうしてこうなったのかな…。

考えるまでもないが。

なのは、アリシア、フェイト、はやて、アリサ、すずかの6人に一緒にお風呂に入るように命じられ。

そこへ母さんが桃子さんとプレシア女史を口車に乗せてから3人で俺に入るように命じて来て。

シグナムとシャマルははやての口車に乗せられて俺と一緒に入るよ

うに懇願してきた。

このままだと『淫魔人』から『淫魔王』の称号に昇格しそうだったからユーノを連行して来たのだ。

旅は道連れと言うヤツだ。

ちなみに男性陣に救援を求めようとしたが、父さんは母さんに睨まれて目を逸らし。

士郎さんと恭也さんは桃子さんに睨まれて目を逸らし。

ザフィーラはシグナムとシャマルに睨まれて目を逸らしていた。

何かね、君達は全員尻に敷かれてるのかね？

パワーバランスは明らかに女性陣の方に傾いていた。

…全く、こんな事ばかりしてたら読者から『アレス、モゲろ』とか『爆発しろ』とか言われるじゃないか。

そう思いつつも俺は例によって女性陣の背中を流す事となった。

「多すぎるんだが…」

身体を洗う依頼を受けたのは。

母さん、桃子さん、プレシア女史。

なのは、アリシア、フェイト、はやて、アリサ、すずか。

おまけにシグナムとシャマル。

多すぎるわ！そんなに洗ってたら逆上せて倒れるわ！

「流石に多すぎる。1…2…3…11人か。二重身〈ドッペルゲンガー〉」

俺は11人に分裂してからそれぞれの所に行った。

「おわっ！アレス君が増えとる！」

「実際に見ると…何というか…」

「…」

「…」

シグナムとシャマルは呆然と俺達を見ている。

「…おかしいだろ、あいつ。ホントに人間か？」

ヴィータがリニスさんに身体を洗われつつ呟いていた。

「一応、人間ですよ？」

リニスさん、一応じゃなくてれっきとした人間です。魂は違いますが。

「ん～」

全員の身体を洗い終えて俺が身体を洗っていると。

「…どうした？」

見るとすずかが俺の横で立っていた。

「確かに…違うなぁ」

左からははやての声が。

…なんだろう。もの凄く、イヤな予感を感じる。

「…何の用だ？ってか、何処を見てるんだよ…！」

すずかとはやての視線は…俺の股間、つまりは男性専用アームドデバイス（仮称）を見ていた。

「いやね？よく漫画とかで男の子の…ソレって見ると可愛いらしく描かれてるから…」

「実際はどんなのかなぁと」

お前ら、どんだけマセてるんだ。

「ユーノ君の方が漫画のアレに似とったなぁ…」

「そうだね…。アレス君のは…亀の頭？そんな感じ…」

…どうやって説明しろと。ってか説明出来ねぇ！！！

そしてユーノ。ご愁傷様と言えば良いのか。

「ふっふぅん～♪アレスのは…何か…違う。ユーノと形が違う…」

アリサの声が聞こえてきた。

…横を見るとユーノは壁際に追い込まれてなのは、アリシア、フェイトにじっくり観察されていた。

隣ではユナが解説？らしき事をしてるようにも見えるが…。

見なかったことにしておこう。

《アレス、助けて…》

《すまん、俺も似たような状況になりつつあるんだ…》

《そんな…》

《骨は拾ってやるぞ》

《うわぁぁぁぁぁん！！！》

念話でユーノの断末魔を聞いた後。

周りには6人の少女達が集まっていた。

そして、視線は俺の股間のアームドデバイス（仮称）だった。

これってセクハラで訴えて良いですか？

「ねえ、アレスお兄ちゃん」

アリシアが屈託のない笑顔で聞いてきた。

周りの5人を見ると瞳を輝かせている。

「うん？」

「アレスお兄ちゃんとユーノ君の…どっちが正しいの？」

…正直に言うと俺の方が正しいのだが。

「…俺の方だな…」

「そうなんだ～。で、コレって何の為に付いてるの？あたしやフェイト、周りのみんなにも付いてないし～」

…！！！

ついに来てしまったこの質問…！

正直に答える…訳にはいかないだろ！

横目で大人組を見ると…。

アルフはニヤニヤしながら様子をうかがってる。

お前は後で模擬戦（と言う名を借りた私刑）だ。

シグナム、シャマル、ヴィータは何事も無かったかのように湯船につかってる…が、何か、耳がダンボの様に大きくなってる様に見えるのは気のせいか？

桃子さん、プレシア女史、リニスさんは『あらあら、微笑ましい光景ですね』と言いたいような微笑みで見てる。

保護者なら止めてください！

母さんは『あらあら、罪作りよね？アレスちゃん』と言いたげなにこやかな笑みで見ていた。

母さんが来るとロクでも無いことになるのは間違いないからあえて無視することにした。

ユーノは『お婿に行けなくなったちゃった…』とか言って湯船につかっていた。

大丈夫だ、ユナがきちんと引き取ってくれるから。
周りの援軍は全く期待出来ないと言う事は分かった。
こうなったら…。
「あ！あんな所にスキマ妖怪が」
「どこや！どこどこ！」
「紫〈ゆかり〉！？」
はやてとすずかがエラい勢いで食い付いてきた。
「へ？」
「スキマ妖怪？」
なのはとアリサは不思議そうな顔で俺が指差した所を見る。
「今だ…！」
俺はジャンプしてから逃れようとしたら。
「ダメだよ？」
背中から抱きつくのはフェイト嬢だった。
おおぅ！微妙に柔らかい感触が…！

そうか、膨らみはじめてるのか！

「お兄ちゃん？コレの説明を求めてるんだよ？」

アリシア！俺の男性専用アームドデバイス兼ユニゾンデバイス（仮称）を握るんじゃありません！

そんなことしたら某悪魔将軍の硬度１０、ダイヤモンドアーマーみたいな堅さになるじゃないか！

これだとラチがあかん！

《プレシアさん、救援を求む！》

《あら、ソレの説明なら貴方が適任でしょう？》

《確かにそうだが。まだ、早いだろう？》

《教えても良いわよ。何事も早い方が良いわ》

《良い訳あるか。教えたらイヤな予感がするんだ》

《大丈夫よ。２人とも月のアレはまだだから》

《一年間、俺との会話が一切無くても良いなら》

《すぐに助けに行くわ》

全く、この人は何を考えてるのか。

いつぞやアリシアに説教を喰らってから頭のネジが2、3本は抜けてしまったのかも知れない。

そのあと、プレシア女史と母さん、桃子さんが来てから事態は何とか収拾を迎えた。

「お兄ちゃん、いつか教えてねぇ！」

アリシアの台詞に俺は苦笑するしかなかった。

そんなこんなでこの魔法球の中で3日過ごした。

外ではまだ3時間しか経っていない。

そして俺達は別れを告げて八神家を後にしたのだった。

第17話　誕生パーティー…？（後書き）

着実に話が変な方に向かってますが

この小説の仕様ですw

いや～、頭では構想は色々練ってますが…

文にするのがねぇw

毎日更新してる人を見ると頭が下がる思いですよ

こんな私にも更新速度を分けてください！w

それでは、次回をお楽しみにしてくださいませ

第18話　魔力を蒐集しよう（前書き）

アレス「…」

作者「…」

アレス「…」

作者「スクランブル・ダーッシュ！！！」

アレス「逃がすか！てめぇ！！」

第１８話　魔力を蒐集しよう

と言う訳で俺達はとある世界にやって来た。

ちなみにこの世界のデータはエヴァの中に残っていたので全員のデバイスにソレを転送しておいた。

メンツはまずは下見と不測の事態を防ぐために戦える人全員だ。

つまり…俺、なのは、フェイト、ヴォルケンリッター、ユーノ、ユナ、アルフ、恭也さんに美由希さん。

プレシア女史とリニスさんはアルハザードにいる。

これだけの手練れが居れば大抵のヤツに負けることはないと思う。

どんな世界なのかはエヴァが教えてくれなかったのでまだ分からない。

エヴァ曰く、「お兄様好みの世界ですわ」と嬉しそうに言っていた。

着いた場所は牧草みたいな草が生えた丘みたいな場所。

周りに居るのは草食恐竜みたいな動物…ってちょっと待て。

俺は牧草らしい草が生い茂ったところでモシャモシャと草を食べてる動物を見て唖然とした。

《なあ、エヴァ？》

《どうされました?》

《俺の記憶が間違ってなければ…コイツ…アプトノスじゃねぇか?》

《さすがお兄様、きちんと覚えておられますか》

《ひょっとして…この世界って…》

《お兄様の予想通り、『モンスターハンター』の世界ですわよ?》

《おー…》

何とも言えない気分になった。

リアルモンハン生活を送ることになるとは。

ちなみに前世でも、前世の前世でもモンハンシリーズのお世話になってる。

2Gとか3とか…。

以降も出ていたがここでは割愛する。

「どうだ?こいつは」

モシャモシャと草を食べてるアプトノスを眺めつつ俺は聞いてみた。

「ん~…大した魔力じゃねぇな」

とヴィータが言う。

「そうだな。これでは1ページにもならないな」

シグナムの言葉になるほど、と返答する。

やはり最低でもクック先生並みのヤツが良いみたいだ。

上手い具合に見つかれば…と思ったら空を飛ぶ物体が。

「アレは？」

「…イケるな。よし、アレにしよう」

俺達は空を飛ぶ物体に目を付けた。

鳥の様な感じの竜種、鳥竜種と言う分類に入るモンスター、『イャンクック』２匹。

俺達はそれの後をつけていった。

草原みたいな開けた土地に着陸したイャンクック２匹。

見ると蒼色と桃色のコンビだ。

亜種と普通種のセットだ。

「…なんか、はやてちゃんやすずかちゃんがやってるゲームで見たことあるの…」

なるほど、モンスターハンターは存在するのか。

「そうか、今度はやてとすずかに聞いてみろ。多分、教えてくれるぞ」

「うん」

「さて、とりあえず俺が行ってみる。皆はあいつの行動パターンを記憶してくれ」

全員が頷くと俺は蒼色のイャンクックに向かって走り出した。

戦いは15分位で終わらせた。

結果？

もちろん、頭を殴って気絶させましたが？

イャンクックとイャンクック亜種は気絶して倒れていた。

ちなみに動きはゲームと大差ない行動パターンでした。

まあ、実際の動きとゲームを一緒にしてはアレだが、大体似ていた。

「しっかし、あっさりと倒したな～」

ヴィータが少し驚いた顔で俺の方を見る。

「うむ。だが、アレスちゃんの動きは…全て先読みしていた。まるで…知っているかのように」

顎に手を当てて考え込むように言うシグナム。ちゃん付けが雰囲気をぶち壊しているが。

「ああ、答えは簡単。この世界の奴らはな、俺達のとあるゲームに出てくるモンスターと一緒だから」

「何？」

「とりあえず、シグナム達ははやてに聞いてみろ。『イャンクック』と言う名のモンスターを知っておられますか？と」

「う、うむ…」

「恭也さんは忍さん、なのはとフェイト達はすずか、美由希さんは…同級生の男子に聞けば良いんじゃね？」

「…なんかあたしの扱いがテキトーに聞こえるけど…」

「気のせいじゃね？」

「ぶー」

頬を膨らませてる美由希さん。

シャマルが二頭のイャンクックから魔力を蒐集する。

「…４ページですね」

「おお、意外と魔力持ってるな」

「こんな調子なら早くいけるかもな」

「と言うわけで、次回は皆に戦ってもらおうかな」

「「「

「そう…だな。主の為、ここで引く訳にはいかぬ」

シグナム達のやる気が上がった。

「御神の技が通じないとか言わないですよね？」

「う…」

「そこまで言われてはとーさんの顔に泥を塗ってしまう…。美由希、逝くぞ」

「ええ！？恭ちゃん字が違うよ！」

その時、上に現れる物体。

「…ほぅ？」

俺の目には見えた。

正統派の竜の形をした…竜種。飛竜種のリオレウスとリオレイア。

クック先生の次にいきなりキツい様に思えるかも知れないが、このメンツなら大丈夫だろう。

「あ、次の目標はアレね」

俺は空を飛ぶリオレウスとリオレイアを指差した。

大きさは１５ｍ前後の西洋風の竜だ。

リオレウスは赤い風貌でリオレイアは緑色の風貌だ。

「…ねえ、私にはアレは竜に見えるんだけど？」

引きつった顔で俺を見るなのは。

なのはの火力なら充分戦えると思うのだが。

「ん～？竜だねぇ」

「…サラリと言ってるけど…」

「アレス…本来なら僕達も逃げたいんだけど…」

ユーノが冷や汗を流しながら言う。

ってか、ユナが何事も無かったようにユーノの腕に抱きついてるのだが。

「大丈夫、大丈夫。俺の前世ので付けられた二つ名にこんな名があったんだぜ？」

「アレス君の前世…あ…」

なのはが思い出した様に呟いた。

「…どんな二つ名だよ？」

ヴィータが半目で訪ねてきた。

「『竜殺し〈ドラゴン・スレイヤー〉』だよ」

「「「「「「「「「「…」」」」」」」」」」

全員は沈黙していた。

【懐かしいですわね～。たまにお兄様、凶暴化した火竜とか素手で殴り倒していましたし】

「…一つ聞いて良いか？」

「どうした？」

「オメー、ホントに人間か？」

「失敬だな、ヴィータ。刺されたら血も出るし、大怪我負ったら死ぬぞ？」

「いや、オメーが怪我を負うシーンとか想像出来ない…。何かあたしのアイゼンの攻撃喰らっても無傷そうだし」

流石にギガントハンマーとか喰らったらヤバいと思うんだが。

姉のアテナなら大丈夫だと思う。なんせ、耐久力とか俺の3倍はあるんじゃね？と思う時があるし。

もっとも、前世は『吸血鬼の真祖〈ハイディライト・ウォーカー〉』で身体能力が上がってたから出来た芸当だし。

普通の人間ベースの今ならそれなりに苦戦はすると思う。多分。

「いやいや、さすがにそんなハンマーで頭殴られたら血だって出るぞ？」

「ホントかぁ？シグナムもレヴァンテインで斬っても無傷そうなのが想像出来るよな？」

「…ヴィータ。私にアレスちゃんを斬れ…と言うのか？」

目が据わってるピンク髪の侍が居た。

「…悪かった」

「大丈夫よ、シグナム。アレスちゃんが重傷を負っても私が即座に治癒しますから。命に代えても！」

…この2人は一度、フォーマットした方が良いんじゃね？と思う俺が居た。

「…とにかく。どういう連携で行く？」

ザフィーラが話を変えてくれた。

「…そうだな、シグナム達は空中戦と地上戦、どっちが得意だ？」

「む…？そうだな…どちらも大丈夫だが…？」

「恭也さん達は？」

「俺と美由希は空中はまだ不慣れだな。出来れば地上戦だ」

「なるほど…なるほど…」

俺は頭で考える。

リオレウスは空の王者と呼ばれるくらい空中戦が好きなヤツだ。

それに対してリオレイアは陸の王者と呼ばれる位、地上で戦う事が多い。

となると…。

レウスはヴォルケンリッター４人にフェイト、アルフ。

レイアは恭也さん、美由紀さん、なのは、ユーノ、ユナ。

俺は両方の後援支援と指示。

こんなもんだろ。

「それじゃあ、二組に分かれましょう。まず…」

１時間後。

そこそこ苦労はしたが、無事にレウス・レイアの二頭を倒した。

二頭の傷は俺が癒しておいたから大丈夫だろう。

「ぜぇ…ぜぇ…」

「はぁ…はぁ…」

俺となのは、恭也さんと美由希さんを除く人達は全員息切れしていた。

なんで俺と高町兄妹は大丈夫か…だって？

念法を習得してチャクラを回しているから体力は尽きることが無いのだ。

チート街道まっしぐらだね！

「大丈夫か？」

「…何で…４人は…そんなに平気そうなの…？」

フェイトがやや虚ろな目になって聞いてきた。

「うむ、簡単に説明するとだな。身体にあるチャクラを回して体力を無尽蔵状態にしてるのだ」

「…それって…かなりインチキみたいな…」

「だろうな。何時間でも戦えるのだから相手にとっては悪夢としか言えないと思う」

「…あたしは絶対にアレスやなのはと戦わないぞ…」

座り込んでるヴィータが呟いていた。

「２４時間戦えるのか…。それは素晴らしいな…」

息切れをしながらも目を輝かせているシグナムが居た。

…バトルジャンキーめ。

「しかし、我らもソレが出来ればかなり楽になると思うのだが…」

「アレスちゃん、私達はそれが出来るのかしら？」

ザフィーラとシャマルが聞いてくる。

「う～ん？」

ヴォルケンリッターの４人はプログラム生命体だ。

気と言う概念は無いと思う。

魔力のみだから…主のはやてからの魔力供給が無限になれば同じ様に戦えるだろう。

「残念だが、シグナム達はこの技法は使えないだろう」

「そうか…」

「だが、手はある。はやての協力を得られればシグナム達も俺や恭也さん達の様にいけると思う」

「本当か!?」

「ああ。今ははやての治療が優先だからちょいとキツイと思うが、いずれは出来るだろう」

「そうか。ならば早いところ魔力を蒐集しようか」

そんなこんなで俺達は魔力の蒐集を再開するのであった。

ちなみに、この日に蒐集した魔力は３５ページであった。

第１８話　魔力を蒐集しよう（後書き）

とりあえず、モンスターハンター知らないと分からないネタですねｗ

しかし、高町一家が人外じみて来たような…。

まあ、他の二次でも似たようなモンだから大丈夫かｗ

それでは、続きます！

第19話　この先生は…様子を見るべきか？うん、様子を見ようか（前書き）

作者「ハァ、ハァ…」

アレス「俺から逃げられると思うなよ？」

作者「待て、話せば…」

アレス「問答無用！」

作者「ウボァ――――――ッ！」

第１９話　この先生は…様子を見るべきか？うん、様子を見ようか

初の蒐集から１週間流れました。

日によってページ数は違ったが、何とか８０ページまで集まりました。

確か、４００ページで管制人格を起動出来るから…。

この調子で行けば１ヶ月半でイケると思う。

まあ、時に５ページしか集まらなかった日もあるからちょっと延びる可能性もあるが、それでも１２月末まではかからないだろう。

ちなみにメンツは５人１組くらいに分かれて蒐集している。

日によってまちまちだが、そう大した事態は起きていないから大丈夫だろう。

それに、あの世界はまだ管理局も発見していないみたいだし。

さて、話は変わるが…。

今日は学校に新任教師がやって来るのだ。

まあ、単に一人産休で休むから臨時と言う形で来ると言う話らしいが。

別に何にも怪しい所は無い。

前世の前世でもよくあった話だしな。

情報は隠していても漏洩は免れないと言うことで。

なのはと来てみたら教室はその新任教師の話で盛り上がっていた。

聞くと、男性教師で若いみたいだ。

容姿はかなりかっこいいとの事。

まあ、俺にとってはどうでも良い話でもある。

すると今日は俺達より早めに来ていたアリサとすずかがやって来た。

「おはよう、なのは」

「おはよー、なのはちゃん」

「おはよ、アリサちゃん、すずかちゃん」

なのはに挨拶したあと、机に突っ伏していた俺の方を向いた。

「アレス君、おはよう」

「アレス、おはよう」

「ああ、おはよう。アリサ、すずか」

「ねえ、アンタも今日来る先生の話聞いた？」

「ん…？ああ。他の人の会話を聞いて一応は」

「ふぅん…」

「どうした？気になるのか？」

「べ、別に…」

アリサが何を言いたいのかよく分からないが。

「何でも、凄くかっこいい男の人らしいよ？」

すずかがアリサの隣に来てそう言った。

「へぇ。そう言えば、女子の様子が少し嬉しそうと言うか、ウキウキしてると言った雰囲気だな」

笑顔で会話する女子達を眺める。

男子は何か別にどうでも良さそうな雰囲気だった。

「私はアレス君一筋だからね♪」

朝から暴走するなのは。

周りの男子は目を光らせて俺の方を見る。

だが、俺にはそんなもん効かぬ！

「あ、ずるい。私もアレス君の方が良いのに」

すずかも頭が暴走してる様だ。

俺はアリサの顔を見た。

「べ、別にアンタの事なんか好きじゃないんだからね？アンタの事…一生をかけていじめてやるんだから！」

真っ赤な顔と言ってる事がおかしいのだが、アリサ。

「…そうか」

俺はそう返すしかなかった。

ちなみに周りの男子から「呪呪呪呪呪呪…」とか「嫉妬で人を殺せるなら…」とか「爆発しろ…」とか聞こえてきたが。

残念だったな、俺に呪殺は効かぬ。

精神、呪殺、破魔は無効だからな。

やるなら万能属性が有効だぞ？メギ〇ラオンとか至〇の魔弾とか持ってこい！

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが鳴り響いたのでなのは達は席に戻った。

全校集会が開かれて、今日から来る新任教師の紹介が始まるのだが…。

俺は校長の挨拶の後に現れた新任教師の顔を見て愕然とするしかなかった。

《なあ、エヴァ？》

《…お兄様の言いたいことは分かります…》

《そうか。俺の目がおかしくなった訳じゃないんだな？》

《大丈夫です。私の目にも多分、お兄様と同じ容姿で映ってますから》

《そうか。アレ…どう思う？》

《十中八九、転生者かと》

《だよなぁ…》

壇上の上でやたらと爽やかそうな雰囲気を振りまいて話すイケメン教師を見ながら俺はため息をついた。

その容姿はＦＦ？のセフィロスが背広を着た様にしか見えなかったから。

名前は『伊集院　蓮〈いじゅういん　れん〉』とあからさまな名前。

もうね、容姿が日本人離れして日本名とか…。

『おまいはアホか』と言いたいね。

もっとも、俺の名前も日本名じゃないから人のことは全く言えないのだが。

《ねぇ…アレス君》

突然のなのはからの念話。

《どうした?》

《あの先生…私の方をチラチラ見てるの》

…確定だな。

《気のせいじゃなしに?》

《ううん。あと、アリサちゃんとすずかちゃんも見てるの》

やはり、なのはも人外魔境の高町家の娘なんだな。

普通の人では分からないと思うのだが。

《そうか。まあ、何かあったら俺が守ってやるからな》

《うん♪》

そのあと、イケメン新任教師の様子を眺めながら全校集会は終わるのであった。

何事も無く授業は進んで昼になった。

俺達のクラスはあの教育実習生の時間はまだ無く、顔合わせはしていない。

どんな能力持ちなのか分からないが、昼間の学校で何か起こす程の馬鹿でもあるまい。

俺はいつもの様になのは達と一緒に弁当を食べる。

「なぁんか、あの先生…きな臭いのよねぇ」

アリサはサンドイッチを噛りながら呟いた。

「うん。何でなのか分からないけど、私も何かイヤな雰囲気と言うか、予感と言うか、そう言うのを感じたの」

すずかもミートボールを口に頬張りつつも呟く。

ふむ、乙女の勘と言うのかな？アリサとすずかの2人は良い印象を持ってはいないようだ。

「う〜、私も…今朝の朝礼の時にあの先生から何か視線を感じたの…」

そう言ってなのはは唐揚げを口に入れる。

「ますますきな臭いわね…いつぞやあたし達をさらった誘拐犯みたいなヤツじゃないの？」

俺の頭に浮かぶのはアリサ、すずか、はやての3人をさらったあの事件。

確か、あの時はアリサが強姦されかけたのを間一髪で俺が救ったのだ。

…あの時にアリサ、すずかのフラグが立ったのかもしれないな。

「まあまあ、それだけであの誘拐犯みたいなヤツと決めつけるのは早計かも知れないぞ？」

俺はおかずのミニハンバーグを一口齧る。

ぬぅ、冷凍じゃなくてエヴァお手製のハンバーグだったか。

エヴァの手は小さいからミニハンバーグとか楽に作るんだよな。

「何よ。あの先生の肩を持つの？」

「いや、持つ気は一切無いが…」

「だよね。もし、私達を裏切るとか言ったら…」

「言ったら？」

俺は生唾をゴクリを飲む。

「アレス君に心と身体を陵辱されたと周りの人に言うから」

そんなのが先生の耳に入ったらどんな事になるか…！

想像するだけで恐ろしい。

「ＨＡＨＡＨＡ、裏切る訳無いじゃないか。なのはもアリサもすずかも大事な友人だからな」

「友人…？」

「ゆう…じん…？」

「友人…ですって？」

なのは達の表情が少しずつ…変わっていった。

片目を吊り上げ、眉間に僅かな皺が寄ってる。

「…待て。友人じゃないのか？」

「あははは、何を言ってるのかな？アレス君？」

とアリサ。口調が若干変わってるんだが？

「もう私達はアレス君と将来を誓い合ったんだよ？」

とすずか。背後に見える闇のオーラは俺の目の錯覚だよな？

「…アレス君、少し頭を冷やそうか…？」

待て、なのは。その台詞は１０年後のハズだろう。今言っても良い物じゃないぞ？

「ゑ…？友人がダメなら…恋人…なのか？」

「当然！」

「当然よ！」

「当然に決まってるじゃない！」

３人とも即答だった。

まだ、告白とかもしてないんだが、良いのか？

俺は心の中で首を傾げていた。

「やあ」

そこに現れたのは…今朝赴任したばかりの伊集院先生だった。

さっきから俺達の方に向かって歩いてくる存在が居るな…と思っていたが。

爽やかそうな笑みで俺達の方を見ている。

…なんだろう、胡散臭そうな雰囲気も見えるのだが。

俺の気のせいと思いたい。

「あ、伊集院先生…」

「おや？僕の名前を覚えていてくれたのかな？」

「ええ、一応は…」

なのは達の対応は実によそよそしく見える。

「ところで…何か用ですか？」

「いや、屋上に出たらたまたま君達の姿を見てね」

「そうですか」

「…」

伊集院先生は俺の方を少し見てからなのは達の方を見る。

「ふむ。この子は…？」

「なのはの幼馴染みの藤之宮アレス君ですけど？」

「なるほど…なるほど…」

先生は俺の顔を見てから全身をジロジロと眺める。

「…アレス君が何か？」

「いや、特には。悪かったね、食事の邪魔をして」

そう言うと伊集院先生は立ち去っていった。

「…変なの」

なのはは小さく呟いた。

多分、俺の存在を確認しに来たのだろう。

どんな能力持ちなのか。

ひょっとしたら、今までのヤツより狡猾かもしれない。

注意した方が良いかも知れない。

「外見は良いかも知れないけど、ちょっと変わった先生ね」

「そうだね」

アリサとすずかの評価は高くなさそうだ。

昼休みが終わって午後の授業が始まる。

午後一番の授業は英語だった。

ちなみにこの学園では小学生時に既に英語を組み込んでいるのだ。

と言ってもまだ基礎の段階なのだが。

もっとも、前世で英語を喋ることが出来る様になった俺には簡単の一言に尽きるのだが。

クラス全員、俺が英語を喋る事が出来るのは知っている。

アリサもハーフなのか、喋る事が出来る。

すずかは喋る事は出来ないが、聞き取ることは出来る。

なのはは以前、ミッドの書類を見て頭から煙を出していたから英語は壊滅状態だ。

チャイムが鳴って5分経ってから先生が登場した。

あれ？一緒に伊集院先生が来るって事は英語担当なのか？

どんなもんかお手並み拝見しようかな。

『やあ、初めまして。新任の伊集院先生だよ』

…。コレは…。

いきなり日本語でない言葉で喋る伊集院先生。

「アレス…」

後ろからアリサが喋りかけてくる。

そうそう、俺の右隣はなのは、左隣がすずか、後ろがアリサなのだ。

「どうした？」

「あの先生、何語を喋ってるの？英語…じゃないわよね？」

さすがのアリサも戸惑いを見せている。

担当の先生が止めないところを見ると、他のクラスでも同じ事をやっているのだろうか？

それにしてはちょっと意地悪なパフォーマンスではある。

ちょっと強めのアクセントのあの言語。

普通なら誰も分からないだろうな。

『ふむ、やはりこのクラスでも分からないかな？』

ゆっくりと喋って分かりやすくしてるようだが、英語とはちょっと違うからなぁ。

もっとも、俺は何を喋ってるのかは分かる。

《ちょっと意地悪なパフォーマンスですわね》

《ああ、かなりな。英語もろくに喋ることが出来ないのに、アレは無いだろう》

エヴァもツッコミを入れてくる。

右隣を見るとなのはは頭から煙を出していた。

左隣を見ると、「???」と困惑した表情で伊集院先生の言葉を聞いているすずか。

『ははは、ちょっと意地悪だったかな?』

爽やかな笑みを浮かべる伊集院先生。

仕方ない、俺がちょっとやってやるか。

『いえ、分かりますよ?伊集院先生?』

俺は伊集院先生に問いかける。

周りのクラスメイトは驚いた表情で俺の方を見る。

『ほぅ?君は分かるのかね?』

『はい。しかし、ちょっと意地悪じゃないですかね?英語の時間なのに、【ドイツ語】で喋るなんて』

そう、伊集院先生が最初に喋ったのはドイツ語なのだ。
英語より強めのアクセントだから初めて聞く人は困惑するだろう。
アリサとすずかも英語は耳にする機会はあってもドイツ語はあまり無いんだろう。

「アレス…あんた、分かるの？」

「ああ。先生が喋ってたのはドイツ語だよ」

「ドイツ語ぉ！？そりゃダメだ…。滅多に聞かないから忘れてたわ…」

「うう…アレス君凄いの…」

机に突っ伏しているなのは。

「ははは、これは参った。まさか、ドイツ語を喋る事が出来る子がいるなんて」

今度は日本語で喋る伊集院先生。

周りからは『すげー』とか『どうなってんだ？』とか色々と騒がしくなっていた。

「改めて紹介するよ。英語担当の伊集院蓮。短い期間になるがよろしくお願いするよ」

そう言って一礼する伊集院先生。

「伊集院先生は英語、ドイツ語の他にイタリア語とフランス語も喋れるんですよ？」

後ろから担当の先生が話しかける。

ほぅ、イタリアとフランスか。

ちょっと試してみるか。

（伊）『先生、本当にイタリア語を話せるんですか？』

俺はイタリア語で話しかける。

周りがまたざわめいた。

（伊）『君は凄いな。そんな流暢にイタリア語が喋れるなんて』

伊集院先生もイタリア語で返してきた。

（仏）『いえいえ、努力すればどうとでもなりますよ』

俺がフランス語で返すとまた驚いた顔になる伊集院先生。

（仏）『本当かね？しかもフランス語まで喋るとは、驚くしかないよ』

先生は同じようにフランス語で返してくる。

どうやら本当にどちらも喋ることが出来るみたいだ。

周りは呆然とした顔をしていた。

後ろの担当の先生を見ても同じようにビックリした表情を浮かべていた。

《まあ、１０００年あれば喋れる様になりますもんね》

《まあな。普通の人だと相当苦労しないといけないが》

《ですわねぇ～》

ちなみにエヴァも大半の言語を喋ることが出来る。

要は時間とやる気さえあれば大抵の事は何とかなるものである。

「失礼しました。どうやら本当でしたね」

「いやいや、こちらも驚いたよ…。まさか、イタリア語とフランス語を喋れるなんてね…」

そんなこんなで時間は流れていった。

（英）『アンタ、実は他の言葉も喋れるんじゃないの？』

後ろからアリサが問い訪ねてくる。

しかも、英語だ。

（英）『さあ？日本語、英語、ドイツ語、フランス語で打ち止めかもよ？』

（英）『嘘仰い！アンタの事だから中国語とかロシア語辺り喋ってもおかしくないわ！』

さすがアリサ、俺の事が分かってるみたいだ。

ぶっちゃけ言うと両方とも喋る事は可能である。

（英）『さあ？それはアリサの想像に任せるよ』

（英）『吐け！あたしに隠し事なんて許されると思ってるの！？』

段々ヒートアップするアリサ。今は授業中なんだが。

「おやおや、バニングスさん。どうしたのかな？」

アリサの隣に立つのは伊集院先生。

「いえ、な、何でもありません…」

「レディがそんなに熱くなるものではありませんよ？」

そう言ってアリサの頭を撫でる伊集院先生。

…？

何だ?伊集院先生の口元が…僅かに歪んだ?

周りの女子を見ると…。

何だ?羨ましそうな表情で見ている?

何故だ…?たかが頭を撫でるだけなのに…。

……。

もしや、二次小説によくある『ナデポ』的な事を狙ってるんじゃあるまいな?

妙に気になる。

帰ってから久しぶりに天界に聞いてみるか。

「…あの?先生?」

「ん?どうしたのかね?」

「あんまり…頭を撫でられるのは…好きじゃないです…」

「…そうか、それは失礼した」

一瞬、驚愕の表情を見せたがまたいつも通り爽やかそうな顔に戻る。

先生は自分の右手を眺めてからまた授業に戻った。

「レディィの頭を気安く撫でるなんて！」

放課後になって一緒に帰ってるとアリサが憤慨した雰囲気でそんなことを喋っていた。

よほど伊集院先生に撫でられたのが気に入らなかったみたいだ。

「頭を撫でられた位で…」

「アンタには分からないでしょうね！大人の男に撫でられただなんて…気持ち悪い！」

…もしかして、いつぞやの誘拐事件のせいで大人の男に嫌悪感を抱くようになったのかもな…。

「アリサちゃんの気持ち…分かるよ。私も…大人の男の人に近寄られるのは…ちょっと…」

とすずかも同じように嫌そうな表情を浮かべていた。

「アリサちゃん…すずかちゃん…」

「…だが、俺もいずれはあんな風に大人になるんだぞ？」

その言葉を聞いてアリサとすずかの２人は俺の顔をジッと見つめた。

2人の瞳に俺の顔が映っていた。

「…ど、どうした？」

無言で俺の顔を見つめる2人。

「アレス君は…大丈夫だよ」

「そうそう。あたしの勘が告げるのよ。アンタはずっとそのままだって」

何それ恐い。

六感超えて七感の域に達してないか？

そのうち小宇宙（コスモ）とか感じる様になったら俺は困る。

「アリサちゃんとすずかちゃんも？実は、私もアレス君ってずっとこのままじゃないかな～と思ってたりして…」

ブルータス、お前もか。

なのはの台詞で俺は何とも言えない気分になった。

「え？それって大きくならないって事？」

「うん」

「そうだよ」

「そうに決まってるじゃない」

…。

即答だった。

「…まあ、とりあえずはやての家に行くぞ」

釈然としなかったが、はやての家に向けて俺達は歩くのであった。

第１９話　この先生は…様子を見るべきか？うん、様子を見ようか（後書き）

さあ、あからさまな容姿をした先生が登場しましたｗ

どんな風にアレス達に絡むのか…。

作者の気分次第です（ヲイ）

一応、つじつまがきちんと合うように物語を書いていますが…

某超人漫画の様に設定がコロっと変わるかも知れませんがｗ

その点は容赦してくださいｗ

それでは、次回お楽しみに！

第２０話　片角のマ王（前書き）

アレス「なあ、今回こんな話で大丈夫か？」

作者「大丈夫だ、問題無い」

アレス「問題だらけに見えるんだが…」

作者「片角のマ王、かっこいいじゃないか」

アレス「まあ、あいつの耐久力は痺れるモノがあったが…」

作者「後にラージャンも出る予定だからｗ」

アレス「ちょｗｗｗ」

作者「それくらいかな？リオレウスとかは他に出てるからなぁ」

アレス「確かに」

作者「それに、あまり出してると本来の目的が分からなくなるし」

アレス「（既に転生者捕まえる話がほとんど無いんだが…）」

作者「後はお前がなのは達に弄られる予定だし」

アレス「待てや」

作者「ハーレムだぜ？男のロマンだぜ？」

アレス「一人に絞れないのか？」

作者「お前、絞れる？」

アレス「…無理だな」

作者「だろ？お前の性格は俺をベースにして改良してるからなｗ」

アレス「なんだかなぁ…」

第２０話　片角のマ王

八神家に到着すると出てきたのは主のはやて。

今日のお留守番はザフィーラだけとの事。

リビングに通されてからはやてはお茶の準備でキッチンに向かっていく。

ザフィーラは家事スキルは皆無なので仕方ない。

狼形態のザフィーラはなのは達の様子を観察していた。

俺ははやてと一緒にキッチンに居た。

はやてはアレス君はお客さんなんだから待ってええんよ～と言ったが、俺はそれを却下してはやての車椅子を押す係を担当した。

お茶の準備を終えてリビングに向かう。

今日は翠屋特製のチーズケーキや～とはやての声が聞こえる。

実に楽しみだ。

桃子さんのあのチーズケーキは真似するがあの味は出せないのだ。

エヴァと2人で首を傾げてケーキを作ってるのは秘密なのだが。

…。

そうだ、最近あの『スキル』を使ってなかったな。

はやての気分転換になるだろうし、俺の勘を取り戻すのも良い。

俺は心の中でしめしめ…と思っていた。

リビングに到着してからはやてがお茶を入れる準備をしようとしたところで。

「はやて」

「ん？」

「しっかりお盆持ってろよ」

「へ？」

俺は魔力を纏った糸をはやての全身に纏わせてから。

左手の指をクイッと動かす。

「ひゃわぁ！？」

いきなり立ち上がるはやて。

その様子をなのは達は目を見開いていた。

ザフィーラも口を開けて呆然と眺めてる。

「な、ななな何事やぁ！？あ、アレス君！私に何かしたんか！？」

【お兄様ったら、いきなりソレはかなり心臓に悪いですよ？】

顔を真っ赤にしてるはやて。いきなりだったから驚いてるのか？

「ん～？エヴァの二つ名を思い出してみたら？」

「エヴァの？確か、『闇の福音〈ダーク・エヴァンジェル〉』やろ、『不死の魔法使い〈マガ・ノスフェラトゥ〉』やろ、『悪しき音信〈あしきおとずれ〉』やろ、『禍音の使徒〈かいんのしと〉』やろ、『童姿の闇の魔王〈わらべすがたのやみのまおう〉』やろ、それから…あっ」

はやては一息ついてからゆっくりと言った。

「『人形使い〈ドール・マスター〉』…」

【ん～…私はそこまで凄いことはしてないのですけど…】

まあ、漫画のエヴァがやったからなぁ～。

その言葉を聞いてなのは達の息を呑む声が聞こえた。

「ご名答。エヴァの姉なんだから出来てもおかしくないだろ？」

「失念しとったわ…確かに出来てもおかしくないわ」

そう言ってはやてはお茶を入れて全員の前に置く。

言っても俺が操作してるのだが。

「感覚が無いから違和感あるけど、立てるのは良いもんや」

部屋の中をうろうろと歩かせる。

「自分通りに動かへんのがもどかしいけど、まあ、しゃあないか」

「それは勘弁してくれ。四六時中はやてに付きっきりになってしまう」

「…なあ？私の足が動くようになるまでずっと一緒に住まへんか？一緒に添い寝からお風呂の世話にトイレの世話まで♪」

この狸娘は何を仰るのか。

軽い目眩を覚えつつ俺は返答する。

「何を戯けた事を。シグナムやシャマルの役目を奪うわけにいかんだろ」

「シグナムとシャマルなら歓喜すると思うけどなぁ～？」

確かに。

その光景が目に浮かぶ様だ。

「ヴィータとザフィーラは？」

「ザフィーラはどうや？アレス君と一緒に住むのは反対か？」

「…主が望むなら反対はしません」

デスよねー。

予想通りの返答ありがとう、ザフィーラ。

仮にヴィータが反対してもはやて、シグナム、シャマルの３人にＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩされて終わりだろう。

ふと、なのは達を見ると…。

「うぉっ！」

背後に浮かぶのは般若の面。

炎が燃えさかってその中に般若が見えていた。

「いくらはやてちゃんでもそれは許されないの…」

「そうよ。アレスはあたしがいじめて遊ぶ玩具なんだから…」

「…」

すずかは紅茶カップを持ってるが、カチャカチャと震えていた。

表情はニッコリ微笑んでるから余計に恐い。

「い、いや、ジョークやで？ただ、たまにこうやってくれるのもありがたいかな～と…」

苦笑いのはやて。

このままいくとはやてがボコられるかも知れないから話を変えるか。

《アレス！聞こえるか！？》

突然聞こえるヴィータの声。

はて、ヴィータは魔力蒐集に向かっていたはずだが。

《どうした？突然？》

《すまねぇ、休みの所。実は、厄介なヤツが現れてな…》

どうやら応援を求めてる様だ。

珍しいな、確か…今日のメンツはシグナム、ヴィータ、フェイト、シャマル、美由希さん。

やや前衛寄りだが、悪くないパーティーだと思う。
これだけのメンツが苦戦するのはあまり想像出来ないのだが。

《どんなヤツだ？》

《ああ、砂漠で地面を泳ぐ魚みたいなヤツをブッ倒してから蒐集してたらな…》

《うむ。それから？》

なるほど。砂を泳ぐのは『ドスガレオス』だな。
まあ…鬱陶しいが、そんなに強いヤツじゃないな。
ヴィータなら音爆弾的な魔法持ってたし。

《遠くの方にかなりでかい魔力反応があったからあたし達は向かって行ったんだ。そしたら、砂の中から角が生えたドラゴンみたいなヤツが現れて…》

砂から出るドラゴンみたいなヤツって言うのは…『モノブロス』か『ディアブロス』のどちらかだろう。

どちらも砂の中に潜ったり、ちょっと鬱陶しいがそれでも5人の敵では無いと思うんだが。

《確かに厄介そうではあるが…。それでもヴィータ達ならそう簡単に負けないと思うぞ？》

《いや、それがもの凄いタフなんだよ。シグナムが連続で斬ってあたしがギガントで殴ってもなかなか弱くならねぇんだよ！》

ヴィータがギガントで殴っても…だと？アレを耐えるなんて、相当のヤツだぞ？

《ヴィータのギガントでも仕留められないだと？》

《ああ。フェイトがファランクスって言うヤツぶち込んでも効いた様に思えないんだ》

…もの凄いタフだな。

普通のモノブロスとかディアブロスならとっくに気絶してると思うのだが。

そんな巫山戯たヤツが…待てよ？

《ヴィータ、一つ聞くぞ？其奴の特徴は？》

《ああ、頭の角が本来は2本みたいだけど…あたし達と会った時は既に1本折れてたんだ》

俺はその言葉を聞いて背筋が寒くなってきた。

ゲームの中だけかと思ったら、ホントに居たんだ。

『片角のマ王』

モンスターハンター2Gに出てくるモンスターで。

普通のディアブロスなのだが、そいつは初めから2本ある角のうち、片方が既に折れた状態なのだ。

厄介なのは、上級クエストなのに耐久力が上のクエストであるG級と同等なのだ。

兎に角、やたらとタフなのだ。

かつてゲームでやった時、上級だから楽勝だろうなと思いつつG級用の武器で行ったのにも関わらず、時間ギリギリで倒した覚えがある。

上級クエストの分際でG級並みとはどういう事かと。

《分かった。なのはとザフィーラ連れてすぐに行く。それまで何とか持ちこたえろ》

《ああ、分かった。なるべく早く頼む》

ヴィータの通信が切れる。

「なのは、ザフィーラ」

なのはとザフィーラが俺の方を向いた。

「シグナム達を助けに行くぞ。『片角のマ王』が出たみたいだ」

「「ブフッ！」」

その言葉を聞いてはやてとすずかの2人は紅茶を噴き出していた。

「わっぷぅ！」

アリサが少し被害を被ったみたいだが、そこはスルー。

「なるほど、シグナム達が苦戦するほどのヤツか」

「ああ、耐久力がやたらとあるんだ。ヴィータのギガントでも仕留められなかったそうだ」

「…なるほど。それは相当のヤツだな」

「にゃあ～ヴィータちゃんのアレを耐えるの…」

「そう言う事だ。行くぞ？」

俺となのは、ザフィーラの3人で転送しようとしたら。

「ちょっと待ちぃ！」

「あたし達も連れて行きなさい！」

「置いてきぼりは嫌！」

はやて、アリサ、すずかの3人も付いてくる事に。
まあ、家を守る人が居なくなるからその方が良いかもな。
あっちでシャマルに守らせる手もあるし。
「ああ、それじゃあ行くぞ」
俺達は一斉に転送した。

「キィエエエエエエエ！！！」
「ぶちぬけぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
ディアブロスとヴィータが戦っていました。
ヴィータのアイゼンが頭に直撃しているにも関わらず、あのディアブロスはまだ元気でした。
ってか、この世界のモンスターはオリジナルよりも遙かに強いと思われる。
「なのはとザフィーラはヴィータの援護を。俺は3人をシャマルに預けて来る」

「分かったの」

「うむ」

2人と分かれてから俺はシャマルの方に向かう。

ちなみに分身してからアリサ、すずか、はやてを抱えている。

「…」

「…」

「…」

3人は呆然とディアブロスを見ていた。

「…でかいな…」

俺はディアブロスを見ながら呟く。

目測30mはあるんじゃね？

確か、普通のディアブロスは平均20mらしいからかなり大きい個体だ。

「アレが…片角のマ王…」

「ゲームで見るより遙かに凄まじいわ…」

ゲームと現実は違うのだよ？3人とも。

「さて、とりあえずシャマルの所に行くぞ」

シャマルの所に行くとシグナムとフェイト、美由希さんが治療を受けていた。

「う～攻撃当てても怯まないよ～」

「う～ん…やられた…」

うなされてる美由希さんとフェイト。

確かに、あいつのタフさには辟易させられる。

「いつつ…あ、主はやてにアレスちゃん…。無様な姿を見せて申し訳ない」

「いや、そんな日もある。全員が無事で良かった」

「そうやで～怪我は治るけど死んだらそこまでやからなぁ～」

「ありがとうございます。そう言って頂けると少しは気が楽になります」

「さて、シャマル？」

「はい！」

嬉しそうな顔で返事するシャマル。

尻尾があったらハタハタと振っているだろう。

「俺はヴィータ達の援助に向かう。だから、全員の守り…頼むぞ？」

「はい！」

「シグナムも治療が終えたらシャマルと2人でここの守り頼む」

「分かりました。命に代えてもここは守ります」

「ダメだ」

「え？」

「命に代えずに守ってくれ。勝手に死ぬのはダメだ、許さん。なあ？はやて？」

「…そうやね。シグナム？シグナムも私達の大事な家族なんやからね」

「…分かりました。それでは、アレスちゃんも怪我せぬ様に…」

「ああ。行ってくるぜ？」

俺はヴィータ達の所に向かって飛んでいった。

「大丈夫か？」

俺は肩で息してるヴィータに話しかける。

「ああ、何とか…な」

ディアブロスはザフィーラとなのはに標的を向けてそちらに向かっている。

「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？ディバイン・バスター喰らっても平然としてるぅ！？」

なのはの驚きの声が聞こえる。

「キィエェアアア

確か、怒りモードになったらパワーとスピードが少し上がるハズ。

「ぬうぅぅぅぅ！？」

あ、ザフィーラが地中からの突き上げで吹っ飛ばされていた。

アレも厄介だな～。

足止め出来れば楽…あ。

そうだ、ザフィーラが居るなら出来るな。

《ザフィーラ、其奴の足止め…出来るか？》

《ああ。ちとキツイが出来ないことは無い》

《どれくらい止められそうだ？》

《１５秒…位だな》

上等。１５秒あるなら何とかなるかも。

《なのは》

《うん？》

《今からスターライト・ブレーカー撃つのにどれくらいかかる？》

《ん～３０秒あれば何とか…》

《そうか。なら、今からザフィーラがあいつの足止めしてから俺とヴィータがあいつに一撃喰らわせる。その直後になのはがスターライト・ブレーカーでとどめを刺す。どうだ?》

《分かったの。今からチャージに入るね》

なのはは空中に向かって飛んでいく。

「ヴィータ、ギガントはあと何発いける?」

「あとギリギリで2発…だな」

「よし。俺と一緒にギガントを同時にあいつにぶちかまそう。ラケーテンハンマーの要領で横殴りだ」

「…それは良いけど…。お前、ギガントって出来るのか?」

「出来るぞ。俺の持ってるデバイスを忘れたか?エヴァ、モード『アイゼン』」

【了解です、お兄様。モード『グラーフ・アイゼン』】

武神の魔導書が光り輝くと俺の手に握られたのはヴィータと全く同じ形状のハンマーだった。

「っ…!へへ、それなら…いけるな」

ヴィータはニヤリ…と笑った。

「ザフィーラ!こっちは準備出来た!頼む!」

「よし！でぇぇぇい！縛れ！鋼の軛（くびき）！！！」

ザフィーラがそう叫ぶとディアブロスの足下から尖った魔力の刃が現れてディアブロスの足、胴体に突き刺さりその場に縫い止める。

「ギィエェアァァァァァ！」

咆吼するディアブロス。しかし、どんなにもがいてもザフィーラのソレから逃れることは出来ない！

「ヴィータ！」

「ぶちかませぇ！！アイゼン！！！」

【了解〈ヤヴォール〉！！起爆〈エクスプロズィオーン〉！！！】

ヴィータのアイゼンがカートリッジロードする。

「エヴァ！頼む！」

【了解〈ヤヴォール〉！！起爆〈エクスプロズィオーン〉！！！】

俺の手に持たれるエヴァも同じ様にカートリッジロードする。

身体に魔力が溢れてくる。

「行くぜぇ！！これを耐えられるか見せて貰うぞ！？片角のマ王！！」

アイゼンモードのエヴァの形状が変わる。
超巨大ハンマーに変化して俺は左回りに回転する。
ヴィータも同じように回転する。
「「ラケーテン・ギガントシュラーク！」」
高速回転で回る俺とヴィータのハンマーがディアブロスを挟み込んで一撃を加える！
「ギィエエエエエエエエ！！！」
ディアブロスの咆吼と轟音が周りに響いて爆風の様な風が周りに広がる。
俺は上を見る。
なのはの周りに桃色の魔力光が集まる。
「ヴィータ、離れろ！なのはの砲撃が来るぞ！！」
「分かった！あんなの直撃したくねーよ！！」
俺とヴィータは即座にディアブロスから離れる。
ふらふらのディアブロス。
ギガントハンマーのサンドイッチを喰らって気絶しないのかよ、あいつは！！

「全力全壊！スターライト・ブレーカ――――――ッ！！！！」

桃色の砲撃がディアブロスを包み込んで、その直後、台風を上回る爆風が俺に襲いかかる。

「ぐぅぅぅぅ！」

「で、出鱈目も良いところだよ、アレは！」

俺とヴィータは薄目を開けて様子を見る。

アレが非殺傷とは思いがたいのだが。

ってか、既に原作のカートリッジロードしたスターライト・ブレーカーより上回ってるんじゃね？

そんな事を思いつつ俺は煙が晴れるのを待つ。

「これでまだ意識あったらもう諦める。あんなタフなヤツとやってらんねぇよ…」

ヴィータはそうぼやいてその場に座る。

「おーい」

シグナム達がやってくる。

ザフィーラは狼形態になってはやてを背に乗せて。

シクルゥに乗るナコルルみたいだな…。

シグナムはアリサを抱きかかえ、シャマルはすずかを抱きかかえてる。

美由希さんとフェイトもフラフラした感じではあるが、こちらにやって来る。何とか回復したのであろう。

なのはも何事も無かった様に降りてきた。

「なのは…アンタのアレってホントに非殺傷設定？」

「にゃっ！？非殺傷だよ？」

「…いくら非殺傷と言っても…喰らいたくはないね…」

「大丈夫だよ～？ちょっと痛いだけだから♪」

「あれでちょっと痛い…？我が妹ながら恐ろしい…」

身震いしてる美由希さん。

下手に姉妹喧嘩したら超高確率で美由希さんが負けると思うんだ。

俺はなのは達の会話を聞きつつもディアブロスの方を見る。

段々と煙が晴れてくるのを見てると、巨大隕石が落ちた様なクレーターが見えるんだが…。

「晴れた～って…これは」

夜天の書を持ったシャマルは目の前の光景を見て絶句していた。

二の句が継げない…と言えば良いのか。

大きなクレーターが出来ていて、真ん中で砂に埋もれてるディアブロス。

ピクピク痙攣してるから一応は生きてるんだろうが…。

「…とりあえず、引っ張り出すか」

俺はディアブロスの角を持って引きずり出す。

無論、咸卦法を使って身体能力を上げてる。

前世なら身体能力で何とかなったんだがなぁ。

身体が成長し終えたら重力使って身体を鍛えるかな。

「…アレを簡単そうに引きずり出すお前はおかしいと思うんだ、あたしは…」

ヴィータの呟きはスルーして。

シャマルはディアブロスから魔力を蒐集する。

ページがペラペラペラとめくれていく。

「…４５ページ」

「…そうか」

「それだけ苦労した甲斐はあったな…」

そのあと、俺は傷の治療をしてディアブロスを解放しておいた。

俺達の姿を見ると脱兎のごとく逃げていったのは余談である。

「しかし、ヴィータのアイゼンが入ってるとはな…」

「ああ。当然ながらシグナムのレヴァンティンも入ってるぞ？」

「そうか…私と同じ武器で戦えるのか…。まるで夫婦の様だな？」

やたらに顔が赤いシグナム。

「夫婦…ねぇ…」

「…年上女房は…嫌いか？」

…なんか、口説かれてる様に思えるのは気のせいだろうか？

「…シグナム？何抜け駆けしてるのよ？」

ジト目でシグナムを見るシャマル。

ものすげー嫌な予感。

「待て、シャマル？ここでアレスちゃんから年上女房は嫌いだと言われてみろ。我々は明日から何を糧にして生きていけば良いのだ？」

「…確かに。ソレはもの凄く重大な死活問題ね」

そんな事じゃなくてはやての家族として生きていけば良いじゃねぇか…と思った俺は悪くないハズだ。

「で？アレスちゃんは年上女房は…どうかしら？」

やけに血走った目で俺を見るシグナムとシャマル。

やっぱりこの2人は一度、頭をフォーマットした方が良いとボクは思うのですよ☆にぱー☆

おっと、違うモノが頭に降臨してたな。

「まあ、別に年上女房でも全く問題は無いが…」

その言葉を聞いて2人の目はもの凄く輝いていた。

夜天の書のバグはここまで影響を及ぼしていたのか…と思わざるを得ない。

「主人を差し置いて…アレス君をナンパするんて…」

額に青筋を立ててるはやてが来る。
ザフィーラはやけに疲れてる様に見えるのだが…。
「すみません、主はやて！」
「ごめんなさい、はやてちゃん！アレスちゃんが嬉しいことを言ってくれたから…」
「いーや！そもそも、私がアレス君と結婚したら2人も一緒に住めるやないか！」
「あ…」
「そうだ…！」
シグナムとシャマルの顔は驚愕に溢れていた。
俺はザフィーラの顔を見る。
「…すまん」
そう言ってザフィーラは顔を逸らした。
俺はヴィータを見た。
「あ～砂漠はあちぃなぁ…」
空を眺めて俺達の方を一切見ないヴィータがそこに居た。

「そうやろ!?2人の主である私がアレス君と結婚したら、家族のシグナムとシャマルにも寵愛がイってもおかしゅうない!」

おかしいから。

そもそも、シグナムとシャマルは従姉妹のお姉さん扱いだろ?

従姉妹丼か…。

新しいジャンルだな。

「何を言ってるのかな?かな?」

「アレスは私とアリシア姉さんとも結婚するんだよ?」

「アレス君は私とも結婚だよ?」

「アレスは私のいじめ相手よ!そう簡単に渡さないわよ!?」

なのは、フェイト、アリサ、すずかがやって来る。

わー、コレは始末に負えない予感。

「こうなったら、私達の中で誰が正妻にふさわしいか!競い合おうやない!負けた人は妾で我慢!これでどうや!」

「「「「乗った!!」」」」

おいおい、ちょっと前は妾で良いって言ってたのが…どうしてこうなった!?

「よっしゃ！それなら…とりあえず、舞台は…アレス君の家や！アレス君のお義母さんにアピールや！」

待てや！なんでお義母さんになってるんだよ、この狸娘は！

「ちょ、ま…」

5人は一斉に転送してしまった。

なのはとフェイトが一斉転送したのだ。

「主はやて！？」

「はやてちゃん！？」

後を追うようにシグナムとシャマルも転送していった。

呆然と佇む俺の肩を叩くのは美由希さん。

「もてる男は辛いわね…」

「…妹さんを止めると言うのは…」

「アレス君、あたしにこの世から骨一つ残さずに消えろと？」

「ですよねぇ～」

俺はヴィータとザフィーラを見る。

「…すまん、我は主を守護する大事な役目があって死ぬわけには…」

「…あたしも同じだ。せめて、シグナムとシャマル位は止めたいけど…あいつら、お前が絡むと通常の3倍の力を発揮するというか…」

赤い彗星かよ。あれは3倍の速さだが。

ちなみに、実際に赤い彗星ザクはノーマルザクの1．3倍にチューンナップされた専用ザクで3倍と言うのは誇張であるらしい。

あと、郵便ポストはシャア専用ではない。

「まあ、気にするな。アレは止められないのは分かってる…」

「すまねぇ…」

「さて、今日はコレくらいにして帰るか」

「そうだね～」

とりあえず、今日の魔力蒐集は終わりを告げた。

そして、家に帰宅する。

美由希さん、ザフィーラ、ヴィータ達3人と別れて家に帰ると母さんがニヤニヤしながら出迎えてきた。

「…ただいま、母さん?」

「モテモテね~?」

もの凄い嫌な予感。

「…嫌な予感を感じるんだが…」

「ご名答よ。お嫁さん候補が沢山来てから大騒ぎよ?」

目の前が暗くなってきた。

とりあえず、俺は自分の部屋に戻るべく、ドアを開けた。

すると…なのは、アリシア、フェイト、はやて、アリサ、すずかの6人がトランプのババ抜きで戦っていた。

そして、なのはの後ろには桃子さん。

アリシアの後ろにはプレシア女史。

フェイトの後ろではリニスさん。

はやての後ろではシグナムとシャマル。

すずかの後ろではノエルさん。

アリサ以外、保護者役の人達が手に汗握る様相で見守っていた。

「にゃあぁぁぁぁっ！ババ引いた～！」

「大丈夫よ！コレをアリシアちゃんに引かせれば良いのよ！」

「そう簡単にアリシアが引くと思わない方が良いわよ！桃子！」

「私の娘をなめて貰っては困るわ！」

「貴女こそ、私のアリシアをなめて貰っては困るわ！」

「はやてちゃん、私のクラールヴィントを使えば…！」

「あかん！そんな事したらわたしは海鳴湾の藻屑に消えるわ！」

「大丈夫です！その時は私とシャマルで、主はやての分も含めてアレスちゃんを愛でる事にします！」

「あんたはどっちの味方や！？シグナム！」

「何とかなのはにババを引かせたけど…」

「大丈夫です、フェイト。アリシアにプレシアが付く以上、私がフェイトの補佐をして見事、アレス君の正妻の座をプレゼントしますから！」

「ねぇ、ノエルの能力で何とか出来ないかな？」

「難しい質問ですが、愛しのアレスちゃんの為です！何とかすずか様を勝利に導きます！」

「アレスのくせに…アレスのくせに！アレスはあたしのモノなのよ！」

「うぅ…なのはちゃん…！手が読めない！アレスお兄ちゃん！私に加護を！」

一言で言えば『混沌〈カオス〉』だった。

ちなみに俺の部屋はかなり広いので、この大人数でも大丈夫なのだ。

「…」

俺は無言でドアを閉めた。

全員、勝負に熱中していて俺に気付いていない。

「俺は何も見ていない。気のせいだ」

【残念ながら、これは現実ですよ？お兄様？】

「なん……だと…？」

エヴァのツッコミが俺を現実に引き戻す！

何なんださっきの空間は！

俺の部屋が女の子の匂いで一杯になってるじゃないか！

まあ、ベッドの下にはいかがわしいモノは無いが。

あ、俺は今現在？歳だからあったらそれはそれで問題なんだが！

「なぁ？部屋に戻った方が良いか？」

【ん～…。餓えた狼の中に羊を放り込む様な感じがしますけど、戻らないと…暴動が起こるかも知れませんよ？】

「だよなぁ…」

俺は不承不承ながら部屋に戻る事にした。

接戦は続いたが、今回はなのはが勝利を収めた。

勝利に喜ぶ高町親子だったが、翠屋を士郎さんに丸投げしていた桃子さんは美由希さんに連行されていった。

聞けば、恭也さんと忍さんまでも手伝ってるとか。

それで良いのか、翠屋。

その後、ヴィータとザフィーラもやって来た。

いつまでも帰ってこない主と同僚に業を煮やして3人を連行しに来たが、あえなく玉砕。

八神一家はウチに泊まる事となった。

テスタロッサ一家も泊まることになった。

アリサも鮫島さんに着替え等を持ってきて貰っていた。

泊まる気満々ですね…。

すずかとノエルさんも忍さんの許可を得ていた模様。

ノエルさんは忍さんのメイド仕事をファリン嬢に丸投げしていた。

すずかにこっそり聞いたら忍さんに相当頼み込んだようだ。

『後生ですから、一度で良いですから！』

後で忍さんに聞いたが、許可しなかったら自殺しかねない勢いだったから許可したとか。

忍さんも色々と大変だな…。

あ～、俺の家が大きくて助かったぜ。

母さんも「こんな事もあろうかと、大きい家を建てておいて良かったわ」とのこと。

いつから真田さんになったんだ…。

こうして、初のお泊まり会が開かれることになったのだ。

余談だが、週に一回、こうして俺の家に泊まる事になったのだが。

まあ…これから騒がしくなるなぁ…。

第２０話　片角のマ王（後書き）

はい、苦戦（？）する話でしたｗ

すいません、片角のマ王出してみたかったんですｗ

あとはラージャンくらいですねぇ…

しかし、遅筆過ぎるのも問題がありますなぁｗ

ネタはそれなりにありますが、書くのが面倒というｗ

こんな遅筆な私ですが、お付き合いくださいませｗ

次回に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9172s/

魔法少女リリカルなのは　～転生者共を捕まえろ～

2011年11月28日06時50分発行